鳥取県教育文化財団調査報告書86

一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県東伯郡東伯町

笠見第３遺跡

本　文　編

２００４

財団法人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉河川国道事務所

鳥取県教育文化財団調査報告書86

一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県東伯郡東伯町

笠見第３遺跡

本　文　編

２００４

財 団 法 人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉河川国道事務所

鳥取県教育文化財団調査報告書８６

一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

笠見第３遺跡正誤表

本文編

<table>
<tr><th>頁</th><th>誤</th><th>正</th></tr>
<tr><td>背表紙</td><td>鳥取県教育文化財団発掘調査報告８６</td><td>鳥取県教育文化財団調査報告書８６</td></tr>
<tr><td>例　言
17行目</td><td>未製品</td><td>未成品</td></tr>
<tr><td>P.47
表２</td><td>
<table>
<tr><th>ピット番号</th><th>長軸×短軸−深さ（cm）</th><th>備　考</th><th>ピット番号</th><th>長軸×短軸−深さ（cm）</th><th>備　考</th></tr>
<tr><td>Ｐ１</td><td>40×36−68</td><td></td><td>Ｐ12</td><td>29×26−34</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ２</td><td>32×31−34</td><td>主柱穴</td><td>Ｐ14</td><td>35×30−48</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ３</td><td>53×39−29</td><td></td><td>Ｐ15</td><td>31×29−27</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ４</td><td>49×40−65</td><td></td><td>Ｐ16</td><td>41×39−55</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ５</td><td>34×34−66</td><td>主柱穴（柱痕有）</td><td>Ｐ17</td><td>39×35−45</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ６</td><td>42×30−62</td><td></td><td>Ｐ18</td><td>36×20−23</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ７</td><td>50×47−13</td><td>主柱穴</td><td>Ｐ19</td><td>35×33−51</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ８</td><td>44×33−50</td><td></td><td>Ｐ20</td><td>38×34−16</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ９</td><td>107×85−28</td><td>主柱穴</td><td>Ｐ21</td><td>32×28−17</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ10</td><td>42×36−41</td><td>中央ピット</td><td>Ｐ22</td><td>31×27−40</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ11</td><td>34×30−30</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>
</td><td>
<table>
<tr><th>ピット番号</th><th>長軸×短軸−深さ（cm）</th><th>備　考</th><th>ピット番号</th><th>長軸×短軸−深さ（cm）</th><th>備　考</th></tr>
<tr><td>Ｐ１</td><td>40×36−68</td><td>主柱穴</td><td>Ｐ12</td><td>29×26−34</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ２</td><td>32×31−34</td><td></td><td>Ｐ13</td><td>51×46−51</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ３</td><td>53×39−29</td><td></td><td>Ｐ14</td><td>35×30−48</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ４</td><td>49×40−65</td><td>主柱穴（柱痕有）</td><td>Ｐ15</td><td>31×29−27</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ５</td><td>34×34−66</td><td></td><td>Ｐ16</td><td>41×39−55</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ６</td><td>42×30−62</td><td>主柱穴</td><td>Ｐ17</td><td>39×35−45</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ７</td><td>50×47−13</td><td></td><td>Ｐ18</td><td>36×20−23</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ８</td><td>44×33−50</td><td>主柱穴</td><td>Ｐ19</td><td>35×33−51</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ９</td><td>107×85−28</td><td>中央ピット</td><td>Ｐ20</td><td>38×34−16</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ10</td><td>42×36−41</td><td></td><td>Ｐ21</td><td>32×28−17</td><td></td></tr>
<tr><td>Ｐ11</td><td>34×30−30</td><td></td><td>Ｐ22</td><td>31×27−40</td><td></td></tr>
</table>
</td></tr>
<tr><td>P.160
15行目</td><td>ＡＭＳによる</td><td>Radiometric による</td></tr>
<tr><td>P.248
11行目</td><td>測る</td><td>測る。</td></tr>
<tr><td>P.280
２行目</td><td>Po1129～1130</td><td>Po1129～1131</td></tr>
<tr><td>P.392
35行目</td><td>未製品</td><td>未成品</td></tr>
<tr><td>奥付</td><td>一般国道９号（東伯中山道路）の改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ</td><td>一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ</td></tr>
</table>

写真図版編

頁	誤	正
図版目次 PL.74 ３.	SI31 遺物出土状況② 須恵器杯蓋（北東から）	SI31 遺物出土状況② 須恵器杯蓋 Po1139（北東から）
図版目次 PL.81 2.	SI117Po1297（手前）	SI117Po1295（手前）
図版目次 PL.91 2.	SK35　F54 出土状況（南から）	SK35　F54 出土状況②（南から）
PL.81 2.	SI117Po1297（手前）・1293 出土状況（北から）	SI117Po1295（手前）・1293 出土状況（北から）

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところでありますが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道９号（東伯中山道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

そのうち、東伯町に所在する笠見第３遺跡では、平成14・15年の２箇年の調査で総数170棟にものぼる弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居の他、大型の高床倉庫、玉作り工房など古代東伯地域における古代の大集落遺跡の他、古墳などを確認し、当時の集落構造及び変遷の様相を知る貴重な成果を得、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成16年３月

財団法人　鳥取県教育文化財団

理事長　有　田　博　充

序　　文

一般国道９号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡泊村から米子市（鳥取―島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡東伯町から西伯郡中山町にかけての、国道９号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路(自動車専用道路)であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の３の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成15年度は、「中尾遺跡」、「井図地頭遺跡」、「三林遺跡」、「笠見第３遺跡」、「久蔵峰北遺跡」、「蝮谷遺跡」、「岩本遺跡」、「八橋第８・９遺跡」、「別所中峯遺跡」、「松谷中峰遺跡」、の10遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「笠見第３遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成16年３月

国土交通省　倉吉河川国道事務所

所　長　矢　田　光　夫

例　　言

1　本書は、国土交通省国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業による、笠見第３遺跡の発掘調査報告書である。

2　本報告書に収載した笠見第３遺跡の所在地は、Ａ・Ｂ区が鳥取県東伯郡東伯町笠見字東神楽平730－６～45、Ｃ区が同町田越字岩屋峯112－４～12である。

3　本調査は、国土交通省中国地方建設局の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター東伯調査事務所が、平成14年・15年度に行った。

4　本報告書で示す標高は、２級基準点10－２－11、３級基準点Ｈ10－３－12を基点とする標高値を使用した。方位は、公共座標北を示す。なお、磁北は座標北に対し約６°27′25″西偏、真北は約22′35″東偏する。Ｘ：、Ｙ：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ｖ系の座標値である。

5　本報告書に記載の地形図は、国土地理院発行の１/50,000地形図「伯耆浦安」、東伯町地形図１/5,000「新農業構造改善事業（東伯地区）№１」を使用した。

6　本報告書の執筆は、各年度の調査員がそれぞれ分担して行い、執筆者名を文末に記載した。編集は牧本がおこなった。

7　本報告書に使用した遺構・遺物写真は、航空写真を除いて調査員が撮影した。

8　本報告にあたり、調査前・調査後航空写真撮影、調査前地形測量、調査後地形測量、Ａ・Ｂ区一部の遺構実測及び玉作工房出土管玉未製品・剥片の石材産地同定、竪穴建物等埋土の花粉分析、焼失建物出土炭化材等の^{14}Ｃ年代測定、樹種同定、炭化種実同定、土器内部付着物同定の理化学分析を業者委託した。

9　本遺跡焼失建物出土炭化材の樹種同定を、鳥取大学農学部教授古川郁夫氏に依頼した。

10　本遺跡出土石製品の石材鑑定を、鳥取大学名誉教授赤木三郎氏に依頼した。

11　本遺跡SK93出土の動物骨の現地鑑定及び現地指導を、鳥取大学医学部教授井上貴央氏に依頼した。

12　出土遺物、図面、写真等は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

13　現地調査及び報告書作成に当たって、下記の方々に御指導、御協力いただいた。

赤木三郎、浅川滋男、井上貴央、田中義昭、丹羽野裕、深田　浩、船橋　晃、古川郁夫、米田克彦、藁科哲男（敬称略）

凡　　例

1　発掘調査時における遺構番号と報告書記載時の遺構番号は、基本的に一致するが、竪穴建物跡、掘立柱建物跡のピット番号は、調査時のものから変更したものがある。

2　本報告書における遺構番号は、次のように表した。

SI：竪穴建物跡、SB：掘立柱建物跡、SK：土坑・土壙、SS：段状遺構、SD：溝状遺構、P：柱穴等、SX：埋葬施設

なお、本報告で使用する用語のうち、竪穴建物については住居以外の機能を持ちえた可能性が指摘されるため表記の用語を使用することとした。（工楽　1998）

3　本報告書における実測図は、下記の縮尺で掲載した。

(1)　遺構図－竪穴建物跡：1/80、掘立柱建物跡：1/80、土坑・土壙：1/40、段状遺構：1/80、溝状遺構：1/80・1/100、古墳：1/160、横穴式石室：1/80、埋葬施設：1/40、床面・ピット内遺物出土状況：1/20・1/40

(2)　遺物実測図－土製品：1/4・1/2、金属製品：1/2・1/4、石製品：1/1・1/2・1/4、玉製品・玉未製品：1/1・1/2

4　遺構の測定値のうち、ピットの規模は（長軸×短軸－深さ）cmで表した。竪穴建物跡の規模は、壁溝を除いた床面の規模である。古墳墳丘の規模は、墳端までの計測値である。

5　遺構図における表示は以下のとおりである。

：焼土面、：貼床、：炭化物層、●：土製品、□：石製品

6　本報告書における遺物記号は次のように表す。

Po：土器・土製品、F：鉄製品、S：石製品、J：玉製品

7　土器実測図のうち、弥生土器、土師器は断面白抜き、須恵器は断面黒塗りで表現した。

遺物実測図中における記号は、以下のとおりとする。

→：ケズリの方向（砂粒の動き）、：擦り面・砥面、……：擦り範囲、：敲打範囲

：赤色塗彩

8　遺物のネーミングに際しての遺跡名には、「カサミ3」を略号として用いた。

9　文章中で触れた土器型式名及び年代観は、弥生時代は因幡・伯耆土器編年（清水　1992）、古墳時代土師器については、天神川下流編年（牧本　1996）、須恵器については陶邑・田辺編年（田辺1981）、古代の土師器については伯耆国庁編年（巽　1983）を参考にした。

参考文献

工楽善通　1998「コメント　竪穴建物の機能」『奈良国立文化財研究所シンポジウム報告　先史日本の住居とその周辺』浅川滋男編　同成社　P.41～49

清水真一　1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』正岡睦夫・松本岩雄編　木耳社　P.355～412

牧本哲雄　1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ　園第6遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書61　P.151～160

田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店　P.34～72

巽淳一郎　1983「古代窯業生産の展開―西日本を中心にして―」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　P.659～685

目　　次

本文編
巻頭カラー図版
序
序文
例言
凡例
目次
第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯 ……（牧本）　1
　第２節　調査の経過と方法 ……（牧本）　1
　第３節　調査体制……（牧本）　3
第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境 ……（小谷）　17
　第２節　歴史的環境 ……（淺田・岩井・原・福井）　18
第３章　弥生時代中期以前の調査成果
　第１節　調査の概要 ……（前島）　21
　第２節　土坑 ……（家塚・岩井・小谷・小山・坂本・西川・前島・牧本）　22
第４章　弥生時代の調査成果
　第１節　調査の概要 ……（牧本）　43
　第２節　竪穴建物跡 ……（家塚・岩井・小谷・小山・坂本・西川・前島・牧本）　46
　第３節　掘立柱建物跡 ……（岩井・小山・西川・牧本）　213
　第４節　土坑・土壙……（家塚・岩井・小山・西川・前島・牧本）　220
　第５節　段状遺構 ……（小山・牧本）　240
　第６節　土器溜り……（岩井）　246
　第７節　溝状遺構……（牧本）　248
　第８節　ピット内遺物について ……（牧本）　248
第５章　古墳時代の調査成果
　第１節　調査の概要 ……（牧本）　250
　第２節　竪穴建物跡 ……（家塚・岩井・小谷・小山・西川・前島・牧本）　250
　第３節　掘立柱建物跡 ……（西川・牧本）　330
　第４節　土坑・土壙 ……（前島・牧本・西川）　333
　第５節　段状遺構 ……（家塚・牧本）　335
　第６節　ピット内遺物について ……（牧本）　339
　第７節　笠見３号墳……（牧本）　342

第６章　奈良時代以降の調査成果
第１節　調査の概要 ……（牧本）　352
第２節　竪穴建物跡 ……（小山）　352
第３節　土坑・土壙墓 ……（小山・牧本）　354
第４節　溝状遺構……（牧本）　359
第５節　ピット内遺物について ……（牧本）　359
第７章　時期不明の遺構
第１節　竪穴建物跡 ……（岩井・西川・牧本）　360
第２節　掘立柱建物跡 ……（岩井・小山・西川・牧本）　362
第３節　土坑・土壙 ……（岩井・小山・西川）　370
第４節　段状遺構……（牧本）　379
第５節　溝状遺構……（牧本）　381
第８章　遺物包含層の調査
第１節　Ａ区遺物包含層 ……（牧本）　383
第２節　Ｂ区遺物包含層 ……（牧本）　385
第３節　Ｃ区遺物包含層 ……（牧本）　389
第４節　Ａ・Ｃ区遺構外遺物について ……（牧本）　391
第９章　考察とまとめ
第１節　笠見第３遺跡の集落変遷と建物配列パターンからみた集落構造の復元…（牧本）　392
第２節　東伯耆における終末期古墳の様相―笠見３号墳の調査から― ……（牧本）　397
第３節　笠見第３遺跡における玉製作について ……（岩井）　399
第４節　笠見第３遺跡の落し穴について ……（前島）　403
遺物観察表 ……（岩井・西川・前島・牧本）　407
特論１　笠見第３遺跡の自然化学分析……（パリノ・サーヴェイ株式会社）　464
特論２　鳥取県、笠見第３遺跡の放射性炭素年代測定 ……（株式会社　古環境研究所）　467
特論３　笠見第３遺跡出土碧玉、凝灰岩製玉材の産地分析……（藁科哲男）　469
特論４　笠見第３遺跡焼失住居跡から出土した炭化材の樹種 ……（古川郁夫・船橋　晃）　488
特論５　鳥取県、笠見第３遺跡における樹種同定 ……（株式会社　古環境研究所）　495
特論６　笠見第３遺跡出土土器内容物の分析 ……（パリノ・サーヴェイ株式会社）　498
特論７　笠見第３遺跡出土種実同定……（パリノ・サーヴェイ株式会社）　501
写真図版編

挿図目次

第１図　笠見第３遺跡位置図
第２図　笠見第３遺跡地区割図　1
第３図　笠見第３遺跡調査前地形測量図　5・6
第４図　平成14年度笠見第３遺跡Ｃ区調査後地形測量図　9・10
第５図　平成14・15年度笠見第３遺跡Ａ・Ｂ区調査後地形測量図　13・14
第６図　東伯町・笠見第３遺跡位置図　17
第７図　周辺遺跡分布図　19
第８図　笠見第３遺跡弥生時代以前遺構配置図　21
第９図　笠見第３遺跡SK7遺構図　21
第10図　笠見第３遺跡SK8遺構図　22
第11図　笠見第３遺跡SK12遺構図　22
第12図　笠見第３遺跡SK15遺構図　22
第13図　笠見第３遺跡SK16遺構図　23
第14図　笠見第３遺跡SK19遺構図　23
第15図　笠見第３遺跡SK23遺構図　23
第16図　笠見第３遺跡SK24遺構図　24
第17図　笠見第３遺跡SK27遺構図　24
第18図　笠見第３遺跡SK28遺構図　24
第19図　笠見第３遺跡SK29遺構図　25
第20図　笠見第３遺跡SK34遺構図　25
第21図　笠見第３遺跡SK39遺構図　25
第22図　笠見第３遺跡SK43遺構図　26
第23図　笠見第３遺跡SK45遺構図　26
第24図　笠見第３遺跡SK46遺構図　26
第25図　笠見第３遺跡SK47遺構図　27
第26図　笠見第３遺跡SK52遺構図　27
第27図　笠見第３遺跡SK53遺構図　27
第28図　笠見第３遺跡SK59遺構図　28
第29図　笠見第３遺跡SK60遺構図　28
第30図　笠見第３遺跡SK63遺構図　28
第31図　笠見第３遺跡SK64遺構図　29
第32図　笠見第３遺跡SK66遺構図　29
第33図　笠見第３遺跡SK68遺構図　29
第34図　笠見第３遺跡SK69遺構図　30
第35図　笠見第３遺跡SK71遺構図　30
第36図　笠見第３遺跡SK72遺構図　30
第37図　笠見第３遺跡SK75遺構図　31
第38図　笠見第３遺跡SK76遺構図　31
第39図　笠見第３遺跡SK77遺構図　31
第40図　笠見第３遺跡SK79遺構図　32
第41図　笠見第３遺跡SK80遺構図　32
第42図　笠見第３遺跡SK83遺構図　32
第43図　笠見第３遺跡SK85遺構図　33
第44図　笠見第３遺跡SK86遺構図　33
第45図　笠見第３遺跡SK90遺構図　33
第46図　笠見第３遺跡SK91遺構図　34
第47図　笠見第３遺跡SK94遺構図　34
第48図　笠見第３遺跡SK97遺構図　35
第49図　笠見第３遺跡SK98遺構図　35
第50図　笠見第３遺跡SK99出土遺物実測図　35
第51図　笠見第３遺跡SK99遺構図　36
第52図　笠見第３遺跡SK101遺構図　36
第53図　笠見第３遺跡SK102遺構図　37
第54図　笠見第３遺跡SK103遺構図　37
第55図　笠見第３遺跡SK107遺構図　37
第56図　笠見第３遺跡SK108遺構図　37
第57図　笠見第３遺跡SK109遺構図　38
第58図　笠見第３遺跡SK110遺構図　38
第59図　笠見第３遺跡SK111遺構図　38
第60図　笠見第３遺跡SK112遺構図　39
第61図　笠見第３遺跡SK113遺構図　39
第62図　笠見第３遺跡SK114遺構図　39
第63図　笠見第３遺跡SK115遺構図　40
第64図　笠見第３遺跡SK117遺構図　40
第65図　笠見第３遺跡SK120遺構図　40
第66図　笠見第３遺跡SK121遺構図　41

第67図　笠見第３遺跡SK122遺構図　41
第68図　笠見第３遺跡SK123遺構図　41
第69図　笠見第３遺跡SK125遺構図　42
第70図　笠見第３遺跡SK127遺構図　42
第71図　笠見第３遺跡SK130遺構図　42
第72図　笠見第３遺跡弥生時代遺構配置図　43
第73図　笠見第３遺跡SI1遺構図　46
第74図　笠見第３遺跡SI1出土遺物実測図　47
第75図　笠見第３遺跡SI2遺構図　48
第76図　笠見第３遺跡SI2出土遺物実測図　48
第77図　笠見第３遺跡SI4遺構図　49
第78図　笠見第３遺跡SI4出土遺物実測図　49
第79図　笠見第３遺跡SI6遺構図　50
第80図　笠見第３遺跡SI7出土遺物実測図　51
第81図　笠見第３遺跡SI7・８遺構図　52
第82図　笠見第３遺跡SI8出土遺物実測図　53
第83図　笠見第３遺跡SI10・11遺構図　54
第84図　笠見第３遺跡SI10出土遺物実測図　55
第85図　笠見第３遺跡SI14遺構図　56
第86図　笠見第３遺跡SI14出土遺物実測図　57
第87図　笠見第３遺跡SI20出土遺物実測図　57
第88図　笠見第３遺跡SI20・21遺構図　58
第89図　笠見第３遺跡SI23出土遺物実測図　59
第90図　笠見第３遺跡SI23遺構図　59
第91図　笠見第３遺跡SI24遺構図　60
第92図　笠見第３遺跡SI24出土遺物実測図　61
第93図　笠見第３遺跡SI26遺構図　62
第94図　笠見第３遺跡SI26出土遺物実測図　63
第95図　笠見第３遺跡SI28出土遺物実測図　63
第96図　笠見第３遺跡SI28遺構図　63
第97図　笠見第３遺跡SI30遺構図・P5炭化材出土状況図　64
第98図　笠見第３遺跡SI30炭化材出土状況図　65
第99図　笠見第３遺跡SI30出土遺物実測図　66
第100図　笠見第３遺跡SI34遺構図　68
第101図　笠見第３遺跡SI34玉剥片等出土状況図　68
第102図　笠見第３遺跡SI34出土遺物実測図　69
第103図　笠見第３遺跡SI36遺構図　71
第104図　笠見第３遺跡SI36出土遺物実測図　72
第105図　笠見第３遺跡SI37遺構図　73
第106図　笠見第３遺跡SI37出土遺物実測図　73
第107図　笠見第３遺跡SI38出土遺物実測図　74
第108図　笠見第３遺跡SI38遺構図　74
第109図　笠見第３遺跡SI40遺構図　75
第110図　笠見第３遺跡SI40出土遺物実測図　76
第111図　笠見第３遺跡SI41・42遺構図　77
第112図　笠見第３遺跡SI42出土遺物実測図　78
第113図　笠見第３遺跡SI43遺構図　79
第114図　笠見第３遺跡SI43出土遺物実測図　79
第115図　笠見第３遺跡SI44遺構図　80
第116図　笠見第３遺跡SI44出土遺物実測図　81
第117図　笠見第３遺跡SI35・45遺構図　82
第118図　笠見第３遺跡SI45出土遺物実測図　83
第119図　笠見第３遺跡SI46・SB26遺構図　83
第120図　笠見第３遺跡SI46出土遺物実測図　84
第121図　笠見第３遺跡SI48遺構図　85
第122図　笠見第３遺跡SI48炭化材出土状況図　86
第123図　笠見第３遺跡SI48出土遺物実測図　86
第124図　笠見第３遺跡SI49遺構図　87
第125図　笠見第３遺跡SI49出土遺物実測図（１）　88
第126図　笠見第３遺跡SI49出土遺物実測図（２）　89
第127図　笠見第３遺跡SI49玉未製品・剥片出土状況図　89
第128図　笠見第３遺跡SI50・54遺構図　91
第129図　笠見第３遺跡SI50出土遺物実測図　91
第130図　笠見第３遺跡SI51遺構図　93
第131図　笠見第３遺跡SI51出土遺物実測図　94
第132図　笠見第３遺跡SI53遺構図　94
第133図　笠見第３遺跡SI53出土遺物実測図　94
第134図　笠見第３遺跡SI55遺構図　95
第135図　笠見第３遺跡SI55出土遺物実測図　95
第136図　笠見第３遺跡SI59遺構図　95
第137図　笠見第３遺跡SI61遺構図　96
第138図　笠見第３遺跡SI61出土遺物実測図　97

第139図　笠見第３遺跡SI62遺構図　97
第140図　笠見第３遺跡SI62出土遺物実測図　98
第141図　笠見第３遺跡SI63遺構図　99
第142図　笠見第３遺跡SI63出土遺物実測図　99
第143図　笠見第３遺跡SI64遺構図　100
第144図　笠見第３遺跡SI64出土遺物実測図　100
第145図　笠見第３遺跡SI65遺構図　101
第146図　笠見第３遺跡SI65出土遺物実測図　101
第147図　笠見第３遺跡SI66遺構図　102
第148図　笠見第３遺跡SI66出土遺物実測図　103
第149図　笠見第３遺跡SI67・68遺構図　104
第150図　笠見第３遺跡SI67出土遺物実測図　105
第151図　笠見第３遺跡SI68出土遺物実測図　105
第152図　笠見第３遺跡SI69・76遺構図　106
第153図　笠見第３遺跡SI76出土遺物実測図　107
第154図　笠見第３遺跡SI70遺構図　108
第155図　笠見第３遺跡SI70出土遺物実測図　108
第156図　笠見第３遺跡SI71遺構図　109
第157図　笠見第３遺跡SI71出土遺物実測図　110
第158図　笠見第３遺跡SI72遺構図　111
第159図　笠見第３遺跡SI72出土遺物実測図　112
第160図　笠見第３遺跡SI73遺構図　113
第161図　笠見第３遺跡SI73出土遺物実測図　114
第162図　笠見第３遺跡SI74遺構図・埋め戻し土実測図　115
第163図　笠見第３遺跡SI74出土遺物実測図　116
第164図　笠見第３遺跡SI75遺構図　117
第165図　笠見第３遺跡SI75遺物出土状況図　118
第166図　笠見第３遺跡SI75出土遺物実測図（１）　119
第167図　笠見第３遺跡SI75出土遺物実測図（２）　120
第168図　笠見第３遺跡SI75出土遺物実測図（３）　121
第169図　笠見第３遺跡SI77遺構図　121
第170図　笠見第３遺跡SI77出土遺物実測図　122
第171図　笠見第３遺跡SI79遺構図　123
第172図　笠見第３遺跡SI79出土遺物実測図　124
第173図　笠見第３遺跡SI80・87・88遺構図　125
第174図　笠見第３遺跡SI80出土遺物実測図　126
第175図　笠見第３遺跡SI87出土遺物実測図　127
第176図　笠見第３遺跡SI88出土遺物実測図　127
第177図　笠見第３遺跡SI82出土遺物実測図　128
第178図　笠見第３遺跡SI82遺構図　129
第179図　笠見第３遺跡SI83・SK44遺構図　130
第180図　笠見第３遺跡SI83・SK44出土遺物実測図　131
第181図　笠見第３遺跡SI86遺構図　132
第182図　笠見第３遺跡SI86出土遺物実測図　132
第183図　笠見第３遺跡SI89・99遺構図　134
第184図　笠見第３遺跡SI89出土遺物実測図　135
第185図　笠見第３遺跡SI99出土遺物実測図　135
第186図　笠見第３遺跡SI90遺構図・炭化材出土状況図　136
第187図　笠見第３遺跡SI90出土遺物実測図　137
第188図　笠見第３遺跡SI91遺構図　138
第189図　笠見第３遺跡SI91出土遺物実測図　138
第190図　笠見第３遺跡SI92・94遺構図　139
第191図　笠見第３遺跡SI92・94出土遺物実測図　139
第192図　笠見第３遺跡SI93遺構図　140
第193図　笠見第３遺跡SI95遺構図　141
第194図　笠見第３遺跡SI95出土遺物実測図　141
第195図　笠見第３遺跡SI96遺構図　142
第196図　笠見第３遺跡SI97遺構図・遺物出土状況図　143
第197図　笠見第３遺跡SI97出土遺物実測図　144
第198図　笠見第３遺跡SI98遺構図　145
第199図　笠見第３遺跡SI98出土遺物実測図　145
第200図　笠見第３遺跡SI101遺構図　146
第201図　笠見第３遺跡SI101出土遺物実測図　146
第202図　笠見第３遺跡SI103・SS11遺構図　147
第203図　笠見第３遺跡SI105遺構図　147
第204図　笠見第３遺跡SI105出土遺物実測図　148
第205図　笠見第３遺跡SI107遺構図　148
第206図　笠見第３遺跡SI107出土遺物実測図　149
第207図　笠見第３遺跡SI109遺構図　149
第208図　笠見第３遺跡SI109出土遺物実測図　150

第209図　笠見第３遺跡SI112遺構図　151
第210図　笠見第３遺跡SI112出土遺物実測図　152
第211図　笠見第３遺跡SI114遺構図　153
第212図　笠見第３遺跡SI114出土遺物実測図　154
第213図　笠見第３遺跡SI115遺構図　155
第214図　笠見第３遺跡SI115出土遺物実測図　155
第215図　笠見第３遺跡SI118出土遺物実測図　156
第216図　笠見第３遺跡SI118遺構図　156
第217図　笠見第３遺跡SI119遺構図　157
第218図　笠見第３遺跡SI119出土遺物実測図　158
第219図　笠見第３遺跡SI120遺構図　159
第220図　笠見第３遺跡SI120炭化材出土状況図　160
第221図　笠見第３遺跡SI120出土遺物実測図　160
第222図　笠見第３遺跡SI123遺構図　161
第223図　笠見第３遺跡SI123出土遺物実測図　162
第224図　笠見第３遺跡SI125遺構図　162
第225図　笠見第３遺跡SI125出土遺物実測図　162
第226図　笠見第３遺跡SI129遺構図　163
第227図　笠見第３遺跡SI129出土遺物実測図　164
第228図　笠見第３遺跡SI130遺構図　165
第229図　笠見第３遺跡SI130出土遺物実測図　166
第230図　笠見第３遺跡SI132遺構図　167
第231図　笠見第３遺跡SI132出土遺物実測図　167
第232図　笠見第３遺跡SI133遺構図　168
第233図　笠見第３遺跡SI133出土遺物実測図　169
第234図　笠見第３遺跡SI134遺構図　170
第235図　笠見第３遺跡SI134出土遺物実測図　170
第236図　笠見第３遺跡SI135出土遺物実測図　171
第237図　笠見第３遺跡SI135遺構図　171
第238図　笠見第３遺跡SI138・139遺構図　173
第239図　笠見第３遺跡SI139遺構図　174
第240図　笠見第３遺跡SI138出土遺物実測図　174
第241図　笠見第３遺跡SI139出土遺物実測図　175
第242図　笠見第３遺跡SI140出土遺物実測図　176
第243図　笠見第３遺跡SI140遺構図　177
第244図　笠見第３遺跡SI141遺構図　177
第245図　笠見第３遺跡SI141出土遺物実測図　178
第246図　笠見第３遺跡SI143遺構図　179
第247図　笠見第３遺跡SI144・145遺構図　180
第248図　笠見第３遺跡SI144出土遺物実測図　181
第249図　笠見第３遺跡SI145出土遺物実測図　181
第250図　笠見第３遺跡SI147遺構図　182
第251図　笠見第３遺跡SI147出土遺物実測図　183
第252図　笠見第３遺跡SI149遺構図　184
第253図　笠見第３遺跡SI149出土遺物実測図　185
第254図　笠見第３遺跡SI151遺構図　186
第255図　笠見第３遺跡SI151出土遺物実測図　187
第256図　笠見第３遺跡SI152遺構図　188
第257図　笠見第３遺跡SI152出土遺物実測図　189
第258図　笠見第３遺跡SI153遺構図　190
第259図　笠見第３遺跡SI153炭化材出土状況図　191
第260図　笠見第３遺跡SI153出土遺物実測図　191
第261図　笠見第３遺跡SI154遺構図　192
第262図　笠見第３遺跡SI154出土遺物実測図　193
第263図　笠見第３遺跡SI155・SI156遺構図　194
第264図　笠見第３遺跡SI155出土遺物実測図　194
第265図　笠見第３遺跡SI156出土遺物実測図　194
第266図　笠見第３遺跡SI157遺構図　195
第267図　笠見第３遺跡SI157炭化材出土状況図　196
第268図　笠見第３遺跡SI157出土遺物実測図　196
第269図　笠見第３遺跡SI158遺構図　197
第270図　笠見第３遺跡SI158出土遺物実測図　197
第271図　笠見第３遺跡SI159遺構図　198
第272図　笠見第３遺跡SI159出土遺物実測図　199
第273図　笠見第３遺跡SI160遺構図　200
第274図　笠見第３遺跡SI160出土遺物実測図　200
第275図　笠見第３遺跡SI163遺構図　201
第276図　笠見第３遺跡SI163出土遺物実測図　201
第277図　笠見第３遺跡SI164遺構図　202
第278図　笠見第３遺跡SI164出土遺物実測図　203
第279図　笠見第３遺跡SI165遺構図　204
第280図　笠見第３遺跡SI166遺構図　205
第281図　笠見第３遺跡SI166出土遺物実測図（１）　206
第282図　笠見第３遺跡SI166出土遺物実測図（２）　207

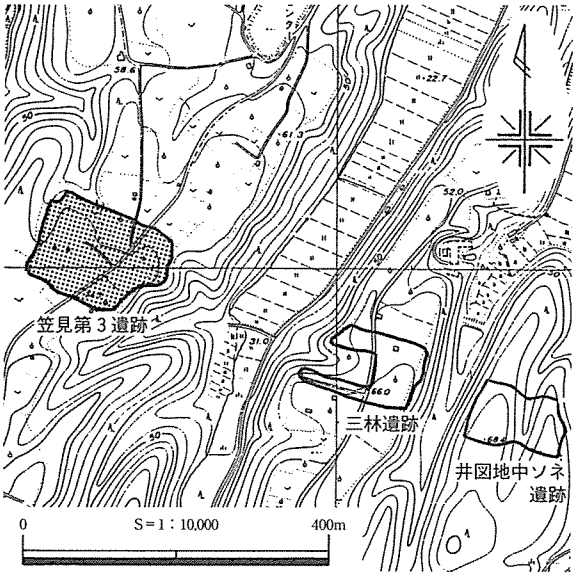
第283図　笠見第３遺跡SI167遺構図　207
第284図　笠見第３遺跡SI167出土遺物実測図　208
第285図　笠見第３遺跡SI168出土遺物実測図　208
第286図　笠見第３遺跡SI168遺構図　209
第287図　笠見第３遺跡SI169遺構図　210
第288図　笠見第３遺跡SI169出土遺物実測図　210
第289図　笠見第３遺跡SI170遺構図　211
第290図　笠見第３遺跡SI170出土遺物実測図　212
第291図　笠見第３遺跡SB1遺構図　213
第292図　笠見第３遺跡SB1出土遺物実測図　214
第293図　笠見第３遺跡SB4遺構図　215
第294図　笠見第３遺跡SB4出土遺物実測図　215
第295図　笠見第３遺跡SB5遺構図　216
第296図　笠見第３遺跡SB5出土遺物実測図　216
第297図　笠見第３遺跡SB16遺構図　217
第298図　笠見第３遺跡SB17出土遺物実測図　218
第299図　笠見第３遺跡SB17遺構図　218
第300図　笠見第３遺跡SB21遺構図　219
第301図　笠見第３遺跡SB21出土遺物実測図　219
第302図　笠見第３遺跡SK1遺構図　220
第303図　笠見第３遺跡SK1出土遺物実測図　220
第304図　笠見第３遺跡SK3遺構図　221
第305図　笠見第３遺跡SK3出土遺物実測図　221
第306図　笠見第３遺跡SK4遺構図　222
第307図　笠見第３遺跡SK4出土遺物実測図　222
第308図　笠見第３遺跡SK5遺構図　223
第309図　笠見第３遺跡SK5出土遺物実測図　223
第310図　笠見第３遺跡SK9遺構図　223
第311図　笠見第３遺跡SK9出土遺物実測図　223
第312図　笠見第３遺跡SK13出土遺物実測図　224
第313図　笠見第３遺跡SK13遺構図　224
第314図　笠見第３遺跡SK14遺構図　224
第315図　笠見第３遺跡SK14出土遺物実測図　224
第316図　笠見第３遺跡SK17遺構図　225
第317図　笠見第３遺跡SK17出土遺物実測図　225
第318図　笠見第３遺跡SK20遺構図　226
第319図　笠見第３遺跡SK20出土遺物実測図　226
第320図　笠見第３遺跡SK25出土遺物実測図　226
第321図　笠見第３遺跡SK25遺構図　226
第322図　笠見第３遺跡SK26遺構図　227
第323図　笠見第３遺跡SK26出土遺物実測図　227
第324図　笠見第３遺跡SK37遺構図　228
第325図　笠見第３遺跡SK37出土遺物実測図　228
第326図　笠見第３遺跡SK55遺構図　228
第327図　笠見第３遺跡SK55出土遺物実測図　229
第328図　笠見第３遺跡SK56出土遺物実測図　229
第329図　笠見第３遺跡SK56遺構図　229
第330図　笠見第３遺跡SK57遺構図　230
第331図　笠見第３遺跡SK58遺構図　230
第332図　笠見第３遺跡SK57出土遺物実測図　231
第333図　笠見第３遺跡SK58出土遺物実測図　231
第334図　笠見第３遺跡SK61遺構図　232
第335図　笠見第３遺跡SK62遺構図　232
第336図　笠見第３遺跡SK61出土遺物実測図　232
第337図　笠見第３遺跡SK62出土遺物実測図　233
第338図　笠見第３遺跡SK65出土遺物実測図（１）　234
第339図　笠見第３遺跡SK65遺構図　235
第340図　笠見第３遺跡SK65出土遺物実測図（２）　235
第341図　笠見第３遺跡SK84遺構図　236
第342図　笠見第３遺跡SK84出土遺物実測図　236
第343図　笠見第３遺跡SK88遺構図　236
第344図　笠見第３遺跡SK88出土遺物実測図　236
第345図　笠見第３遺跡SK100遺構図　237
第346図　笠見第３遺跡SK100出土遺物実測図　237
第347図　笠見第３遺跡SK106遺構図　238
第348図　笠見第３遺跡SK119遺構図　238
第349図　笠見第３遺跡SK119出土遺物実測図　239
第350図　笠見第３遺跡SK128遺構図　239
第351図　笠見第３遺跡SK128出土遺物実測図　239
第352図　笠見第３遺跡SS3遺構図　240
第353図　笠見第３遺跡SS3出土遺物実測図　240
第354図　笠見第３遺跡SS5出土遺物実測図　241
第355図　笠見第３遺跡SS6遺構図　241
第356図　笠見第３遺跡SS6出土遺物実測図　241

第357図　笠見第３遺跡SS7・８遺構図　242
第358図　笠見第３遺跡SS7出土遺物実測図　243
第359図　笠見第３遺跡SS8出土遺物実測図　243
第360図　笠見第３遺跡SS9遺構図　244
第361図　笠見第３遺跡SS9出土遺物実測図（１）　245
第362図　笠見第３遺跡SS9出土遺物実測図（２）　246
第363図　笠見第３遺跡SS11出土遺物実測図　246
第364図　笠見第３遺跡Ａ区土器溜り遺物出土状況図　246
第365図　笠見第３遺跡Ａ区土器溜り出土遺物実測図　247
第366図　笠見第３遺跡SD4遺構図　248
第367図　笠見第３遺跡P726遺物出土状況図　248
第368図　笠見第３遺跡P726出土遺物実測図　249
第369図　笠見第３遺跡弥生時代ピット内出土遺物実測図　249
第370図　笠見第３遺跡古墳時代遺構配置図　250
第371図　笠見第３遺跡SI3遺構図　252
第372図　笠見第３遺跡SI3出土遺物実測図　253
第373図　笠見第３遺跡SI9・27遺構図　254
第374図　笠見第３遺跡SI9出土遺物実測図　255
第375図　笠見第３遺跡SI27出土遺物実測図　255
第376図　笠見第３遺跡SI11遺構図　256
第377図　笠見第３遺跡SI11出土遺物実測図　257
第378図　笠見第３遺跡SI12遺構図　258
第379図　笠見第３遺跡SI12出土遺物実測図（１）　259
第380図　笠見第３遺跡SI12出土遺物実測図（２）　260
第381図　笠見第３遺跡SI13遺構図　261
第382図　笠見第３遺跡SI13出土遺物実測図　262
第383図　笠見第３遺跡SI15遺構図　263
第384図　笠見第３遺跡SI15出土遺物実測図　264
第385図　笠見第３遺跡SI16遺構図　264
第386図　笠見第３遺跡SI16出土遺物実測図　265
第387図　笠見第３遺跡SI17遺構図　265
第388図　笠見第３遺跡SI17出土遺物実測図　266
第389図　笠見第３遺跡SI18遺構図　267
第390図　笠見第３遺跡SI18D１・PB内遺物出土状況図　268
第391図　笠見第３遺跡SI18出土遺物実測図（１）　269
第392図　笠見第３遺跡SI18出土遺物実測図（２）　270
第393図　笠見第３遺跡SI19遺構図　271
第394図　笠見第３遺跡SI19出土遺物実測図　272
第395図　笠見第３遺跡SI21遺物出土状況図　273
第396図　笠見第３遺跡SI21出土遺物実測図（１）　274
第397図　笠見第３遺跡SI21出土遺物実測図（２）　275
第398図　笠見第３遺跡SI22遺構図　275
第399図　笠見第３遺跡SI22出土遺物実測図　276
第400図　笠見第３遺跡SI25・47遺構図　277
第401図　笠見第３遺跡SI25出土遺物実測図　278
第402図　笠見第３遺跡SI29遺構図　279
第403図　笠見第３遺跡SI29出土遺物実測図　280
第404図　笠見第３遺跡SI31遺構図　281
第405図　笠見第３遺跡SI31出土遺物実測図　281
第406図　笠見第３遺跡SI32・56遺構図　283
第407図　笠見第３遺跡SI32出土遺物実測図　284
第408図　笠見第３遺跡SI56出土遺物実測図　285
第409図　笠見第３遺跡SI33遺構図　286
第410図　笠見第３遺跡SI33出土遺物実測図　286
第411図　笠見第３遺跡SI35出土遺物実測図　287
第412図　笠見第３遺跡SI39遺構図　289
第413図　笠見第３遺跡SI39出土遺物実測図　289
第414図　笠見第３遺跡SI41出土遺物実測図　290
第415図　笠見第３遺跡SI57遺構図　291
第416図　笠見第３遺跡SI57出土遺物実測図　291
第417図　笠見第３遺跡SI58遺構図　292
第418図　笠見第３遺跡SI58出土遺物実測図　292
第419図　笠見第３遺跡SI60遺構図　293
第420図　笠見第３遺跡SI60出土遺物実測図　294
第421図　笠見第３遺跡SI78遺構図　295
第422図　笠見第３遺跡SI78出土遺物実測図　295
第423図　笠見第３遺跡SI81遺構図　296
第424図　笠見第３遺跡SI81出土遺物実測図　297
第425図　笠見第３遺跡SI84遺構図　297

第426図　笠見第３遺跡SI84出土遺物実測図　298
第427図　笠見第３遺跡SI85・104遺構図　299
第428図　笠見第３遺跡SI85出土遺物実測図　300
第429図　笠見第３遺跡SI104出土遺物実測図　300
第430図　笠見第３遺跡SI100・102遺構図　301
第431図　笠見第３遺跡SI100出土遺物実測図　302
第432図　笠見第３遺跡SI106遺構図　302
第433図　笠見第３遺跡SI106出土遺物実測図　302
第434図　笠見第３遺跡SI108遺構図　303
第435図　笠見第３遺跡SI108出土遺物実測図　304
第436図　笠見第３遺跡SI110遺構図　305
第437図　笠見第３遺跡SI111遺構図　306
第438図　笠見第３遺跡SI111出土遺物実測図　306
第439図　笠見第３遺跡SI113遺構図　307
第440図　笠見第３遺跡SI113出土遺物実測図　308
第441図　笠見第３遺跡SI116遺構図　308
第442図　笠見第３遺跡SI116出土遺物実測図　309
第443図　笠見第３遺跡SI117遺構図　309
第444図　笠見第３遺跡SI117出土遺物実測図　310
第445図　笠見第３遺跡SI121遺構図　311
第446図　笠見第３遺跡SI121出土遺物実測図　311
第447図　笠見第３遺跡SI122遺構図　312
第448図　笠見第３遺跡SI122出土遺物実測図　313
第449図　笠見第３遺跡SI124遺構図　313
第450図　笠見第３遺跡SI124出土遺物実測図　314
第451図　笠見第３遺跡SI127遺構図　315
第452図　笠見第３遺跡SI127出土遺物実測図　315
第453図　笠見第３遺跡SI128貼床除去後状況図　316
第454図　笠見第３遺跡SI128遺構図　317
第455図　笠見第３遺跡SI128出土遺物実測図　318
第456図　笠見第３遺跡SI131遺構図　318
第457図　笠見第３遺跡SI131出土遺物実測図　319
第458図　笠見第３遺跡SI136遺構図　319
第459図　笠見第３遺跡SI136出土遺物実測図　320
第460図　笠見第３遺跡SI137遺構図　321
第461図　笠見第３遺跡SI137出土遺物実測図　321
第462図　笠見第３遺跡SI142遺構図　322
第463図　笠見第３遺跡SI142出土遺物実測図　323
第464図　笠見第３遺跡SI146遺構図　324
第465図　笠見第３遺跡SI150遺構図　325
第466図　笠見第３遺跡SI150出土遺物実測図　326
第467図　笠見第３遺跡SI161・162遺構図　327
第468図　笠見第３遺跡SI161・162変遷図　328
第469図　笠見第３遺跡SI161出土遺物実測図　329
第470図　笠見第３遺跡SI162出土遺物実測図　329
第471図　笠見第３遺跡SB13遺構図　330
第472図　笠見第３遺跡SB15遺構図　331
第473図　笠見第３遺跡SB20・SK87遺構図　332
第474図　笠見第３遺跡SB20出土遺物実測図　332
第475図　笠見第３遺跡SK35遺構図　333
第476図　笠見第３遺跡SK35出土遺物実測図　333
第477図　笠見第３遺跡SK36遺構図　333
第478図　笠見第３遺跡SK36出土遺物実測図　334
第479図　笠見第３遺跡SK95遺構図　334
第480図　笠見第３遺跡SK95遺物出土状況図　334
第481図　笠見第３遺跡SK95出土遺物実測図　334
第482図　笠見第３遺跡SK124遺構図　335
第483図　笠見第３遺跡SK124出土遺物実測図　335
第484図　笠見第３遺跡SS1・SB8・11遺構図　336
第485図　笠見第３遺跡SS1・SB8・11土層断面図　337
第486図　笠見第３遺跡SS1出土遺物実測図　339
第487図　笠見第３遺跡SS4遺構図　340
第488図　笠見第３遺跡SS4出土遺物実測図　341
第489図　笠見第３遺跡古墳時代ピット内出土遺物実測図　341
第490図　笠見３号墳墳丘測量図　342
第491図　笠見３号墳墳丘除去後測量図　343
第492図　笠見３号墳墳丘土層断面図　344
第493図　笠見３号墳横穴式石室実測図　345
第494図　笠見３号墳SX1遺構図　345
第495図　笠見３号墳周溝内遺物出土状況図　346
第496図　笠見３号墳出土遺物実測図（１）　347
第497図　笠見３号墳出土遺物実測図（２）　348
第498図　笠見３号墳出土遺物実測図（３）　349

第499図　笠見３号墳出土遺物実測図（４）　350
第500図　笠見３号墳出土遺物実測図（５）　351
第501図　奈良時代以降遺構配置図　352
第502図　笠見第３遺跡SI5遺構図　353
第503図　笠見第３遺跡SI5出土遺物実測図　353
第504図　笠見第３遺跡SK2遺構図　354
第505図　笠見第３遺跡SK2出土遺物実測図　355
第506図　笠見第３遺跡SK92遺構図　356
第507図　笠見第３遺跡SK93遺構図牛骨出土状況図　357
第508図　笠見第３遺跡Ｂ区第１遺構面溝群遺構図　358
第509図　笠見第３遺跡Ｂ区P3内出土遺物実測図　359
第510図　笠見第３遺跡P13内出土遺物実測図　359
第511図　笠見第３遺跡SI52遺構図　360
第512図　笠見第３遺跡SI126遺構図　360
第513図　笠見第３遺跡SI148遺構図　361
第514図　笠見第３遺跡SB2遺構図　362
第515図　笠見第３遺跡SB3遺構図　363
第516図　笠見第３遺跡SB6遺構図　363
第517図　笠見第３遺跡SB7遺構図　364
第518図　笠見第３遺跡SB10遺構図　364
第519図　笠見第３遺跡SB12遺構図　365
第520図　笠見第３遺跡SB14遺構図　366
第521図　笠見第３遺跡SB18遺構図　366
第522図　笠見第３遺跡SB19遺構図　367
第523図　笠見第３遺跡SB22遺構図　367
第524図　笠見第３遺跡SB23遺構図　368
第525図　笠見第３遺跡SB24遺構図　369
第526図　笠見第３遺跡SB25遺構図　369
第527図　笠見第３遺跡SK6遺構図　370
第528図　笠見第３遺跡SK10遺構図　370
第529図　笠見第３遺跡SK11遺構図　370
第530図　笠見第３遺跡SK18遺構図　370
第531図　笠見第３遺跡SK21遺構図　371
第532図　笠見第３遺跡SK22遺構図　371
第533図　笠見第３遺跡SK30遺構図　371
第534図　笠見第３遺跡SK31遺構図　372
第535図　笠見第３遺跡SK32・33遺構図　372
第536図　笠見第３遺跡SK38遺構図　372
第537図　笠見第３遺跡SK40遺構図　373
第538図　笠見第３遺跡SK41遺構図　373
第539図　笠見第３遺跡SK42遺構図　373
第540図　笠見第３遺跡SK48遺構図　374
第541図　笠見第３遺跡SK49遺構図　374
第542図　笠見第３遺跡SK50遺構図　374
第543図　笠見第３遺跡SK51遺構図　374
第544図　笠見第３遺跡SK54遺構図　374
第545図　笠見第３遺跡SK67遺構図　375
第546図　笠見第３遺跡SK70遺構図　375
第547図　笠見第３遺跡SK73遺構図　375
第548図　笠見第３遺跡SK74遺構図　376
第549図　笠見第３遺跡SK78遺構図　376
第550図　笠見第３遺跡SK81遺構図　376
第551図　笠見第３遺跡SK82遺構図　377
第552図　笠見第３遺跡SK89遺構図　377
第553図　笠見第３遺跡SK96遺構図　377
第554図　笠見第３遺跡SK104遺構図　377
第555図　笠見第３遺跡SK105遺構図　378
第556図　笠見第３遺跡SK116遺構図　378
第557図　笠見第３遺跡SK118遺構図　378
第558図　笠見第３遺跡SK126遺構図　379
第559図　笠見第３遺跡SK129遺構図　379
第560図　笠見第３遺跡SS2・SB9遺構図　380
第561図　笠見第３遺跡SS10遺構図　380
第562図　笠見第３遺跡SD3遺構図　381
第563図　笠見第３遺跡SD5・６・７遺構図　381
第564図　笠見第３遺跡Ａ区遺物包含層土層断面図　383
第565図　笠見第３遺跡Ａ区遺物包含層出土遺物実測図　384
第566図　笠見第３遺跡Ｂ区遺物包含層出土遺物実測図（１）　386

第567図　笠見第３遺跡Ｂ区遺物包含層出土遺物実測図（２）　387
第568図　笠見第３遺跡Ｂ区遺物包含層出土遺物実測図（３）　388
第569図　笠見第３遺跡Ｃ区遺物包含層出土遺物実測図（１）　389
第570図　笠見第３遺跡Ｃ区遺物包含層出土遺物実測図（２）　390
第571図　笠見第３遺跡Ａ・Ｃ区遺構外出土遺物実測図　391
第572図　笠見第３遺跡集落変遷図（１）　393
第573図　笠見第３遺跡集落変遷図（２）　394
第574図　笠見第３遺跡管玉製作工程　402
第575図　笠見第３遺跡落し穴形態分類図（落し穴）　403
第576図　笠見第３遺跡落し穴配置図　404



第１図　笠見第３遺跡位置図

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

山陰地方では、国道９号線の交通混雑緩和及び、将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県中部地域では、東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画・施工されている。

東伯中山道路の計画地内には、東伯町地内で中尾第１遺跡、井図地頭遺跡、井図地中ソネ遺跡、三林遺跡、笠見第３遺跡、久蔵峰北遺跡、蝮谷遺跡、八橋第８・９遺跡、岩本遺跡などの多数の遺跡があり、建設に先立ち計画地内の遺跡及び遺構の広がりを確認する必要性が生じた。このため、東伯町教育委員会が平成12年度から14年度にかけて、国庫補助事業として試掘調査を行った。

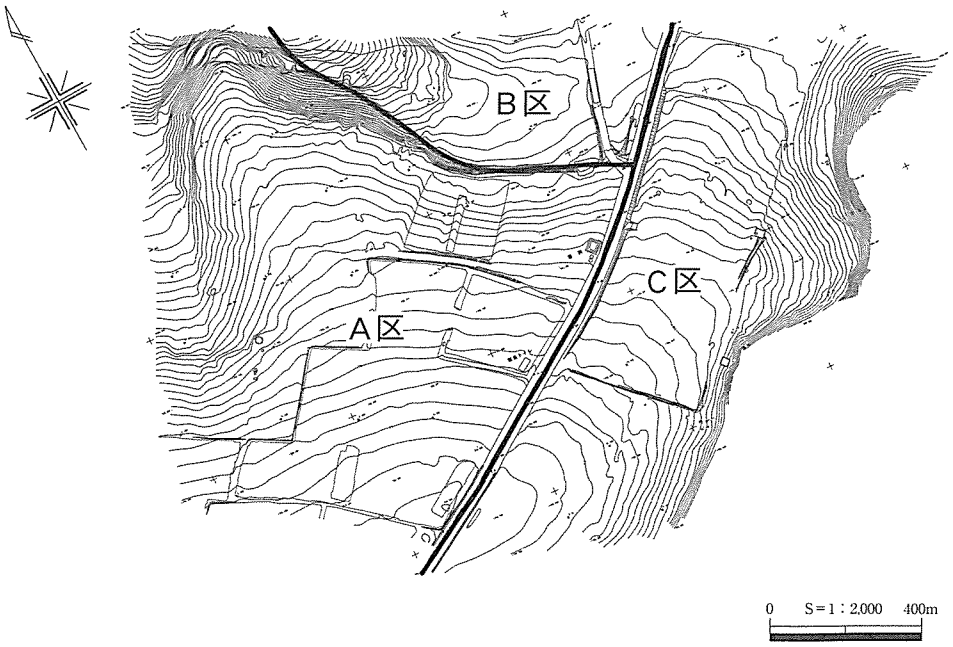
この結果を受け、国土交通省中国地方建設局倉吉河川国道事務所は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議し、文化財保護法第57条の３に基づく発掘通知を行った上、鳥取県教育委員会事務局教育長の指示により財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これにより、当財団が文化財保護法第57条に基づく発掘調査届を提出し、平成14年度から、埋蔵文化財センターが発掘調査を担当することとなった。

笠見第３遺跡については、当初、調査対象区すべての調査を平成14年度中に終了させる予定であったが、遺構の密度が高かったこと、耕作による攪乱土を除去して遺構検出するまでの労力が必要であったことなどから調査の進捗が遅れ、国土交通省中国地方建設局倉吉河川国道事務所と協議し、引き続き平成15年度も調査を行うこととなった。

第２節　調査の経過と方法

１　平成14年度

平成14年度調査では、調査地内に周辺地域の営農者が頻繁に利用する農道があることから、農道を除いた東西部分を調査対象地とし、地形的な特徴及び試掘調査の結果から調査地をＡ区、Ｂ区、Ｃ区と細分して調査に取り掛かった（第２図参照）。



第２図　笠見第３遺跡地区割図

調査は、Ｃ区から開始しＢ区、Ａ区の順に行った。なお、Ｂ区内にある農道については、仮設道を用地内に設置した後、撤去して調査した。Ｃ区排土は、ベルトコンベヤーと重機によって調査区内に仮置きした後、国土交通省によって一部をダンプで場外搬出し、Ａ・Ｂ区排土は調査が終了したＣ区に仮置きした。

なお、Ａ区の西側尾根部分についても試掘調査の結果遺構の存在が知られていたが、用地買収の関係で平成14年度は調査が行えなかった。

調査区については、調査前地形測量を業者委託し、調査区内に10mおきに基準杭を設定し、グリッドを設けた。その結果、南北（Ｙ）軸は東から１～21、東西（Ｘ）軸は北からＡ～Ｐとした。グリッド名は、東西南北軸交点の北東側杭の名称をとって呼称することとし、座標はA16杭（Ｘ：－56556.033m、Ｙ：－59596.252m）、P9杭（Ｘ：－56706.034m、Ｙ：－59526.251m）などとなった。

４月22日に調査前航空写真撮影、４月25日から調査前地形測量を業者委託した後、Ｃ区において５月２日から重機による表土剥ぎ作業を行った。人力による検出及び完掘作業は、Ｃ区を５月９日から12月20日、Ｂ区を６月27日から12月20日、Ａ区を９月１日から12月20日の間で行った。なお、Ａ区については、全区域の調査を終えることができなかったため、国土交通省と協議の結果、残りの区域の発掘作業および報告書刊行については、次年度で行うこととなった。

Ｃ区は、全域に亘って二十世紀梨栽培に伴う肥料穴よる攪乱が著しく、攪乱土を除去した後に遺構の輪郭が確認できる状況であったため、検出作業が困難を極めた。遺構の遺存状態も非常に悪かったが、弥生時代中期から奈良時代の竪穴建物跡68基、掘立柱建物跡12基、土坑並び土壙31基、段状遺構５基、溝状遺構３基、古墳１基（笠見３号墳）など多数の遺構を検出した。

Ｂ区については、表土下は部分的に弥生時代遺物を多量に包含する暗茶褐色土上面で奈良時代以降の遺構が検出されると伴に、前述の包含層を除去した後の黒褐色土上面でも弥生時代後期後葉以前の遺構面を確認することができ、計２面の調査となった。検出した遺構は、竪穴建物跡３基、段状遺構２基、土坑４基、ピット・溝状遺構多数を検出した。

Ａ区については、調査区の北西側部分、Ａ区の約４割に当たる約4,804㎡について調査を行った。Ｃ区同様梨栽培に伴う肥料穴による攪乱が著しかったが、竪穴建物跡33基、掘立柱建物跡２基、土坑・土壙11基、段状遺構３基、溝状遺構、ピット群など多数の遺構を検出することができた。

Ａ・Ｃ区の遺構は、地山である「上のホーキ火山灰層」ないしは「オドリ火山砂層」で検出された。なお、Ａ区北側の一部では、弥生時代後期以前の遺構を暗茶褐色土の遺物包含層を除去したところで検出したものもある。

笠見第３遺跡の発掘調査面積は、Ｂ区が１面2,465.7㎡の２面、計4,931.4㎡、Ｃ区が6,471㎡となった。

現地調査終了後、３月31日に発掘調査概報を刊行した。

２　平成15年度

平成15年度調査は、Ａ区の残り部分と調査地内を南北に走る農道部分を加えた、6,900㎡が対象となった。

調査は、４月22日にＡ区の残り部分から開始し、調査区中央部を通る農道部分については前年度終了したＣ区に仮設農道を設置した後に撤去を行い、８月19日から調査を行った。

調査の結果、竪穴建物跡67基、掘立柱建物跡13基、土坑並び土壙76基、溝状遺構３基、ピット多数

を検出した。笠見第３遺跡Ａ区の調査面積は、平成14年度分とあわせ11,704㎡となった。

その結果、遺跡全体での遺構の総数は、竪穴建物跡170基、掘立柱建物跡25基、土坑並び土壙130基、段状遺構11基、溝状遺構及びピット多数にのぼり、鳥取県内においても有数の集落遺跡であることが明らかとなった。

調査区全体の調査面積は、平成14年・15年度あわせて23,106.4㎡となった。

第３節　調査体制

調査は、下記の体制で実施した。

平成14年度

○調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理　事　長　　有田　博充
常務理事　　川口　一彦（兼・鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長　　下田　弘人

埋蔵文化財センター

所　　長　　田中　弘道（兼・鳥取県埋蔵文化財センター所長）
次　　長　　竹内　　茂
次　　長　　加藤　隆昭
調査研究課長（兼）　加藤　隆昭
企画調整班長　　松田　　潔（８月異動・転出）
文化財主事　　原田　雅弘
庶務課長（兼）　竹内　　茂
主任事務職員　　矢部　美恵
事務職員　　小林　順子、大川　秋子

○調査担当　第一調査班　中部埋蔵文化財東伯調査事務所

所　　長　　佐治　孝弐
班　　長　　牧本　哲雄（主任調査員、笠見第３遺跡担当）
調　査　員　　小谷　郁夫、小山　浩和、家塚　英詞、坂本　嘉和（Ｈ．14．10～）
調査補助員　　吉田由香里
事務補助員　　大田　直子

○調査指導　鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力　国土交通省中国地方建設局倉吉工事事務所、東伯町、東伯町教育委員会

平成15年度

○調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理　事　長　　有田　博充
常務理事　　川口　一彦（兼・鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長　　下田　弘人

埋蔵文化財センター

所　　長	田中　弘道（兼・鳥取県埋蔵文化財センター所長）
次　　長	竹内　　茂
次　　長	加藤　隆昭
調査課長（兼）	加藤　隆昭
企画調整班長	山枡　雅美
文化財主事	下江　健太
庶務課長（兼）	竹内　　茂
主任事務職員	矢部　美恵
事 務 職 員	田中　陽子　大川　秋子　植田　恵子（９月退職）
	谷垣真寿美　小谷　有里
事務補助員	山根　美代（11月採用）

○調査担当　埋蔵文化財センター東伯調査事務所

所　　長	佐治　孝弐
班　　長	牧本　哲雄（笠見第３遺跡担当）
調　査　員	西川　雄大　岩井　美枝　前島　ちか（７月から）
調査補助員	有本　　仁
事務補助員	大田　直子

○調査指導　鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力　国土交通省中国地方建設局倉吉河川国道事務所、東伯町、東伯町教育委員会

調査日誌抄

平成14年

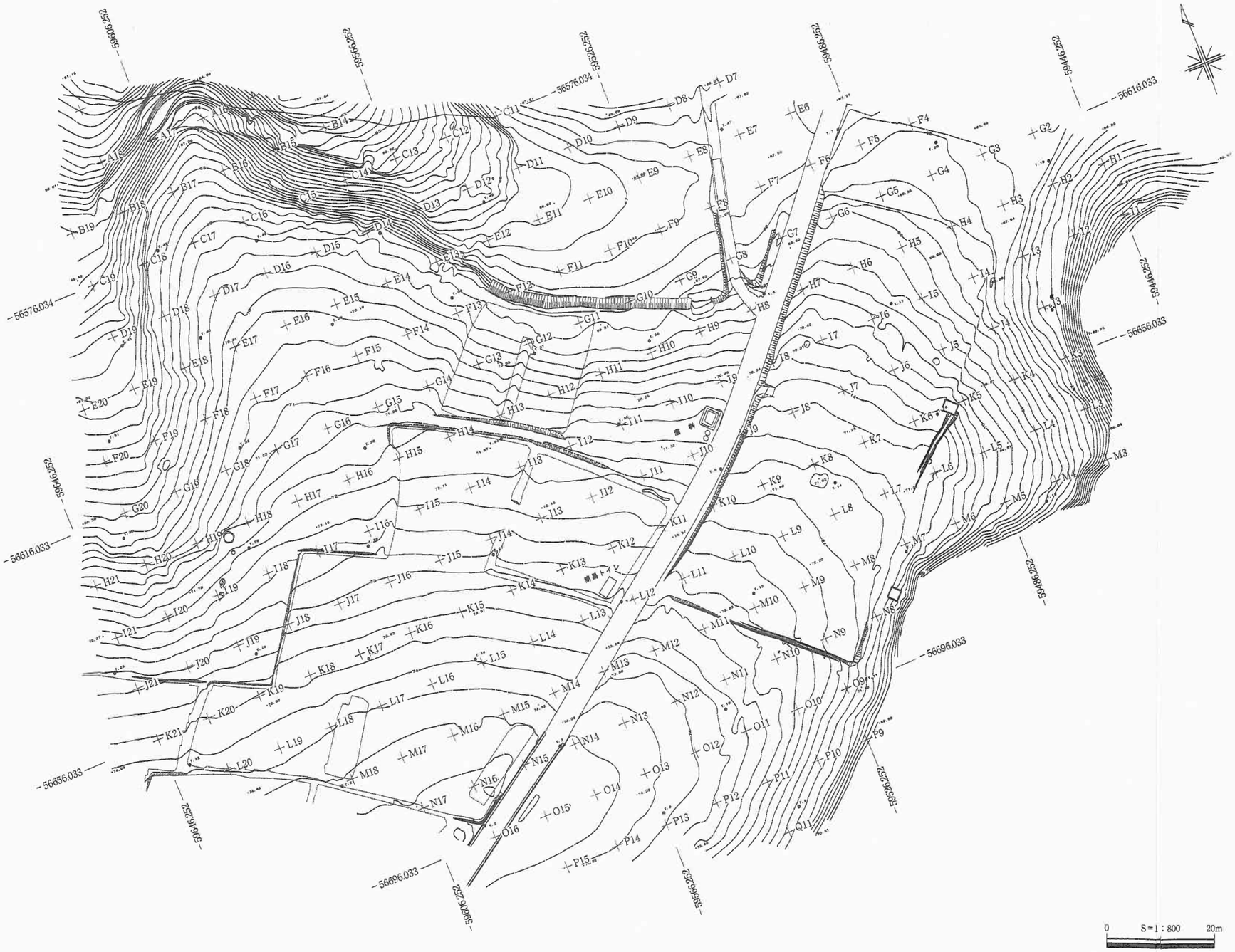
４月22日	調査前空撮
４月24日	調査前地形測量開始
５月２日	Ｃ区重機表土剥ぎ開始
５月９日	発掘作業Ｃ区から開始
５月21日	SI1・３調査開始
６月13日	SI9・13・18・21・23完掘
７月３日	火葬墓（SK2）検出。Ｂ区仮設道部分掘り下げ開始
７月11日	笠見３号墳調査開始
７月23日	SI30炭化材・焼土検出
７月31日	事務所移転
８月６日	笠見３号墳周溝内須恵器出土状況写真
８月７日	SI10床面からガラス管玉出土
９月２日	Ａ区SI60検出作業。Ｂ区仮設道設置
９月６日	SI34玉未製品・剥片多量出土
９月11日	SI49玉未製品・剥片多量出土
９月13日	Ｂ区検出作業開始
９月18日	現地調査記者発表
９月21日	現地説明会開催（157名参加）
10月７日	Ａ区検出作業開始。
10月15日	Ａ区SI61・62・65・66・67・68・69掘り下げ開始
10月18日	Ｃ区完掘状況空撮
10月23日	Ｃ区埋め戻し開始
11月12日	Ｂ区SI90・95掘り下げ開始
11月27日	笠見３号墳盛土内で馬具出土
12月２日	SI90炭化材出土写真撮影
12月20日	掘り下げ作業終了
12月24日	Ａ・Ｂ区遺構測量業務委託作業開始
12月26日	補足実測終了
３月14日	遺構測量業務成果品納品
３月31日	笠見第３遺跡調査概報作成

平成15年

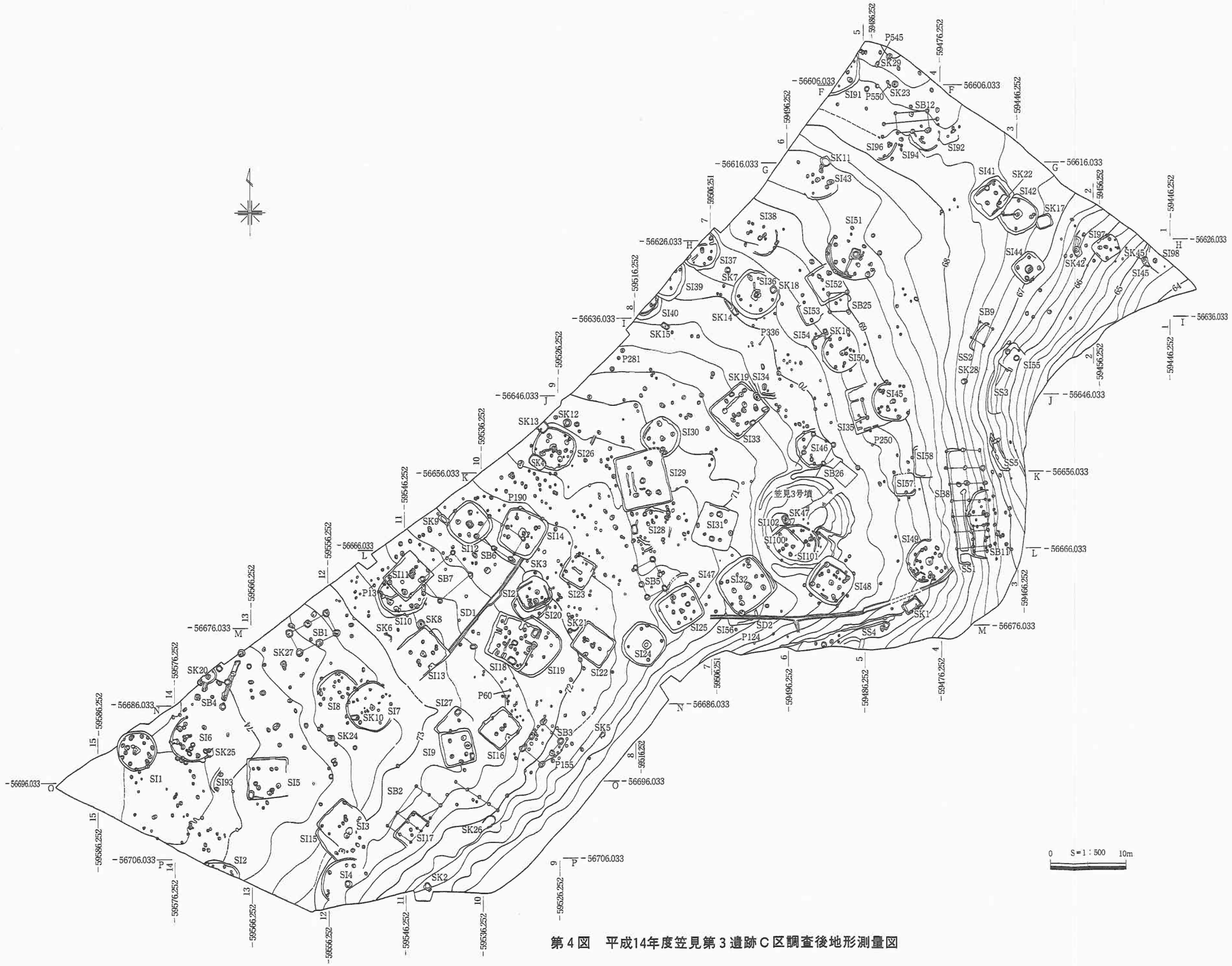
４月22日	Ａ区検出作業開始
４月25日	SI105・106・107掘り下げ開始
５月２日	SI108・109・110・111・112掘り下げ開始
５月７日	SI113・114・115・116掘り下げ開始
５月22日	SI120炭化材検出
７月２日	SI115・122・132・140、SK59・60・66・67・69完掘
７月16日	Ａ区西側谷部遺物包含層掘り下げ。有機物付着小型甕、石斧出土。
８月７日	浅川滋男鳥取環境大学教授現地指導
９月22日	SK79・80・83・89・90・91・94・97・98完掘写真撮影
９月24日	現地調査記者発表
９月27日	現地説明会開催（218名参加）
10月15日	完掘状況空撮。検出作業終了
10月31日	補足遺構実測終了
11月４日	報告書作成開始

写真１　作業員集合写真（平成15年度）

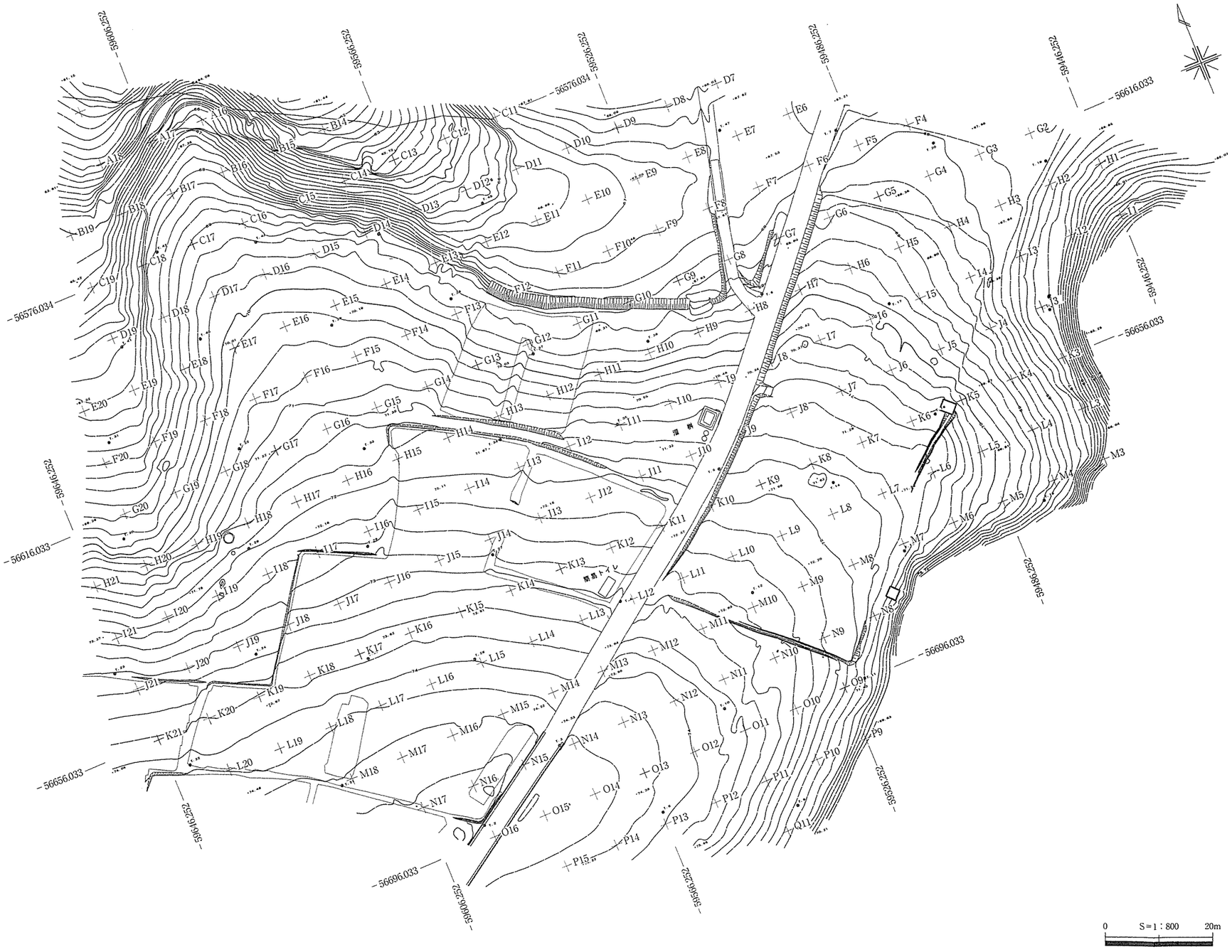
写真２　重機表土剥ぎ作業



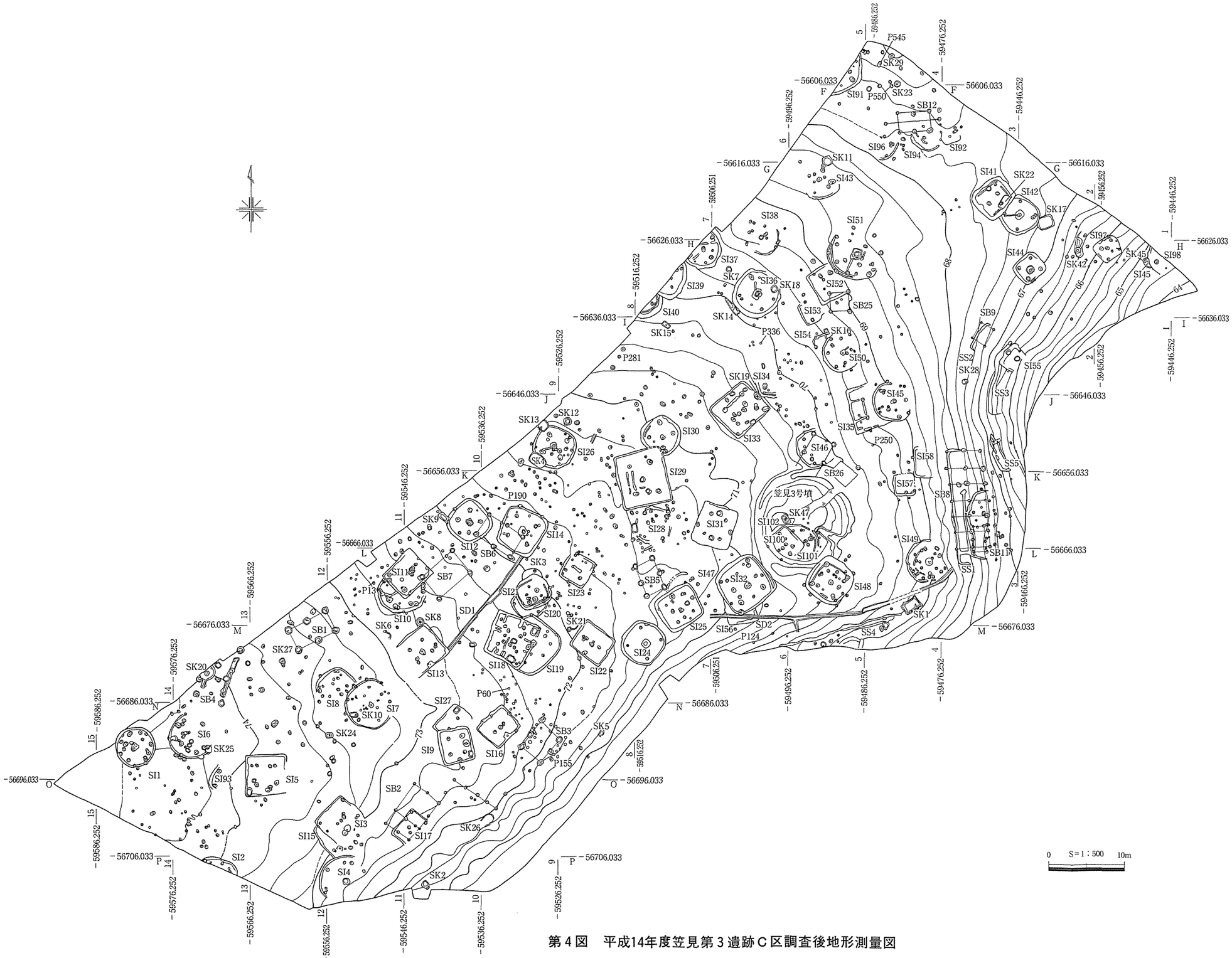
第３図　笠見第３遺跡調査前地形測量図



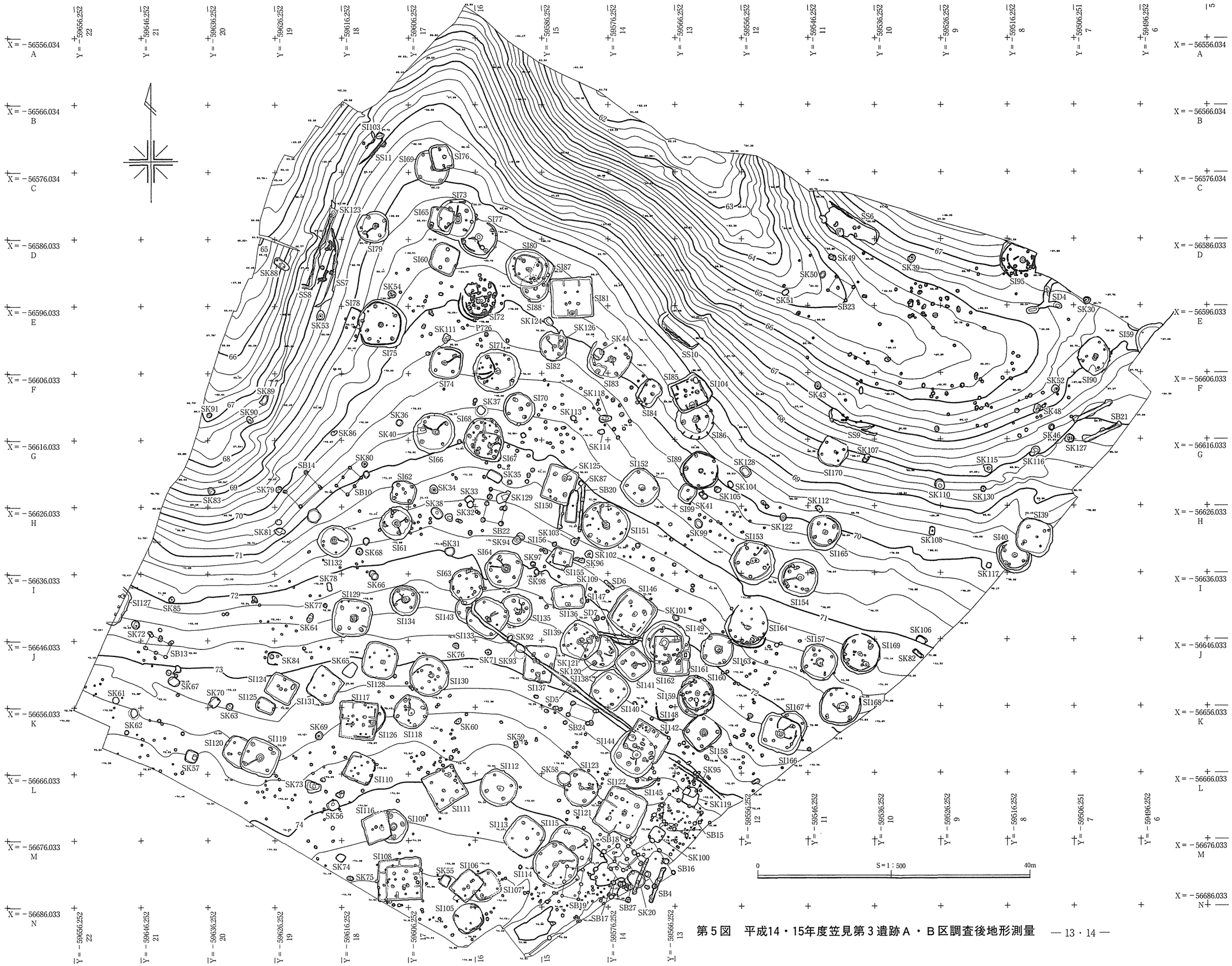
第４図　平成14年度笠見第３遺跡Ｃ区調査後地形測量図



第３図　笠見第３遺跡調査前地形測量図



第４図　平成14年度笠見第３遺跡Ｃ区調査後地形測量図



第５図　平成14・15年度笠見第３遺跡Ａ・Ｂ区調査後地形測量

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

今回調査が行われた東伯町は、鳥取県中部の西側に位置する。大山連峰の烏ヶ山（1,381m）と野田ヶ山を結ぶ線を南西端とし、北東に細長い三角状に広がって北端は日本海に至る。東西15.2km、南北16.8km、総面積は約82.2㎢で県面積の約2.3%を占めている。人口は約12,400人（平成15年末）で少子高齢化の進展で昭和期に比して暫減傾向にある。昭和29年の5町村合併により、東伯耆を意味する現町名となった。

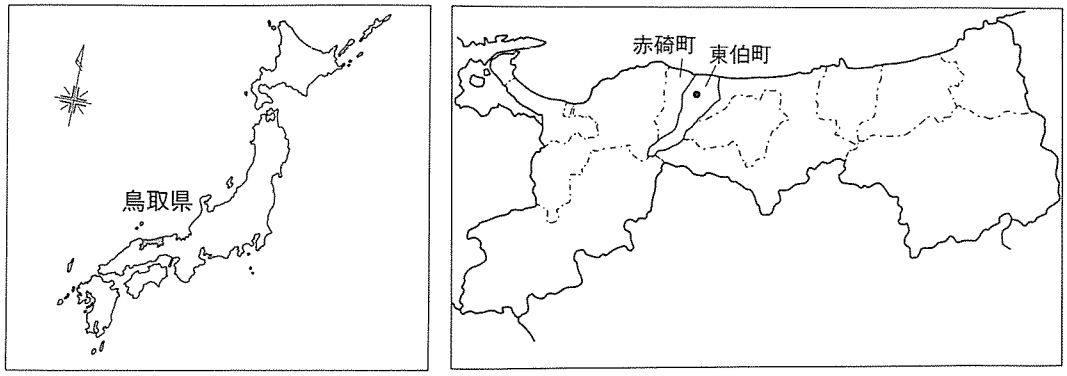
本町の地勢は、大山（1,729m）山系から派生する丘陵地及び、加勢蛇川・洗川が形成する沖積平野からなる。平野部は黒ボク地帯で、西側丘陵地は火山灰土の堆積した溶岩台地状地形を呈している。

町内には大山山麓に源流を発する、大小計5本の川が日本海に注いでいる。遺跡は、加勢蛇川下流域東岸のなだらかな低丘陵地と、洗川西岸の丘陵台地とその山裾付近、加勢蛇川中流域に比較的多く集まっている。両河川に挟まれた扇状地には、律令時代の条里制が旧地名や地割りに残る地域もあるが、概ね残りがよいとは言えない。洗川の西側には3本の小河川があり、水田可能な低湿地は広くはないが安定的で初期の稲作に適していたといえる。加勢蛇川の東岸地域は、火山扇状地性台地で大小の農業用ため池があり、荘園が発達した平安中期ごろから導水していたものと考えられる。

海岸沿いの八橋地区は、古代から伯耆の東西をつなぐ交通、交流及び戦略的活動の要衝として栄え、古代山陰道清水駅、中世以降は八橋城が築かれ、国道9号線沿線には、近年商業および公共施設が急速に立地し、弱電、酒造、食品製造などの工場群とともに都市機能を形成している。また、加勢蛇川最上流域の地獄谷から大休峠付近、大山町川床を経て大山博労座に通じる急峻な山道は、江戸時代から昭和初期にかけて、東伯耆地方から市の立つ大山へ牛馬を運ぶ重要な短絡ルートであった。

二十世紀梨生産は、昭和20年代から盛んになり、北米や香港・シンガポールなどにも輸出されるなど本県東郷町に次ぐ生産量を誇るが、現在では農家の高齢化、後継者不足による廃園が目立っている。本調査地でも平成元年度まで梨栽培が行われていた。また、水稲とともに芝、ブロイラー・和牛などの畜産も主要な農業分野である。

笠見第3遺跡はJR浦安駅の南西約2kmの丘陵台地上に位置している。調査地の東側の谷あいには水田があり、調査地との標高差は約40mを測る。調査地からは東に東郷町の羽衣石城趾、青谷町の長尾鼻まで見られる。また、南西部には雄大な大山が屹立している。（小谷）



第6図　東伯町・笠見第3遺跡の位置

第２節　歴史的環境

旧石器・縄文時代　鳥取県内では旧石器時代の遺構を伴う遺跡は発見されておらず、この地域では赤碕町松ヶ丘、東伯町槻下で尖頭器が数点見つかっているのみである。

縄文時代の遺構は、後期に入るまで明確なものは少ない。早～前期では西高尾谷奥遺跡（35）で、押型文土器とともに住居跡の可能性がある竪穴状遺構、松ヶ丘遺跡（13）、大栄町築山遺跡、森藤第２遺跡（31）などで土器片が出土している。中期では、井図地中ソネ遺跡（９）、井図地頭遺跡（10）など丘陵上の遺跡で、土器が出土している。後期になると丘陵部に定住的な集落が見られるようになる。特に森藤第２遺跡では中央に石囲い炉をもつ竪穴住居が土器、土器片錘、土偶とともに検出されている。その他、この時代と考えられる落し穴が福留遺跡（12）、中尾第１遺跡（11）、笠見第３遺跡（７）など多くの遺跡で検出されており、狩猟場として丘陵・微高地が利用された様子が窺われる。

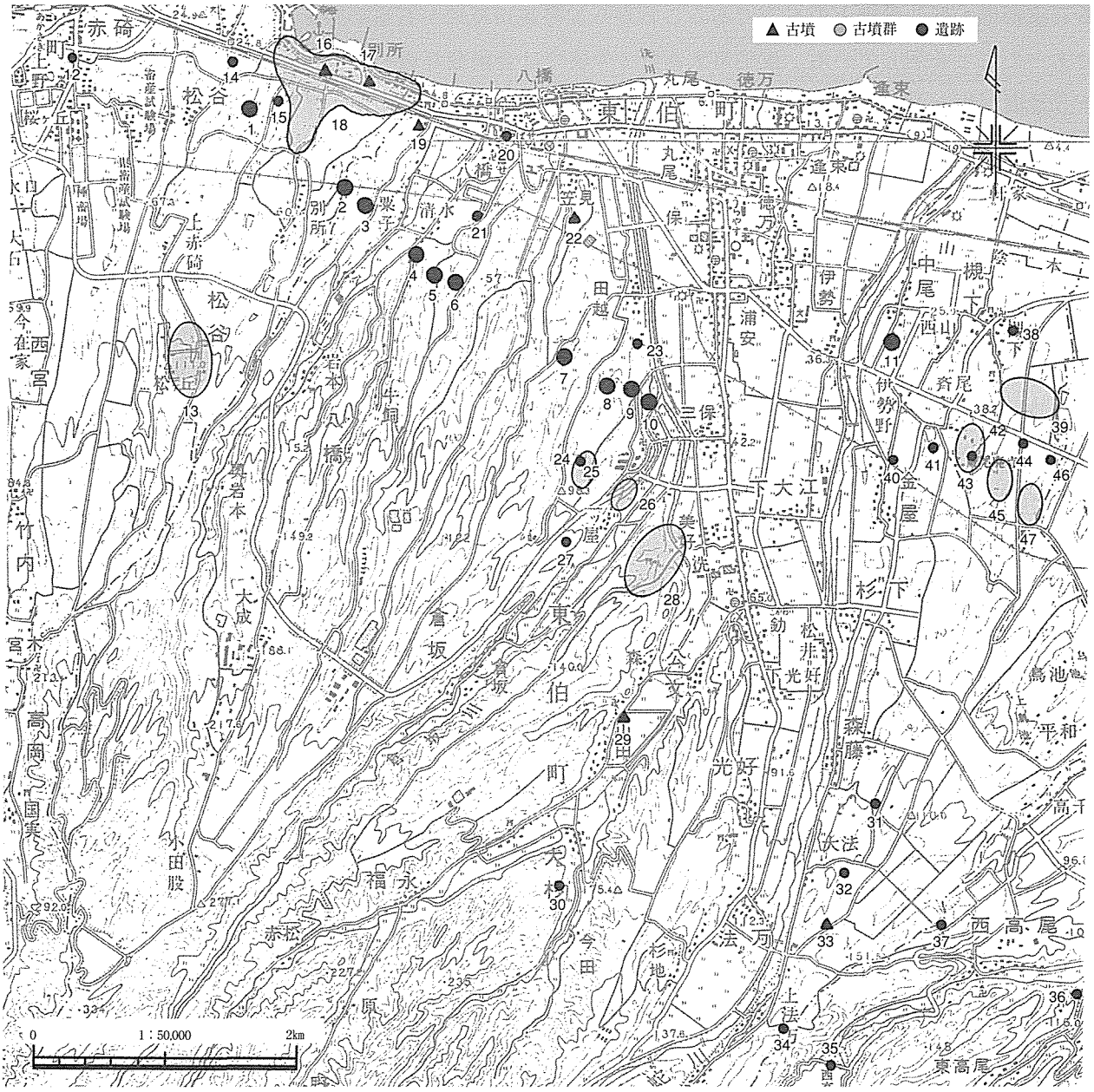
弥生時代　弥生時代に入り本格的に稲作が始められ、それを機軸とした文化・社会が形成される。米子市目久美遺跡では前期の水田が確認されているが、県中部では、現時点では稲作に関る遺構は発見されていない。中期後葉から古墳時代初頭にかけて集落遺跡が大幅に増加する。東伯町森藤第１・２遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡（46）、大峰遺跡（37）、田越遺跡群（23、24、25）、井図地中ソネ遺跡、笠見第３遺跡（７）、三林遺跡（８）、久蔵峰北遺跡（６）、赤碕町福留遺跡などで集落が営まれている。これらの遺跡の中には、集落内に玉作り工房をもつ遺跡がある。大栄町西高江遺跡は、中期の工房跡で水晶の剥片とともに製作に使用したと考えられる鉄製工具等が出土している。笠見第３遺跡は、後期の工房跡で緑色凝灰岩製の管玉未成品や剥片が出土している。現段階で当地域での数少ない生産遺跡である。

墓域については、前期に大栄町青木第１遺跡・後ろ谷遺跡で土壙墓が見つかっており、中期以降赤碕町墓ノ上遺跡（14）・別所女夫岩峯遺跡で木棺墓が検出されている。井図地中ソネ遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての溝で区画された土壙墓群が供献土器とともに見つかっている。

また、弥生時代の祭祀を特徴づける銅鐸が、県中部では６遺跡で計７口見つかっている。東伯町八橋の南方丘陵上（21）で銅鐸（扁平鈕Ⅰ式）が１口見つかっている。また、東伯町田越の丘陵上（25）では、正確な出土状況は明らかではないが、中細形銅剣が４口、東伯町久蔵峰で銅矛が１口出土している。八橋を中心とする地域は銅剣・銅矛・銅鐸がそろって出土していることとなり、島根県神庭荒神谷遺跡と同様の組成であることから、共通した祭祀形態に関連性があったものとして興味深い。

古墳時代　古墳時代に入ると大型前方後円墳が各地に出現する。当該地域では明らかに前期に属する大型古墳は確認されていないが、前方後方墳である別所１号墳（笠取塚古墳）（16）は、墳形等の特徴から、前期に遡る可能性がある。中期から後期になって、前方後円墳の築造が見られる。別所２号墳（17）・八橋狐塚古墳（19）・笠見１号墳（22）・竜ヶ崎３号墳（28）などがある。

中期・後期になると中・小規模の円墳が群集して築かれるようになる。中期以降の群集墳としては、大栄町妻波古墳群・瀬戸古墳群・西穂波古墳群、赤碕町出上岩屋古墳・別所古墳群（18）・箆津古墳群・帆立貝式古墳の光１号墳などがある。また、後期以降従来の竪穴系の埋葬施設に代わって横穴式石室が採用される。このうち、大法３号墳（33）や三保６号墳（26）、大栄町上種東３、上種西14号墳は竪穴系横口式石室と呼ばれる特異な構造で、八橋狐塚古墳の西側くびれ部の石室もその可能性があり、槻下古墳群（39）・塚本古墳群（45）・大高野古墳群（47）・斎尾古墳群（43）など、後続す



第７図　周辺遺跡分布図

１松谷中峰遺跡　２別所中峯遺跡　３八橋第８・９遺跡　４岩本遺跡　５蝮谷遺跡　６久蔵峰北遺跡　７笠見第３遺跡
８三林遺跡（旧田越第４遺跡）　９井図地中ソネ遺跡　10井図地頭遺跡　11中尾第１遺跡　12福留遺跡　13松ヶ丘遺跡
14墓ノ上遺跡　15松谷遺跡　16笠取塚古墳　17別所２号墳　18別所古墳群　19八橋狐塚古墳　20八橋城跡　21八橋銅鐸出土地
22笠見１号墳　23田越第１遺跡　24田越第２遺跡　25田越第３遺跡（銅剣出土地）　26三保古墳群　27三保遺跡群
28竜ヶ崎古墳群　29山田１・２号墳　30妙見山城跡　31森藤遺跡群　32古瓦出土地（大法廃寺跡）　33大法古墳群　34法万経塚
35西高尾谷奥遺跡　36西高尾経塚　37大峰遺跡　38槻下豪族居館　39槻下古墳群　40金屋経塚　41伊勢野遺跡群
42斎尾廃寺跡　43斎尾古墳群　44大高野遺跡　45塚本古墳群　46水溜り・駕籠据場遺跡　47大高野古墳群

る石室形態も同じ系譜上のものであることから加勢蛇川流域が石室形態を共通とするまとまった地域であったことを示している。東伯町大高野３号墳では金銅製耳環・青銅製鈴・鉄刀・刀子などが、槻下５号墳（代々１号墳）では金環・鉄刀などが副葬されていた。山田１号墳（29）や出上岩屋古墳は切石積石室で、終末期の様相を示す。

この時代の集落は、東伯町三保遺跡（27)、井図地中ソネ遺跡、笠見第３遺跡、八橋第８・９遺跡（３)、赤碕町太一垣遺跡・松谷遺跡（15)・別所第３遺跡などが丘陵上に営まれている。

古代　日本で最初に仏教伽藍が建立されてから約半世紀後の７世紀後半以降、山陰地方では仏教文化受容の痕跡が認められる。現在県内では22カ所の古代寺院が見つかっているが、初期の仏教文化の姿を最もよく残す斎尾廃寺(42)は、 県内の古代寺院の多くが法起寺式伽藍配置を採用するのに対し、法隆寺式伽藍配置を採用しており、山陰では唯一の国特別史跡に指定されている。塑像片・仏頭・鴟尾・鬼瓦などが出土している他、創建期の軒丸瓦には紀寺式、軒平瓦に法隆寺式系統のものがあり、山陰・山陽では数少ない瓦当文様で、畿内と結びつきの深い有力豪族が斎尾廃寺周辺で勢力を持っていたと推察される。

斎尾廃寺の東方にある大高野遺跡（44）では、総柱礎石建物群が検出されており、正倉（郷倉）と考えられる。さらに郡衙所在地もその周辺に比定されている。伊勢野遺跡群（41)、水溜り・駕籠据場遺跡、森藤遺跡群では、掘立柱建物を中心とする集落が見つかっている他、伊勢野遺跡群の南方に古瓦出土地（32）があり、加勢蛇川右岸が伯耆国八橋郡の中心地であったと推察される。

平安時代末期の遺構として、金屋（40）と法万（34）に経塚があり、金屋と西高尾（36）では銅経筒が出土している。また、井図地頭遺跡において「コ」の字状の溝に囲まれた方形区画遺構が見つかっている。建物跡は認められていないが、丘陵上の方形居館の可能性が指摘されている。

中世・近世　鎌倉時代に入ると、名田を多く集めた有力名主の中には荘園内に孤立した荘宅を構えるなど、武士的な性格を持つ豪士が出現する。東伯町槻下（38）には、台地に堀を巡らせた方形の一段高い敷地が並んで残り、一つには周囲に高さ２mの土塁が築かれた館跡がある。

また、赤碕町海岸部から船上山にかけて、鎌倉末期の作と推定される宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせ持つ独特の形態の赤碕塔がある。現在赤碕町内で６基確認されている。

JR山陰線八橋駅付近の丘陵上には、八橋城跡（20）がある。八橋城は、南北朝時代に行松氏によって築造されたが、のちに尼子・毛利氏の支配下となり、西伯耆から東伯耆方面の経営拠点となった。また東伯町大杉には南条氏の出城である妙見山城跡（30)、赤碕町箆津には、土塁と堀を持つ箆津城（槇城）がある。1585年頃の築城と推定され、海上防備の城と考えられている。他に、太一垣城・大仏山城・山川城跡があり、『伯耆民談記』によると、吉川元春の羽衣石城（東郷町）攻撃に関与した城と考えられている。

江戸時代には東伯町逢束に伯耆街道の宿駅が置かれた。江戸時代前期寛永14年（1637年）の『因幡伯耆駄賃銀宿賃書付』に「大塚」がみられることから、この時期には宿駅として機能していたことが分かる。またこの地には鳥取藩の藩倉「大塚御蔵」がおかれていた。現在でも北側の土手の一部と火除地が残っている。(淺田・岩井・原・福井)

第３章　弥生時代中期以前の調査成果

第１節　調査の概要

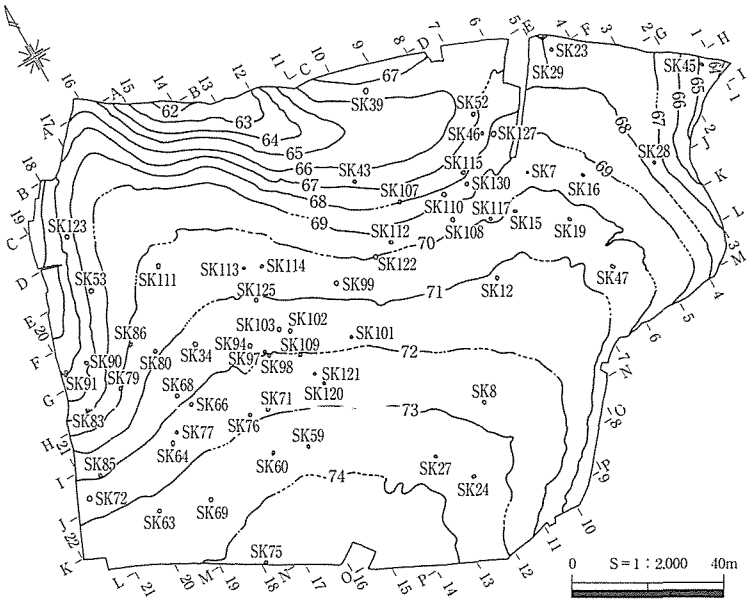
当遺跡で最も時期的に遡る遺構として、落し穴61基を含む多数の土坑がある。これらは谷部にむかう斜面の縁辺部と調査区中央の平坦面に集中している。

これら土坑のうち、確実な時期は不明であるが、形態的に縄文時代ごろの落し穴と考えられる土坑が61基検出できた。その他に、確実な時期が判明するものとして、性格不明であるが埋土下層に縄文時代後期初頭（中津Ⅲ式）の土器を含むSK99、縄文時代晩期の粗製土器を含むSK73がある。

落し穴としたものの中には、Ａ区西側の谷部とＢ区北東側の谷部に所在し、弥生時代中期～後期にかけての遺物包含層を除去した後に確認したものもある。落し穴には弥生時代の遺物が含まれていなかったため、包含層形成以前に埋没したものと考えられる。

また、直接当該期の遺構には伴わないが、縄文時代ごろのものと考えられる石鏃が、計12点出土している。

多数の落し穴及び狩猟具が検出されたことで、当時この遺跡周辺が良好な狩猟場であったことが想像される。（前島）



第８図　笠見第３遺跡弥生時代以前遺構配置図

第２節　土坑

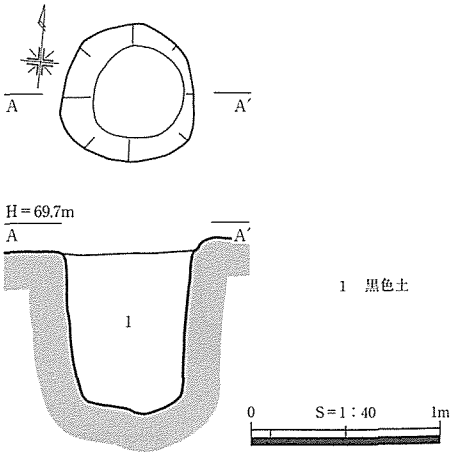
SK7（第９図、PL. 4）

Ｃ区西側のH6グリッドにあり、標高69.6mの緩やかな傾斜面に立地する。

平面は円形を呈し、規模は上面で長軸75cm、短軸73cm、底面で長軸49cm、短軸48cmを測る。断面は、垂直型を呈する。検出面からの深さは85cmを測り、底面にはやや凹凸がある。

埋土は黒色粘質土の単層である。

底面ピットは有さないものの、その形態から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第９図　笠見第３遺跡SK7遺構図

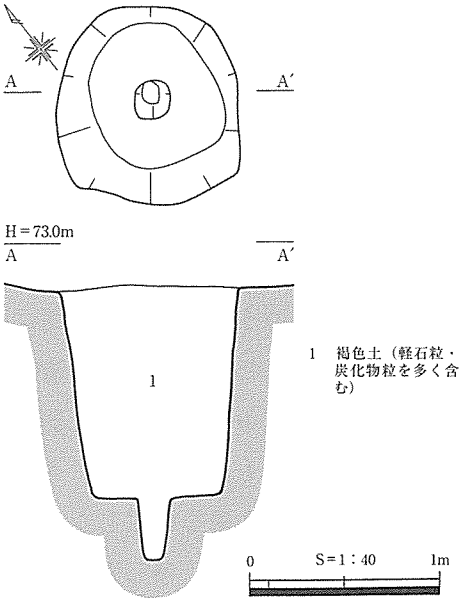
SK8（第10図、PL. 4）

Ｃ区南西側のL10グリッドにあり、標高72.8mの平坦面に立地する。南側はSI13によって切られている。

平面は、歪な楕円形を呈し、規模は長軸105cm、短軸96cm、深さ109cmを測る。断面は垂直型を呈す。底面には、径20cm、深さ32cmのピットが掘り込まれており、杭が立てられていたものと考えられる。

埋土は、炭化物を多く含む褐色土である。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（牧本）



第10図　笠見第３遺跡SK8遺構図

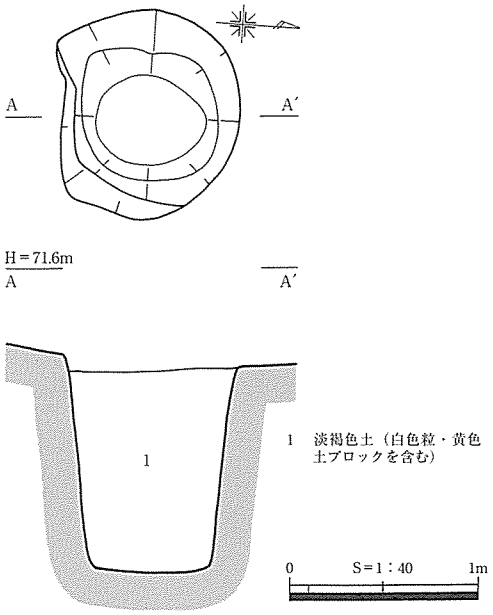
SK12（第11図、PL. 4）

Ｃ区西側のJ8グリッドにあり、標高71.2mの平坦面に立地する。

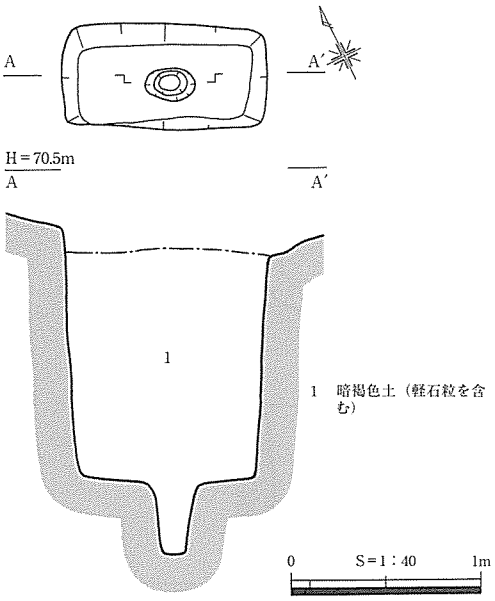
平面楕円形を呈し、規模は上面で長軸111cm、短軸94cm、底面で長軸58cm、短軸46cmを測る。断面はスリバチ型を呈する。検出面からの深さは115cmを測り、底面は平坦である。

埋土は淡褐色粘質土の単層である。

底面ピットは有さないものの、その形態から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第11図　笠見第３遺跡SK12遺構図



第12図　笠見第３遺跡SK15遺構図

SK15（第12図、PL. 4）

Ｃ区北西側のI7グリッドにあり、標高70.3mの平坦面に立地する。西側約２mにはSI40がある。

平面は長方形を呈し、規模は長軸109cm、短軸56cm、深さ130cmを測る。断面は垂直型を呈す。底面には、長径27cm、深さ37cmのピットが掘り込まれており、杭が立てられていたものと考えられる。

埋土は、暗褐色土単層である。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（牧本）

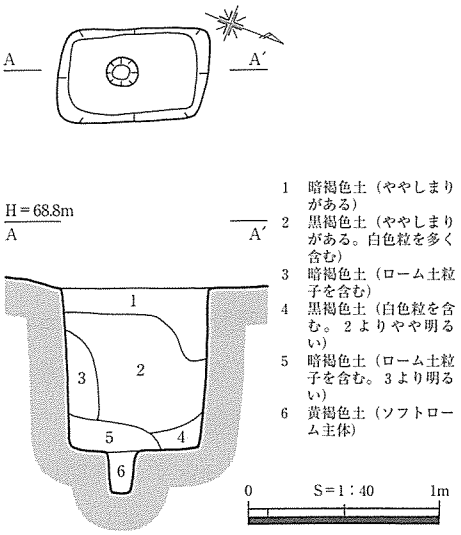
SK16（第13図、PL. 4）

Ｃ区中央やや北寄りのI5グリッドにあり、標高68.5mの緩斜面に立地する。

平面は隅丸長方形を呈し、規模は上面で長軸78cm、短軸49cm、深さ86cm、底面で長軸73cm、短軸41cmを測る。断面は垂直型を呈する。底面の中央やや南寄りに径15cm、深さ22cmのピットが掘り込まれており、先の尖った杭が立てられていたと考えられる。

埋土は暗褐色・黒褐色・黄褐色系で自然堆積したものと思われる。底面ピット内はソフトロームを主体とする黄褐色粘質土である。

遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第13図　笠見第３遺跡SK16遺構図

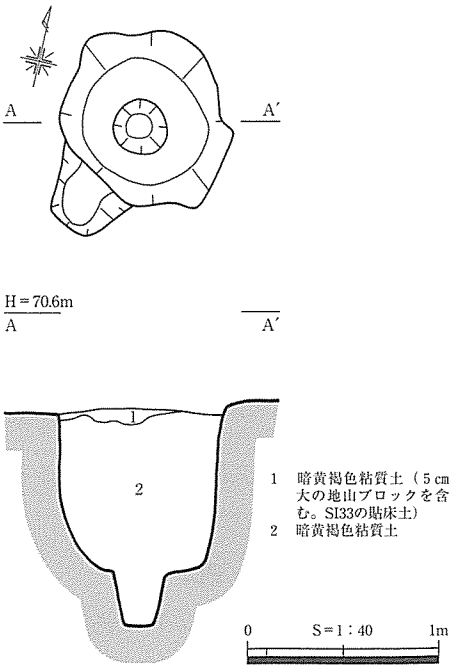
SK19（第14図、PL. 4）

Ｃ区中央やや北寄りのI6・J6グリッドの標高69.9m付近の緩斜面に位置する。SI33の床面で検出した。

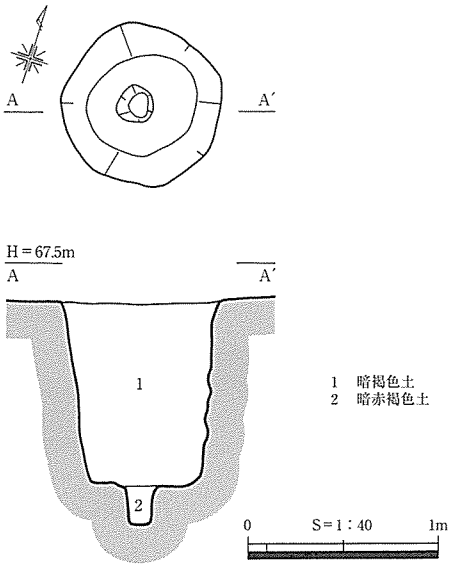
平面は円形で、長軸115cm、短軸84cm、深さは87cmを測る。底面には直径28cm、深さ32cmの底面ピットを１基検出した。

埋土は暗黄褐色土の単層で、埋土の上面はSI33の貼床土で覆われていた。このことからSI33に先行する土坑であることは確実である。

出土遺物はないが、形態から縄文時代の落し穴と考えられる。（小山）



第14図　笠見第３遺跡SK19遺構図



第15図　笠見第３遺跡SK23遺構図

SK23（第15図、PL. 4）

Ｃ区北側のF4グリッドの標高67.3mの緩斜面に位置する。

直径83cmの楕円形で、深さは96cmを測る。断面スリバチ型を呈す。底面には直径20cm、深さ20cmのやや不整円形のピットをもつ。

埋土は比較的均質で、底面ピット内の埋土はより地山の色に近い埋土であった。埋土中からの出土遺物は皆無である。

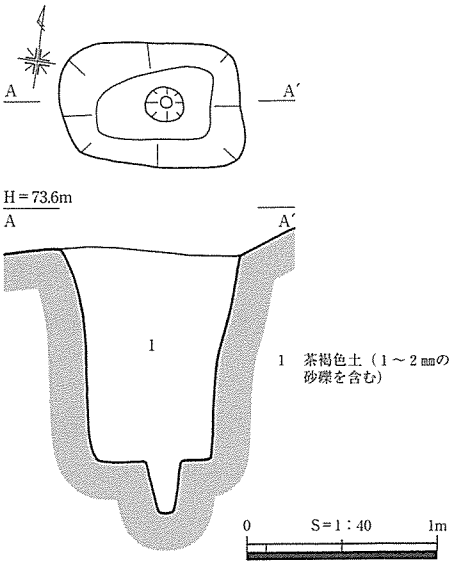
土坑の形状からみて落し穴と考えられる。出土遺物が皆無なため、詳細な時期は不明であるが、縄文時代のものとみられる。（小山）

SK24（第16図、PL. 4）

Ｃ区南側のN11グリッドにあり、標高73.4mの平坦面に立地する。

平面は歪んだ長方形を呈し、規模は上面で長軸95cm、短軸65cm、深さ111cm、底面で長軸61cm、短軸36cmを測る。断面はスリバチ型を呈する。底面はほぼ平坦で、中央やや東寄りに径18cm、深さ27cmのピットが掘り込まれており、杭が立てられていたと考える。埋土は２mm程度の砂礫を含む茶褐色土である。

遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、その形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



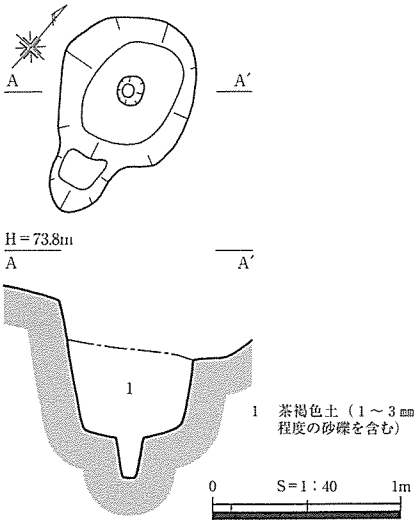
第16図　笠見第３遺跡SK24遺構図

SK27（第17図、PL. 5）

Ａ区南側のM12グリッドにあり、標高73.6mのほぼ平坦面に立地する。

西側から南東側にかけては攪乱を受けており、平面はやや歪んだ楕円形を呈する。規模は上面で長軸81cm、短軸72cm、深さ72cm、底面で長軸58cm、短軸44cmを測る。断面はスリバチ型を呈する。底面中央に径14cm、深さ21cmのピットが掘り込まれており、杭が立てられていたものと考える。埋土は茶褐色土の単層である。

遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、その形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第17図　笠見第３遺跡SK27遺構図

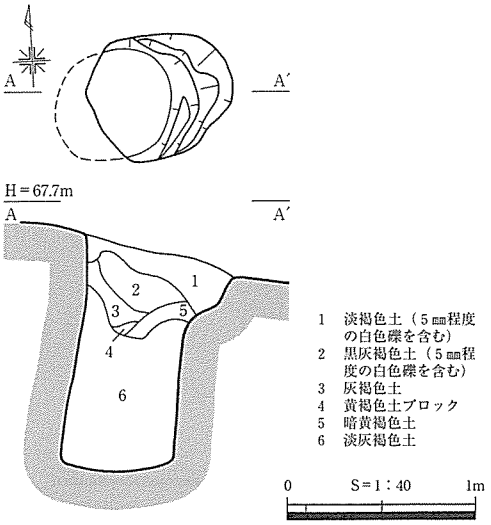
SK28（第18図、PL. 5）

Ｃ区東側のI3グリッドにあり、標高67.6m付近の緩斜面に立地する。

平面円形を呈し、規模は上面で長軸78cm、短軸65cm、深さ124cm、底面で長軸63cm、短軸55cmを測る。断面はフラスコ型である。南西側は検出面下約40cmの深さから底面に向かって外側に広がりをみせ、東側は上面寄りに狭い段をもつ。底面はほぼ平坦である。埋土は大別して２層にわかれる。上層は白色砂粒を含む黒灰褐色土を主体とし、下層は淡灰褐色土の単層である。

出土遺物は無く、底面ピットは有さないものの、その形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。

（前島）



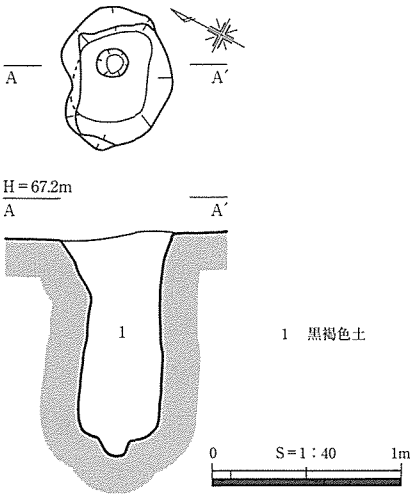
第18図　笠見第３遺跡SK28遺構図

SK29（第19図、PL. 5）

Ｃ区E4グリッドの標高67mのほぼ平坦面に位置する。

長軸72cm、短軸53cmのやや不整形な楕円形を呈す。深さは109cmを測る。土坑の長側壁は、上端から半ばにいくに従い幅狭となり、下端が再び広がるややフラスコ型の断面形である。底面には直径14cm、深さ９cmのピットが１基検出され、杭が立てられていたものと考えられる。埋土は黒褐色土の単層である。

出土遺物は皆無であり、詳細な時期は不明である。その形状からみて縄文時代の落とし穴と考えられる。（小山）



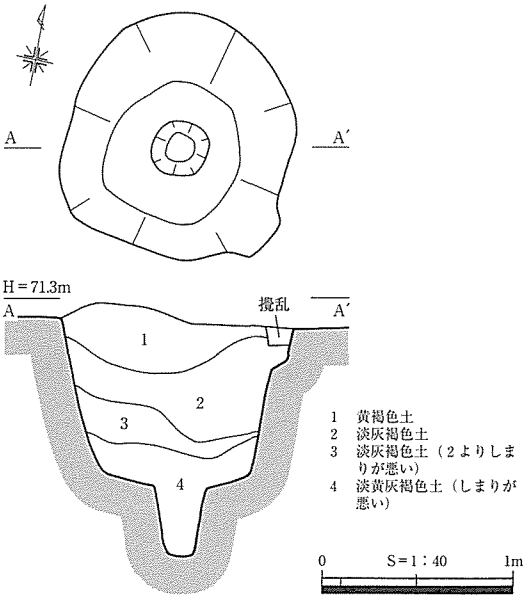
第19図　笠見第３遺跡SK29遺構図

SK34（第20図、PL. 5）

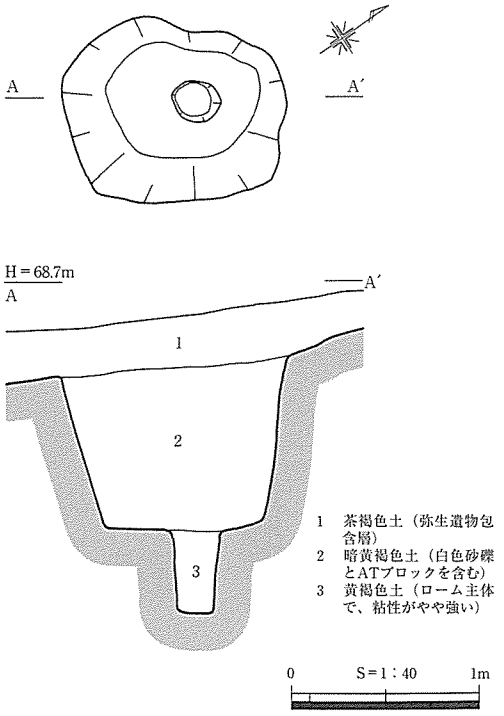
Ａ区中央やや北寄りのG16グリッドにあり、標高71.2mの緩斜面に立地する。

平面円形を呈し、規模は上面で長軸131cm、短軸115cm、深さ90cm、底面で長軸75cm、67cmを測る。断面はスリバチ型を呈する。底面の中央部には径29cm、深さ39cmのピットが掘り込まれており、杭が立てられていたものと考えられる。埋土は黄褐色、淡灰褐色系の４層にわかれ、自然堆積したと思われる。

遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第20図　笠見第３遺跡SK34遺構図



第21図　笠見第３遺跡SK39遺構図

SK39（第21図、PL. 5）

Ｂ区北側のC9グリッドにあり、標高68.2～68.5mの緩やかに南側に傾斜する斜面部に立地する。東側約７mにはSI95がある。

平面は歪な長楕円形を呈し、規模は長軸119cm、短軸90cm、深さ86mを測る。断面はスリバチ型を呈す。底面には、径25cm、深さ42cmのピットが掘り込まれており、杭が立てられていたものと考えられる。

埋土は２層に分かれ、杭穴に黄褐色土が堆積している。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（坂本）

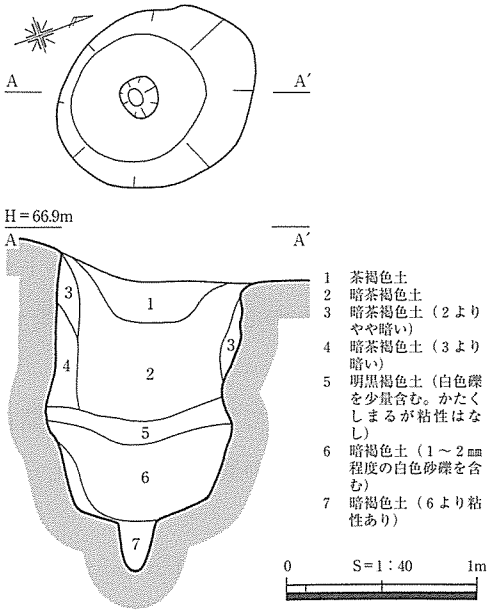
SK43（第22図、PL. 5）

Ｂ区南側のF10グリッドにあり、標高66.8mの北側谷部に向かう傾斜面に立地する。

平面円形を呈し、規模は上面で長軸111cm、短軸88cm、深さ140cm、底面で長軸71cm、短軸64cmを測る。断面は検出面から約65cmの深さで内側にくびれるフラスコ型を呈する。底面中央に径19cm、深さ27cmのピットが掘り込まれており、杭が立てられていたと考えられる。

埋土は暗褐色系で、自然堆積したと思われる。

遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、その形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第22図　笠見第３遺跡SK43遺構図

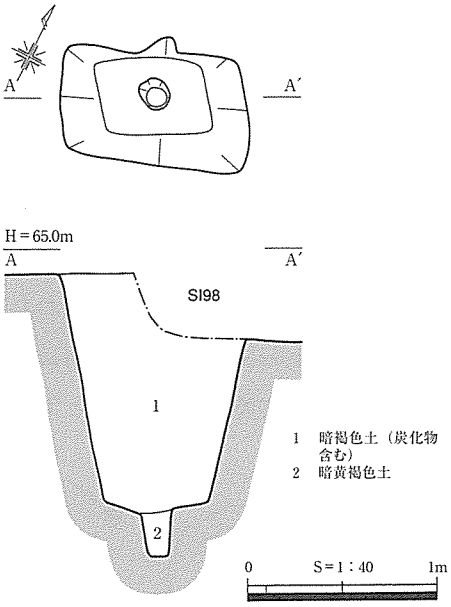
SK45（第23図、PL. 5）

Ａ区北東側、H1グリッドの標高64.7mの斜面に位置する。SI98によって一部掘り込まれる。

平面は長方形を呈し、長軸98cm、短軸60cm、深さ126cmを測る。長軸は等高線に平行する。断面形はスリバチ型を呈す。底面ではピットが１基検出された。径12cm、深さ26cmを測る。

埋土は均質であり、底面ピット内の埋土とは炭化物の有無で区別される。

これらの特徴から、落し穴とみられる。出土遺物が皆無であるため、詳細な時期は不明であるが、縄文時代のものと考えられる。（小山）



第23図　笠見第３遺跡SK45遺構図

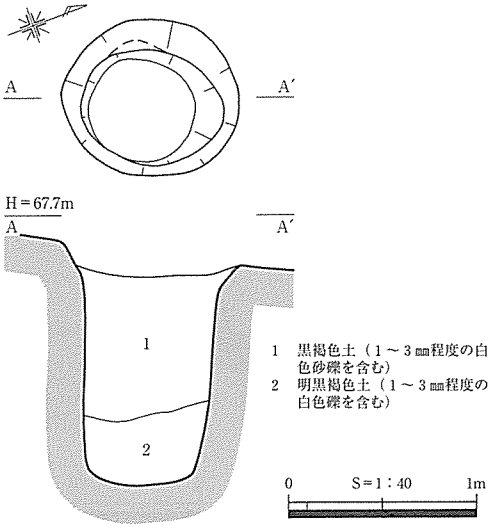
SK46（第24図、PL. 5）

Ｂ区東側のF7グリッドにあり、標高67.6mの北側谷部に向かう傾斜面に立地する。

平面は円形を呈し、規模は上面で長軸95cm、短軸82cm、深さ128cm、底面で長軸55cm、短軸53cmを測る。断面は北西側が内側にくびれるスリバチ型を呈する。

埋土は黒褐色系で、自然堆積したと思われる。

底面ピットは有さないものの、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第24図　笠見第３遺跡SK46遺構図

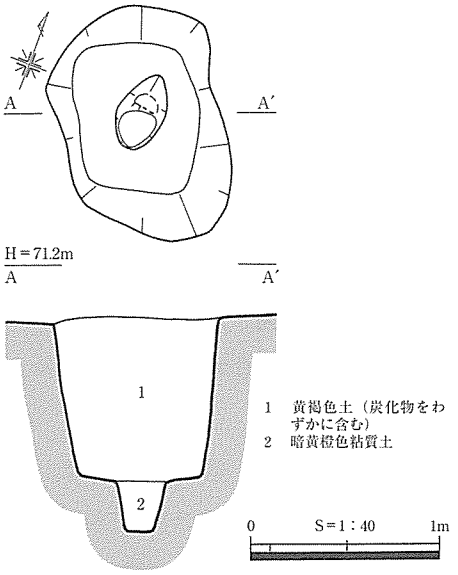
SK47（第25図、PL. 6）

Ｃ区中央東側のK6グリッドにあり、標高70.9m付近のほぼ平坦面に立地する。西側約２mにはSI101がある。笠見３号墳盛土下で検出されたものである。

平面は不整長方形を呈し、規模は長軸125cm、短軸84cm、深さ84cmを測る。断面は垂直型を呈す。底面には、長径40cm、短径25cm、深さ28cmのピットが掘り込まれており、杭が立てられていたと考えられる。

埋土は、炭化物をわずかに含む黄褐色土単層で、底面ピット内は、暗黄橙褐色粘質土である。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（牧本）



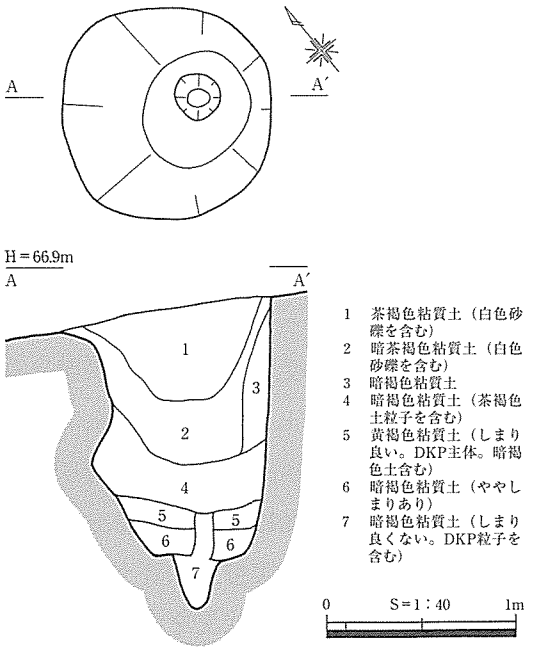
第25図　笠見第３遺跡SK47遺構図

SK52（第26図、PL. 6）

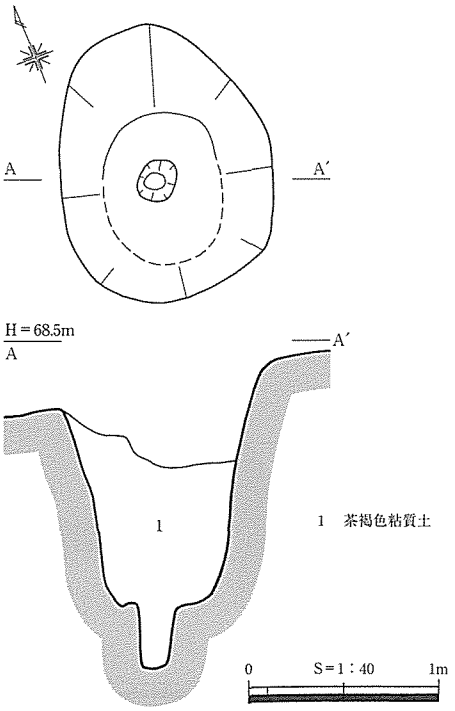
Ｂ区東側のF7グリッドにあり、北側谷部に向かって傾斜する標高66.6～66.8mの斜面に立地する。

平面は円形を呈し、規模は上面で長軸118cm、短軸110cm、深さ134cm、底面で長軸64cm、短軸54cmを測る。断面はスリバチ型を呈する。底面には径23cm、深さ29cmのピットが掘り込まれており、杭が立てられていたと考えられる。埋土は暗茶褐色系・暗褐色系の７層に分層できた。第５層・第６層で杭痕跡を確認した。

遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第26図　笠見第３遺跡SK52遺構図



第27図　笠見第３遺跡SK53遺構図

SK53（第27図、PL. 6）

Ｃ区西側E18グリッドにあり、西側谷部に傾斜する標高68.2～68.5mの斜面に立地する。

平面は上面では楕円形を呈し、長軸147cm、短軸112cm、底面までの深さ140cmを測る。底面の南側は削平を受けているため全体の形状は不明確であるが、復元した場合楕円形を呈するものと思われる。規模は長軸80cm、短軸62cmを測る。断

面はスリバチ型を呈し、底面中央に径29cm、深さ33cmのピットが掘り込まれている。埋土は茶褐色粘質土の単層である。

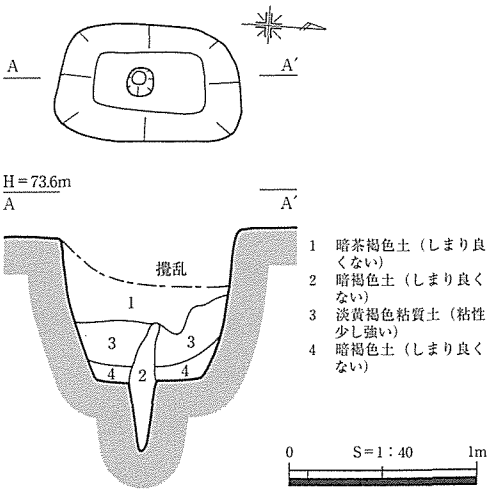
遺物は出土しておらず時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）

SK59（第28図、PL. 6）

Ａ区南側のK15グリッドにあり、標高73.4mの平坦面に立地する。

平面は長方形を呈し、規模は上面で長軸95cm、短軸60cm、深さ80cm、底面で長軸58cm、短軸30cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面やや南寄りには径14cm、深さ35cmのピットが掘り込まれている。埋土は暗褐色系で、自然堆積した状況を示している。第３層中で杭痕跡を確認した。

遺物は出土しておらず時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



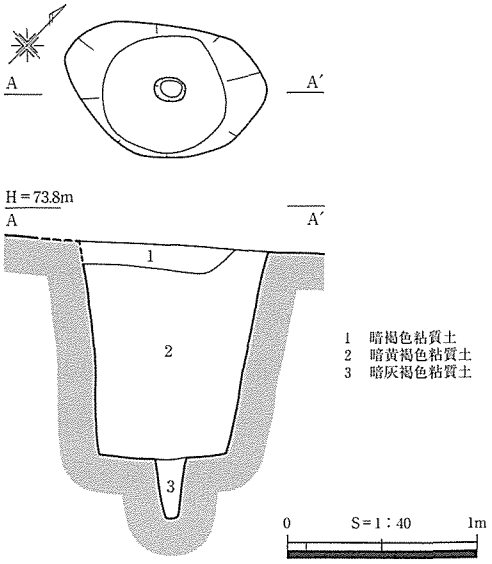
第28図　笠見第３遺跡SK59遺構図

SK60（第29図、PL. 6）

Ａ区南側のK16グリッドにあり、標高73.6mの平坦面に立地する。

北西側は攪乱を受けているが、平面はやや歪んだ円形を呈する。規模は上面で長軸108cm、短軸68cm、深さ114cm、底面で長軸66cm、短軸64cmを測る。断面は垂直型を呈し、底部中央に径12cm、深さ33cmのピットが掘り込まれている。埋土は暗黄褐色粘質土を主体とした３層に分かれ、自然に堆積した状況を示すと思われる。ピット内の埋土は暗灰褐色粘質土である。

遺物は出土しておらず時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）

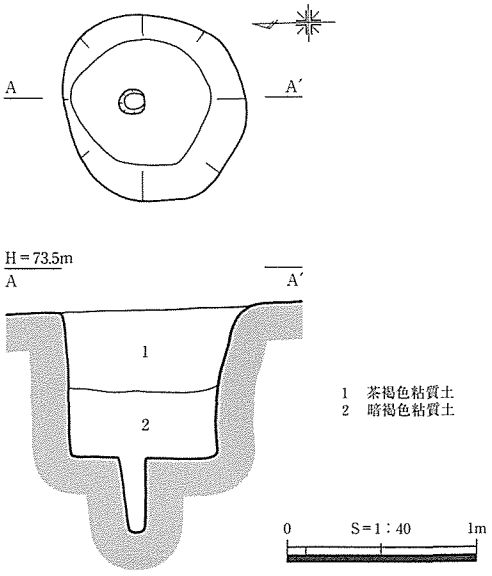


第29図　笠見第３遺跡SK60遺構図

SK63（第30図、PL. 6）

Ａ区南側、K19グリッドにあり、標高73.3mの平坦面に立地する。

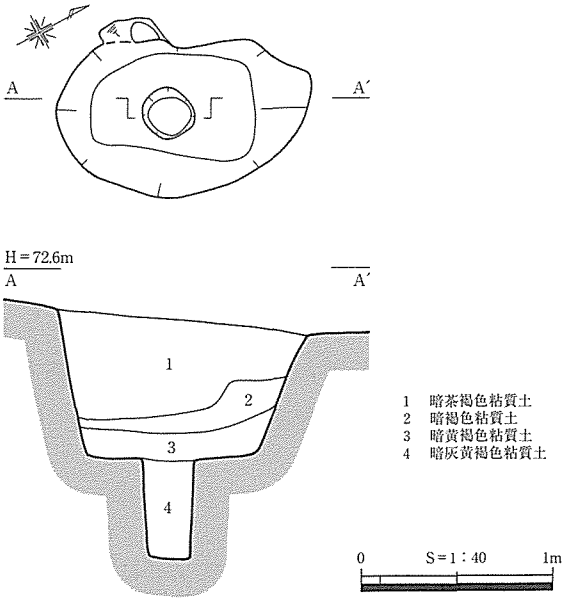
平面は円形を呈し、規模は上面で長軸100cm、短軸98cm、深さ80cm、底面で長軸73cm、短軸65cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面中央には径13cm、深さ40cmのピットが掘り込まれる。埋土は茶褐色土と暗褐色土の２



第30図　笠見第３遺跡SK63遺構図

層に分かれる。

遺物は出土しておらず時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



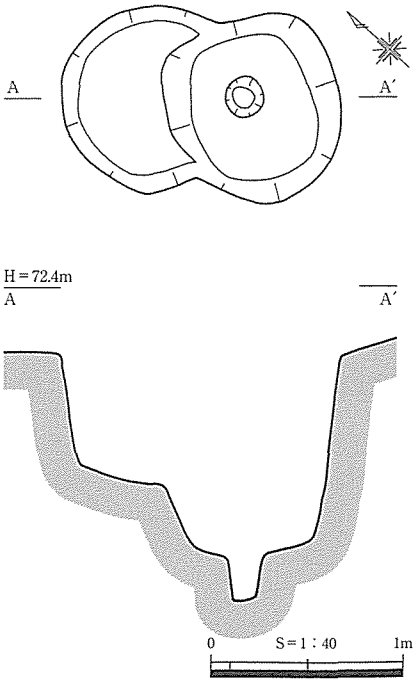
第31図　笠見第３遺跡SK64遺構図

SK64（第31図、PL. 6）

Ａ区西側のI18グリッドにあり、標高72.2～72.4mの緩斜面に立地する。

平面は長方形を呈し、規模は上面で長軸135cm、短軸78cm、深さ80cm、底面で長軸87cm、短軸52cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面中央に径25cm、深さ52cmのピットが掘り込まれる。埋土は暗褐色系で４層にわかれる。自然堆積した状況を示すと思われる。

遺物はなく時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



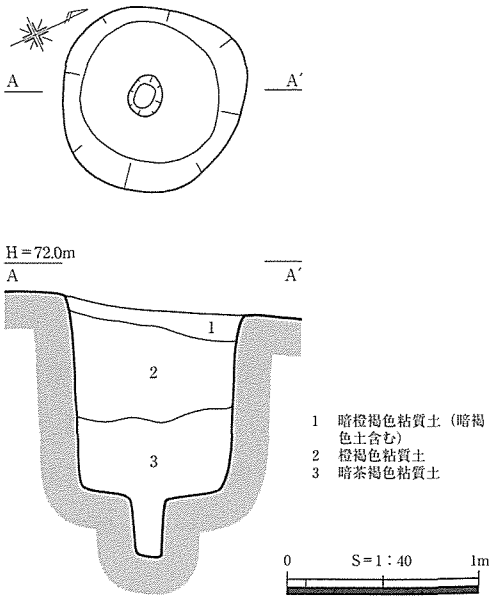
第32図　笠見第３遺跡SK66遺構図

SK66（第32図、PL. 6）

Ａ区西側の17グリッド、標高72.1mの緩斜面に立地する。

上面北西側で攪乱を受けるが、平面は楕円形に復元できる。規模は上面で推定長軸98cm、短軸92cm、深さ106cm、底面で長軸79cm、短軸64cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面やや北寄りに径20cm、深さ23cmのピットが掘り込まれている。埋土は不明である。

遺物はなく時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第33図　笠見第３遺跡SK68遺構図

SK68（第33図、PL. 7）

Ａ区西側のH17グリッドにあり、標高71.9mの緩斜面に立地する。

平面は円形を呈し、上面で長軸103cm、短軸97cm、深さ108cm、底面で長軸76cm、短軸72cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面中央には径18cm、深さ31cmのピットが掘り込まれる。埋土は３層に分かれる。

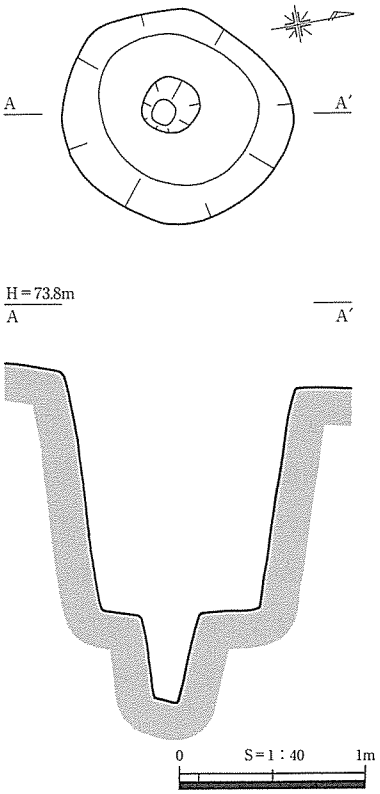
遺物はなく時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）

SK69（第34図、PL. 7）

Ａ区南西側のK18グリッドにあり、標高72.4mの平坦面に立地する。

平面は円形を呈し、上面で長軸122cm、短軸108cm、深さ126cm、底面で長軸83cm、短軸75cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面中央には径29cm、深さ45cmのピットが掘り込まれている。埋土は不明である。

遺物は出土しておらず時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



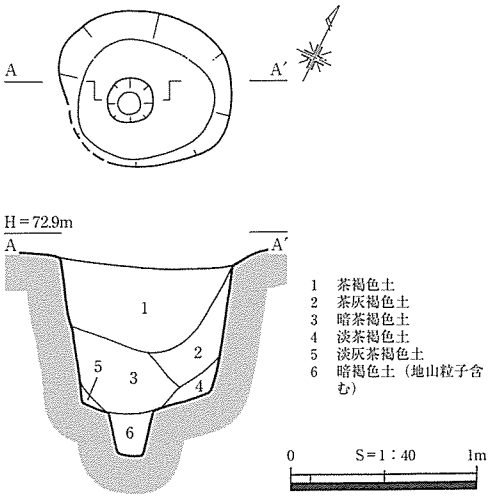
第34図　笠見第３遺跡SK69遺構図

SK71（第35図、PL. 7）

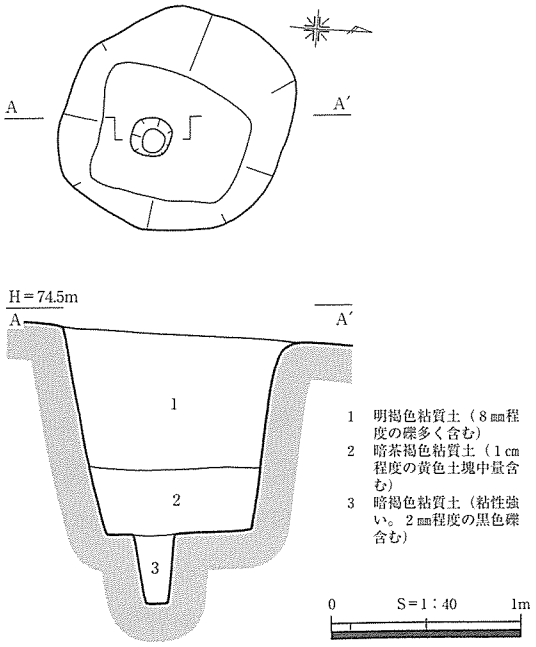
Ａ区中央西寄りのJ15グリッドにあり、標高72.8mの平坦面に立地する。

平面は南西側が攪乱を受けているため、やや歪んだ円形を呈する。規模は上面で長軸96cm、短軸82cm、深さ83cm、底面で長軸72cm、短軸62cmを測る。断面は垂直型を呈し、底面中央やや南西寄りに径24cm、深さ24cmのピットが掘り込まれている。杭が立てられていたと考えられる。埋土は茶褐色系・暗褐色系の６層に分かれ、自然堆積と思われる。ピット内は地山粒子を含む暗褐色粘質土である。

遺物はなく時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第35図　笠見第３遺跡SK71遺構図



第36図　笠見第３遺跡SK72遺構図

SK72（第36図、PL. 7）

Ａ区南西調査区際、I21グリッドの標高74.3mのほぼ平坦面に立地する。

平面は長方形を呈し、上面で長軸121cm、短軸117cm、深さ110cm、底面で長軸76cm、短軸67cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面中央やや南寄りに径20cm、深さ36cmのピットが掘り込まれている。杭が立てられていたものと考えられる。

埋土は暗茶褐色系が主体をなし、自然堆積したもの

と思われる。ピット内の埋土は粘性が強く、黒色礫を含んだ暗褐色粘質土である。

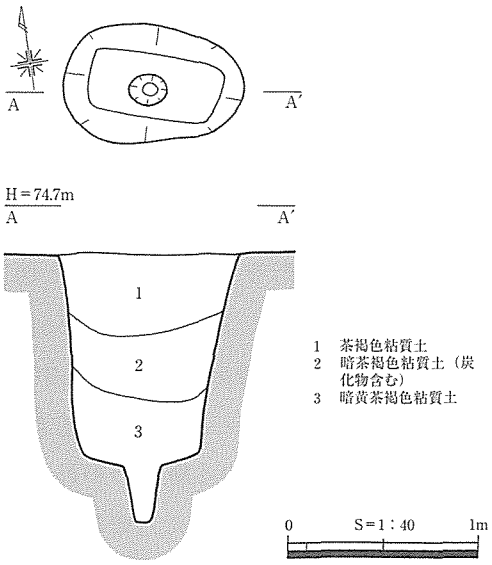
遺物は出土しておらず時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）

SK75（第37図、PL. 7）

Ａ区南側のM17グリッドにあり、標高74.5mの平坦面に立地する。

平面は長方形を呈し、上面で長軸95cm、短軸61cm、深さ110cm、底面で長軸67cm、短軸30cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面中央に径16cm、深さ31cmのピットが掘り込まれている。杭が立てられていたものと考えられる。埋土は３層に分かれる。茶褐色系で自然堆積したものと思われる。

遺物は出土しておらず時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第37図　笠見第３遺跡SK75遺構図

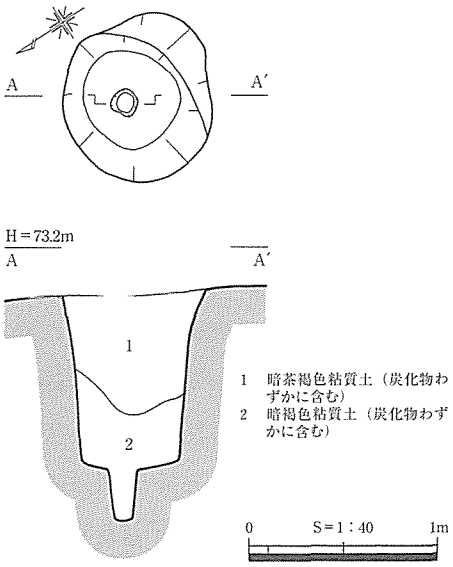
SK76（第38図、PL. 7）

Ａ区中央やや南西側のJ16グリッドにあり、標高73.0mの北側に向かう緩斜面に立地する。

平面は円形を呈し、規模は上面で長軸86cm、短軸79cm、深さ95cm、底面で長軸52cm、短軸48cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面中央に径14cm、深さ28cmのピットが掘り込まれている。杭が立てられていたものと考えられる。

埋土は炭化物をわずかに含む茶褐色系で、自然堆積したものと考えられる。

遺物は出土しておらず時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



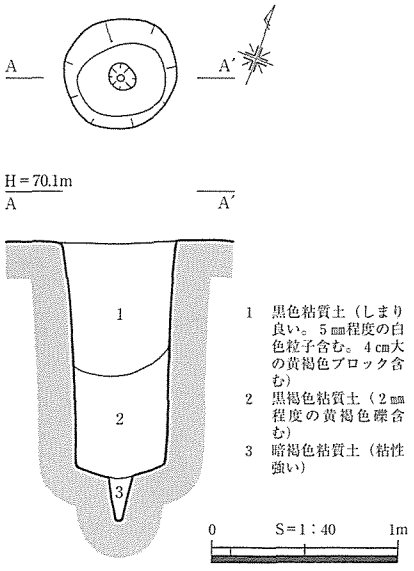
第38図　笠見第３遺跡SK76遺構図

SK77（第39図、PL. 7）

Ａ区南西側のI18グリッドにあり、標高69.8mの西側谷部に向かう緩斜面に立地する。

平面は円形を呈し、規模は上面で長軸63cm、短軸58cm、深さ125cm、底面で長軸46cm、短軸37cmを測る。断面形はスリバチ型を呈し、底面中央に径13cm、深さ23cmのピットが掘り込まれている。杭が立てられたものと考えられる。埋土は、礫を含んだしまりの良い黒褐色系が主体をなす。

遺物はなく時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



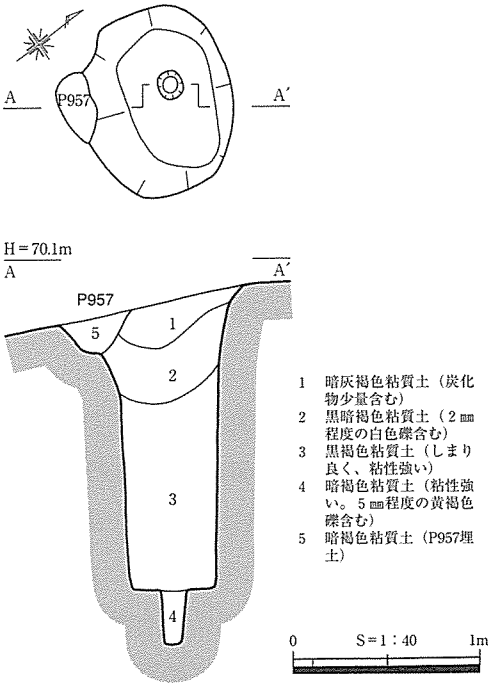
第39図　笠見第３遺跡SK77遺構図

SK79（第40図、PL. 7）

Ａ区西側のG18グリッドにあり、西側谷部に向かって北西方向に傾斜する標高69.7～70.0mに立地する。P957と重複関係にあるが、埋土の堆積状況からSK79が先行する。

平面は楕円形を呈し、規模は上面で長軸102cm、短軸72cm、深さ159cm、底面で長軸76cm、短軸46cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面中央やや西寄りに径14cm、深さ29cmのピットが掘り込まれている。埋土は炭化物を含む黒褐色系の４層にわかれる。底面ピット内は、粘性が強く黄色礫を含んだ暗褐色粘質土である。

遺物はなく時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



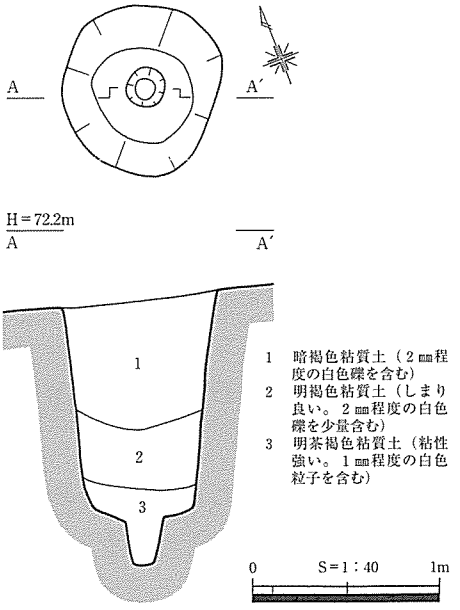
第40図　笠見第３遺跡SK79遺構図

SK80（第41図、PL. 8）

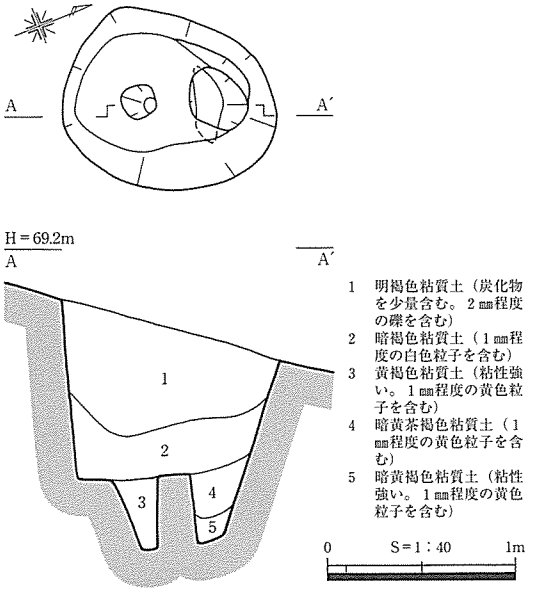
Ａ区G17グリッドにあり、西側谷部に向かって傾斜する標高71.8mに立地する。

平面は円形を呈し、規模は上面で長軸88cm、短軸81cm、深さ121cm、底面で長軸55cm、短軸49cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面北東寄りに径19cm、深さ24cmのピットが掘り込まれている。埋土は礫を含む褐色系を主体とした３層に分かれ、自然堆積した状況を示すと思われる。

遺物は出土しておらず時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第41図　笠見第３遺跡SK80遺構図



第42図　笠見第３遺跡SK83遺構図

SK83（第42図、PL. 8）

Ａ区G19グリッドにあり、西側谷部に向かう標高68.6～69.0mの斜面に立地する。

平面は楕円形を呈し、規模は上面で長軸112cm、短軸92cm、深さ94cm、底面で長軸90cm、短軸60cmを測る。断面はスリバチ型を呈する。

底面には２つのピットが存在し、南側のピットは径19cm、深さ37cm、北東壁に接するピットは長軸35cm、

短軸26㎝、深さ36㎝を測る。北側のピットは、検出面から底面に向かってフラスコ状に掘り込まれている。埋土は礫を含む褐色系が主体をなし、自然堆積した状況を示すと思われる。

遺物は出土しておらず時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）

SK85（第43図、PL. 8）

Ａ区I20グリッドにあり、西側谷部に向かって傾斜する標高71.9mに立地する。

上面北東側が攪乱を受けているが、平面は楕円形に復元することができる。規模は上面で長軸99㎝、短軸83㎝、深さ88㎝、底面で長軸85㎝、短軸65㎝を測る。断面はスリバチ型を呈する。底面中央に径14㎝、深さ10㎝のピットが掘り込まれており、杭が立てられていたと考えられる。埋土は褐色系を主体とし、自然堆積したと思われる。

遺物は出土していないが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）

SK86（第44図、PL. 8）

Ａ区F18グリッドにあり、西側谷部に向かう標高70.0～70.1mの斜面に立地する。

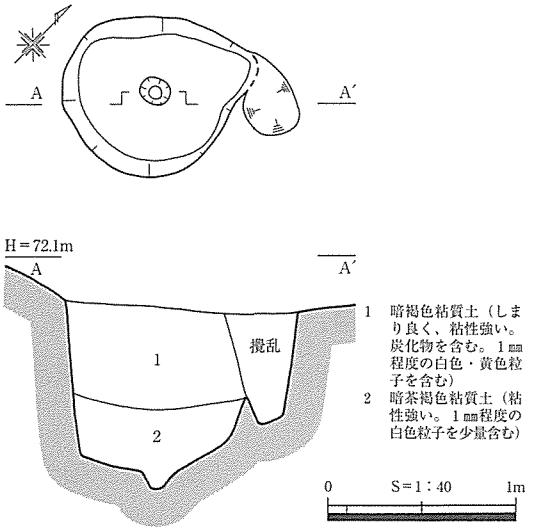
平面は楕円形を呈し、上面で長軸103㎝、短軸55㎝、底面で長軸22㎝、短軸8㎝を測る。断面はスリバチ型を呈し、検出面からの深さ約137㎝を測る。底面は平坦である。北東側は、検出面から約96㎝の深さで段をなす。埋土は炭化物を含む暗褐色系で、自然堆積したものと思われる。

底面ピットは有さないものの、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）

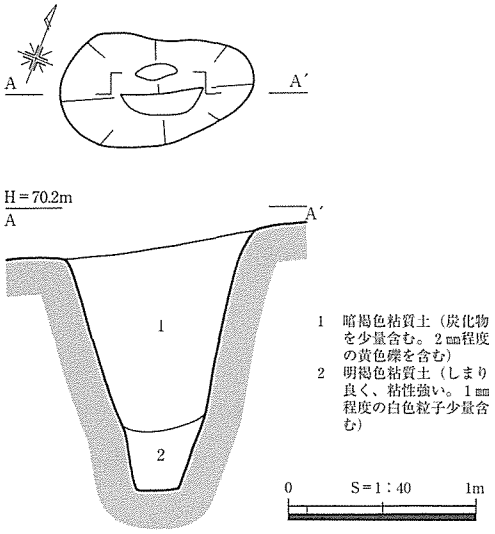
SK90（第45図、PL. 8）

Ａ区F19グリッドにあり、西側谷部に向かう標高66.2～66.5mの斜面に立地する。

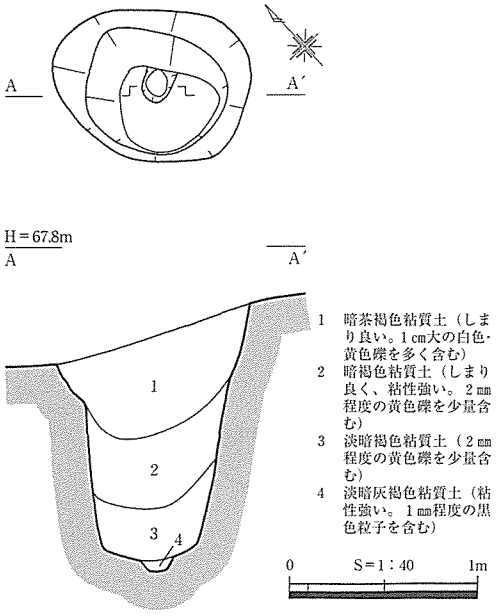
平面は円形を呈する。規模は上面で長軸104㎝、短軸79㎝、検出面からの深さ135㎝、底面で長軸52㎝、短軸43㎝を測る。断面はスリバチ型を呈する。底面北東隅で



第43図　笠見第３遺跡SK85遺構図



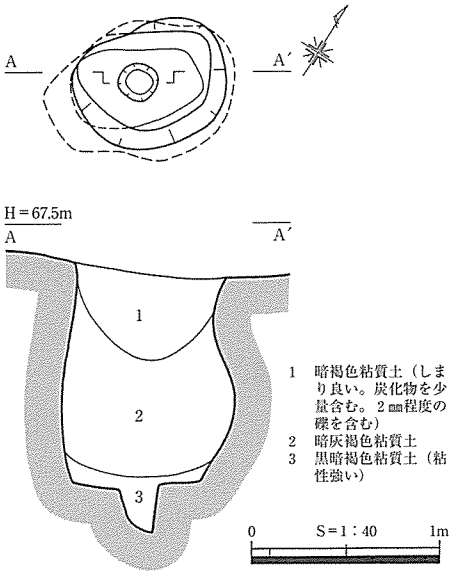
第44図　笠見第３遺跡SK86遺構図



第45図　笠見第３遺跡SK90遺構図

径15cm、深さ７cmのやや浅いピットを検出した。埋土は礫を含む褐色土系を主体とした４層に分かれる。自然堆積した状況を示すと思われる。

遺物は出土しておらず、時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



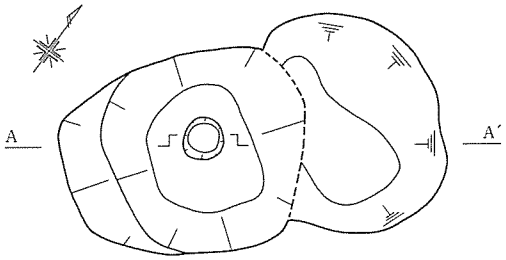
第46図　笠見第３遺跡SK91遺構図

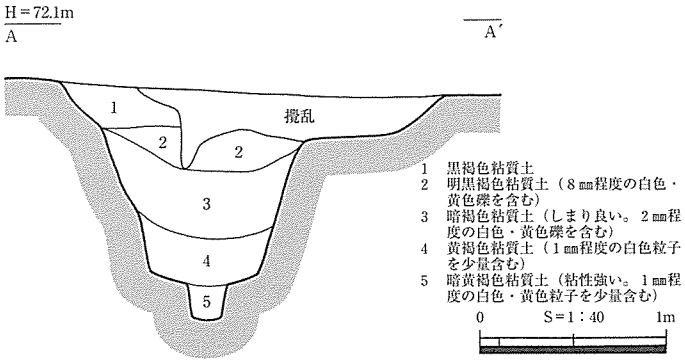
SK91（第46図、PL. 8）

Ａ区西側のF19グリッドにあり、標高67.2mの傾斜面に立地する。

平面は楕円形を呈し、規模は上面で長軸80cm、短軸61cm、底面で長軸70cm、短軸40cmを測る。断面は検出面から約25cmの深さでくびれたフラスコ型を呈する。底面はほぼ平坦で、中央に径20cm、深さ25cmのピットが掘り込まれる。埋土は炭化物を含んだしまりの良い暗褐色系を主体とし、自然堆積したものと思われる。

遺物は出土していないが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）





第47図　笠見第３遺跡SK94遺構図

SK94（第47図、PL. 8）

Ａ区中央のH15グリッドにあり、標高71.8mの緩斜面に立地する。

平面は北側から北東側にかけて攪乱を受けているが、復元した場合、円形を呈するものと思われる。規模は上面で長軸132cm、短軸105cm、深さ107cm、底面で長軸68cm、短軸54cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面やや北西寄りに径22cm、深さ20cmのピットが掘り込まれている。埋土は暗褐色系を主体とし、自然堆積したものと思われる。底面ピット内は粘性の強い暗黄褐色土である。

出土遺物はなく、時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）

SK97（第48図、PL. 8）

Ａ区中央のH15グリッドにあり、標高72.0mの緩斜面に立地する。

平面は円形を呈し、規模は上面で長軸77cm、短軸68cm、深さ134cm、底面で長軸54cm、短軸50cmを測る。断面は垂直型を呈する。底面南寄りに径15cm、深さ10cmのピットが掘り込まれていることから、杭が立てられていたと考えられる。埋土は大別３層に分かれ、褐色系が主体をなす。自然堆積と

思われる。

出土遺物はなく、時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）

SK98（第49図、PL. 9）

Ａ区中央のH15グリッドにあり、標高72.0mの緩斜面に立地する。P987と重複関係にあるが、埋土の堆積状況からSK98が先行する。

平面は円形を呈し、規模は上面で長軸81cm、短軸72cm、底面で長軸63cm、短軸58cmを測る。断面は垂直型を呈し、検出面からの深さ155cmを測る。底面は、中央部が高く周辺部に向かって低くなっている。埋土は粘性の強い暗茶褐色系を主体とする。

底面ピットは有さないものの、その形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）

SK99（第50・51図、PL. 9）

Ｃ区中央のH12グリッドにあり、標高70.6mの平坦面に立地する。

平面は楕円形を呈し、規模は上面で長軸135cm、短軸115cm、深さ79cm、底面で長軸100cm、短軸73cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面は平坦である。

埋土は、他の落し穴の埋土とは異なる褐色系を主体とした４層に分かれ、自然堆積したと考えられる。

遺物は、底面直上から出土した縄文土器Po1がある。幅狭の磨消縄文帯をもつもので、中津Ⅲ式に相当する。

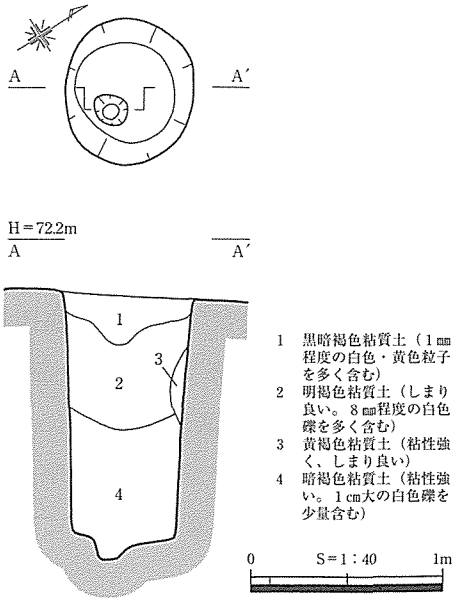
形態的には落し穴の可能性があるが、埋土の状況が異なり、性格は不明である。出土遺物から縄文時代後期初頭のものと考えられる。（前島）

SK101（第52図、PL. 9）

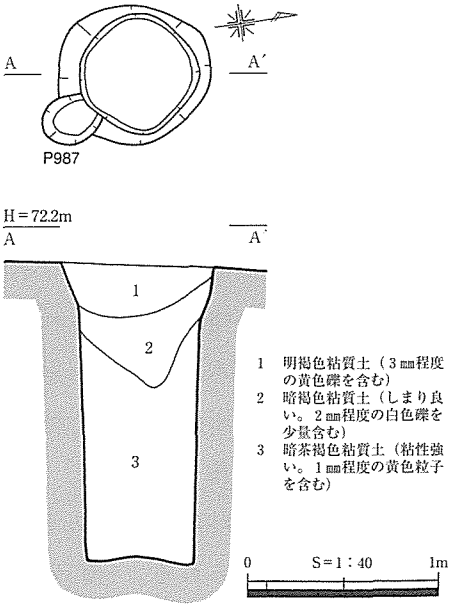
Ｃ区中央やや東寄りのI12グリッドにあり、標高71.2mの平坦面に立地する。

平面は円形を呈し、規模は上面で長軸98cm、短軸81cm、底面で長軸61cm、短軸58cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、検出面からの深さ137cmを測る。底面は平坦である。

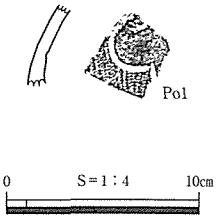
埋土はしまりの良い黒褐色系である。自然堆積したものと思われる。



第48図　笠見第３遺跡SK97遺構図

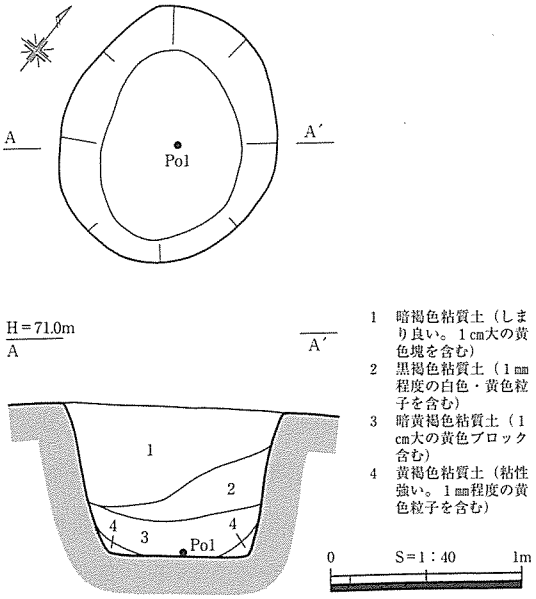


第49図　笠見第３遺跡SK98遺構図



第50図　笠見第３遺跡SK99
出土遺物実測

底面ピットは有さないものの、その形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第51図　笠見第３遺跡SK99遺構図

SK102（第53図、PL. 9）

Ｃ区中央のH14グリッドにあり、標高71.6mの平坦面に立地する。

上面は攪乱を受けているが、楕円形に復元することができると思われる。規模は上面で長軸115cm、短軸58cm、深さ150cm、底面で長軸54cm、短軸33cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面中央に径14cm、深さ13cmのピットが掘り込まれていることから杭が立てられていたと考えられる。

埋土は暗褐色系の３層に分かれ、自然堆積したものと思われる。

遺物は出土しておらず、時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）

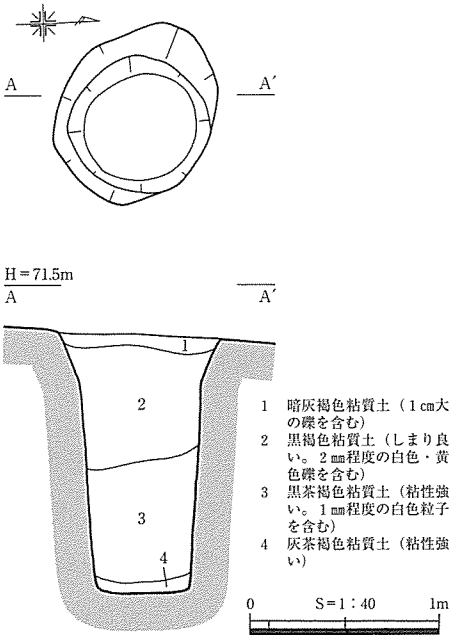
SK103（第54図、PL. 9）

Ｃ区H14グリッドにあり、標高71.5mの平坦面に立地する。

調査当初は検出面の崩落により不整形になったと考えていたが、土層断面の観察により後世の遺構が重複している可能性も考えられる。

上面楕円形だが本来は円形を呈すると思われる。長軸91cm、短軸76cm、深さ95cm、底面長軸55cm、短軸53cmを測る。断面スリバチ型を呈し、底面に径14cm、深さ24cmのピットが掘り込まれている。埋土は暗褐色系を主体とする。

出土遺物はなく時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



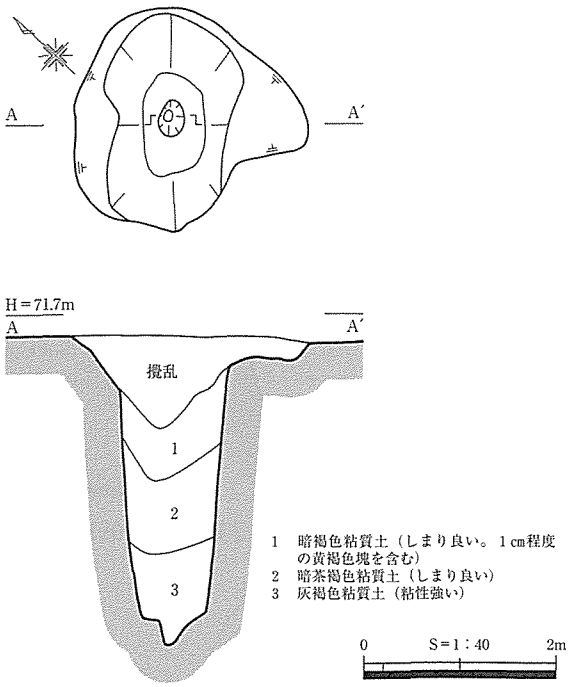
第52図　笠見第３遺跡SK101遺構図

SK107（第55図、PL. 9）

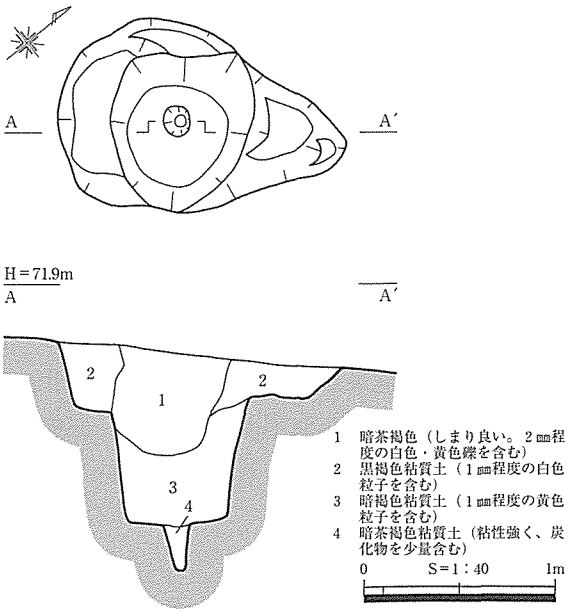
Ａ区北側のG10グリッドにあり、北側谷部にむかって傾斜する標高68.0m～68.2mに立地する。

南西から北東側にかけて攪乱を受けているが、平面は円形を呈すると思われる。規模は上面で長軸88cm、短軸80cm、深さ51cm、底面で長軸66cm、短軸40cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、底面中央に径８cm、深さ10cmのピットが掘り込まれている。埋土は暗褐色系の２層に分かれ、自然に堆積したものと思われる。

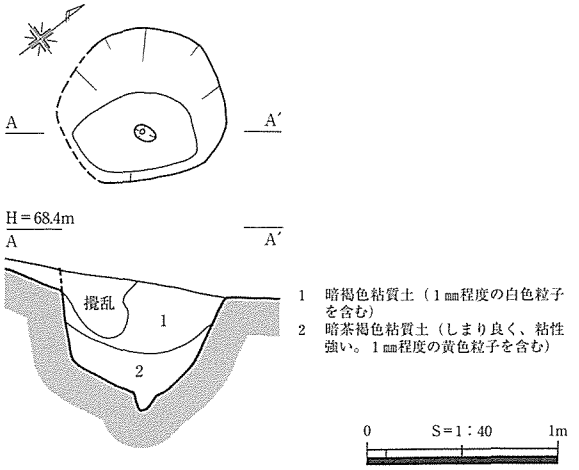
遺物は出土していないが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第53図　笠見第３遺跡SK102遺構図



第54図　笠見第３遺跡SK103遺構図



第55図　笠見第３遺跡SK107遺構図

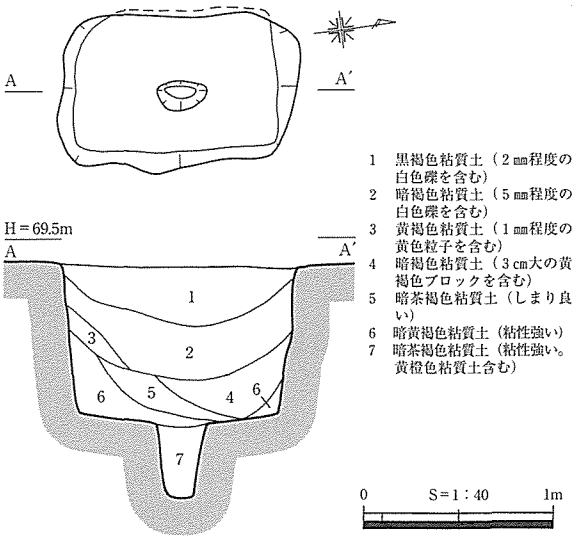
SK108（第56図、PL. 9）

Ｃ区東側のH9グリッドにあり、北側谷部にむかう標高69.4mに立地する。

平面は長方形を呈し、規模は上面で長軸123cm、短軸79cm、深さ83cm、底面で長軸106cm、短軸73cmを測る。断面は、垂直型を呈する。底面中央に径15cm、深さ40cmのピットが掘り込まれていることから、杭が立てられていたと考えられる。

埋土は褐色系を主体とした７層に分かれ、自然堆積したものと思われる。

出土遺物はなく時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第56図　笠見第３遺跡SK108遺構図

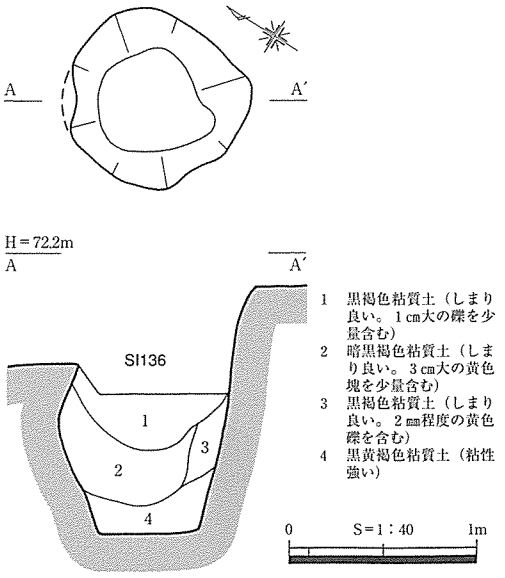
SK109（第57図、PL. 9）

Ｃ区中央のI14グリッドにあり、北東方向に向かう標高71.6mの緩傾斜に立地する。SI136の南東隅で検出されたもので、埋土の堆積状況からSK109が先行する。

平面は円形を呈し、規模は上面で長軸93cm、短軸87cm、深さ129cm、底面で長軸64cm、短軸53cmを測る。断面は北西側が内側にくびれるフラスコ型を呈し、底面は平坦である。

埋土は黒褐色系が主体をなし、４層にわかれる。

出土遺物はなく時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第57図　笠見第３遺跡SK109遺構図

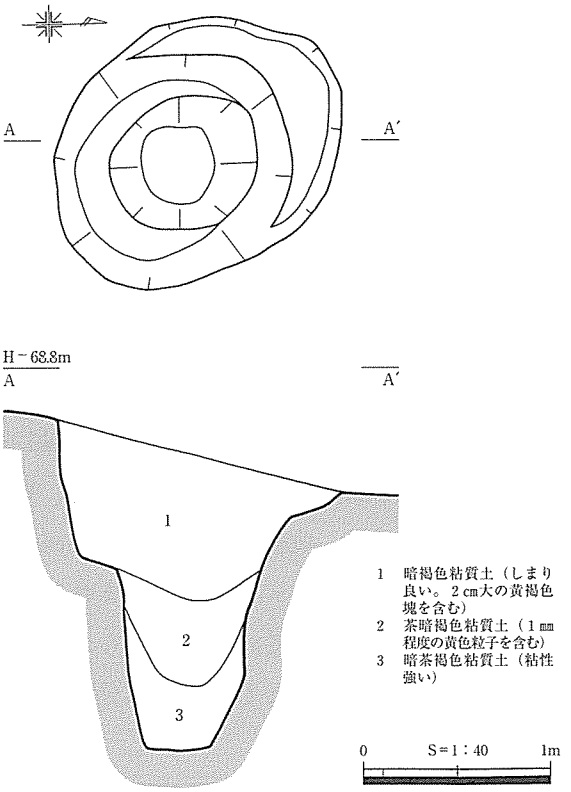
SK110（第58図、PL. 10）

Ａ区北東側のG8・G9グリッドにあり、北側谷部にむかう標高68.1～68.6mの緩斜面に立地する。

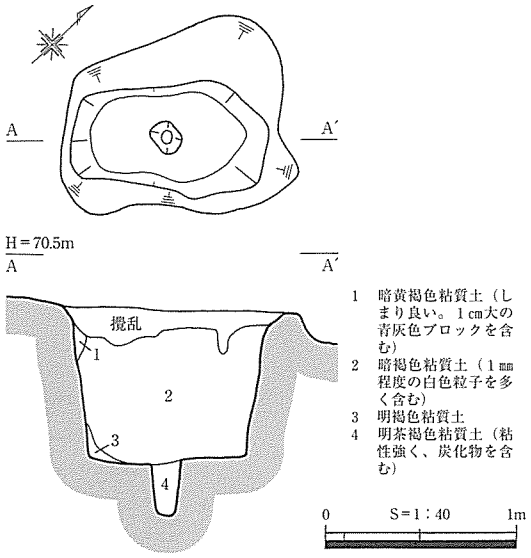
平面は円形を呈し、規模は上面で長軸166cm、短軸128cm、底面で長軸43cm、短軸40cmを測る。断面はスリバチ型を呈し、深さ173cmを測る。検出面から約73cm下で段をなす。

埋土は褐色系が主体をなし、自然堆積したものと思われる。

底面ピットは有さないが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第58図　笠見第３遺跡SK110遺構図



第59図　笠見第３遺跡SK111遺構図

SK111（第59図、PL. 10）

Ａ区北西側のE16グリッドにあり、標高70.2mの緩斜面に立地する。

平面は楕円形を呈すると思われる。規模は上面で長軸105cm、短軸53cm、深さ83cm、底面で長軸82cm、短軸32cmを測る。断面はスリバチ型を呈する。底面中央に径13cm、深さ30cmのピットが掘りこまれていることから、杭が立てられていたと考えられる。

埋土は褐色系を主体とする。底面ピット内は炭化物を含む明茶褐色粘質土である。

遺物は出土していないが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）

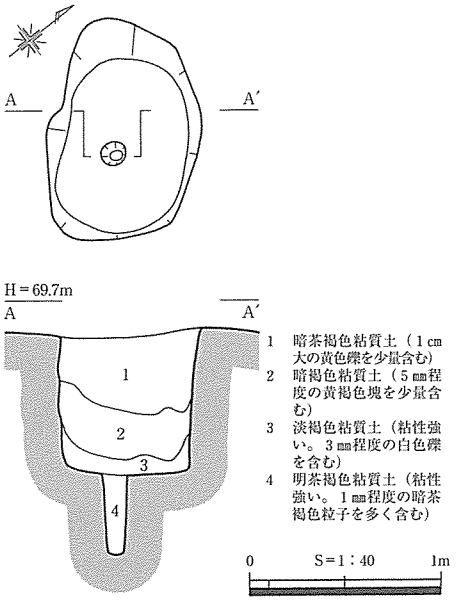
SK112（第60図、PL. 10）

Ａ区やや北東側のH10グリッドにあり、北側谷部にむかう標高69.5mの緩斜面に立地する。

平面楕円形を呈し、規模は上面で長軸116cm、短軸80cm、深さ78cm、底面で長軸91cm、短軸63cmを測る。断面垂直型を呈し、底面中央に径12cm、深さ42cmのピットが掘り込まれている。

埋土は暗褐色系を主体とした４層に分かれる。ピット内は粘性の強い明茶褐色粘質土である。

出土遺物はなく、時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



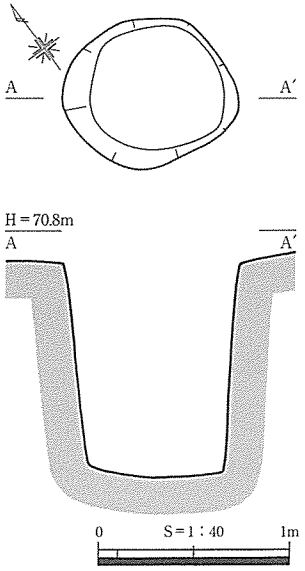
第60図　笠見第３遺跡SK112遺構図

SK113（第61図、PL. 10）

Ａ区中央やや北寄りのF14グリッドにあり、標高70.5mの緩斜面に立地する。

平面円形を呈し、規模は上面で長軸92cm、短軸77cm、底面で長軸71cm、短軸65cmを測る。断面垂直型を呈し、検出面からの深さ114cmを測る。底面は平坦である。

遺物は出土しておらず、底面ピットは有さないものの、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第61図　笠見第３遺跡SK113遺構図

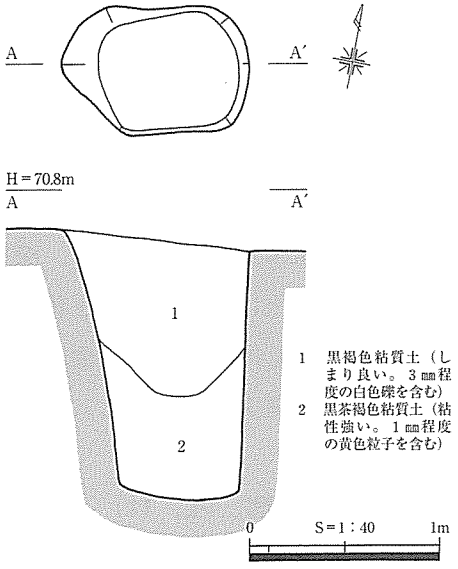
SK114（第62図、PL. 10）

Ａ区中央やや北寄りのF14グリッドにあり、標高70. 5mの緩斜面に立地する。

平面楕円形を呈し、規模は上面で長軸100cm、短軸66cm、底面で長軸74cm、短軸59cmを測る。断面垂直型を呈し、検出面からの深さ142cmを測る。底面は平坦である。

埋土は黒褐色系で、自然堆積したものと思われる。

遺物は出土しておらず、底面ピットは有さないものの、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第62図　笠見第３遺跡SK114遺構図

SK115（第63図、PL. 10）

A区C18グリッドにあり、北側谷部に向う標高67.6m～67.9mの傾斜面に立地する。

平面円形を呈し、規模は上面で長軸141cm、短軸112cm、底面で長軸53cm、短軸46cmを測る。断面スリバチ型を呈し、検出面からの深さ113cmを測る。底面はやや凹凸がある。

埋土は、褐色系を主体とした３層に分かれ、自然堆積したものと思われる。

遺物は出土しておらず、底面ピットは有さないものの、形

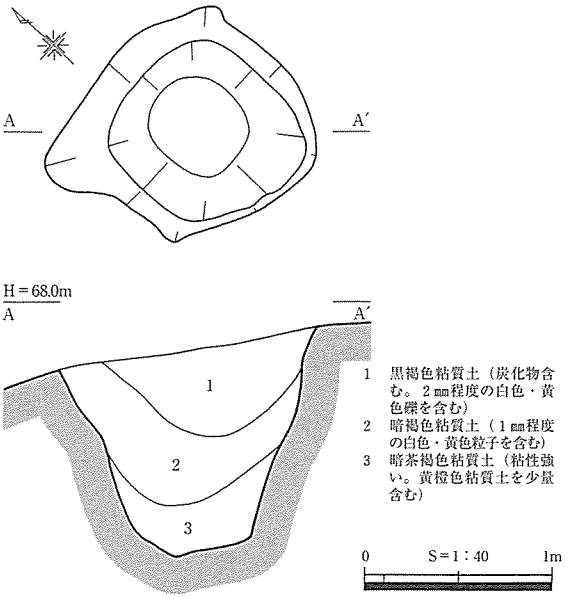
態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。(前島)

SK117（第64図、PL. 10）

Ｃ区東側のH8グリッドにあり、北側谷部に向かう標高69.7mの緩斜面に立地する。

平面円形を呈し、規模は上面で長軸82cm、短軸70cm、底面で長軸71cm、短軸70cmを測る。断面垂直型を呈し、検出面からの深さ87cmを測る。底面は平坦である。埋土は黒褐色系で、自然堆積したものと思われる。

遺物は出土しておらず、底面ピットは有さないものの、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第63図　笠見第３遺跡SK115遺構図

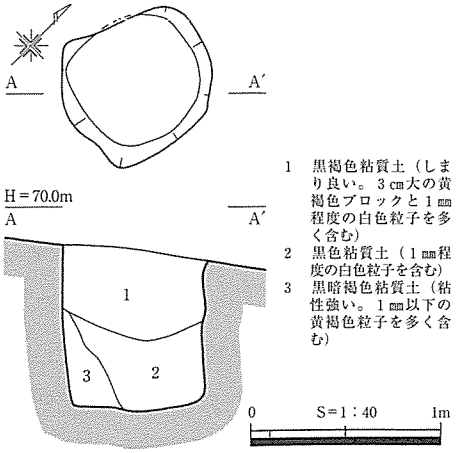
SK120（第65図、PL. 10）

Ａ区中央のJ14グリッドにあり、標高72.0mの平坦面に立地する。SI138の南西隅で検出されたもので、埋土の堆積状況からSK120が先行する。

平面円形を呈し、規模は上面で長軸74cm、短軸64cm、深さ77cmを測る。断面は垂直型を呈し、底面中央に径20cm、深さ14cmのピットが掘り込まれている。

埋土はしまりの良い黒褐色系で、自然堆積したものと思われる。

出土遺物はなく、時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。(前島)



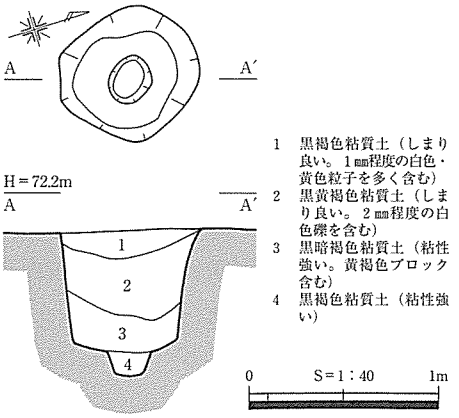
第64図　笠見第３遺跡SK117遺構図

SK121（第66図、PL. 11）

Ａ区中央のI14・J14グリッドにあり、標高71.7mの平坦面に立地する。SI139の中央やや東寄りで検出されたもので、埋土の堆積状況からSK121が先行する。

上面は北側が住居のピットに切られ、南側も攪乱を受けているが、平面円形に復元することができると思われる。規模は上面で長軸101cm、短軸80cm、底面で長軸65cm、短軸52cmを測る。断面スリバチ型を呈し、深さ74cmを測る。底面は平坦である。埋土は黒褐色系を主体とした９層に分かれる。

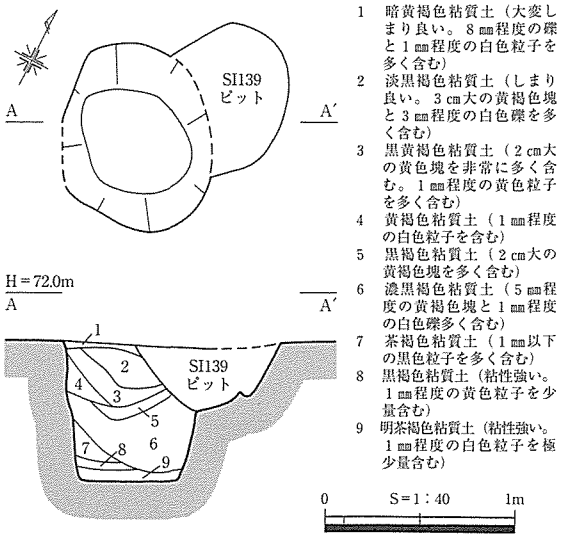
遺物は出土しておらず、底面ピットは有さないものの、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。(前島)



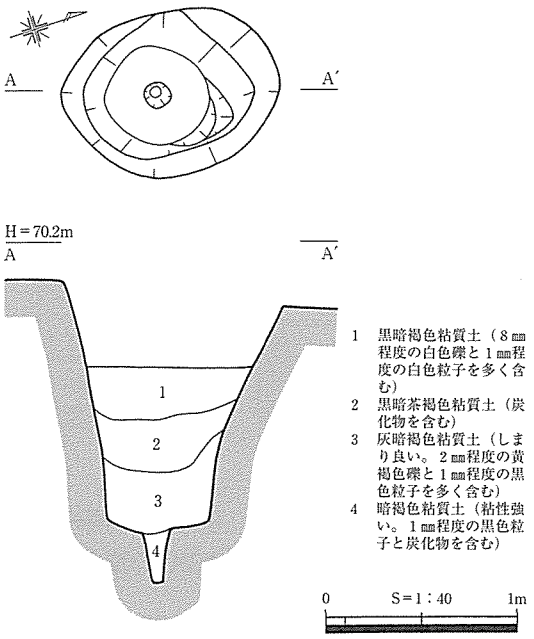
第65図　笠見第３遺跡SK120遺構図

SK122（第67図、PL. 11）

Ａ区やや北東側のH11グリッドにあり、標高70.0mの緩斜



第66図　笠見第３遺跡SK121遺構図



第67図　笠見第３遺跡SK122遺構図

面に立地する。平面円形を呈し、規模は上面で長軸115㎝、短軸85㎝、深さ133㎝を測る。断面スリバチ型を呈し、底面中央に径13㎝、深さ29㎝のピットが掘り込まれている。埋土は４層に分かれ、自然堆積を示すと思われる。底面ピット内は暗褐色粘質土である。

出土遺物はなく、時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。(前島)

SK123（第68図、PL. 11）

Ｃ区北西側端のC18グリッドにあり、西側谷部に向かう標高67.3m～67.8mの傾斜面に立地する。SS8と重複関係にあるが、埋土の堆積状況からSK123が先行する。平面は円形を呈し、規模は上面で長軸132㎝、短軸106㎝、深さ105㎝、底面で長軸62㎝、短軸42㎝を測る。断面スリバチ型を呈し、底面中央に径27㎝、深さ41㎝のピットが掘り込まれている。埋土は暗褐色系が主体をなし、自然堆積したと思われる。

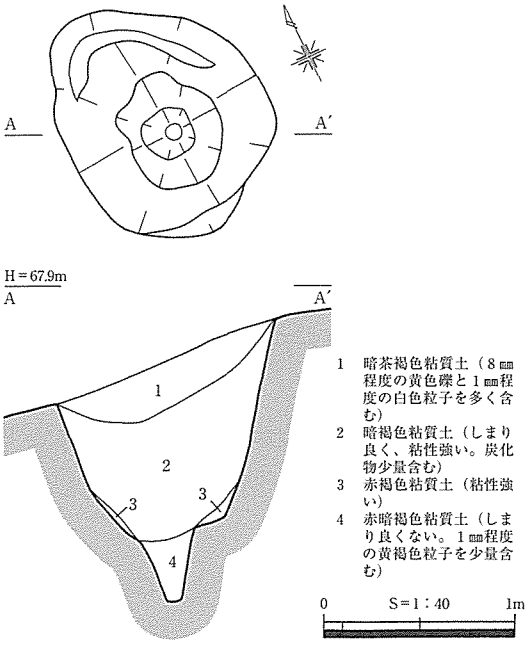
出土遺物はなく、時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。(前島)

SK125（第69図、PL. 11）

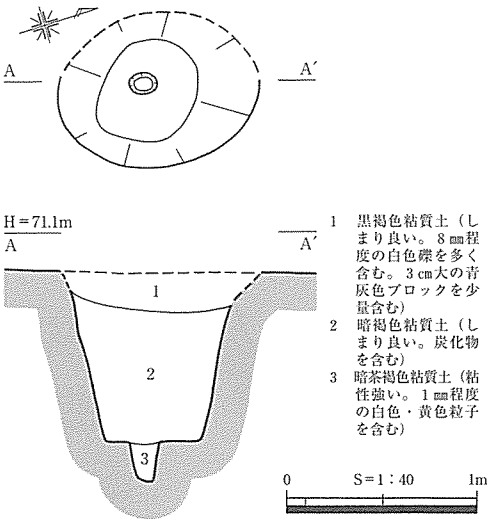
Ｃ区中央やや北寄りのG14グリッドにあり、標高70.9mの緩斜面に立地する。SI150の中央やや北東寄りで検出されたもので、埋土の堆積状況からSK125が先行する。

西側はトレンチで掘削してしまったが、平面円形を呈すると思われる。規模は上面で長軸105㎝、短軸82㎝、深さ90㎝、底面で長軸60㎝、短軸47㎝を測る。断面スリバチ型を呈し、底面やや北西寄りに径11㎝、深さ21㎝のピットが掘り込まれている。埋土は褐色系の３層に分かれ、自然堆積したと思われる。

出土遺物はなく、時期不明であるが、形態的特徴から

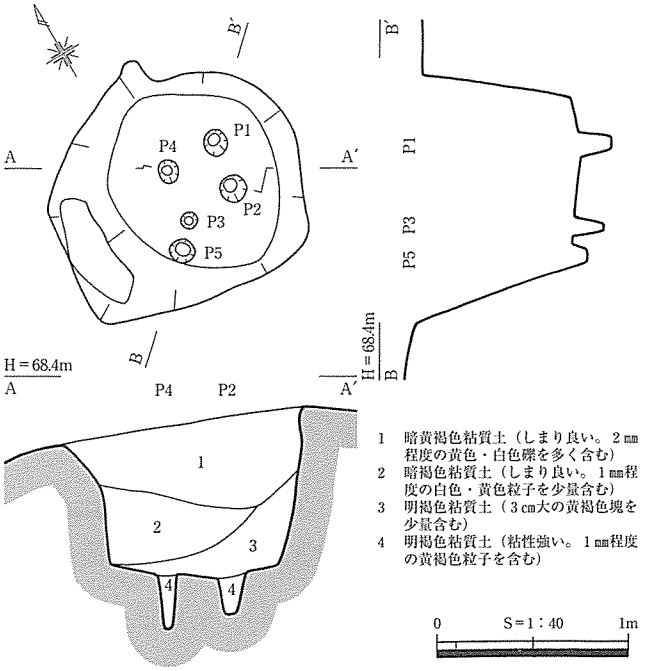


第68図　笠見第３遺跡SK123遺構図



第69図　笠見第３遺跡SK125遺構図

縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



第70図　笠見第３遺跡SK127遺構図

SK127（第70図、PL. 11）

Ｂ区北東側のF7・G7グリッドにあり、北側谷部に向かう標高68.2mの傾斜面に立地する。

平面円形を呈し、規模は上面で長軸147cm、短軸115cm、深さ90cm、底面で長軸105cm、短軸87cmを測る。断面は垂直型を呈し、検出面からの深さ90cmを測る。

底面中央部と南西壁に接して５つのピットが掘り込まれており、杭が立てられていたと考えられる。P1（14×12－18）cm、P2（15×13－22）cm、P3（９×８－16）cm、P4（13×10－30）cm、P5（13×12－９）cmを測る。このうち、P1～P4は中央に規則的に配置されているが、P5は南西壁に接して浅く掘り込まれている。

埋土は褐色系を主体とした４層に分かれ、底面ピット内は粘性の強い明褐色粘質土である。

遺物はなく時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）

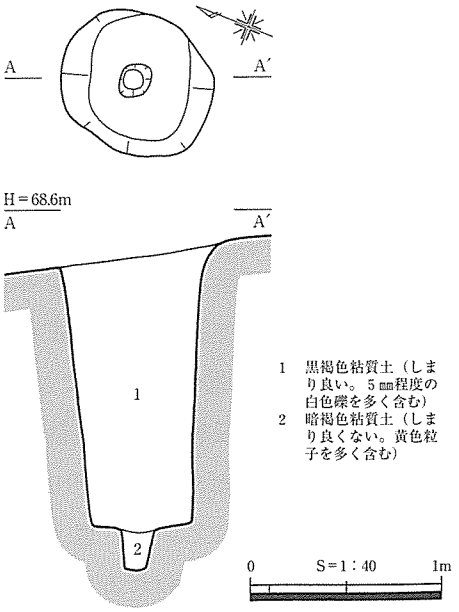
SK130（第71図、PL. 11）

Ａ区北東側のG8グリッドにあり、北側谷部に向かう標高68.3mの斜面に立地する。

平面円形を呈し、規模は上面で長軸85cm、短軸71cm、深さ150cm、底面で長軸67cm、短軸52cmを測る。断面は垂直型を呈する。底面中央に径16cm、深さ22cmのピットが掘り込まれていることから、杭が立てられていたと考えられる。

埋土はしまり良い黒褐色系を主体とした２層に分かれ、自然堆積したものと考えられる。ピット内は暗褐色粘質土である。

遺物はなく時期不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴と考えられる。（前島）



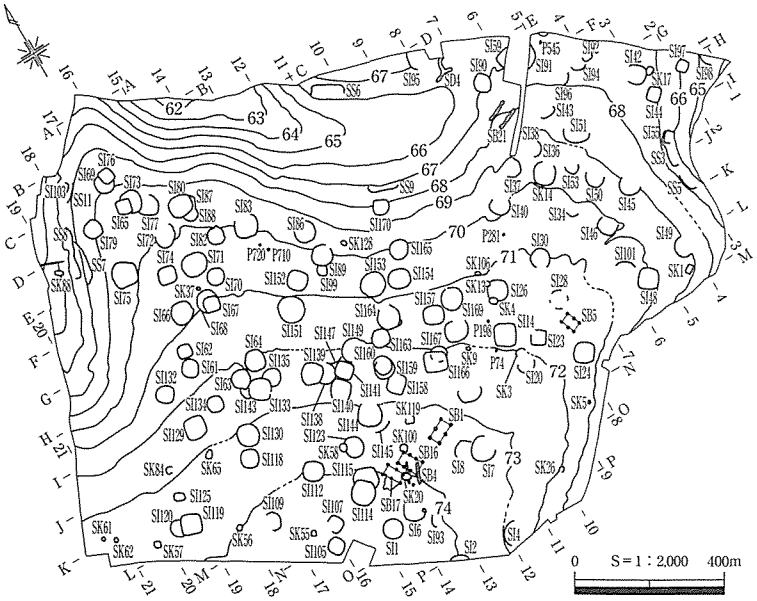
第71図　笠見第３遺跡SK130遺構図

第４章　弥生時代の調査成果

第１節　弥生時代調査の概要

弥生時代は当遺跡で最も遺構数が増える時期で、全域にわたって遺構が認められる。２箇年に亙る調査によって、竪穴建物跡112基、掘立柱建物跡７基、土坑26基、段状遺構７基、溝状遺構１基、土器溜り１箇所、ピットが多数検出された。この時代は、集落の形成から発展時期で、竪穴建物跡は、大半が住居跡であるが、小型のものは、住居以外の目的のものが含まれる。掘立柱建物跡には、布掘りのものと掘立式のものがあり、前者及び後者のうち規模が大きなものは高床倉庫である可能性がある。土坑についても、貯蔵穴と廃棄土坑と性格不明のものがある。

弥生時代中期後葉から集落が形成されはじめ、８基の竪穴建物が散在的に現れる。平面は円形を呈し、SI169（24㎡）を除いて床面積15㎡程度の小規模ものである。付属施設の屋外貯蔵穴（SK1・３～５・17・57・65・84・100・119）と廃棄土坑（SK128）も散在する。**後期前葉**になると遺構数が増し、２棟一単位の竪穴建物が見られるようになる。計15基の竪穴建物を確認した。付属施設としては、布掘り掘立柱建物SB21がある。**中葉**にはさらに増加し、竪穴建物の数が増し29基の竪穴建物が見られる。**後葉**になると調査区全域にわたって集落が営まれ、規模が最大になる。かなり近接した状態で検出されたものもあり、同時並存したとは考えられないが、38基の竪穴建物が検出された。住居配列も定型化したものになる。SI51・75・151・164は床面積が約30㎡と大型で多角形を呈す。**終末期**になると、急速に集落規模は小さくなり、SI14・30・48・53・130・158が見られるに過ぎない。（牧本）



第72図　笠見第３遺跡弥生時代遺構配置図

表１　笠見第３遺跡弥生時代遺構一覧表

遺構名	地区名	規模(長軸×短軸－深さ)m	平面形	床面積(㎡)	時　期	備　考
SI１	C区	4.78×4.70－0.23	円形	15.8	弥生時代中期後葉(Ⅳ－３)	
SI２	C区	4.4×　－0.37	円形？	4.1↑	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	
SI４	C区	6.5×6.5－0.27	円形	19.3	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	
SI６	C区	6.0×5.0－3.7	隅丸方形	16.3↑	不明（弥生後期か）	
SI７	C区	6.0×5.5↑－0.2	円形	28.3	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	
SI８	C区	4.6×4.6－0.12	円形	14.2	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	建て替え１回
SI10	C区	6.0×5※－0.37	円形	13.0↑	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	
SI14	C区	5.24×5.0－0.4	隅丸方形	25.1	弥生時代終末(Ⅵ－２)～古墳時代前期	
SI20	C区	3.7※×　－0.21	円形？	13.4※	弥生時代後期	
SI23	C区	3.8×3.6－0.27	方形	10.9	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	建て替え１回
SI24	C区	5.48×5.22－0.51	隅丸方形	20.1	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	
SI26	C区	5.5×5.3－0.3	円形	20.3	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	
SI28	C区	4.3×4.2－0.05	円形	13.9	弥生時代	
SI30	C区	5.0×4.8－0.6	隅丸方形	15.4	弥生時代終末(Ⅵ－２)	焼失住居
SI34	C区	不明	円形	3.9↑	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	玉作り工房
SI36	C区	5.33×5.25－0.58	隅丸方形	22.4	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	
SI37	C区	4.2↑×　－0.32	円形	10.2	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	
SI38	C区	4.0※×4.0－0.05	円形	7.1↑	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	
SI40	C区	4.6×　－0.62	円形	2.9↑	弥生時代後期前葉(Ⅴ－１)	
SI42	C区	4.3↑×4.2－0.41	隅丸方形	15.1	弥生時代後期前葉(Ⅴ－１)	
SI43	C区	3.8×3.6－0.27	円形	4.7↑	弥生時代中期後葉(Ⅳ－３)	
SI44	C区	3.5×3.2－0.65	隅丸方形	8.1↑	弥生時代後期終末(Ⅵ－１)	
SI45	C区	5.2×　－0.12	円形	16.8	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	
SI46	C区	4.5×4.5－不明	円形	15.9	弥生時代	
SI48	C区	5.5×5.5－0.68	隅丸方形	22.2	弥生時代終末(Ⅵ－２)	建て替え１回
SI49	C区	5.12×4.3↑－0.35	円形	18.0	弥生時代後期前葉(Ⅴ－１)	玉作り工房、建て替え2回
SI50	C区	4.9×4.9－0.19	隅丸方形	15.6	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	
SI51	C区	7.3↑×6.8↑－0.24	円形	36.2	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	建て替え１回
SI53	C区	2.7×2.5－0.2	隅丸方形	3.7↑	弥生時代終末(Ⅵ－２)	
SI54	C区	1.9×1.9－0.2	方形	1.6↑	不明（弥生後期か）	付属施設
SI55	C区	3.4×2.3↑－0.83	方形	5.2↑	弥生時代中期後葉(Ⅳ－３)	
SI59	B区	4.1×　－0.39	円形	3.2↑	弥生時代中期？	建て替え１回
SI61	A区	3.8×3.7－0.54	隅丸方形	12.0	弥生時代後期中葉(Ⅴ-２)	建て替え１回
SI62	A区	3.25×3.1－0.33	隅丸方形	9.0	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	
SI63	A区	4.4×4.3－0.42	円形	9.8	弥生時代中期後葉(Ⅳ－３)	
SI64	A区	5.9×5.6－0.49	不整円形	20.1	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	
SI65	A区	3.3×3.2－0.47	方形	10.0	弥生時代後期後葉(Ⅴ-３)	
SI66	A区	5.14×5.1－0.64	不整円形	22.2	弥生時代後期後葉(Ⅴ-３)	
SI67	A区	3.7×3.5－0.5	隅丸方形	11.8	弥生時代後期後葉(Ⅴ-３)	
SI68	A区	5.34×5.1－0.26	不整円形	10.6↑	弥生時代後期中葉(Ⅴ-２)	
SI69	A区	5.0×5.0－0.49	隅丸方形	11.3↑	弥生時代	
SI70	A区	3.89×3.61－0.54	円形	13.2	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	
SI71	A区	5.7×5.5－0.54	五角形	26.3	弥生時代後期後葉(Ⅴ-３)	
SI72	A区	5.1×5.0－0.13	楕円形	16.5	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	建て替え１回
SI73	A区	4.96×4.82－0.64	円形	27.8	弥生時代後期中葉(Ⅴ-２)	
SI74	A区	4.26×4.0－0.61	隅丸方形	15.5	弥生時代後期後葉(Ⅴ-３)	
SI75	A区	6.1×6.04－0.82	五角形	29.8	弥生時代後期後葉(Ⅴ-３)	焼失住居
SI76	A区	3.45×2.6－0.58	隅丸方形	7.9	弥生時代後期後葉(Ⅴ-３)	建て替え１回
SI77	A区	5.0×4.0↑－0.52	円形	25.1↑	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	
SI79	A区	4.1×3.46－0.8	円形	12.1	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	
SI80	A区	5.6×5.2－0.59	楕円形	24.1	弥生時代後期前葉(Ⅴ－１)	建て替え１回
SI82	A区	3.7×3.64－0.61	円形	10.3	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	
SI83	A区	5.68×5.4－0.51	隅丸方形	25.7↑	弥生時代後期中葉(Ⅴ-２)	
SI86	A区	4.78×4.2↑－0.78	円形	12.5↑	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	建て替え１回
SI87	A区	3.2×2.4－0.31	長方形	1.7↑	弥生時代後期中葉(Ⅴ-２)	
SI88	A区	3.3×3.0↑－0.43	円形	5.3↑	弥生時代後期前葉(Ⅴ－１)	
SI89	A区	5.12×4.98－0.7	五角形	19.1	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	
SI90	B区	4.46×4.16－0.29	隅丸方形	16.2	弥生時代後期後葉(Ⅴ-３)	焼失住居
SI91	C区	5～6※－0.68	円形	6.8↑	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	
SI92	C区	2.2×2.2－不明	隅丸方形	3.1↑	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	
SI93	C区	3.0↑×　－0.07	隅丸方形	2.1↑	弥生時代	
SI94	C区	4.6×4.6－不明	円形	6↑	弥生時代後期前葉(Ⅴ－１)	建て替え１回
SI95	B区	5.1×4.8↑－0.7	円形	20.6↑	弥生時代後期後葉(Ⅴ-３)	焼失住居、建て替え１回
SI96	C区	5.4×　－不明	円形	10↑	弥生時代	
SI97	C区	3.2×2.9－0.45	隅丸方形	7.6※	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	焼失住居
SI98	C区	6.0※×　－0.59	円形	5.7↑	弥生時代中期後葉(Ⅳ-３)	
SI99	A区	2.4×1.88－0.96	隅丸長方形	3.6	弥生時代後期前葉(Ⅴ－１)	
SI101	C区	5.0×　－0.1	円形(多角形)	6.9↑	弥生時代後期後葉(Ⅴ-３)	建て替え１回
SI103	A区	不明	隅丸方形	2.1↑	弥生時代	
SI105	A区	4.7×4.5－0.09	隅丸方形	12.8※	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	
SI107	A区	3.9×3.0↑－0.19	隅丸方形	13.2※	弥生時代後期前葉(Ⅴ－１)	
SI109	A区	5.1×4.6－0.54	円形	13.1	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	建て替え１回
SI112	A区	5.6×5.2－0.35	楕円形	20	弥生時代後期前葉(Ⅴ－１)	
SI114	A区	6.85×6.3－0.73	不整円形	28.9	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	建て替え１回
SI115	A区	7.0×6.5－0.52	隅丸五角形	29	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	
SI118	A区	5.2×5.0－0.34	隅丸方形	15.8※	弥生時代後期中葉(Ⅴ－２)	
SI119	A区	5.5×5.3－0.56	隅丸方形	21.1	弥生時代後期後葉(Ⅴ－３)	
SI120	A区	4.5※×4.5－0.3	隅丸方形	13.9※	弥生時代後期前葉(Ⅴ－１)	

遺構名	地区名	規模(長軸×短軸－深さ)m	平面形	床面積(㎡)	時　期	備　考
SI123	A区	5.3×　－0.28	円形	19.7※	弥生時代後期後葉(V－3)	
SI125	A区	3.0×2.4－0.54	長方形	3.6	弥生時代後期前葉(V－1)	建て替えか
SI129	A区	5.8×5.8－0.8	隅丸方形	23	弥生時代終末(Ⅵ－2)	
SI130	A区	6.1×5.8－0.53	楕円形	22.5	弥生時代終末(Ⅵ－2)	建て替え１回
SI132	A区	4.7×4.7－0.5	円形	12.5	弥生時代後期前葉(V－1)	
SI133	A区	5.7×5.7－0.19	隅丸方形	23	弥生時代後期後葉(V－3)	
SI134	A区	4.5×4.5－0.49	円形	11.5	弥生時代後期中葉(V－2)	
SI135	A区	4.8×4.8－0.49	円形	13.1	弥生時代中期末～後期初頭(Ⅳ－3～V－1)	
SI138	A区	5.4×5.4－0.68	円形	12.2↑	弥生時代後期中葉(V－2)	建て替え１回
SI139	A区	5.9×5.7－0.74	隅丸方形	20.1	弥生時代後期後葉(V－3)	建て替え１回
SI140	A区	5.5×5.4－0.71	隅丸方形	19.8	弥生時代後期後葉(V－3)	
SI141	A区	4.75×4.4－0.57	隅丸方形	14.4	弥生時代後期後葉(V－3)	
SI143	A区	4.1↑×　－0.29	円形	4.6↑	弥生時代後期	
SI144	A区	5.6×5.45－0.65	隅丸方形	27	弥生時代後期後葉(V－3)	建て替え１回
SI145	A区	4.5×　－0.12	円形	6↑	弥生時代後期中葉(V－2)	
SI147	A区	5.8×　－0.16	円形	7.9↑	弥生時代中期後葉(Ⅳ－3)	
SI149	A区	6.6×6.2－0.47	隅丸五角形	27.4	弥生時代後期後葉(V－3)	建て替え2回
SI151	A区	7.16×7.08－0.58	円形	32.6	弥生時代後期後葉(V－3)	建て替え2回
SI152	A区	5.5×5.3－0.45	隅丸方形	18.4	弥生時代終末(Ⅵ－1)	
SI153	A区	6.8×6.4－0.5	隅丸五角形	24.5	弥生時代後期前葉(V－1)	焼失住居、建て替え１回
SI154	A区	5.9×5.5－0.5	隅丸方形	19	弥生時代後期中葉(V－2)	建て替え１回
SI156	A区	3.0×2.5－0.43	方形	5.9	弥生時代後期	付属施設
SI157	A区	4.73×4.5－0.43	隅丸方形	17.5	弥生時代後期中葉(V－2)	焼失住居
SI158	A区	5.0×4.8－0.45	隅丸方形	18※	弥生時代終末(Ⅵ－2)	
SI159	A区	5.5×5.5－0.32	不整五角形	21.2	弥生時代後期後葉(V－3)	建て替え１回
SI160	A区	5.2×4.5－0.22	楕円形	15	弥生時代後期前葉(V－1)	
SI163	A区	4.9×4.9－0.52	隅丸方形	15.3	弥生時代後期前葉(V－1)	
SI164	A区	5.5×5.5－0.3	不整円形	31.2※	弥生時代後期後葉(V－3)	建て替え１回
SI165	A区	5.2×5.0－0.67	円形	15.9	弥生時代後期後葉(V－3)	建て替え１回
SI166	A区	6.4×5.3－0.7	隅丸長方形	23.2	弥生時代後期後葉(V－3)	建て替え１回
SI167	A区	4.5×4.5－0.46	円形	12※	弥生時代後期	
SI168	A区	6.1×5.6－0.34	隅丸方形	25.1	弥生時代後期中葉(V－2)	
SI169	A区	6.1×5.9－0.27	円形	24	弥生時代中期後葉(Ⅳ－3)	建て替え１回
SI170	A区	4.15×4.0－0.73	隅丸方形	13.2	弥生時代後期後葉(V－3)	
SB１	C区	5.7×2.8	２間×１間		弥生時代後期中葉(V－2)	高床倉庫
SB４	C区	5.48×2.8	３間×１間		弥生時代後期中葉(V－2)	布掘り、高床倉庫
SB５	C区	4.2×2.6	２間×１間		弥生時代後期中葉(V－2)	
SB16	A区	6.1×3.1	３間×１間		弥生時代後期後葉(V－3)	
SB17	A区	5.0×2.8	２間×１間		弥生時代後期後葉(V－3)	
SB21	A区	5.4×3.4	２間×１間		弥生時代後期前葉(V－1)	布掘り、高床倉庫
SB27	A区	2.8×2.5	１間×１間		不明	
SK１	C区	2.44×1.37－0.55	長方形		弥生時代中期後葉(Ⅳ－3)	貯蔵穴か、上屋有
SK３	C区	2.8×2.8－0.6	円形		弥生時代中期後葉(Ⅳ－3)	貯蔵穴か
SK４	C区	2.23×1.5－0.54	長楕円形		弥生時代中期後葉(Ⅳ－3)	貯蔵穴か
SK５	C区	0.69↑×0.35↑－0.11	不整形		弥生時代中期後葉(Ⅳ－3)	
SK９	C区	1.7×0.75－0.2	長方形		弥生時代後期後葉(V－3)	土壙墓
SK13	C区	1.3×1.05－0.23	方形		弥生時代後期中葉(V－2)	
SK14	C区	2.5↑×0.65－0.17	長方形		弥生時代後期前葉(V－1)	
SK17	C区	1.9×1.5－0.77	長方形		弥生時代中期後葉(Ⅳ－3)	貯蔵穴か
SK20	C区	2.67×2.12－0.57	台形状		弥生時代後期前葉(V－1)	貯蔵穴か
SK25	C区	0.95×0.8↑－0.07	不整方形		弥生時代後期中葉(V－2)	
SK26	C区	1.7↑×1.25－0.25	不整楕円形		弥生時代後期中葉(V－2)	廃棄土坑
SK37	A区	1.4×1.25－1.05	不整楕円形		弥生時代後期後葉(V－3)	貯蔵穴
SK44	A区	1.75×1.39－0.92	小判形		弥生時代後期後葉(V－3)	不明
SK55	A区	1.6×1.37－0.6	長方形		弥生時代後期前葉(V－1)	貯蔵穴か
SK56	A区	1.7×1.5－0.8	楕円形		弥生時代後期前葉(V－1)	柱穴
SK57	A区	2.1×1.7－1.08	隅丸方形		弥生時代中期後葉(Ⅳ－3)	貯蔵穴か
SK58	A区	1.18×　－0.85	円形		弥生時代後期後葉(V－3)	貯蔵穴
SK61	A区	1.1×1.02－0.85	円形		弥生時代後期後葉(V－3)	貯蔵穴
SK62	A区	1.01×0.94－0.95	円形		弥生時代後期前葉(V－1)	貯蔵穴
SK65	A区	2.2×1.7－0.25	隅丸長方形		弥生時代中期後葉(Ⅳ－3)	貯蔵穴か
SK84	A区	1.93×1.82－0.17	隅丸方形		弥生時代中期後葉(Ⅳ－3)	貯蔵穴、上屋有
SK88	A区	2.53×1.17－0.56	楕円形		弥生時代後期前葉(V－1)	貯蔵穴、上屋有
SK100	A区	2.1×2.1－0.25	隅丸方形		弥生時代中期後葉(Ⅳ－3)	貯蔵穴か
SK106	A区	1.44×1.09－0.89	長方形		弥生時代	貯蔵穴か
SK119	A区	2.4×2.1－0.65	隅丸方形		弥生時代中期後葉(Ⅳ－3)	貯蔵穴か
SK128	A区	1.7×1.3－0.34	楕円形		弥生時代中期後葉(Ⅳ－3)	廃棄土坑
SS３	C区	4.6×0.65－0.51			弥生時代後期中葉(V－2)	
SS５	B区	5.2×1.0↑－0.52			弥生時代後期前葉(V－1)	
SS６	B区	8.8↑×3.0↑－0.32			弥生時代後期中葉(V－2)	
SS７	A区	12×2.2－0.44			弥生時代後期中葉(V－2)	
SS８	A区	13.8×1.0↑－0.42			弥生時代後期前葉(V－1)	
SS９	A区	6.8↑×4.0↑－0.46			弥生時代後期後葉(V－3)	
SS11	A区	5.6×2.6↑－0.76			弥生時代後期後葉(V－3)	
SD４	B区				弥生時代	

↑は数値以上
※は復元値

第２節　竪穴建物跡

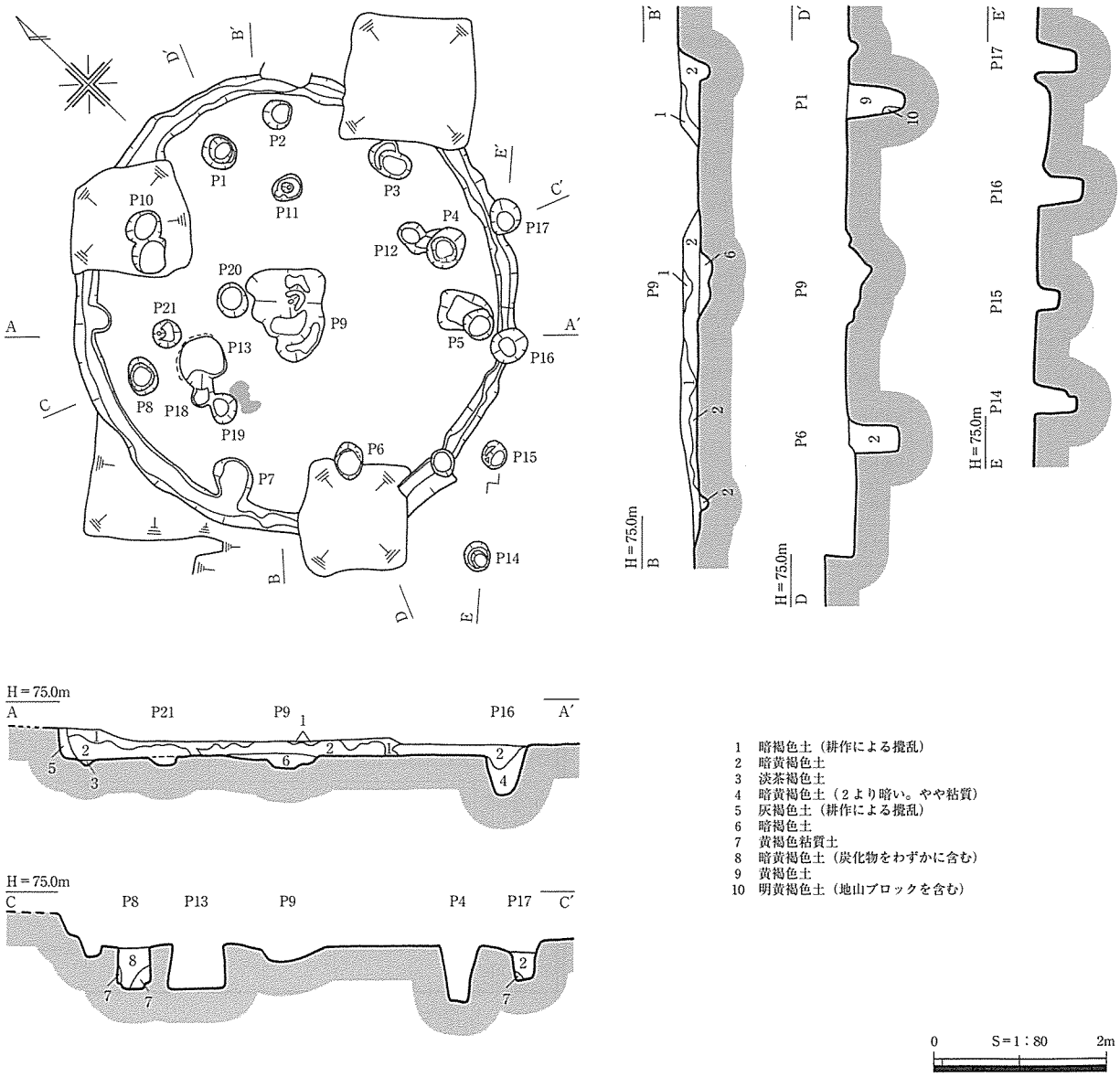
SI1（第74図、PL. 12・113）

調査区南東側のＮ14グリッドにあり、標高74.5m付近の遺跡の最も高い位置の平坦面に立地する竪穴建物跡である。東側約４ｍにはSI6がある。

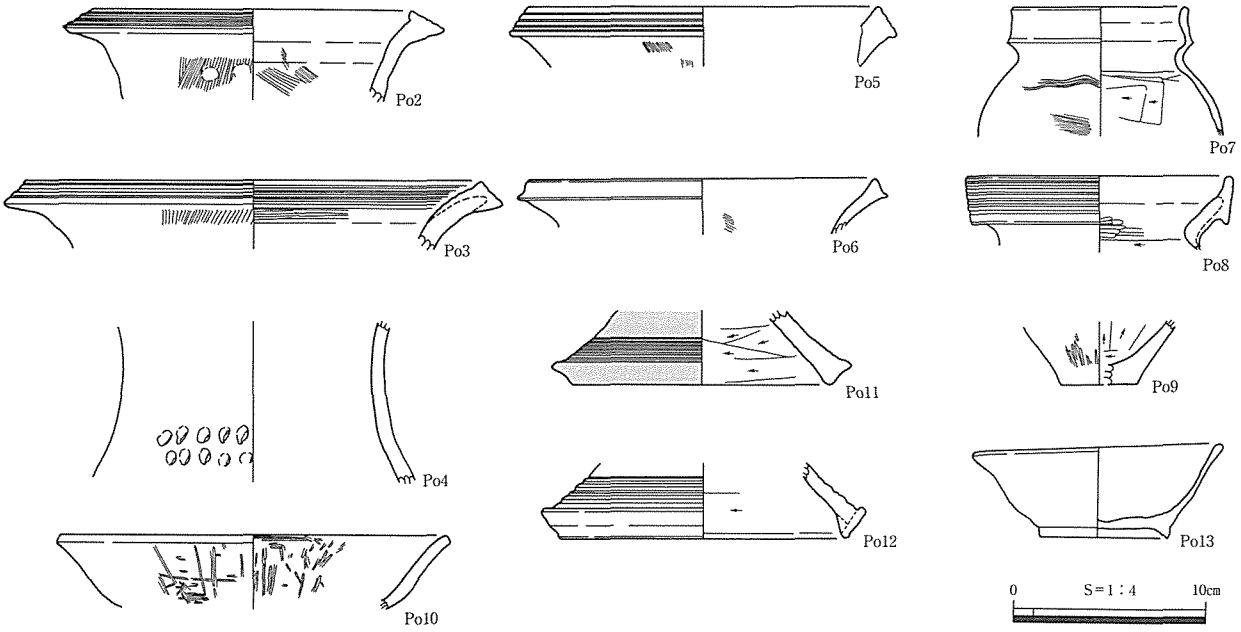
梨栽培等により上半部は削平を受け、床面まで４箇所の肥料穴が掘り込まれており遺存状態は悪い。平面は円形を呈す。規模は、南北4.78m、東西4.7m、床面積は15.6㎡である。残存壁高は、最も遺存状態のよい北壁で最大23㎝を測る。壁際には、幅12～20㎝、深さ10㎝程度の壁溝が全周する。

主柱穴はP1、P4、P6、P8である。P4で柱痕が認められ、推定される柱径は約13㎝である。いずれの埋土も黄褐色系である。主柱穴間距離は、P1−P4間から順に、2.8m、2.7m、2.6m、2.7mである。

建物中央には、不整形に掘り込まれたP9がある。柱穴に比べて浅く、底面も凹凸がある。埋土中には炭化物をわずかに含んでいる。



第73図　笠見第３遺跡SI1遺構図



第74図　笠見第３遺跡SI1出土遺物実測図

その他に、床面上及び周辺でピット17個を検出した。Ｐ14～Ｐ17は一直線に並んでおり、切り合い関係からSI1以降のものと考えられる。埋土は、攪乱土層を除くと暗黄褐色土単層である。

出土遺物には、床面からやや浮いた状態で弥生土器壺Po4、甕Po2～３・Po5～９、高杯Po10～12、平安時代土師器杯Po13などがある。

表２　笠見第３遺跡SI1ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
Ｐ１	40×36－68		Ｐ12	29×26－34	
Ｐ２	32×31－34	主柱穴	Ｐ14	35×30－48	
Ｐ３	53×39－29		Ｐ15	31×29－27	
Ｐ４	49×40－65		Ｐ16	41×39－55	
Ｐ５	34×34－66	主柱穴(柱痕有)	Ｐ17	39×35－45	
Ｐ６	42×30－62		Ｐ18	36×20－23	
Ｐ７	50×47－13	主柱穴	Ｐ19	35×33－51	
Ｐ８	44×33－50		Ｐ20	38×34－16	
Ｐ９	107×85－28	主柱穴	Ｐ21	32×28－17	
Ｐ10	42×36－41	中央ピット	Ｐ22	31×27－40	
Ｐ11	34×30－30				

出土遺物等から清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。Po13は、後世の混入である。（牧本）

SI2（第75・76図、PL. 12・113）

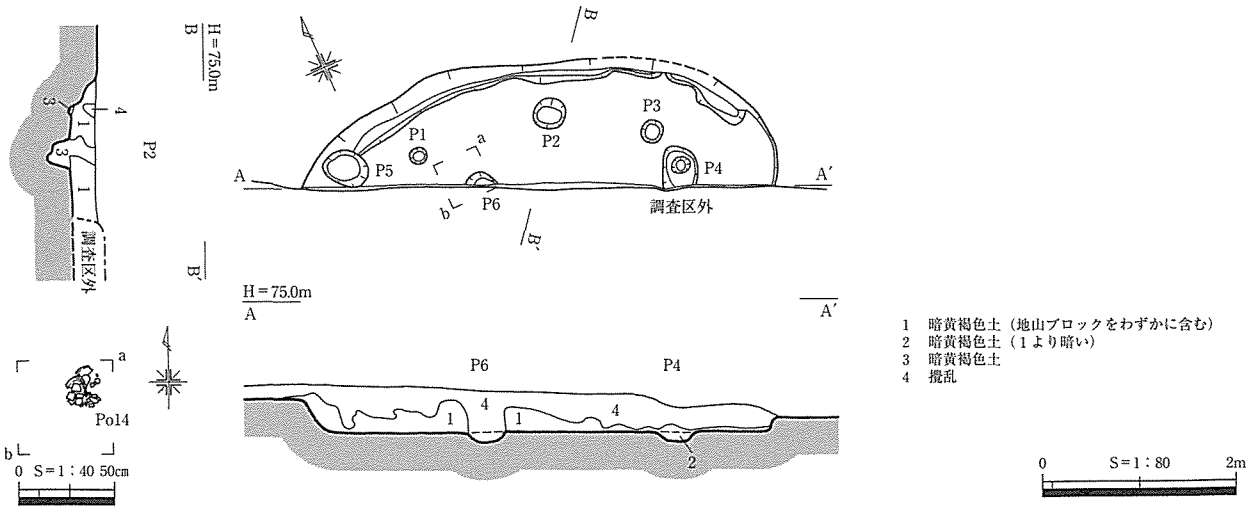
調査区南東際のP13グリッドにあり、標高74.5m付近の遺跡の最も高い位置の平坦面に立地する。調査区際にあるために全体の約１/５しか調査できなかった。東側約10mにはSI4がある。

梨栽培等により上半部は削平を受けている。平面は、円形又は隅丸方形を呈すと考えられる。規模は、南北１m以上、東西4.4m以上、床面積は4.1m²以上である。残存壁高は、最も遺存状態のよい西壁で最大37cmを測る。壁際には、幅８～17cm、深さ４cm程度の壁溝が巡る。

主柱穴と考えられるものはP3のみである。P5・６は、建物埋没以後に掘り込まれたものである。その他のものは、用途不明である。

埋土は、ほとんど攪乱土（第４・５層）である。

出土遺物には、図化できたものに弥生土器甕Po14、底部Po15・16がある。Po14は床面上で出土して



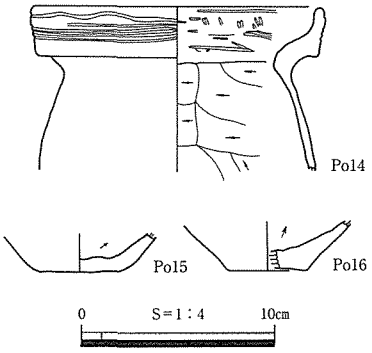
第75図　笠見第３遺跡SI2遺構図

いる。その他は埋土中の出土である。

出土遺物等から清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

表３　SI2ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
Ｐ１	18×17－７	
Ｐ２	36×32－23	
Ｐ３	24×23－62	主柱穴
Ｐ４	48×36－19	



第76図　笠見第３遺跡SI2出土遺物実測図

SI4（第77・78図、PL. 13・113・174）

調査区南東側、P11・12グリッドの標高72.4～73mの斜面に立地する。北端はSI15と重複関係にあるが、当建物跡がSI15の埋土を切り込むことから、当建物が新しい。

遺存状況が悪く西壁のみ残存し、東側は攪乱土を除去すると即床面で、壁溝のみ残存するといった状況であった。残存する壁溝から推定される建物の規模は直径6.5m、床面積19.3㎡以上の円形を呈すと考えられる。壁高は最も遺存状況が良好な北壁際で27cmを測る。

床面で８基のピットを検出した。このうちP1、P3、P4、P6が主柱穴で柱間はP1～P3間から以下順に2.85m、2.45m、2.8mである。P2は支柱穴の可能性がある。またP8は中央ピットとみられる。中央ピットの埋土は２層に分かれ、ともに炭化物を若干含む。壁際には幅16～20cm、深さ4.5～7.1cmの壁溝がめぐる。また床面には８箇所にわたり焼土面が認められたが、埋土中の炭化物の量は極微量であり、焼失したとは考え難い。

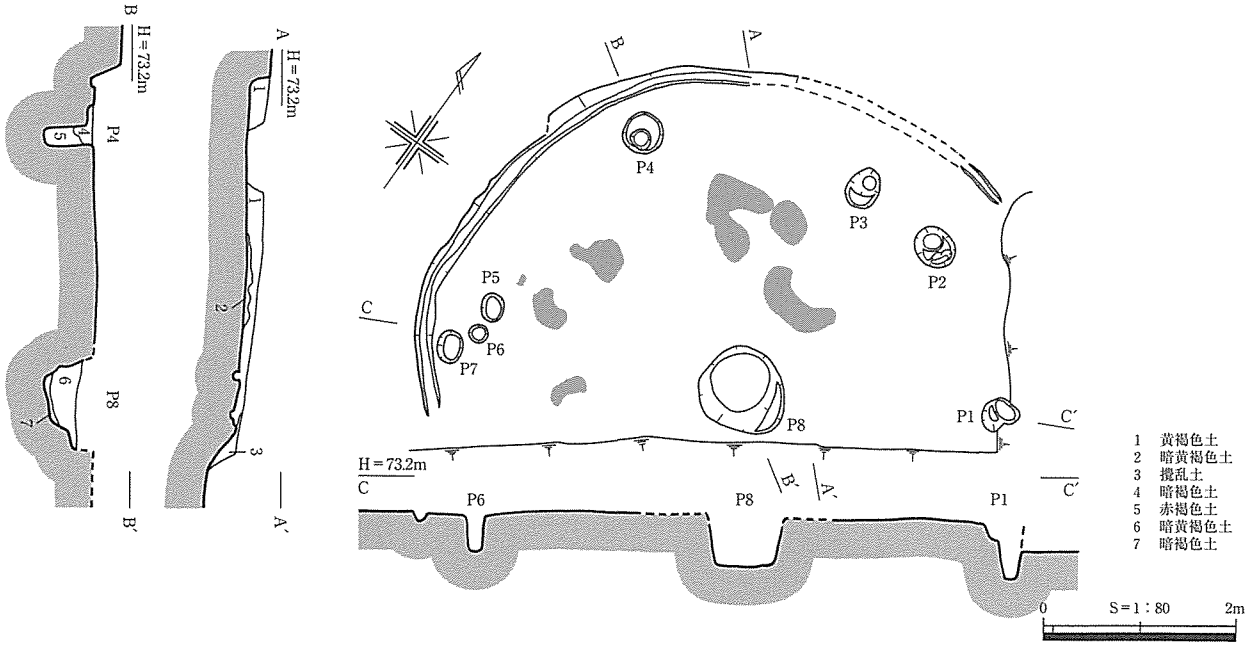
埋土は大半が流出し、検出時すでに一部の壁溝が露出する状況であった。かろうじて残存した埋土は２層に分層可能で、いずれも黄褐色系の土の流入により埋没していた。

出土遺物は、埋土中の床面から浮いた状態で、甕Po17～23、蓋Po24、椀Po25、把手Po26、袋状鉄斧F1が出土した。

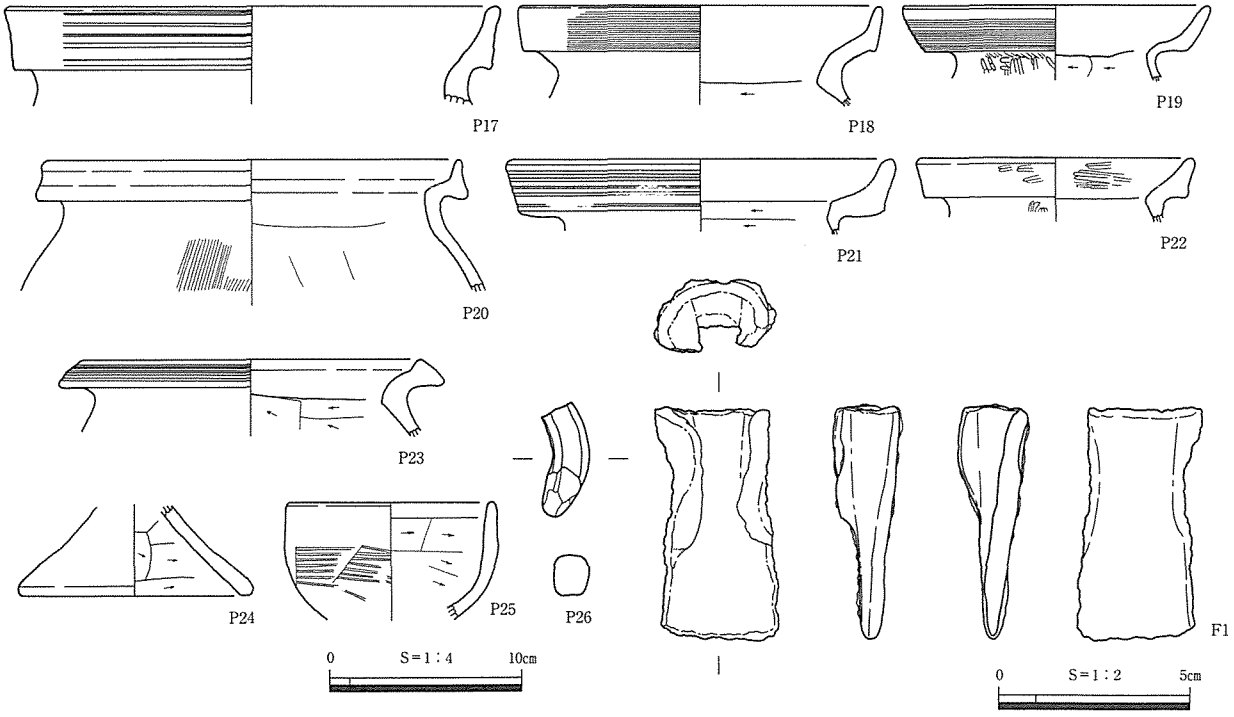
出土遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろと考えられる竪穴住居跡とみられる。（小山）

表４　笠見第３遺跡SI4ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
Ｐ１	35×35－54	
Ｐ２	43×39－47	
Ｐ３	45×32－48	
Ｐ４	43×40－56	
Ｐ５	33×23－７	主柱穴
Ｐ６	19×19－28	
Ｐ７	34×26－10	主柱穴



第77図　笠見第３遺跡SI4遺構図



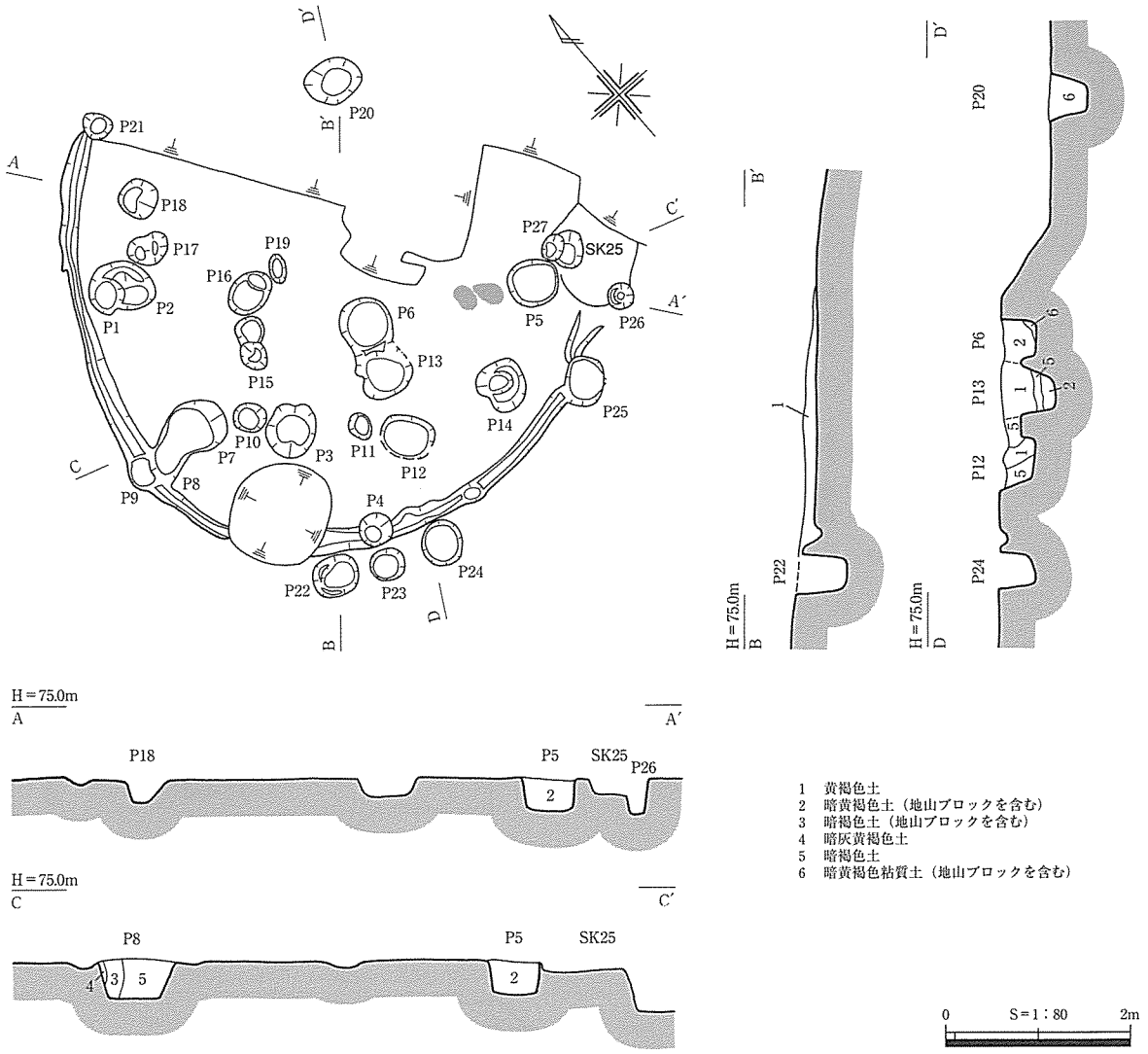
第78図　笠見第３遺跡SI4出土遺物実測図

SI6（第79図、PL. 13）

Ｃ区南西のＮ13グリッドにあり、標高74.4m付近の遺跡の最も高い位置のほぼ平坦面に立地する。西側約２ｍにはSI1がある。

周囲は梨栽培等により、上半部及び北東側が大きく削平を受けているが、平面は円形を呈すと考えられる。規模は、南西−北東約６ｍ、北西−南東５ｍ、床面積は16.3㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態のよい西壁で最大37cmを測る。壁際には、幅10～20cm、深さ４～10cm程度の壁溝が巡っている。

主柱穴は反時計回りにP18、P7、P12、P5、P20の５個である。主柱穴間距離は、P18−P7間から順



第79図　笠見第３遺跡SI6遺構図

に 2.6m、2.3m、2.2m、3.0m、2.6m である。中央ピットに相当するものは、掘削を受けたため検出できなかった。床面上には、P5付近で焼土面が検出されている。

床面及び周辺には、その他に21個のピットが検出されたが、柱穴の可能性はあるものの、規則的に配列されたものはなく、用途は不明である。

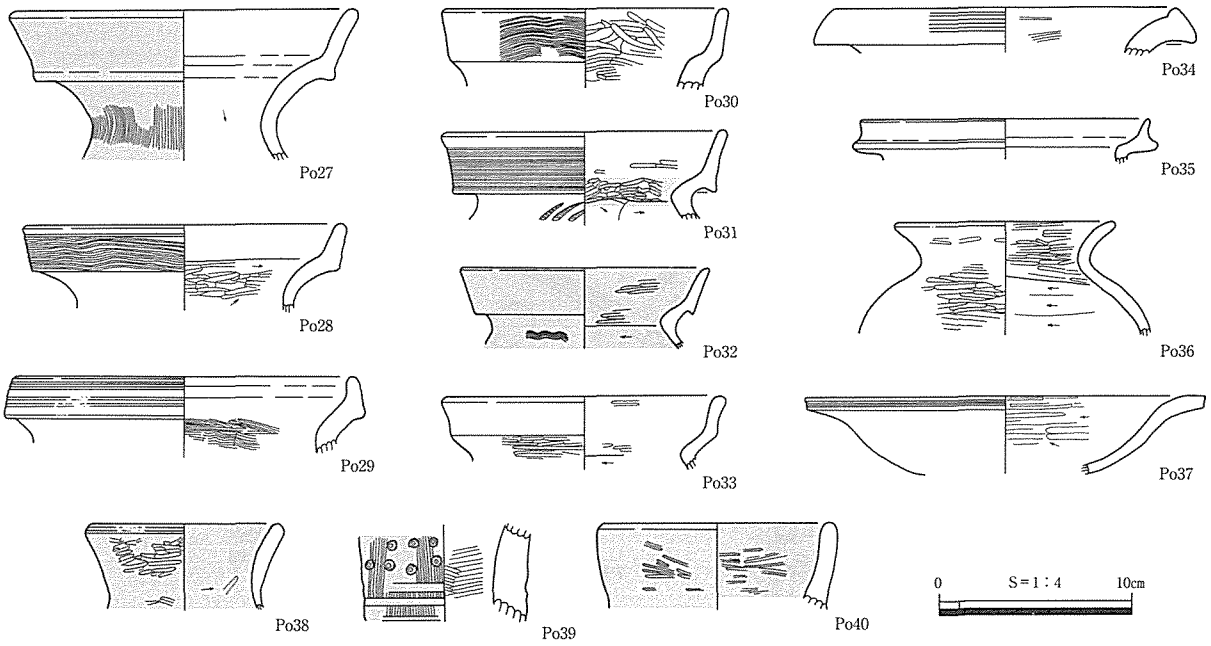
埋土は削平のためほとんど遺存していなかったが、暗黄褐色土単層でおそらく自然堆積したものと考えられる。

表５　笠見第３遺跡SI6ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P 1	45×39－60		P 14	51×50－22	
P 2	55×40－45		P 15	32×27－38	
P 3	59×55－43		P 16	53×39－34	
P 4	39×35－63		P 17	46×40－41	
P 5	55×52－35	主柱穴	P 18	43×42－23	主柱穴
P 6	57×56－43		P 19	23×22－15	
P 7	57×55－43	主柱穴	P 20	65×51－42	主柱穴
P 8	45×40－40		P 21	34×28－54	
P 9	40×35－25		P 22	48×45－56	
P 10	34×30－27		P 23	39×34－81	
P 11	31×24－11		P 24	49×46－39	
P 12	59×50－40	主柱穴	P 25	56×39－44	
P 13	64×53－59		P 26	27×26－55	

出土遺物には、弥生土器片があるが、図化できなかった。

明らかな時期は不明であるが、形態的に弥生時代の竪穴住居跡と考えられる。（牧本）



第80図　笠見第３遺跡SI7出土遺物実測図

SI7（第80・81図、PL. 13・114）

M11、N11グリッドにかけて位置する。北西側でSI8を切る。

平面は、隅丸五角形を呈す。床面規模は径６ｍで、床面積28.3㎡を測る。残存壁高は５～20㎝である。床面で複数のピットを検出したが、規模と間隔、配置から中央ピットがP13で、主柱穴はP22、P8、P6、P5、P12と考えられる。主柱穴間距離は、P22-P8間から順に3.3m、2.8m、2.5m、2.8m、2.7mを測る。P4とP10がもっとも深く、２つのピットを結ぶ線は中央ピットの中心を通るので、棟持柱と考えられる。他の浅いピットについては、P12とP20は結ぶ線がP4の中心を通り、掘方の中心線となるので、P16、P9とあわせて補助柱として機能したと推定する。

表６　笠見第３遺跡SI7ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P 1	29×29－23		P 12	31×28－17	
P 2	29×25－35	主柱穴	P 13	63×47－27	
P 3	53×34－50		P 14	27×24－30	
P 4	39×28－54		P 15	22×21－25	
P 5	45×34－44	主柱穴	P 16	20×16－ 8	
P 6	25×23－42	主柱穴	P 17	20×18－ 8	
P 7	16×14－13		P 18	20×15－ 8	
P 8	29×26－27	主柱穴	P 19	25×24－12	
P 9	27×27－10		P 20	38×21－27	
P 10	50×33－51		P 21	12×12－17	
P 11	20×17－18		P 22	34×27－45	主柱穴

中央ピットの埋土は２層に分かれていて、下層は炭化物粒を含んでいた。焼土面は検出していない。

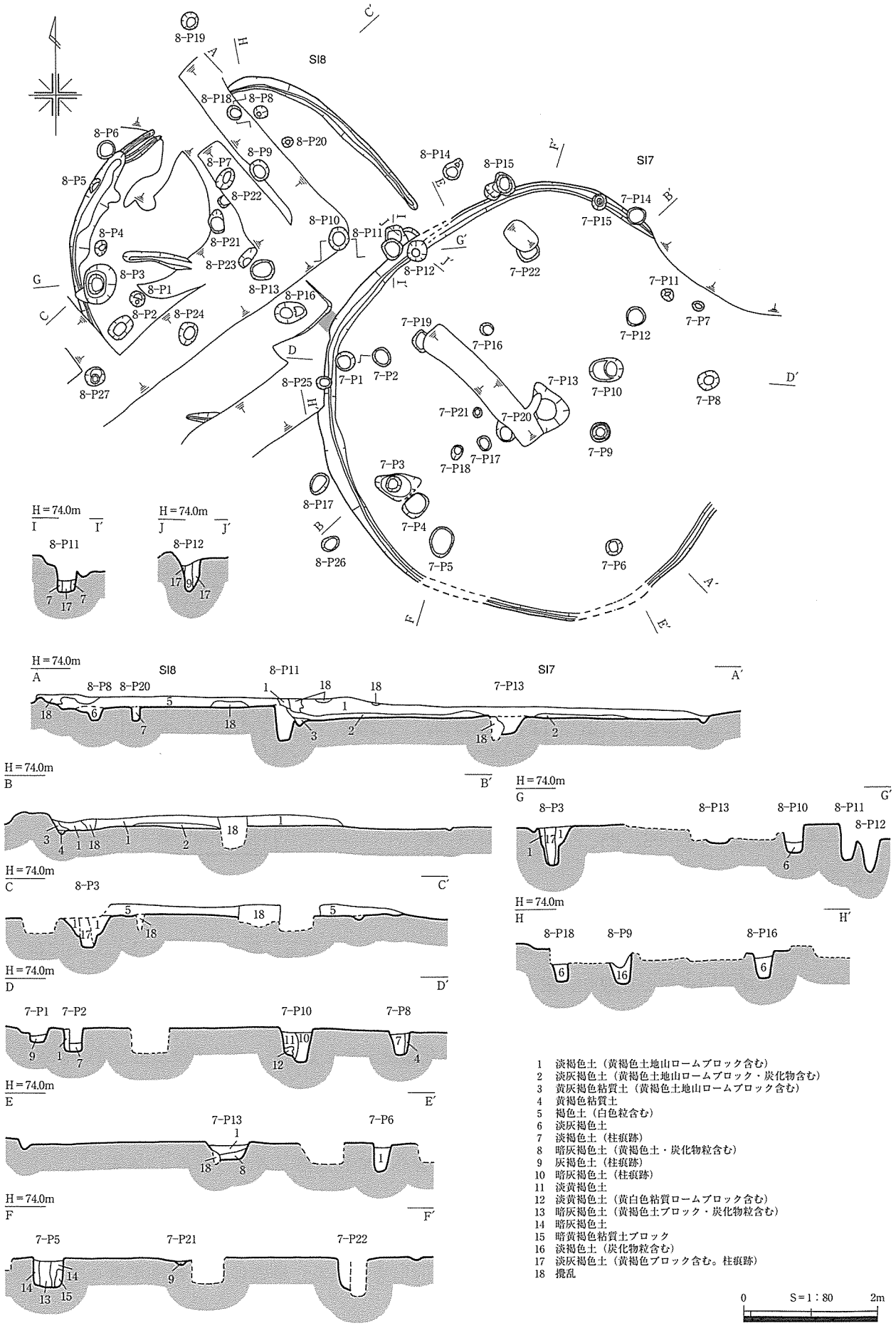
出土遺物は、図化できたものに弥生土器壺Po27・28、甕Po29～36、高杯Po37、直口壺Po38、器台Po39、壺口縁部Po40がある。いずれも、埋土中からの出土である。

出土遺物等から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉の竪穴住居跡と考えられる。（家塚）

SI8（第81・82図、PL. 13・114）

M11・M12グリッドにかけて位置する。南東側をSI7に切られる。耕作による攪乱が著しく、壁高は最大７㎝しか残らない。

壁溝が削平された箇所もあるが、床面の径が約4.6m、壁高最大12㎝の隅丸方形に復元できる。床



第81図　笠見第３遺跡SI7・８遺構図

面積は14.2㎡を測る。北西側の壁溝の一部が二重になることから建て替えが考えられる。

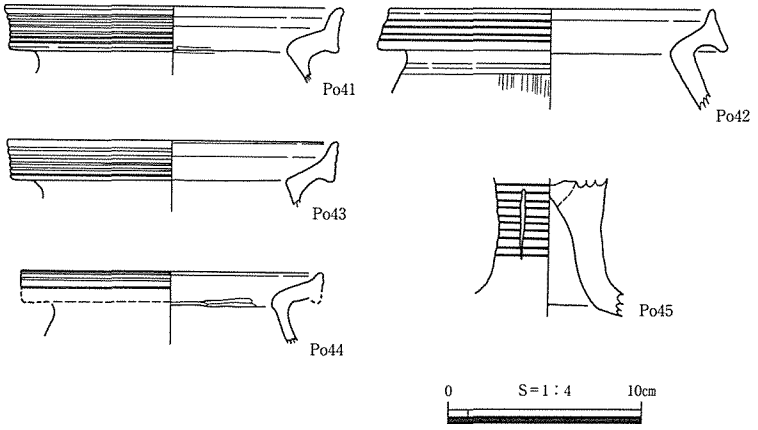
主柱穴は廃絶時の建物に伴うものがP3、P18、P12と攪乱で失われた４基で、主柱穴間距離はP3-P18間から順に3.3m、3.4mを測る。建て替え前のものはP9、P10が想定できるが、明瞭ではない。中央ピットはP17と考えられる。本来の床面はほとんど残っていないが、中央ピットの南東側約1.2mの地点で焼土面を検出した。

出土遺物は、図化できたものに弥生土器甕Po41～44、高杯Po45がある。いずれも埋土下層からの出土である。

出土遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉の竪穴住居跡と考えられる。（家塚）

表７　笠見第３遺跡SI8ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
Ｐ１	31×26－34		Ｐ11	33×27－55	
Ｐ２	40×32－29		Ｐ12	30×27－49	主柱穴
Ｐ３	60×47－61	主柱穴	Ｐ13	41×31－36	
Ｐ４	23×17－26		Ｐ14	35×25－29	
Ｐ５	29×20－25		Ｐ15	38×25－30	
Ｐ６	26×26－14		Ｐ16	48×33－40	
Ｐ７	34×21－31		Ｐ17	37×30－６	
Ｐ８	23×20－30		Ｐ18	20×19－21	主柱穴
Ｐ９	32×27－23	主柱穴	Ｐ19	24×24－27	
Ｐ10	35×30－42	主柱穴	Ｐ20	15×12－25	



第82図　笠見第３遺跡SI8出土遺物実測図

SI10（第83・84図、PL. 14・115・176・178）

調査区中央やや東側L11グリッドの標高約72. 5m付近のほぼ平坦面に位置する。北側はSI11に切られる。

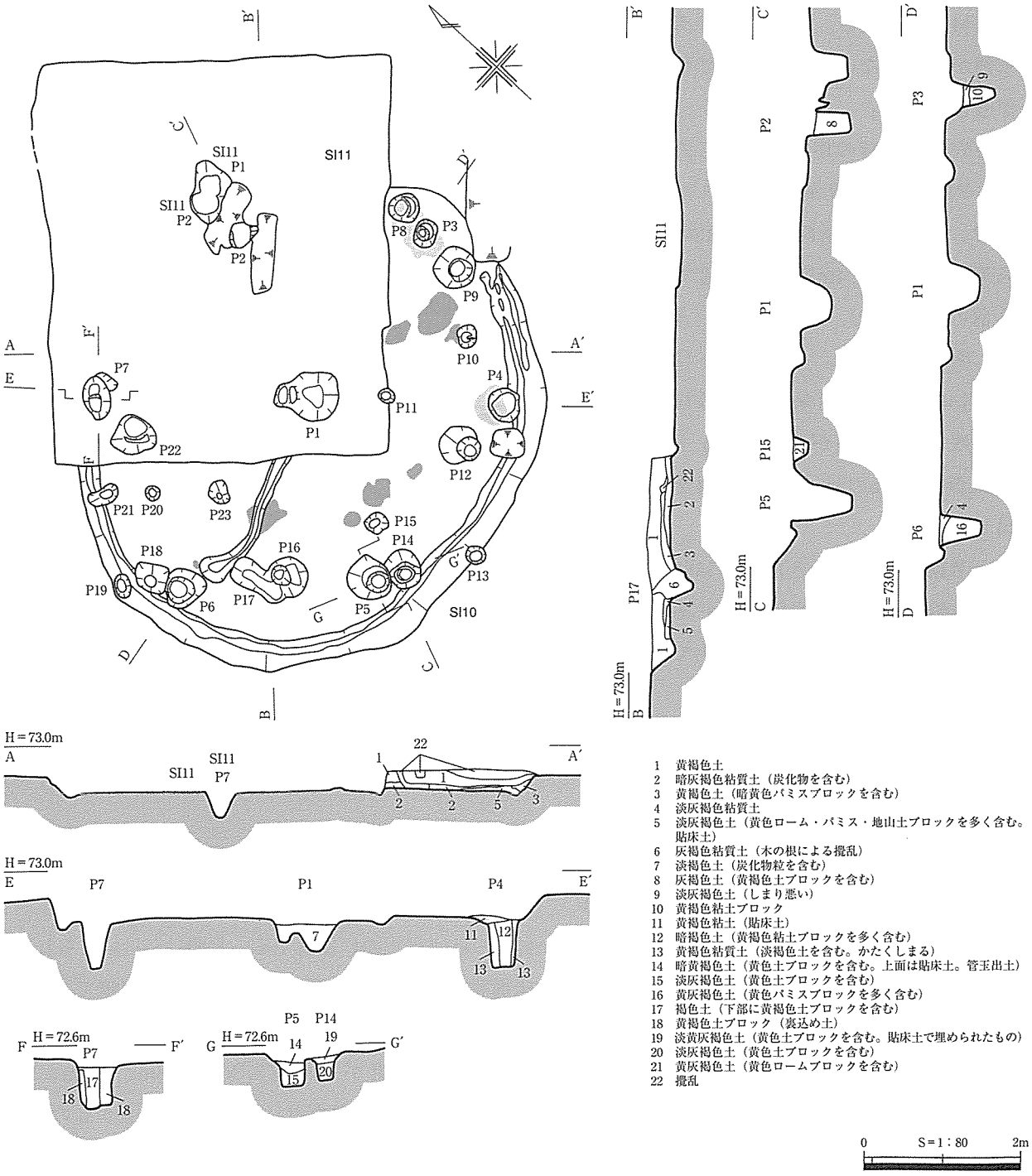
規模は、長軸6.0m、短軸５m前後、深さ37cm、床面積13.0㎡以上を測る。平面は、不明瞭であるが六角形を呈すと考えられる。壁際には、幅10～18cmの壁溝がほぼ全周するものと考えられる。主柱穴はSI11P2、P9、P12、P5、P18、P22で、主柱穴間はSI11P2-P9間から順に3.3m、2.3m、2.0m、2.9m、2.6m、2.7mを測る。主柱穴に近接するように同規模のピットがあり、建て替えに伴うものと考えられる。このうち、P4・P7で柱痕が見られ、復元される柱径は約19cmである。中央ピットは、SI11床面で検出された素掘りのP1である。P6付近まで延びる溝は、中央ピットから延びたものと考えられる。

床面には、壁際付近に貼床が施される。また、主柱穴で囲まれる範囲に焼土面が数箇所見られる。埋土は、３層で下層は水平堆積の状況が窺われる。

出土遺物には、図化できたものに

表８　笠見第３遺跡SI10ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
Ｐ１	71×63－40	中央ピット	Ｐ13	24×22－52	
Ｐ２	30×24－53	主柱穴	Ｐ14	50×41－71	主柱穴
Ｐ３	29×27－50	主柱穴	Ｐ15	26×24－18	
Ｐ４	60×45－60	主柱穴	Ｐ16	51×50－54	
Ｐ５	60×55－77	主柱穴	Ｐ17	80×42－39	
Ｐ６	50×46－57	主柱穴	Ｐ18	41×35－44	主柱穴
Ｐ７	55×36－60	主柱穴	Ｐ19	30×20－36	
Ｐ８	40×34－56		Ｐ20	18×18－11	
Ｐ９	52×50－59	主柱穴	Ｐ21	41×19－17	
Ｐ10	27×22－11		Ｐ22	53×50－67	主柱穴
Ｐ11	20×18－32		SI11P2	42×35－52	主柱穴
Ｐ12	50×50－67	主柱穴			



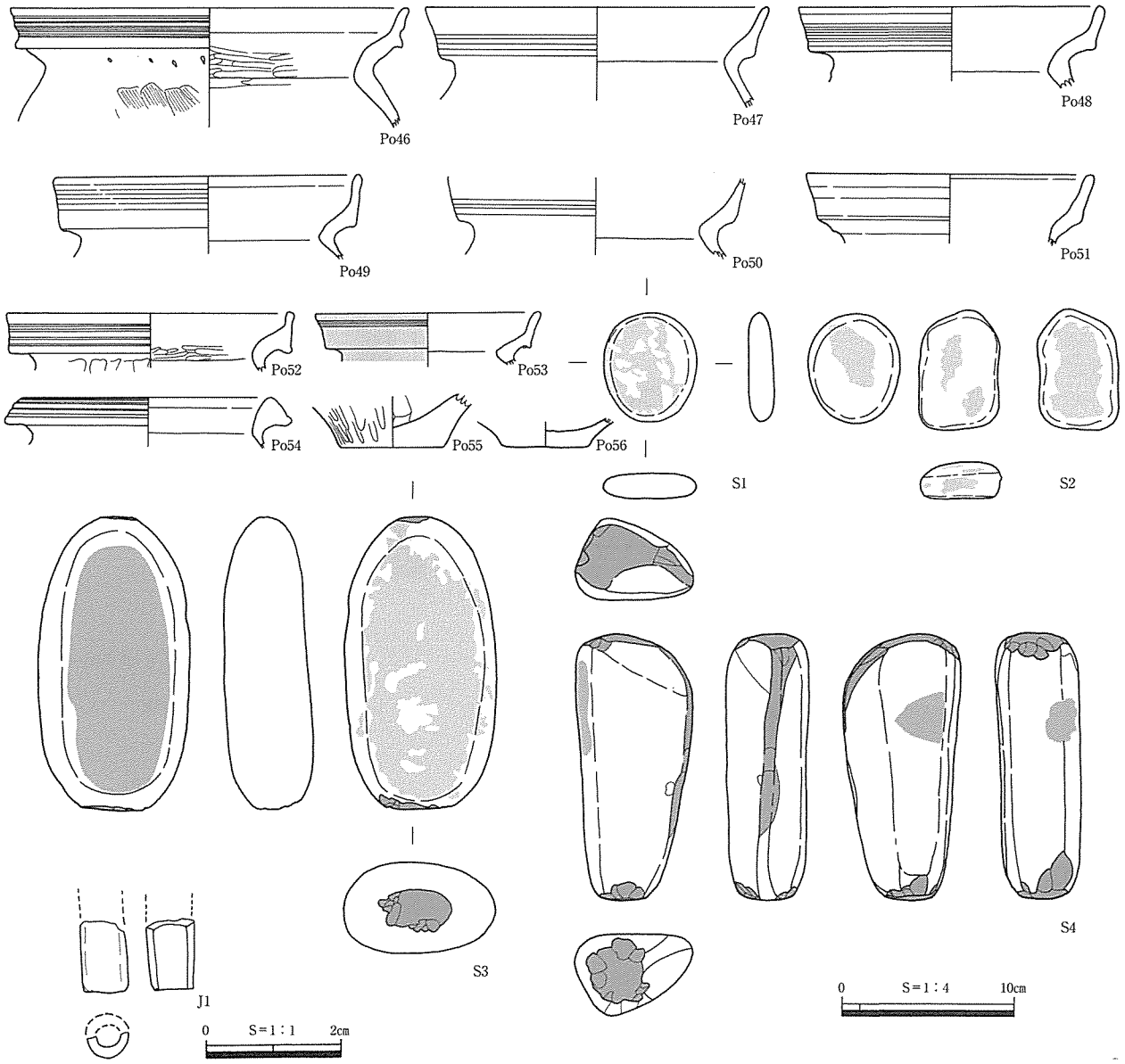
第83図　笠見第３遺跡SI10・11遺構図

弥生土器甕Po46～54、底部Po55・56、赤色塗彩石S1・２、敲石S3・４、ガラス管玉破片J1がある。J1は貼床土中から、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物、形態等の特徴から清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（家塚）

SI14（第85・86図、PL. 14・115・177・178）

調査区中央やや東側のK9グリッド、標高約72.8mの平坦面に立地する。西側約1.5mにSI12、東側約４mにSI23がある。SB6を切る。



第84図　笠見第３遺跡SI10出土遺物実測図

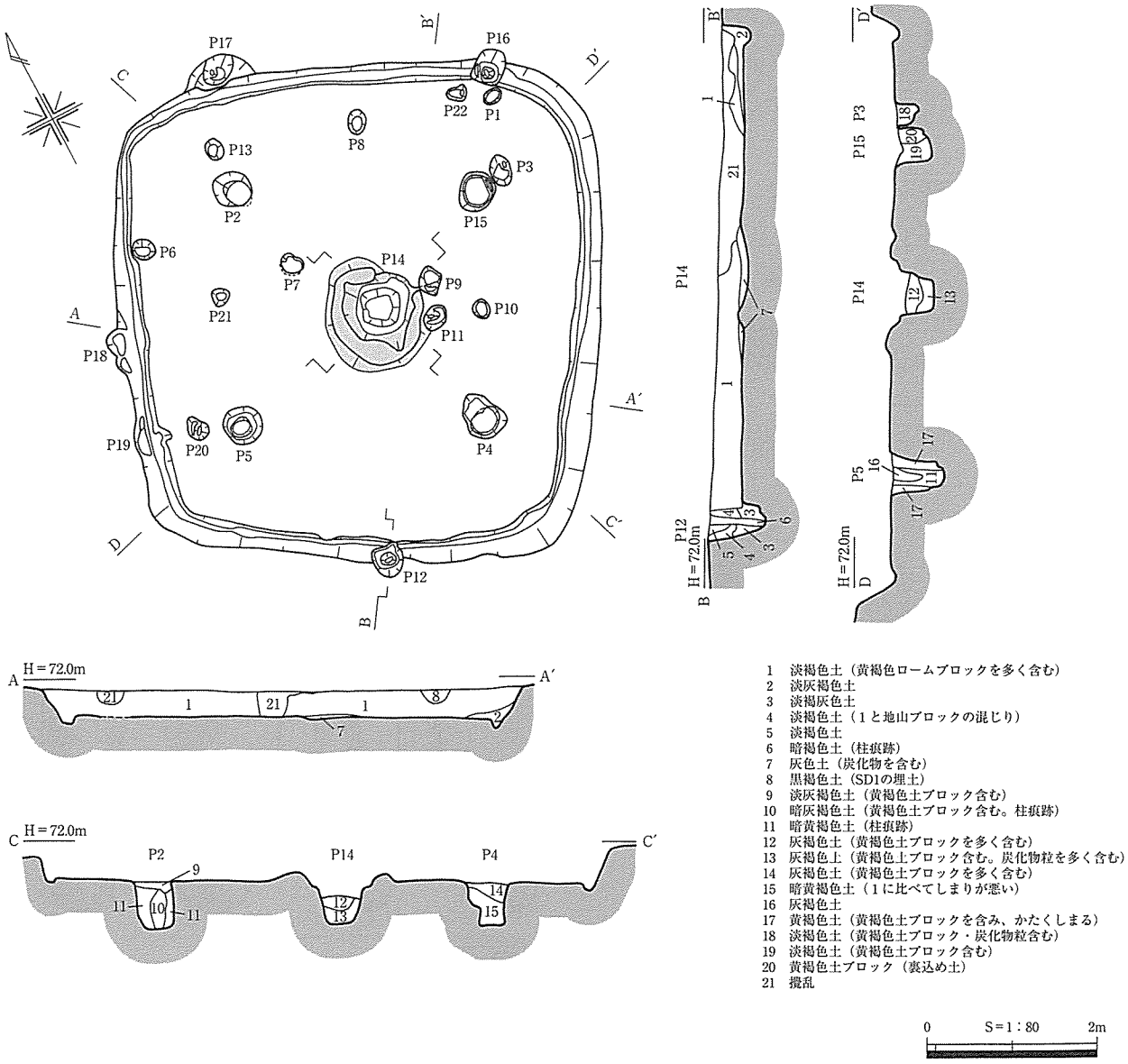
規模は長軸5.24m、短軸5.0m、深さ0.4m、床面積は25.1㎡を測り、平面は方形に近い隅丸方形を呈す。壁溝の幅は10～15cmで、壁際を一周する。焼土面は検出していない。

主柱穴はP2、P15、P4、P5の４基で、柱穴間距離は2.8mである。

中央ピットP14は平面円形、深さは51cmある。埋土の下層は炭化物粒を多く含んでいる。ピットの縁に幅35～40cm、高さ８cmの土手を持つ。地山土を盛って作られており、北東側が途切れている。

P2とP5の間で、埋土上面が地山土を用いて塞がれたピットを検出した。調査当初は５本柱の柱穴の一つと考えていたが、その後中央ピット周縁にめぐる土手の下からピットを検出したことにより、これらが掘立柱建物跡SB6を構成する柱穴であることが判明した。

埋土は主に、壁溝を埋める壁際の下層と、ほぼ全域を埋める上層の２層である。このうち上層は遺物の含有量が少ない代わりに地山のブロックを多く含んでおり、密度にばらつきがないことから、人為行為によって短期間に埋没したと考えられる。炭化材や焼土粒が出土していないことから、焼却処分ではなく、柱を切って土屋根を落とすといった解体手段が考えられる。



第85図　笠見第３遺跡SI14遺構図

出土遺物には、図化できたものに甕Po57～61・64～68、壺Po63、鼓形器台Po62、砥石S5、赤色塗彩石S6などがあり、いずれも埋土中からの出土である。

出土遺物、形態的特徴から清水Ⅵ－２様式から天神川Ⅰ期、弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡と考えられる。（家塚）

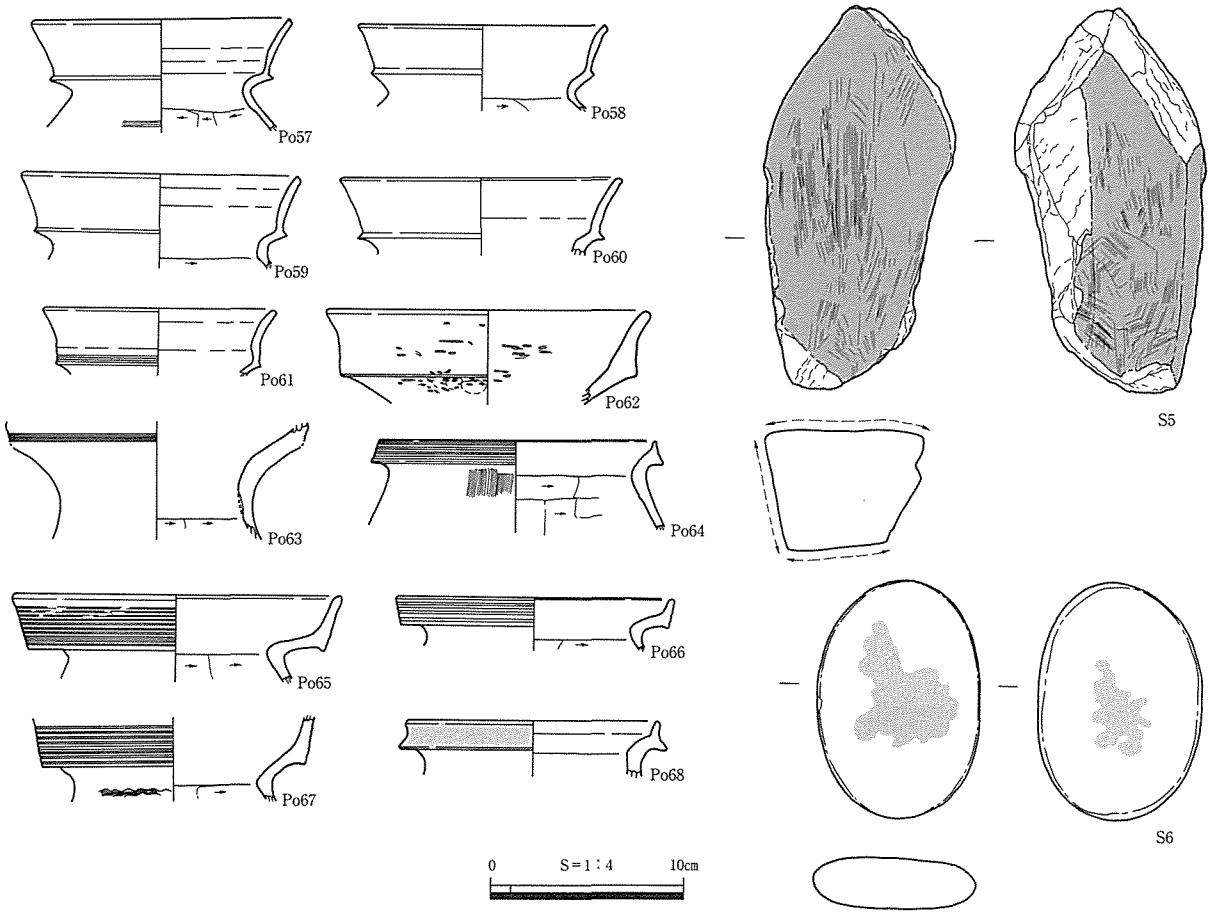
表９　笠見第３遺跡SI14ピット一覧表　　△は残存値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	21×20－５		P11	31×22－20	
P２	47×43－55	主柱穴	P12	37×37－61	
P３	36×26－25		P13	25×20－６	
P４	55×45－62	主柱穴	P14	140×115－51	中央ピット
P５	45×45－62	主柱穴	P15	48×41－43	主柱穴
P６	30×25－10		P16	44×35－46	
P７	27×24－12		P17	40×32－42	
P８	26×21－16		P18	22×12△－29	
P９	32×23－12		P19	40×20△－29	
P10	22×20－25		P20	27×23－12	

SI20（第87・88図、PL. 14・115）

L9グリッドの平坦面に立地する。SK3を切り、SI19とSI21に切られる。

平面は径約3.7m、最大壁高21cm、床面積推定13.4㎡を測る、胴張りの隅丸方形である。主柱穴は



第86図　笠見第３遺跡SI14出土遺物実測図

P2～P5の４基で、壁際に配置されている。主柱穴間距離は2.5～３mである。P2～P5間のP6は補助柱穴であろう。P3はSK3の埋土と底面を掘りぬいており、底に円礫を２個並べて敷いていた。他の３基からは礫を確認していない。

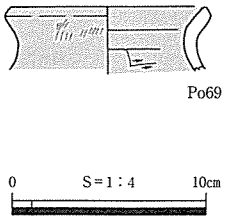
中央ピットP1は建物の中心に位置する。平面形は隅丸方形で、椀状に掘り込まれている。SI21によって床面が約５cm掘り下げられているので、土手の有無は不明である。焼土面は中央ピットの北西側、P4～P5間で検出した。

出土遺物は、床面直上はおろか埋土中の密度も希薄で、さらにSI21に切られる影響もあって、ほとんど出土していない。埋土中から赤色顔料が塗られた土器片が１点出土している。P2-P6間の壁際で、円礫４個が床面上で出土した。そのうちの３個は寄せ集められていた。図化できたものに、埋土中から出土した弥生土器小型甕Po69がある。SK3からは清水Ｖ－１様式の遺物が出土しており、やや新しいものと考えられる。

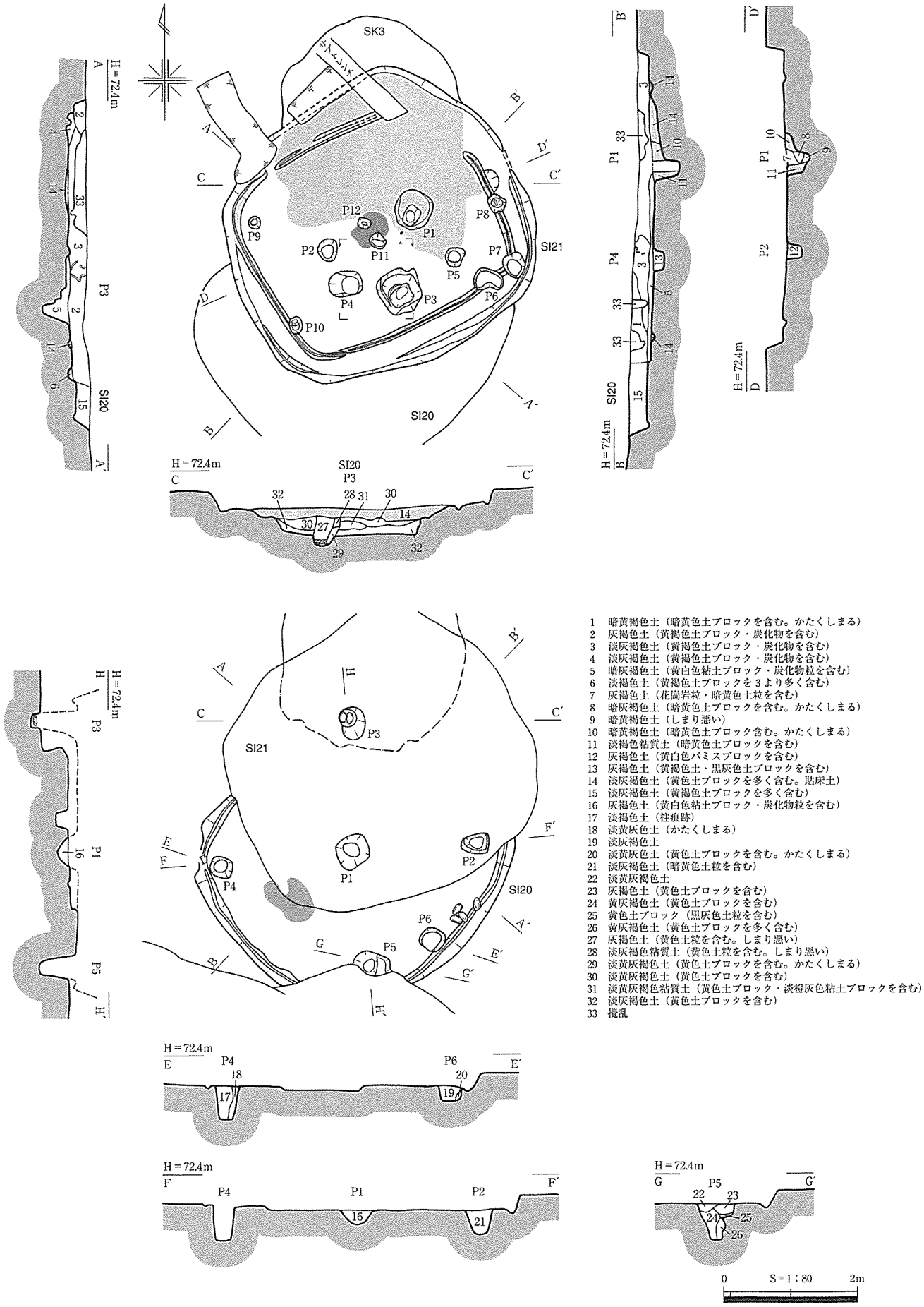
出土遺物、切り合い関係、形態的特徴から、弥生時代後期前半ごろの竪穴住居跡と考えられる。（家塚）

表10　笠見第３遺跡SI20ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
Ｐ１	50×47－31	中央ピット
Ｐ２	43×28－46	主柱穴
Ｐ３	50×40－70	主柱穴
Ｐ４	35×30－52	主柱穴
Ｐ５	55×35－58	主柱穴
Ｐ６	37×34－24	補助柱穴



第87図　笠見第３遺跡SI20出土遺物実測図



第88図　笠見第３遺跡SI20・21遺構図

SI23（第89・90図、PL. 15・115）

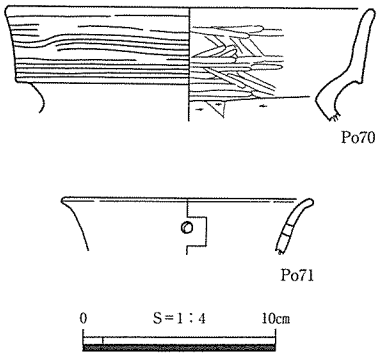
Ｃ区L8グリッドに位置する。南西にSI18、南側にSI22が位置する。

平面は方形を呈し、長軸3.8m、短軸3.6m、最大壁高27cmを測る。遺構埋土を面的に掘り下げると、地山土と土器片を包含する層が現れたが、この層は貼床土で、新旧２面の床面が存在することが判明した。以下、新床面、旧床面の順に記述する。

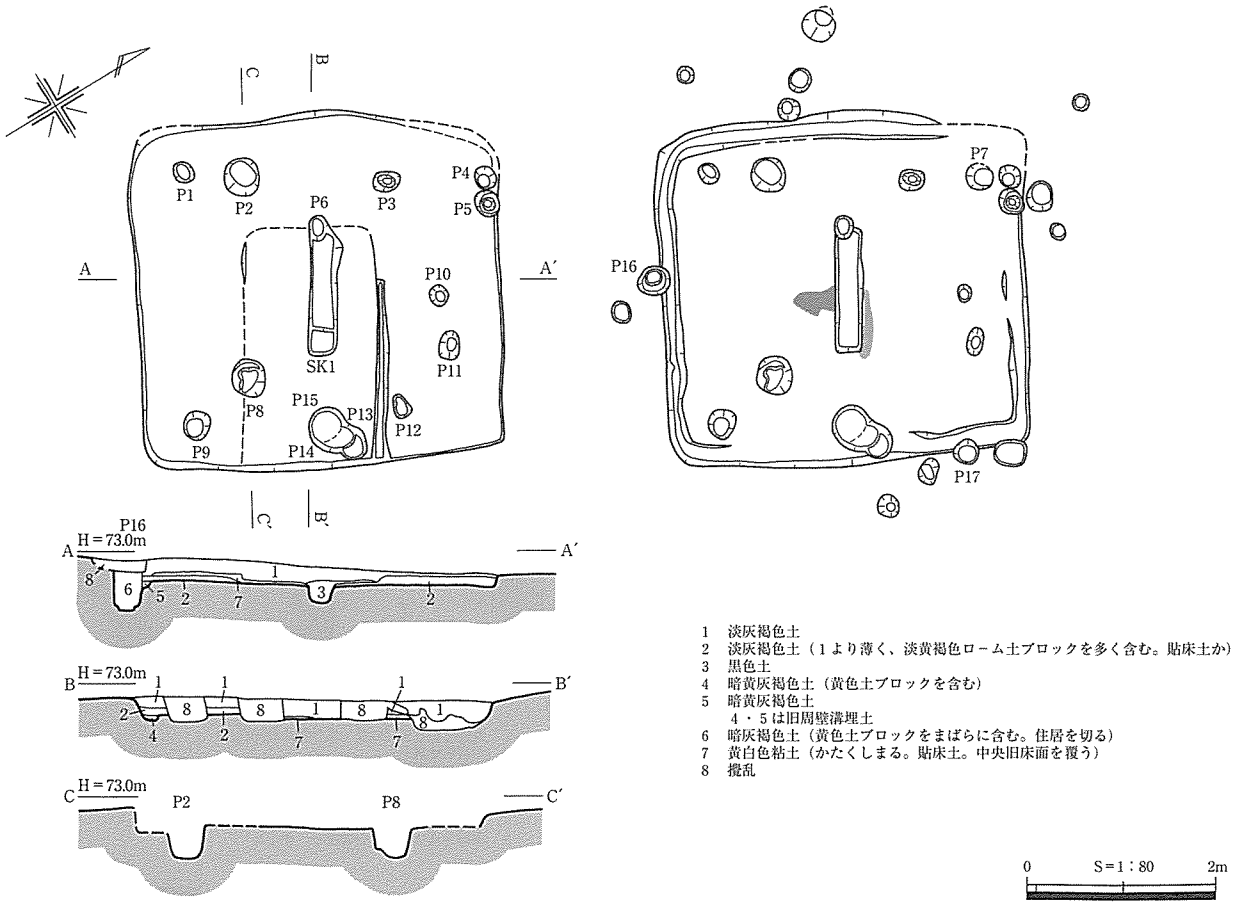
新床面は旧床面の全面に貼床を施している。壁周りはさらに土を盛り上げて幅1.2m、高さ６cmの平面コの字形のベッド状遺構を作り出し、その内周に沿って壁溝状の溝をめぐらせていたと復元できる。床面積は10.9m²である。

また低床部の建物中心には（81×29－24）cmを測る長方形のSK1が主軸に沿って掘り込まれている。この北西端にピットP6が掘られ、南東端は地山土を使って高さ５cmのステップが作り出されている。このSK1の南西側の床面には草藁の燃えカスのような炭化物が散在していた。SK1内面は変色していないが、埋土は炭化物粒を多く含むためか黒色をしていた。

旧床面の規模は長軸3.4m、短軸3.2mで、壁溝をめぐらせる。主柱穴は新床面のものと共通と考えられる。SK1の北東側の縁辺で（70×15）cmの平面葉巻形の焼土面を検出した。焼土面を覆う貼床土が変色していないことから、旧床面の焼土面が



第89図　笠見第３遺跡SI23出土遺物実測図



第90図　笠見第３遺跡SI23遺構図

表11　笠見第３遺跡SI23ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P 1	23×20－33		P 10	22×17－23	
P 2	40×38－40	主柱穴	P 11	31×22－30	
P 3	27×22－40	主柱穴	P 12	25×18－ 8	主柱穴
P 4	25×21－42		P 13	28×23－24	
P 5	26×24－48		P 14	45×33－30	
P 6	25×17－37		P 15	45×33－32	
P 7	38×27－ 8		P 16	35×31－45	
P 8	38×36－40	主柱穴	P 17	27×25－37	
P 9	31×27－23				

SK1によって切られたと考えられる。

旧床面上で検出されたピットは、新床面掘り下げ後に検出したため、いずれの床面上から掘り込まれたものか判断できないが、位置的には、P2、P3、P8、P12が主柱穴と考えられる。

出土遺物は、図化したものが弥生土器甕Po70、壺Po71で、いずれも、埋土中から出土している。

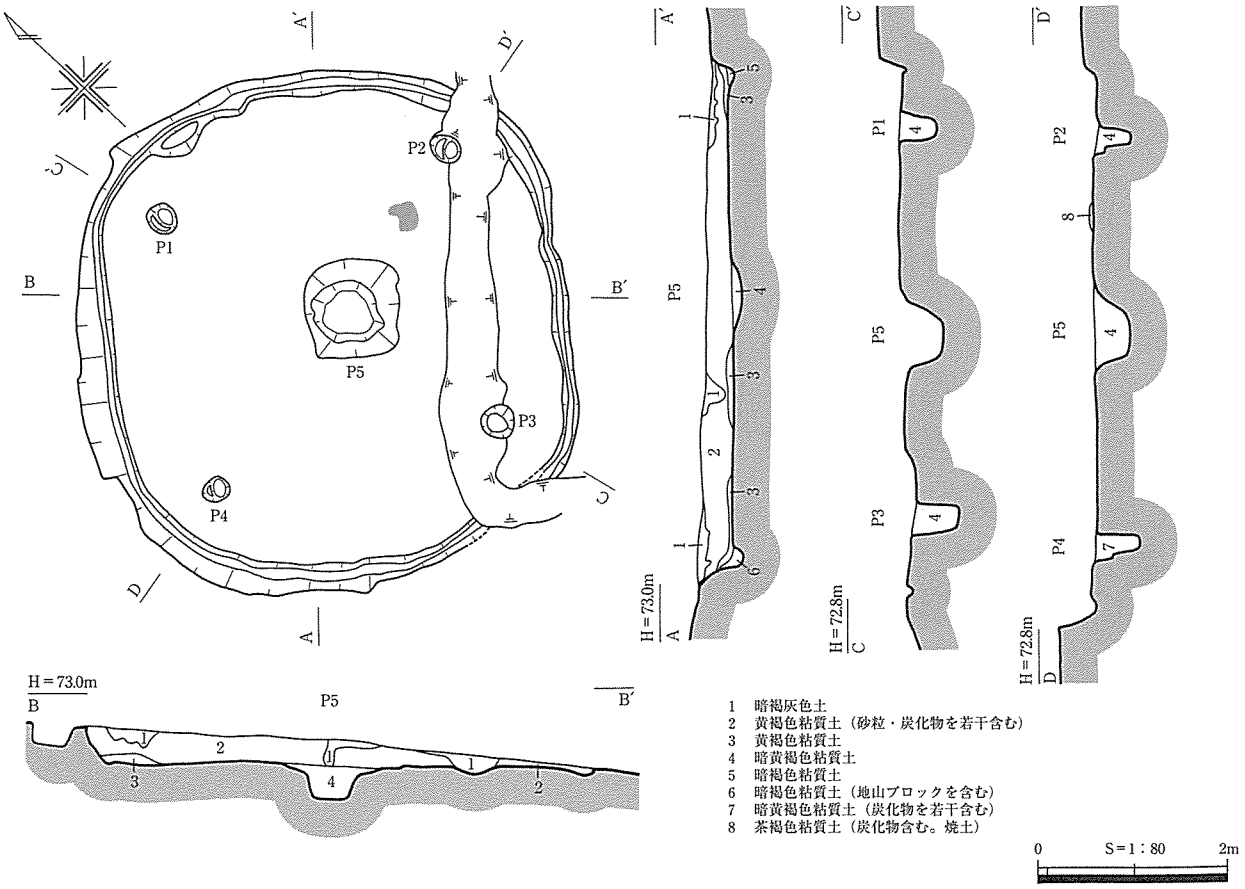
出土遺物から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろの時期のものと考えられ、旧床面も新床面も、中央で火の使用が想定されるが、新床面は他の竪穴住居とは異なるベッド状遺構と長方形の土坑を新たに作り出していることから、通常とは異なる用途をもつ建物であると考えられる。（家塚）

SI24（第91・92図、PL. 72）

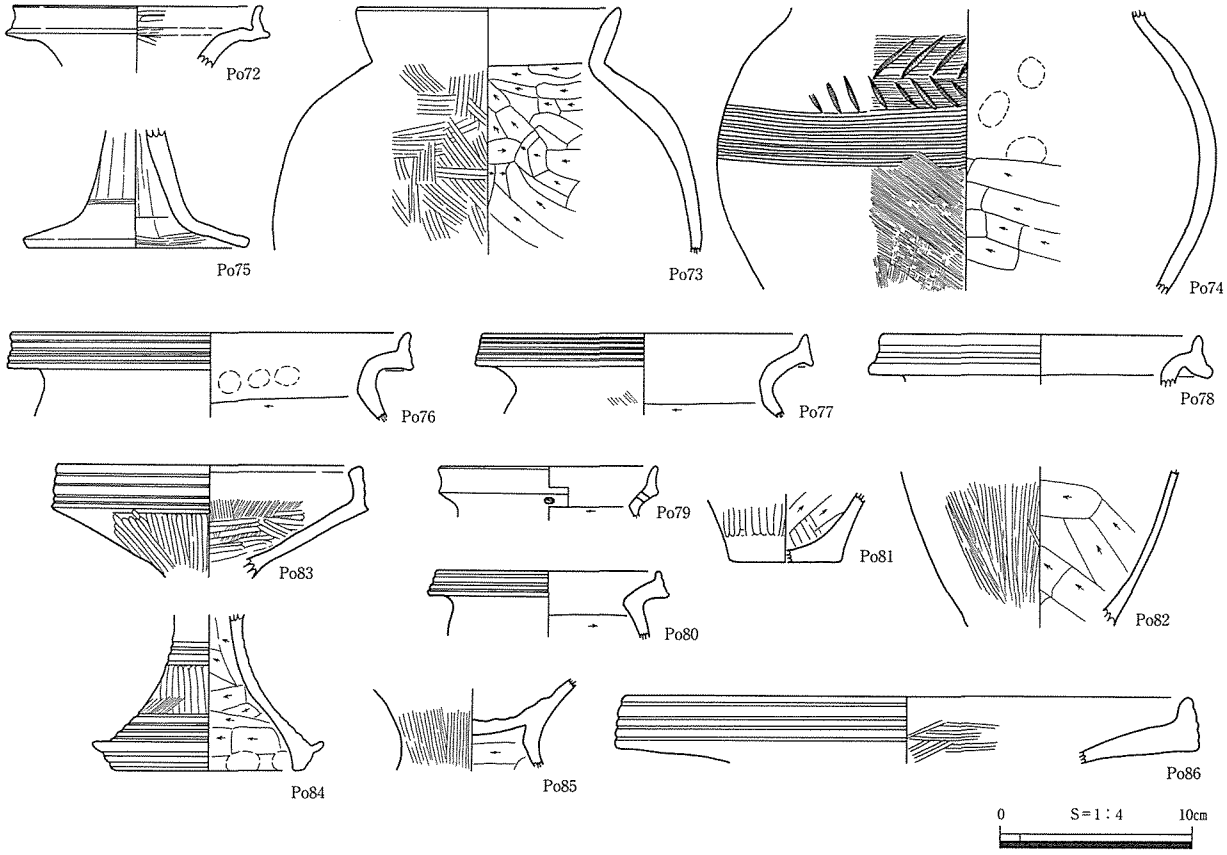
M7・８グリッドに位置し、南東部の谷側へ緩やかに傾斜する標高71.1～71.7mの緩斜面上に立地する。梨の肥料穴等により広範囲に攪乱され遺存状態はよくない。

平面は隅丸方形を呈し、長軸5.48m、短軸5.22m、床面積は約20.1㎡を測る。壁溝は、全周にわたって巡らされている。幅は８～20cm、深さは３～８cmを測る。壁高は北西部で最大51cmを測る。

ピットは全部で５基検出された。主柱穴はP1～P4で、主柱間距離はP1－２間からそれぞれ3.1m、



第91図　笠見第３遺跡SI24遺構図



第92図　笠見第３遺跡SI24出土遺物実測図

2.95m、3m、2.9mを測る。中央ピットはP5（121×116－41cm）である。P5埋土下層部からは、甕口縁部破片が出土した。

P2とP5の間の床面には不整形な焼土面がみられる。

埋土は５層に分層され、砂礫・炭化物を少量含む黄褐色粘質土が主体である。しかし、下層部では砂礫は含まない。

出土遺物は、図化できたものに土師器壺Po72、甕Po73・74、高杯Po75、弥生土器壺Po76、甕Po77～80、底部Po81・82、高杯Po83～85、器台Po86などがある。大半は埋土中からの出土であり、土師器、弥生土器が混在している。中央ピット内からはPo77・81が出土しており、これを時期の判断とした。

出土遺物、形態等から清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（小谷）

表12　笠見第３遺跡SI24ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
Ｐ１	32×32－38	主柱穴
Ｐ２	33×31－41	主柱穴
Ｐ３	37×33－52	主柱穴
Ｐ４	29×21－49	主柱穴
Ｐ５	121×116－41	中央ピット

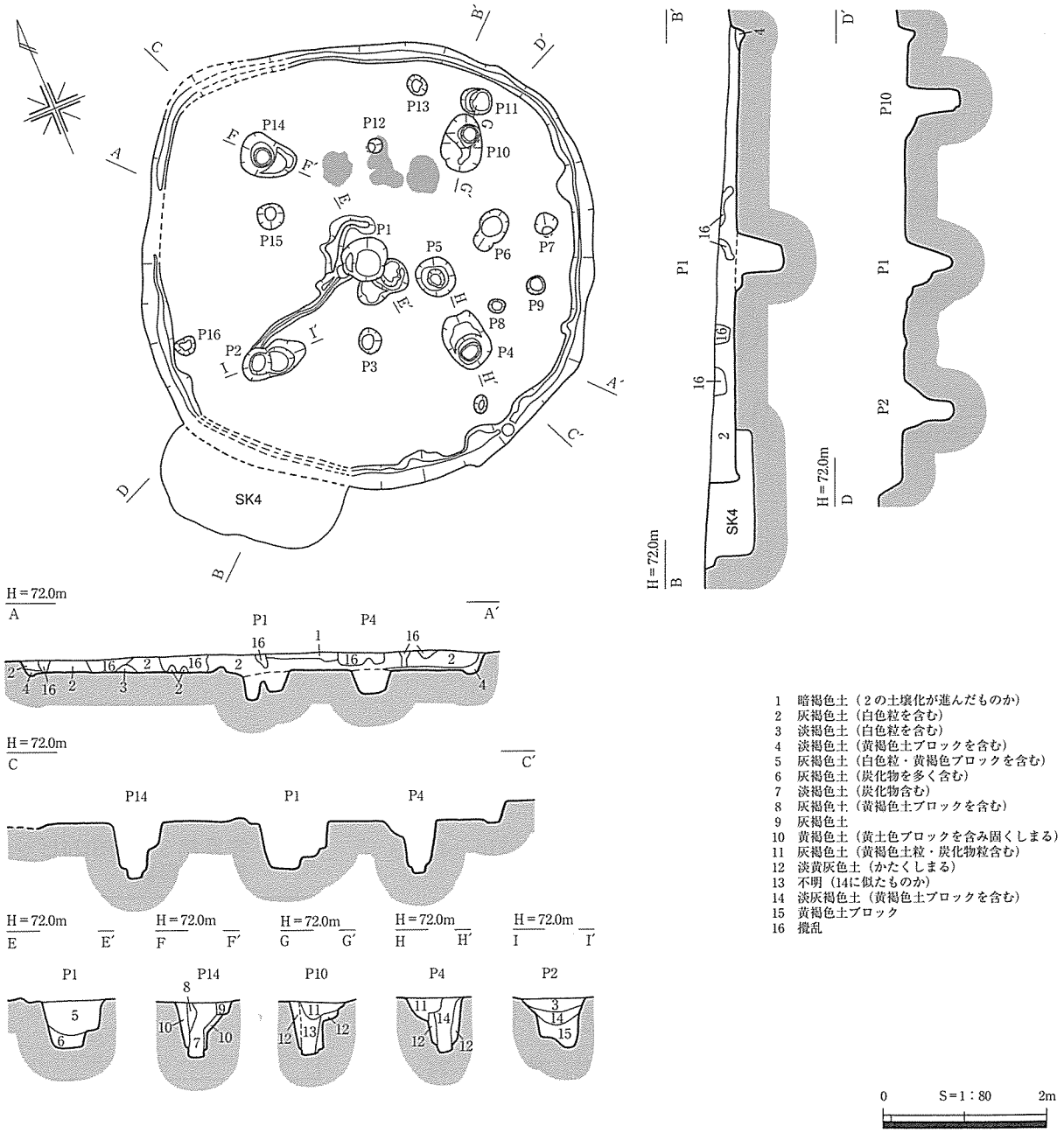
SI26（第93・94図、PL. 15・115）

調査区中央やや東側、J8・９グリッドの標高71.3m付近のほぼ平坦面に立地する。南西側でSK4、北西側でSK13を切る。

平面は胴張りの隅丸方形で、長径5.5m、短径5.3mを測る。壁高は最大30cmである。壁溝は幅10～15cmで、壁際を一周する。

主柱穴はP2、P4、P10、P14で、主柱穴間距離はP14-P10間から順に2.5m、2.6m、2.6m、2.4mである。P4、P10、P14で柱痕を検出し、推定される柱径は20cm前後である。

中央ピットP1は床面中央に位置し、平面は長径80cm、短径50cmのだるま形、深さは55cmで、下層埋



第93図　笠見第３遺跡SI26遺構図

土は炭化物粒を多く含んでいた。中央ピット北西側に、逆Ｌ字状に、幅20cm、高さ５cmに地山を盛った土手がある。また、中央ピットから西北西に延び、主柱穴P2につながる幅10cm、深さ３cmの溝を検出した。

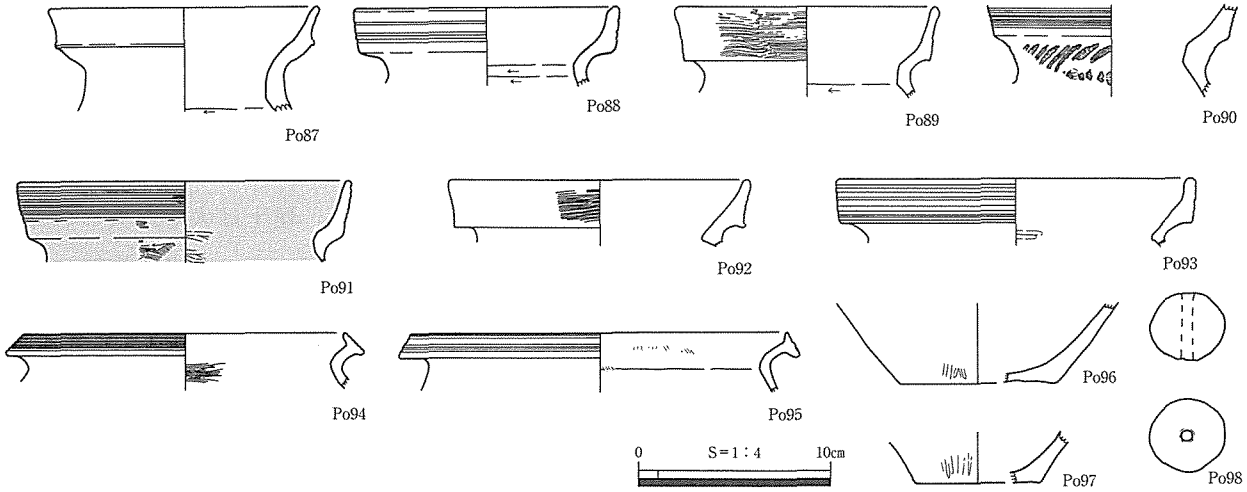
中央ピットの北東側で、径30～40cmの範囲の焼土面を3箇所検出した。

表13　笠見第３遺跡SI26ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
Ｐ１	80×50－55	中央ピット	Ｐ10	69×49－71	主柱穴(柱痕あり)
Ｐ２	78×38－61	主柱穴(２基重複)	Ｐ11	38×31－40	
Ｐ３	32×28－37		Ｐ12	17×17－25	
Ｐ４	68×51－65	主柱穴(柱痕あり)	Ｐ13	27×23－25	
Ｐ５	49×46－58		Ｐ14	65×48－68	主柱穴(柱痕あり)
Ｐ６	56×34－19		Ｐ15	33×32－41	
Ｐ７	29×27－34		Ｐ16	25×20－12	
Ｐ８	18×14－23		Ｐ17	20×16－26	
Ｐ９	22×21－９				

埋土は、攪乱土を除くとほぼ灰褐色土が単層で入り込む。

出土遺物は、図化できたものに弥生土器壺Po87、甕Po88～95、底部Po96・97、土玉Po98がある。



第94図　笠見第３遺跡SI26出土遺物実測図

Po91はP6内から出土している。その他は、埋土中からの出土である。

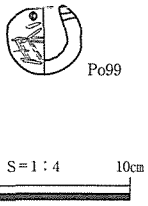
出土遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（家塚）

SI28（第95・96図、PL. 15・115）

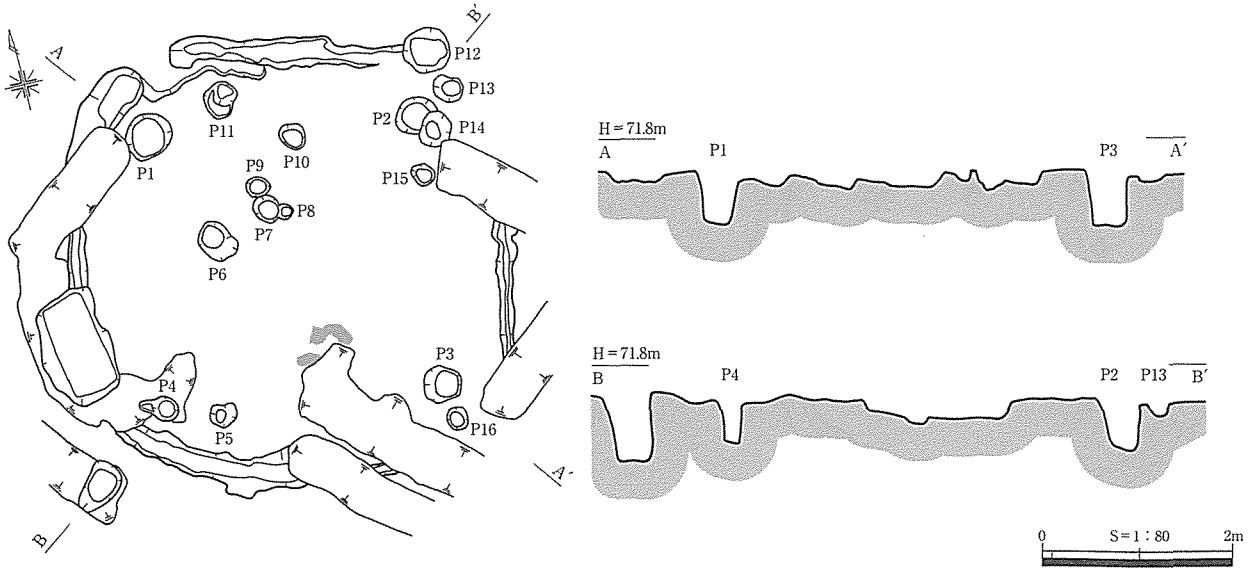
調査区東側、K7・８グリッドの標高71.5m付近の緩斜面に立地する。検出時すでに壁面は削平され、

表14　笠見第３遺跡SI28ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
Ｐ１	50×46－59	主柱穴	Ｐ９	25×21－37	
Ｐ２	45×32－49	主柱穴	Ｐ10	31×27－18	
Ｐ３	40×38－58	主柱穴	Ｐ11	40×34－24	
Ｐ４	40×26－46	主柱穴	Ｐ12	50×48－27	
Ｐ５	28×25－25		Ｐ13	31×25－32	
Ｐ６	44×34－53	中央ピット	Ｐ14	38×31－35	
Ｐ７	30×28－24		Ｐ15	26×22－10	
Ｐ８	16×16－13		Ｐ16	24×22－44	



第95図　笠見第３遺跡SI28出土遺物実測図



第96図　笠見第３遺跡SI28遺構図

床面の大部分が露出する状況であった。

規模及び平面形は長軸4.3m、短軸4.2m、床面積13.9㎡を測る隅丸方形を呈すとみられる。壁溝は幅10～43㎝、深さ５～13㎝で攪乱坑により途切れてはいるが、本来全周するものとみられる。

主柱穴は四隅で検出したP1～P4である。柱間はP1～P2から以下順に３m、2.9m、３m、2.9mである。また中央ピットにあたる場所にはそれに該当するものは見当たらない。埋土は大半が失われており、最も厚い部分でわずか５㎝であった。その他、ピットを多数検出したが、すべて当建物跡に伴うものか否かは不明である。

出土遺物が少なく、わずかに手捏ね土器Po99を図化した。この土器は、P5内で出土している。

詳細な時期決定は困難であるが、形態的特徴等から弥生時代後期ごろの竪穴住居跡と考えられる。（小山）

SI30（第97～99図、PL. 16・115・174）

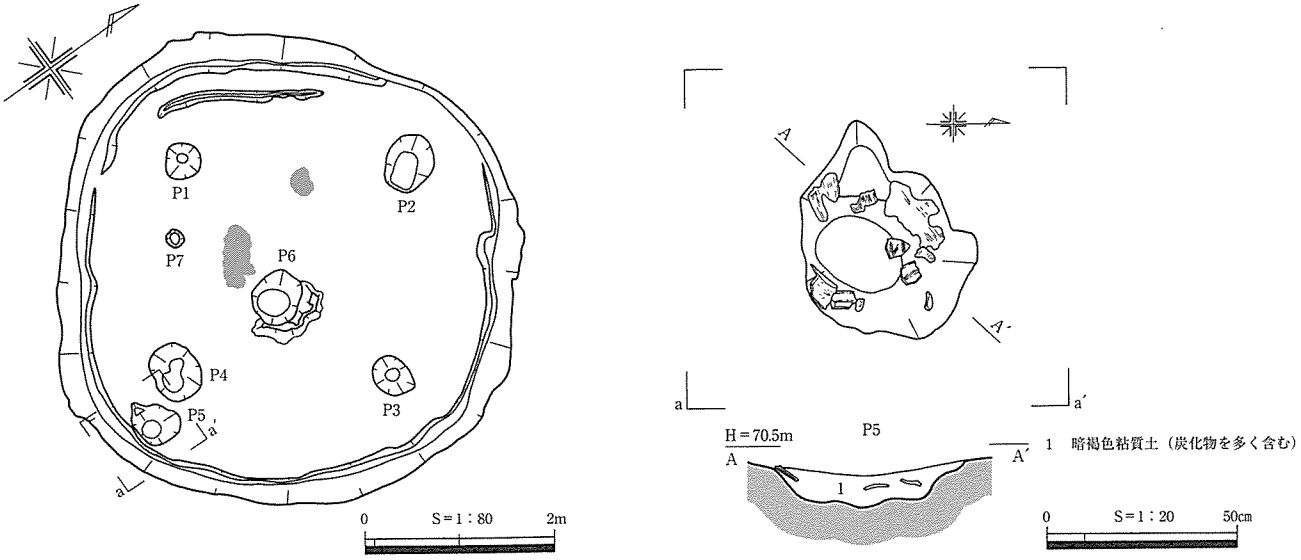
調査区中央東側、J7グリッドの標高71m付近の緩斜面に位置する竪穴建物跡である。南隅はSI29と重複関係にあるが、SI29が当建物跡埋土を掘り込んでいる。

平面は隅丸方形で、長辺が５m、短辺が4.8m、床面積15.4㎡の規模である。壁高は最も残りがよい西隅付近で60㎝を測る。全般的に遺構の残りは良好である。

埋土は大別２層に分かれ、上層は地山のブロックが混入し、焼土や炭化物を含まない暗黄褐色の均質な埋土である。下層は炭や焼土の入り方でいくつかに細分可能であるが、被熱の痕跡が明瞭であることから火災を受けた後、短時間で埋没した層であるとみられる。上層は被熱の痕跡が皆無で均質な層であることから、自然堆積というより、むしろ人為的に埋め戻した土である可能性が高い。

埋土を約40㎝掘り下げた、床面から約20㎝上で焼土面を検出した。焼土の範囲は住居の中央部に集中し、壁際の埋土は床面直上の炭化材を検出するまで、焼けた痕跡は見出せなかった。焼土を除去すると下から屋根材と見られる炭化材を検出したが、焼土層の下は比較的炭化材の出土量が少ない。

炭化材の大半は焼土面よりも低いレベルで出土した。中でも床面付近の出土が最も多い。床面付近出土の炭化材のほとんどは住居の外から内へ倒れこんだ状態で出土しており、平面的にみると住居の

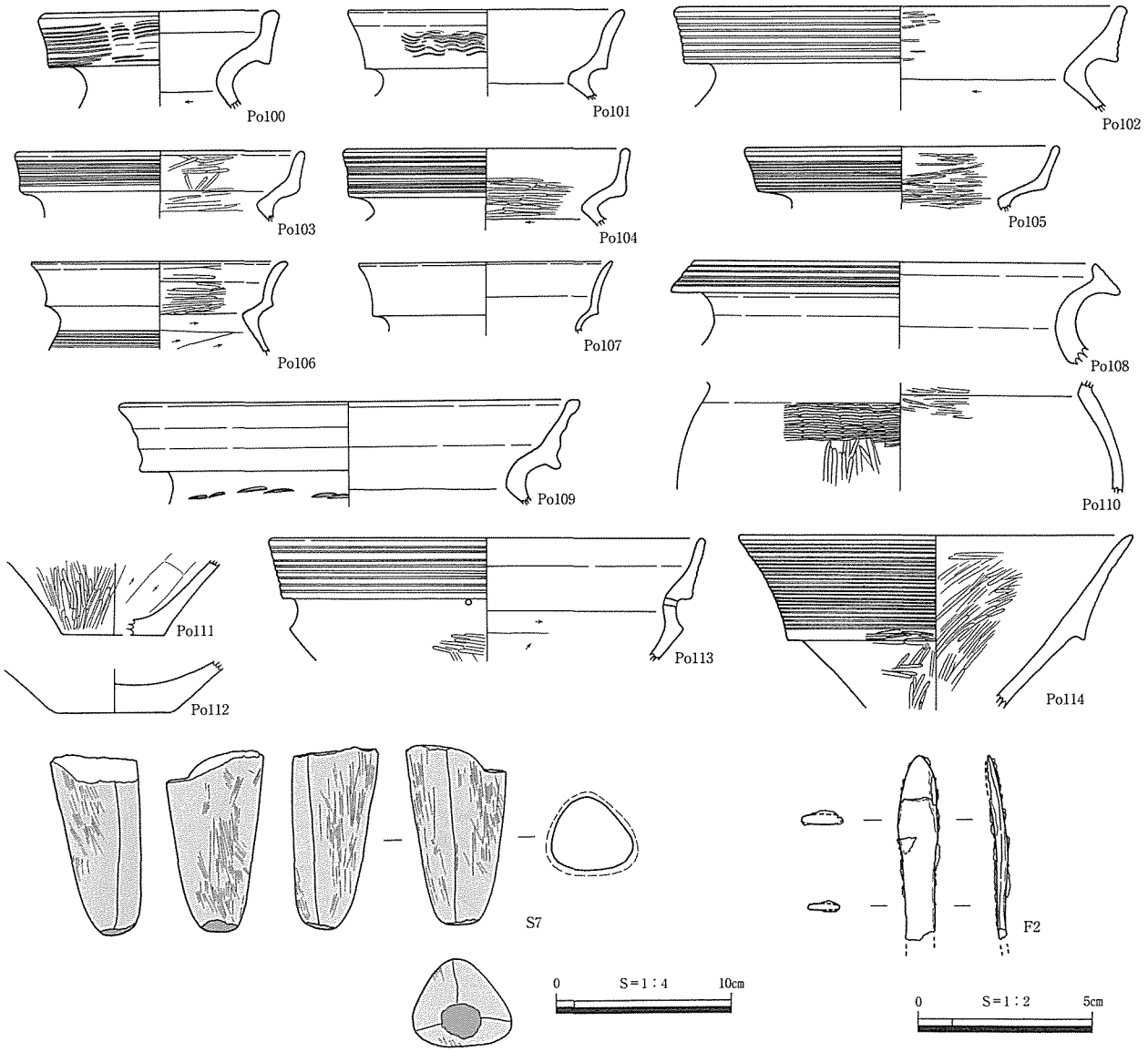


第97図　笠見第３遺跡SI30遺構図・P5炭化材出土状況図

1　暗褐色土
2　暗黄褐色土（１～３㎝大地山ブロック含む）
3　暗褐色土（炭化物・焼土・砂粒含む）
4　暗褐色土（３層に似るが砂粒少ない）
5　暗黄褐色土
6　暗褐色土（炭化物多くしまり弱）
7　暗黄褐色土（２層に似るがしまりやや弱）
8　暗褐色土（炭化物多く含む）
9　暗褐色土（８層に似る）
10　赤褐色焼土塊
11　暗褐粘質土（炭化物多く含みしまり弱）
12　暗褐粘質土（炭化物・焼土を含む）
13　暗黄褐色土（１～２㎝大地山ブロック含む）
14　暗褐土（炭化物・焼土塊を多く含みしまりやや弱）
15　暗褐粘質土（炭化物を多く含み14層より暗い色調）
16　暗褐色土（炭化物・焼土を多く含み14層より暗い色調）
17　暗褐色土（１㎝大の焼土塊を多く含む）
18　暗赤褐色土（被熱により赤い）
19　暗褐色土（炭化物・焼土塊を多く含む）
20　黒褐色土（炭化物・焼土を多く含みしまりやや弱）
21　暗褐色土（炭・焼土・地山ブロックを多く含む）
22　暗黄褐色土
23　暗褐色土
24　黒褐色土（炭・焼土を含みしまりやや弱）
25　暗褐色土
26　暗黄褐色土（炭化物多く含む）
27　暗茶褐色土（地山ブロック多く含む）
28　暗黄褐色土
29　暗褐色土（炭・焼土を多く含む）
30　黄褐色土（地山ブロック多く含む）
31　暗褐色土（炭・焼土を多く含む）
32　暗黄褐色土

0　S＝1：40　1m

第98図　笠見第３遺跡SI30炭化材出土状況図



第99図　笠見第３遺跡SI30出土遺物実測図

表15　笠見第３遺跡SI30ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
Ｐ１	40×40－46	主柱穴	Ｐ５	56×44－13	
Ｐ２	64×50－46	主柱穴	Ｐ６	60×50－60	中央ピット
Ｐ３	48×40－39	主柱穴	Ｐ７	20×18－31	
Ｐ４	61×48－56	主柱穴			

中央部を中心にして放射状に検出された。また炭化材の繊維方向もこれに一致することから、垂木とみられる。垂木に使用した部材は直径５cmの丸太材のほか直径10cm前後の丸太を半裁したもの、幅13cm前後、厚さ５mm～１cmの板状のものが確認できた。建物の東南部で、幅13～16cm、厚さ５mm～１cmの板材が10cm間隔で床面に倒れこんだ状態で出土した。その下には直径3.5cmの丸太材が直交して組み合っていた。これは上の材が板状垂木で、下が身舎桁である可能性のほか、建物の壁面を保護する堰板である可能性が考えられる。この他P4の直上では柱材と思われる直径10cmの丸太状の炭化材が立ったまま出土した。

その他少数ではあるが、焼土面とほぼ同じレベルで出土した炭化材もある。P1とP2を結ぶ線にほぼ平行して出土した丸太状の炭化材もその一つである。直径が10～15cm、長さ174cmと大型の炭化材

であるにもかかわらず床面より20cmも高い位置で出土した炭化材はこれのみである。両端はほぼ水平であるが仔細にみると北東の端がやや低く、焼土層の下に埋没していた。炭化したのは表面に近い部分のみであったようで、中は腐朽し中空となっていた。柱穴との位置関係からみてこれは梁材と考えられる。

高い位置で出土した炭化材はいずれも小破片で、直下に焼土層を伴うことからみて、火災により屋根材が崩落していく過程で、焼土とともに反転して落ち込んだものと推定される。

当住居跡で部材の特定が可能なものとして、垂木、梁、柱板状垂木か堰板の可能性があるものが挙げられる。垂木には丸太状、丸太を半裁したもの、板状のものなどが確認された。茅状の炭化材は確認できなかった。炭化材の上で検出した焼土は火災時に上屋構造の上部を覆っていた土であると考えられるので、土屋根に使用した土であったと考えられる。

ピットは５基検出した。このうち四隅に位置する４基が主柱穴である。柱間は2.35mの等間である。このうちP1～P3で柱痕跡が認められ、推定される柱の直径はP1から順に13cm、20cm、13cmである。またP4では前述したように直径10cmの柱材そのものが炭化して出土した。

P5は中央ピットで、埋土下層は炭、焼土を含む黒褐色土でしまりが弱い。上層は建物埋土と同様の土である。中央ピットの周囲には東側半分のみ地山削り出しによる高まりがあり、床面との段差は最大4.5cmである。またピットの検出面付近で台石が半分落ち込み、その上に炭化材が重なった状態で出土したが、台石自体には被熱の痕跡はみられない。この他、建物南隅にて浅い土坑が検出され、炭化物や甕の破片など若干の土器片が出土した。床面には２箇所の焼土面が認められ、被熱による硬化が顕著であった。また壁際には北隅を除き周溝がめぐる。溝は幅４～23cm、深さ1.2～7.6cm、北西側では一部二重となる。埋土中の出土遺物は少ないが、鉈や土器の細片が若干出土した。鉈は床面から10cm上の焼土層の上面で、炭化材と接し、刃先を北に向け、水平な状態で出土した。床面直上からは土器の細片が若干出土したのみである。

出土遺物には、弥生土器甕Po100～110、底部Po111・112、高杯Po113、鼓形器台Po114、敲石S7、鉈F2がある。すべて埋土中の出土で新旧のものが混在しているが、下層で弥生時代終末期のPo106・107、F2が出土している。

出土遺物等から、清水Ⅵ－２様式、弥生時代終末期のものとみられる。また、炭化材の樹種同定を行ったところ、№6298がクヌギ、№6321・6740がクスノキの他は、８点がクリ又はスダジイと判定された。^{14}Ｃ年代測定では、約1900～2230B.P.とやや幅がある結果であった。（小山）

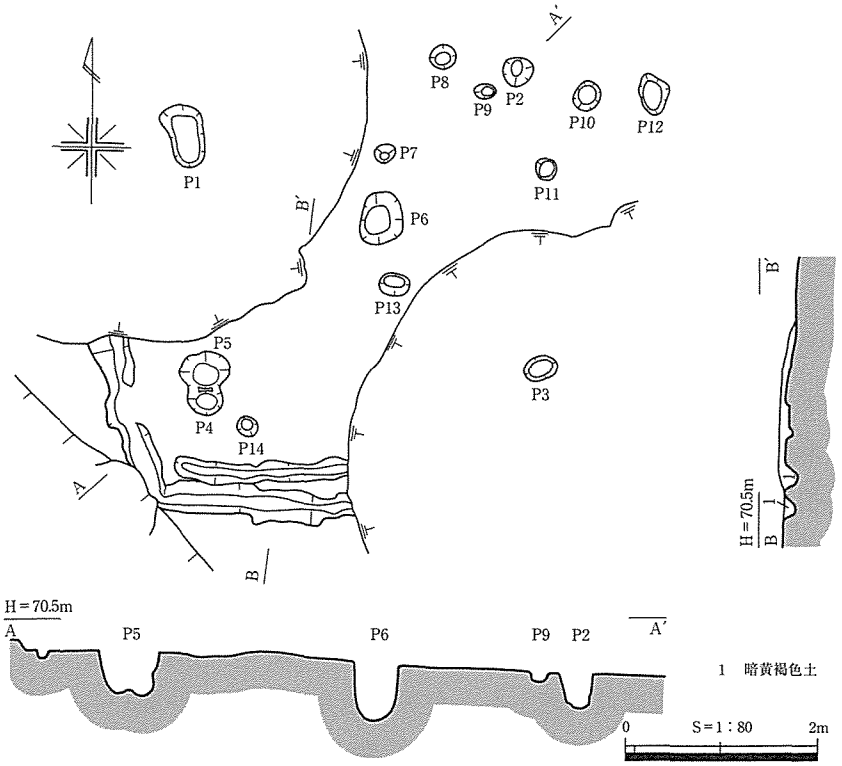
SI34（第100～102図、PL. 17・115・176・177～179）

調査区中央やや東側、Ｉ6グリッドの標高69.9m～70.3m付近の緩斜面に立地する竪穴建物跡である。梨畑の攪乱によって大半が破壊され、また東南隅はSI33によって切られていた。東南部の床面がかろうじて残るに過ぎない。

残存する床面積は3.9m²である。

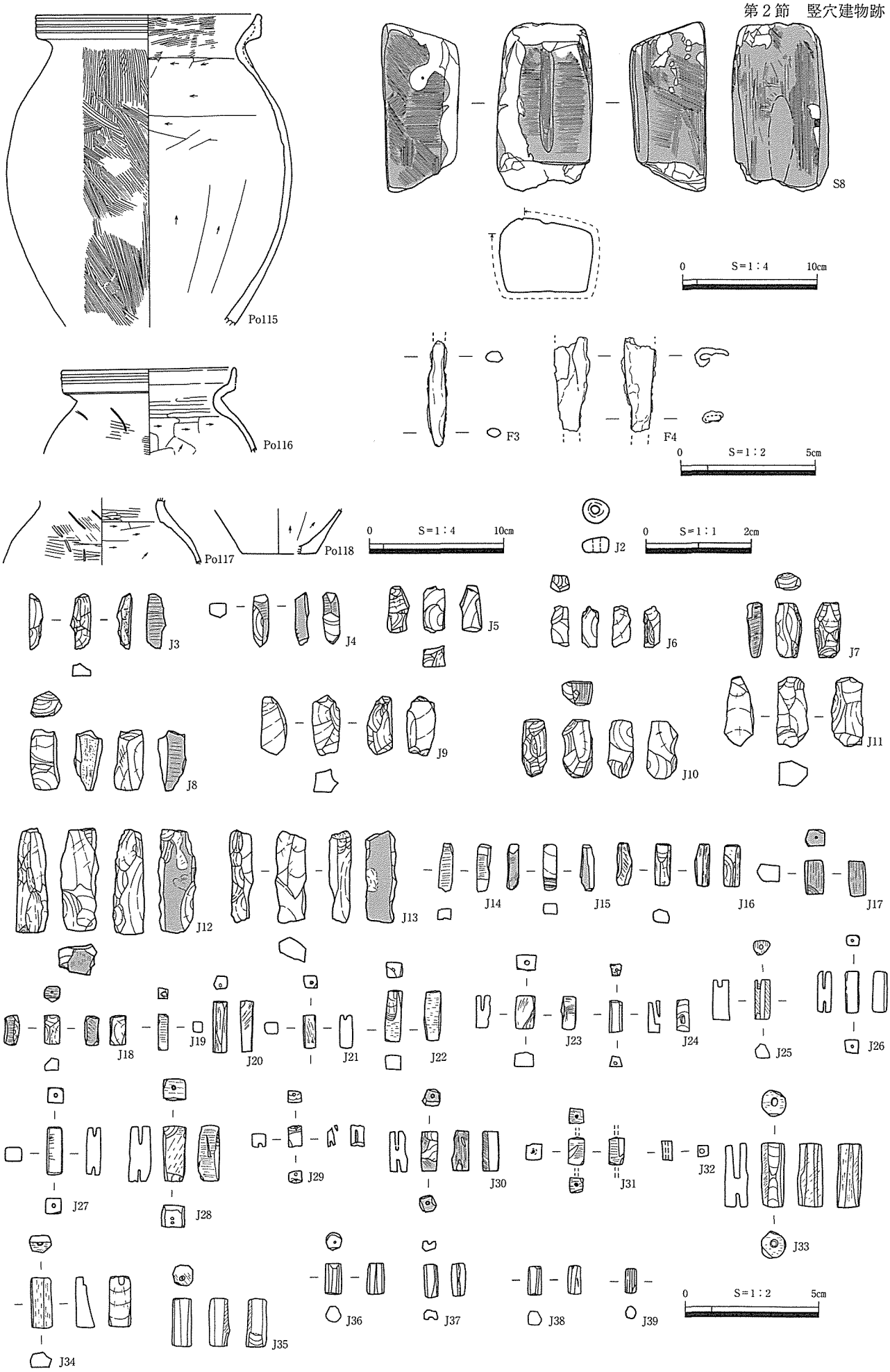
表16　笠見第３遺跡SI34ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
Ｐ１	68×35－31	主柱穴	Ｐ８	28×27－20	
Ｐ２	35×34－37	主柱穴	Ｐ９	23×16－11	
Ｐ３	36×28－20	主柱穴	Ｐ10	32×22－31	
Ｐ４	38×27－47	主柱穴	Ｐ11	24×23－14	
Ｐ５	54×43－50		Ｐ12	38×32－４	
Ｐ６	56×44－60	中央ピット	Ｐ13	32×22－31	
Ｐ７	21×20－５				



第100図　笠見第３遺跡SI34遺構図

第101図　笠見第３遺跡SI34玉剥片等出土状況図



第102図　笠見第３遺跡SI34出土遺物実測図

遺存状況がよくないため、建物の規模は不明であるが、平面方形を呈していたものと思われる。

主柱穴はP1～P4の４基で、柱間はP1-P2間から順に3.6m、3.5m、3.5m、2.9mである。壁際には壁溝がめぐり南辺では二重となる。壁溝は幅20～40㎝、深さ3.3～4.7㎝を測る。P6は建物のほぼ中央にあたることから、中央ピットとみられる。埋土中からは碧玉や緑色凝灰岩の剥片が多量に出土し、また、水晶や鉄製品なども出土した。そのほかにもピットを検出したが、当建物に伴うものか否かは不明である。

埋土は残りがよいところでも厚さわずか６㎝であった。碧玉や緑色凝灰岩の多量の剥片をはじめ管玉未成品や筋砥石、鉄器などの玉生産に関わる遺物が多く出土した。また周溝内の埋土から甕口縁部の破片が出土した。

出土遺物には、図化したものに弥生土器甕Po115～117、底部Po118、筋砥石S8、棒状鉄器F3、袋状鑿F4、ガラス小玉J2、緑色凝灰岩及び碧玉製管玉素材片・未成品J3～39がある。いずれも埋土下層中での出土である。埋土中の玉作関連遺物は、荒割・形割り段階の素材片71点、未成品20点、剥片293点である。未成品のうち見当穴をもつもの８点、研磨後穿孔途中のもの10点（鉄製針が折れたままのもの（J31）もある）、貫通したもの１点がある。大半が緑色凝灰岩で、わずかに碧玉が使用される状況である。

出土遺物から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉の玉作工房とみられ、建物内で管玉を主とする玉生産が行われていたことは確実とみられる。なお、玉未成品・剥片の産地同定の結果、判明するものはすべて女代南Ｂ遺物群であった。（小山）

SI36（第103・104図、PL. 17・116）

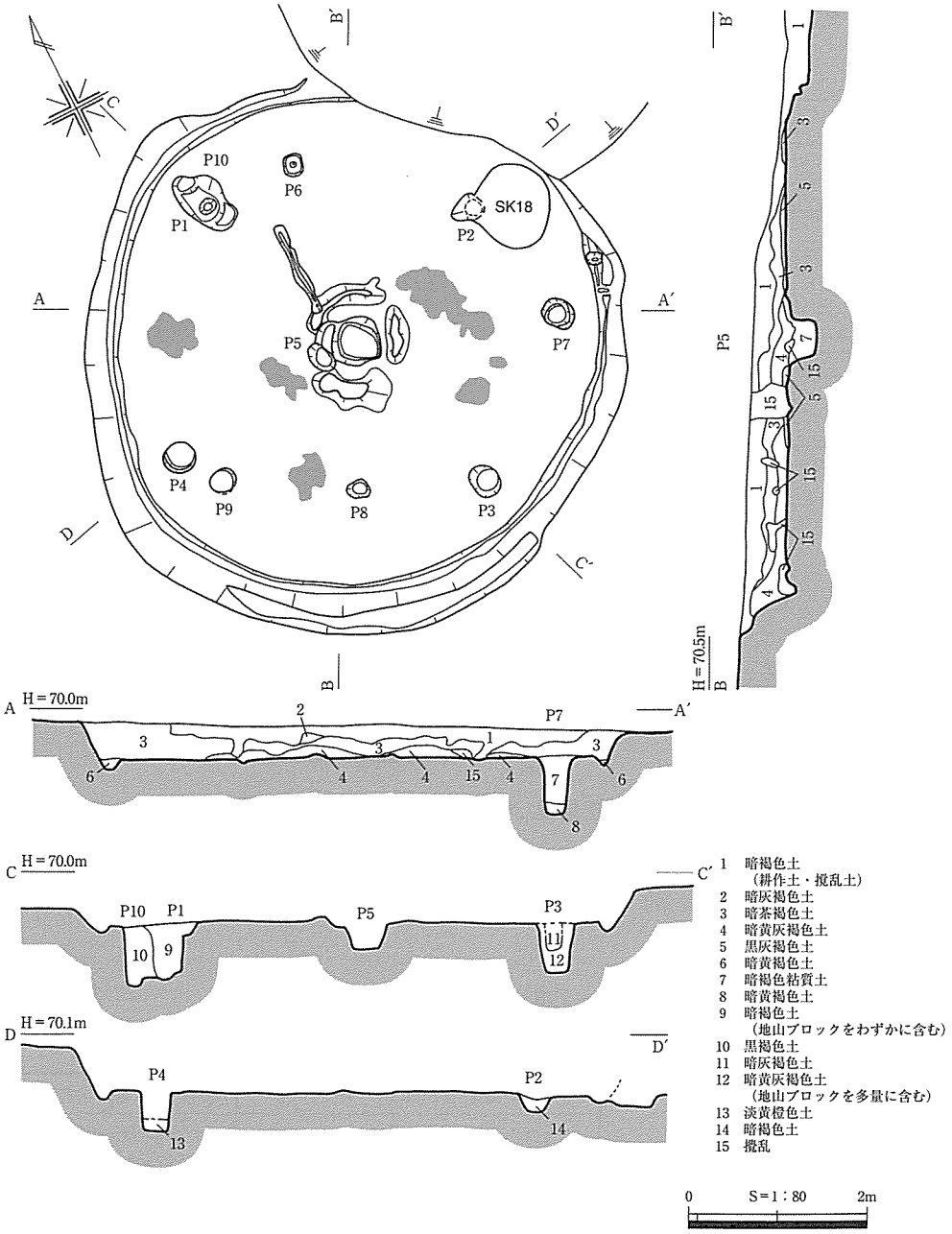
調査区北東側のH6グリッドにあり、標高69.4～70mの緩やかな北東側斜面部に立地する。

平面は隅丸方形を呈す。規模は、南北5.33m、東西5.25m、床面積22.4㎡である。残存壁高は、最も遺存状態がよい南西壁で最大0.58mを測る。壁際には幅８～14㎝、深さ12㎝前後の壁溝がほぼ全周している。

主柱穴は、P1～P4である。P3には柱痕が認められる。推定される柱径は約18㎝である。主柱穴の埋土は暗黄褐色系の土で埋め戻されたものと推定される。なお、P2については、切り合うSK18を掘り下げる際に、削平してしまったため、推定の規模である。柱穴間距離は、P1-P2間から順に3.0m、3.0m、3.4m、2.7mを測り、平面規模のわりに柱穴間が広い。

建物中央には、周囲に低い地山削り出しの土手をもつ中央ピットP5が掘り込まれている。主柱穴に比べて浅い。埋土は、暗褐色粘質土で建物下層の埋土とは異なることから、建物廃絶の際には、既に埋まっていた可能性がある。また、中央ピットの土手から幅10㎝前後、深さ２㎝前後の溝が外側に向かって延びている。

その他床面上に、P6～P10がある。いずれも、用途としては不明である。



第103図　笠見第３遺跡SI36遺構図

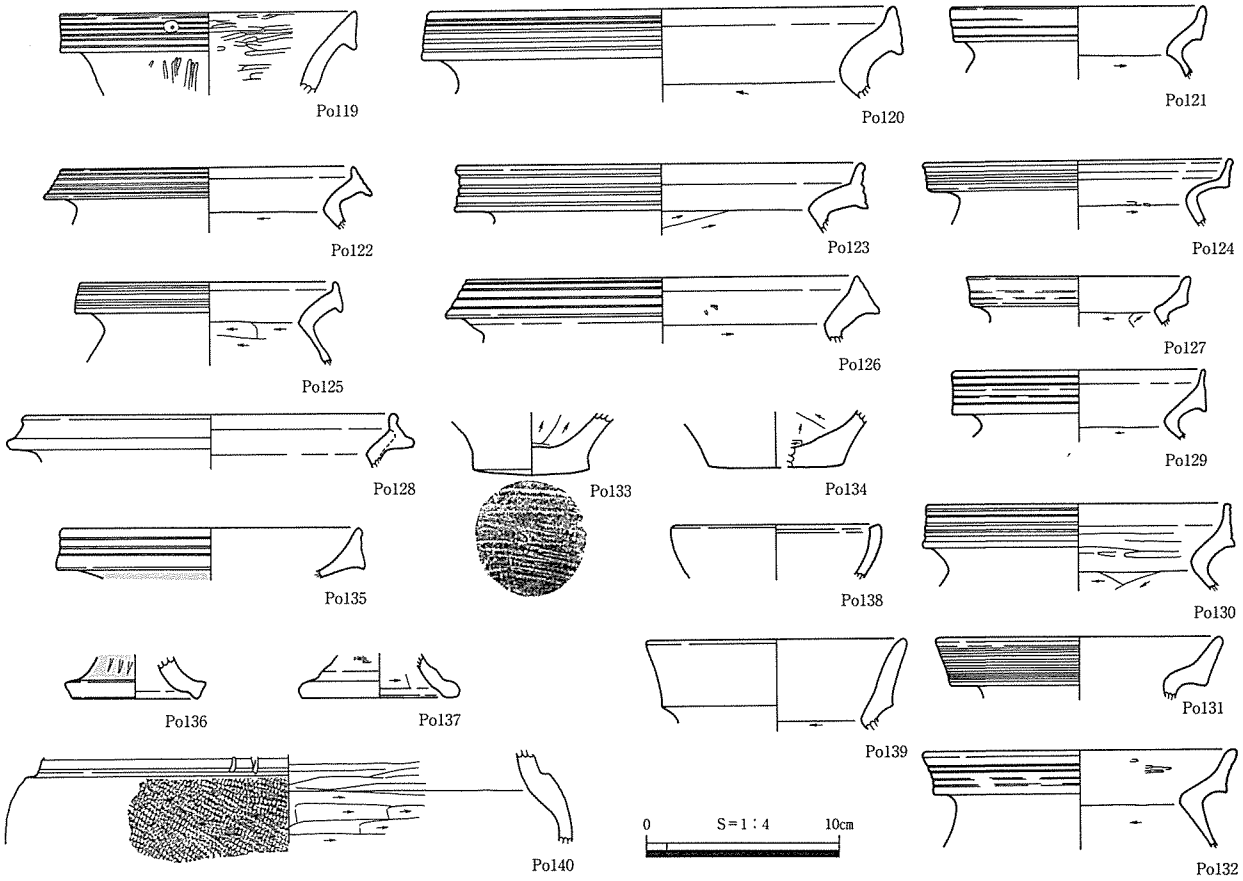
床面中央ピットの周囲には不整形な焼土面が６箇所で認められた。

埋土は、６層に分層できた。第４層以上は自然堆積したものと考えられる。５層は、炭化物を多量に含むもので、中央ピットの周囲にのみ確認されている。前述の焼土面と範囲が同じことから、何らかの関係があるものと推定される。

表17　笠見第３遺跡SI36ピット一覧表　※は復元値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備考(調査時ピット番号)	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備考(調査時ピット番号)
Ｐ１	60×43－62	主柱穴（Ｐ２）	Ｐ６	24×20－25	用途不明(Ｐ３)
Ｐ２	38※×33－21	主柱穴（Ｐ４）	Ｐ７	41×30－64	用途不明(Ｐ５)
Ｐ３	40×30－58	主柱穴･柱痕あり(Ｐ６)	Ｐ８	39×33－58	用途不明(Ｐ７)
Ｐ４	37×34－44	主柱穴（Ｐ１）	Ｐ９	28×22－35	用途不明(Ｐ９)
Ｐ５	47×45－30	中央ピット(Ｐ８)	Ｐ10	28×25－63	用途不明(Ｐ２と切りあう)

出土遺物のうち図化できたものには、埋土中から出土した弥生土器壺Po119、甕Po120～132・139、底部Po133・134、器台Po135、脚部Po136・137、土師器甕Po138、縄文土器浅鉢Po140がある。



第104図　笠見第３遺跡SI36出土遺物実測図

出土遺物等から清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

SI37（第105・106図、PL. 18・102・116・178）

調査区東側、H7グリッドの、標高70.5m付近の平坦面に立地する。西側は、農道により削平を受けている。南西側にはSI39が近接している。

表18　笠見第３遺跡SI37ピット一覧表

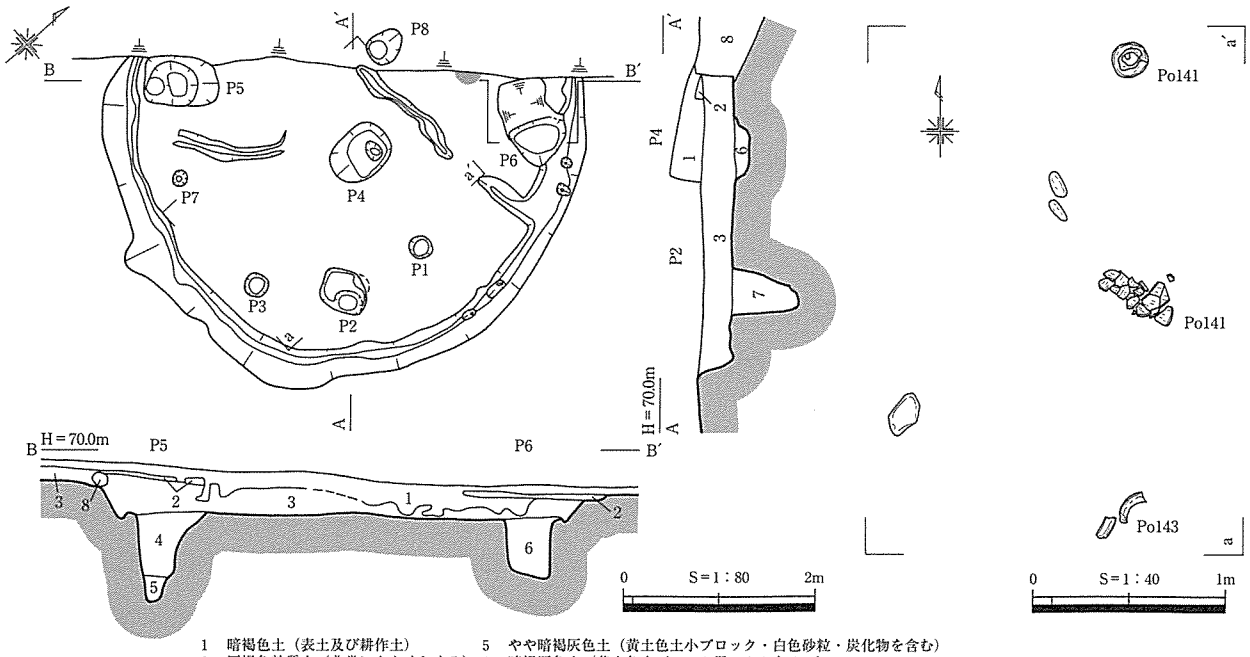
ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
Ｐ１	26×23－12		Ｐ５	77×55－96	主柱穴
Ｐ２	51×43－76	主柱穴	Ｐ６	72×59－54	主柱穴
Ｐ３	25×24－８		Ｐ７	18×17－８	
Ｐ４	70×52－22	中央ピット	Ｐ８	40×32－24	

平面は、円形に近い隅丸方形を呈し、径4.2m以上、床面積10.7㎡以上を測る。壁高は、最も残りがよい東側で32cmである。壁の周囲には幅10～30cm、深さ５cm程度の壁溝が全周すると思われる。

主柱穴は、本来は４本柱であったと考えられるがP6、P2、P5を確認し、残りの１基は農道建設の際に失われたものと考えられる。P4は中央ピットで、主柱穴に比べて浅く第６層が単層で入る。

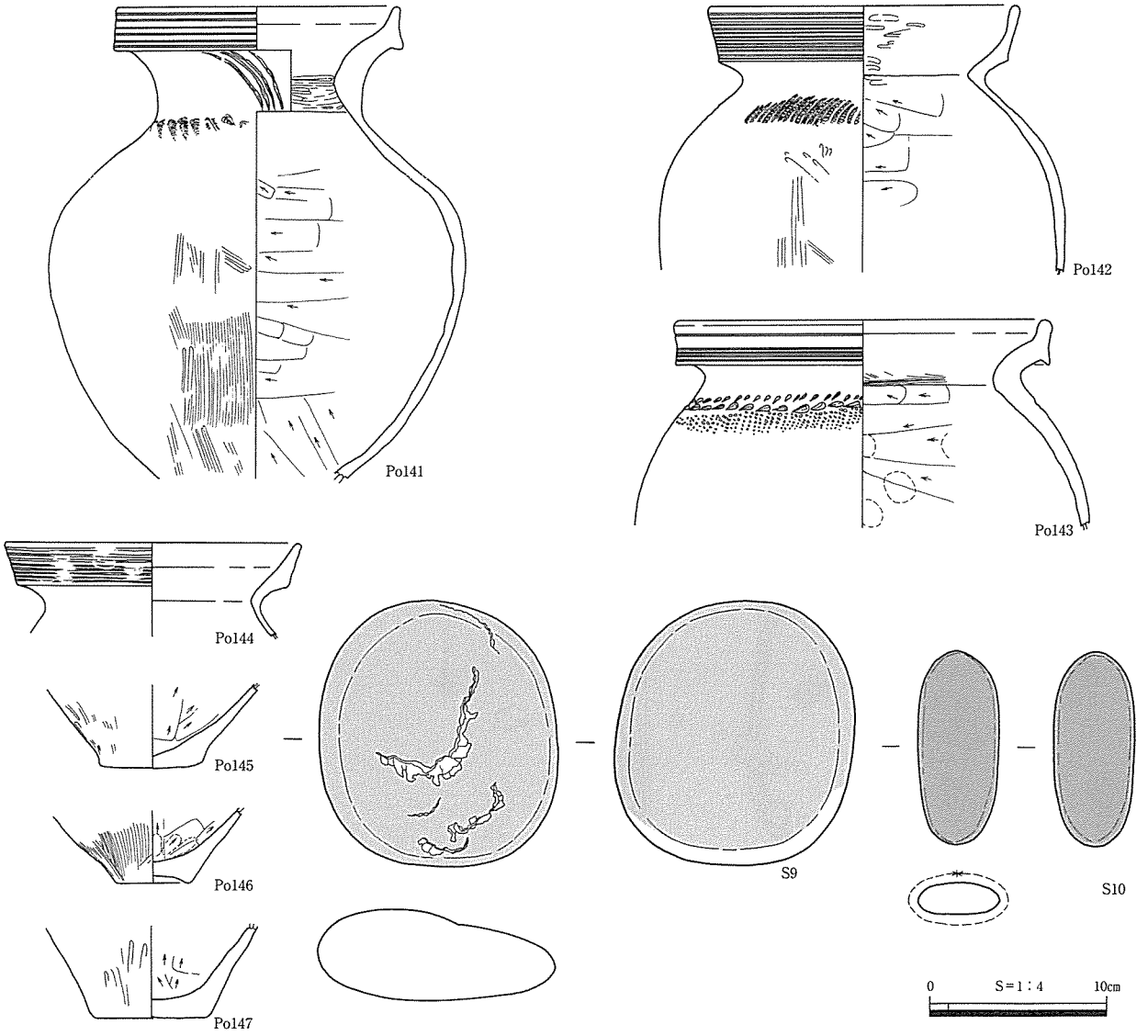
床面上ではP4を囲むように幅10cm程度、深さ２cm程度の浅い溝が検出された。一部壁溝に接続しており、区画溝の可能性がある。また、焼土面が１箇所で検出された。

埋土は、表土以外は基本的に３層単層である。第２層は、非常に硬く締まるもので現農道以前の道路整地土の可能性がある。



1　暗褐色土（表土及び耕作土）
2　灰褐色粘質土（非常にかたくしまる）
3　暗黄褐色土
4　灰褐色（炭化物少量含）
5　やや暗褐灰色土（黄土色土小ブロック・白色砂粒・炭化物を含む）
6　暗褐灰色土（黄土色小ブロック混。ややもろい）
7　暗褐色灰色土（砂粒・炭化物を少量含む）
8　撹乱

第105図　笠見第３遺跡SI37遺構図



第106図　笠見第３遺跡SI37出土遺物実測図

出土遺物には、図化したものに弥生土器壺Po141、甕Po142～144、底部Po145～147、赤色塗彩石S9・10がある。Po141は床面上で出土し、その他は埋土中での出土である。

出土遺物等から、清水Ｖ－２～３様式、弥生時代後期中葉から後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

SI38（第107・108図、PL. 18・117）

調査区北東側、G6グリッドの標高69.3m付近の平坦面に立地する。遺存状態は悪く半分以上は削平されていた。西側約５mにSI37がある。

平面は、隅丸方形を呈し、径約4.0m、床面積7.1㎡以上を測る。壁高は、最も残りがよい南側でわずか３cmしかない。壁の周囲には幅10程度cm、深さ２cm程度の壁溝が全周するものと思われる。

主柱穴はP3、P5、P12であるが、本来は4本柱であったと考えられる。柱間は、P1-P5間から順に2.6m、2.2mである。中央ピットはP6で、主柱穴に比べて浅い。床面上では焼土面を２箇所検出した。

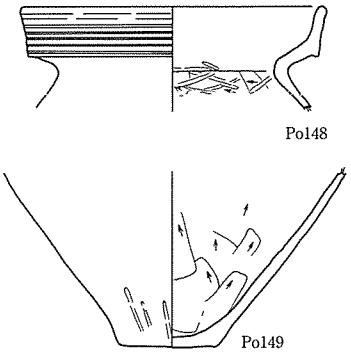
埋土は、攪乱土以外は２層単層である。

出土遺物には、図化したものに床面上で出土した弥生土器甕Po148、底部Po149がある。

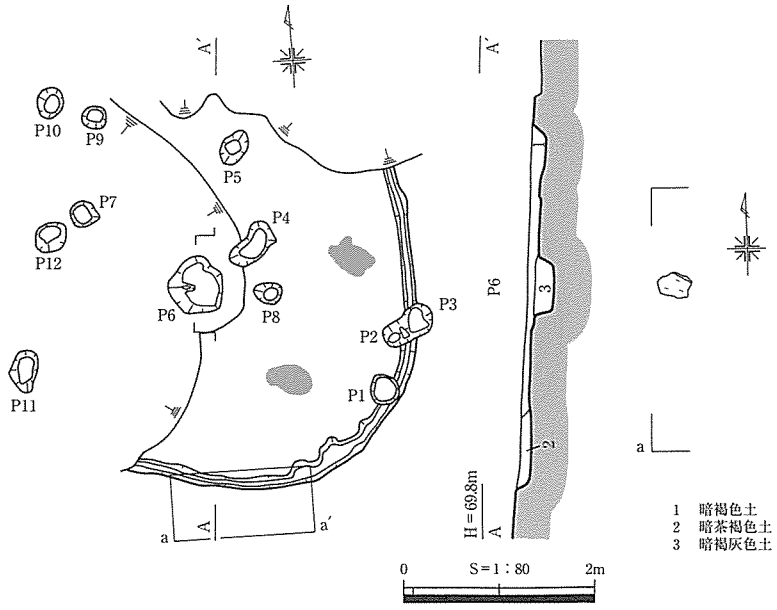
出土遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（小山）

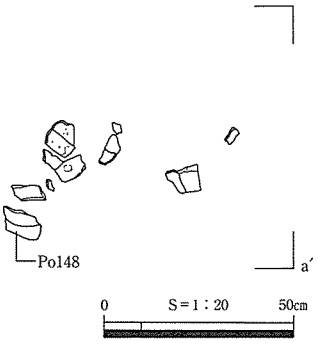
表19　笠見第３遺跡SI38ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
Ｐ１	33×30－20		Ｐ７	30×26－23	
Ｐ２	26×24－20	主柱穴	Ｐ８	29×22－29	
Ｐ３	32×32－56		Ｐ９	26×25－73	
Ｐ４	55×24－25		Ｐ10	35×28－57	
Ｐ５	38×26－21	主柱穴	Ｐ11	45×27－32	
Ｐ６	61×55－22	中央ピット	Ｐ12	36×33－25	主柱穴



第107図　笠見第３遺跡SI38 出土遺物実測図





第108図　笠見第３遺跡SI38遺構図

SI40（第109・110図、PL. 18・102・117・177）

調査区北東側、H7グリッドの標高70m付近の緩斜面で検出した。北側は、SI39によって掘り込まれている。

推定で直径4.6mの平面円形を呈する竪穴建物跡と考えられる。壁高は最も残りがよい北西部で62cmである。壁際には幅11～32cm、深さ６cm～11cmの壁溝が全周すると考えられる。

主柱穴は、P1～P4で、柱間は、P1-P2間から順に2.6m、2.5m、2.4m、2.8mである。建物中央には、中央ピットP5があり、幅15cm、深さ5cm前後の溝が接続している。

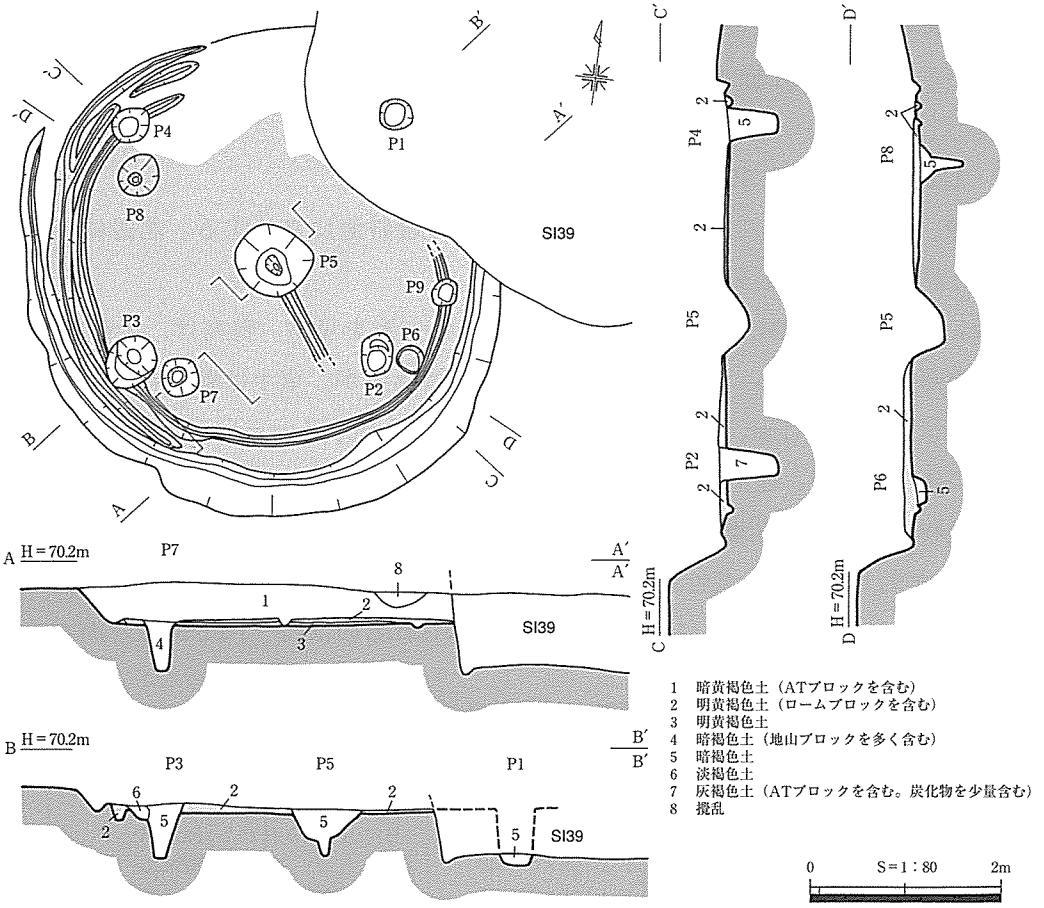
床面には明黄褐色土による貼床を全面に施し、最も厚い部分で９cmを測る。この貼床層を除去すると建て替え前の壁溝及びピットが検出された。貼床層と建て替え前の建物床面との間には、暗黄褐色土が厚さ４cm前後ほど堆積していた。これは自然堆積土とみられることから、先行する建物がいったん廃棄された後、まだ埋まりきらずに窪みとして残っていた時期に建て替えが行われたものとみられる。建て替え前の主柱穴は、P6・P7・P8であるが、本来は４本柱であったものと考えられる。

埋土は暗黄褐色土の単層で水平堆積を示す。その上層は２基の竪穴建物跡を覆うように黒褐色土が覆う。

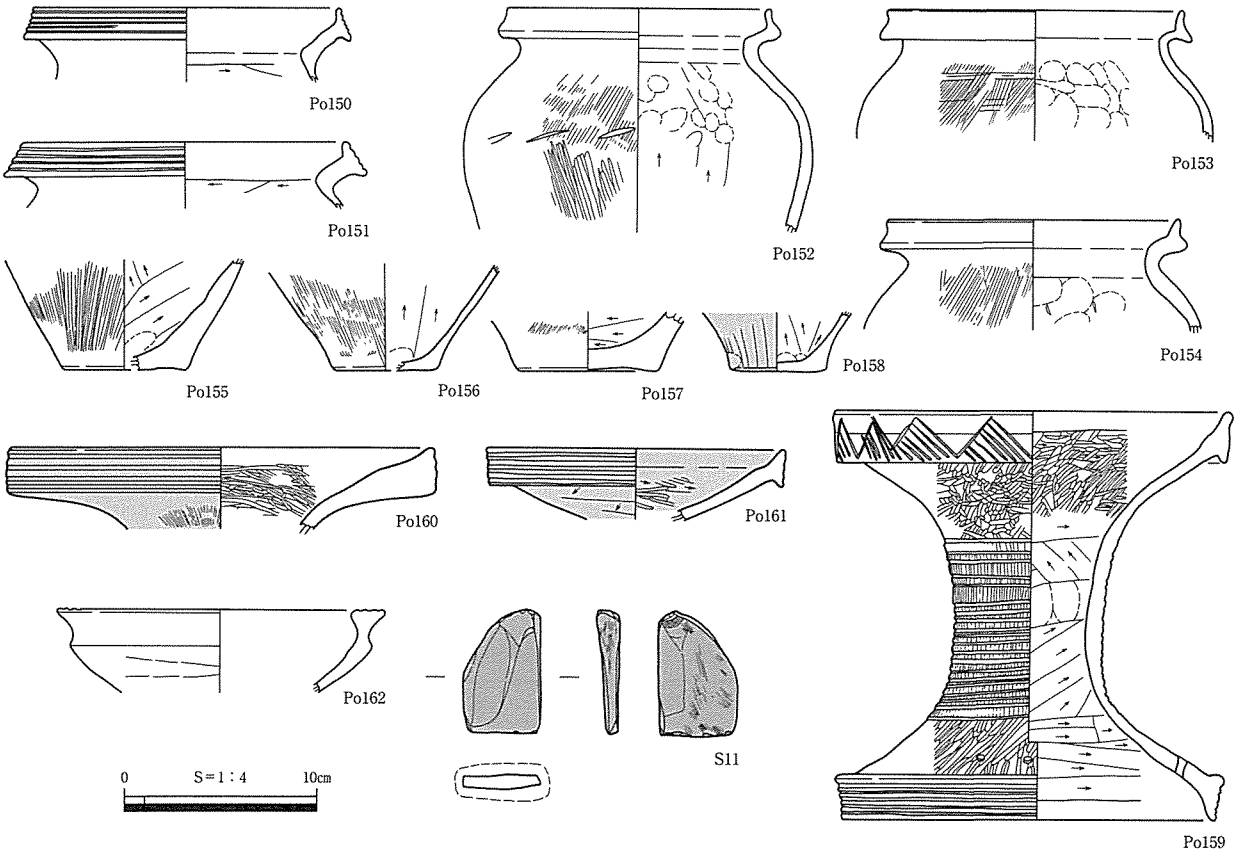
出土遺物は、図化したものに弥生土器甕Po150～154、底部Po155～158、器台Po159～161、高杯Po162、砥石S

表20　笠見第３遺跡SI40ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
Ｐ１	34×33－７	主柱穴	Ｐ６	31×28－10	建て替え前主柱穴
Ｐ２	47×42－61	主柱穴	Ｐ７	42×37－49	建て替え前主柱穴
Ｐ３	60×50－44	主柱穴	Ｐ８	46×43－49	建て替え前主柱穴
Ｐ４	42×37－49	主柱穴	Ｐ９	28×26－10	
Ｐ５	77×75－46	中央ピット			



第109図　笠見第３遺跡SI40遺構図



第110図　笠見第３遺跡SI40出土遺物実測図

11がある。いずれも検出面に近い高さでまとまって出土した。

出土遺物等から、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろのものと考えられる。（小山・牧本）

SI42（第111・112図、PL. 19・102・117・177・178）

調査区北東側、G2・３グリッドの標高67.2m～67.5mの緩斜面に立地する。北辺はSI41と重複関係にあるが、SI41が当建物跡埋土を切り込んでいる。

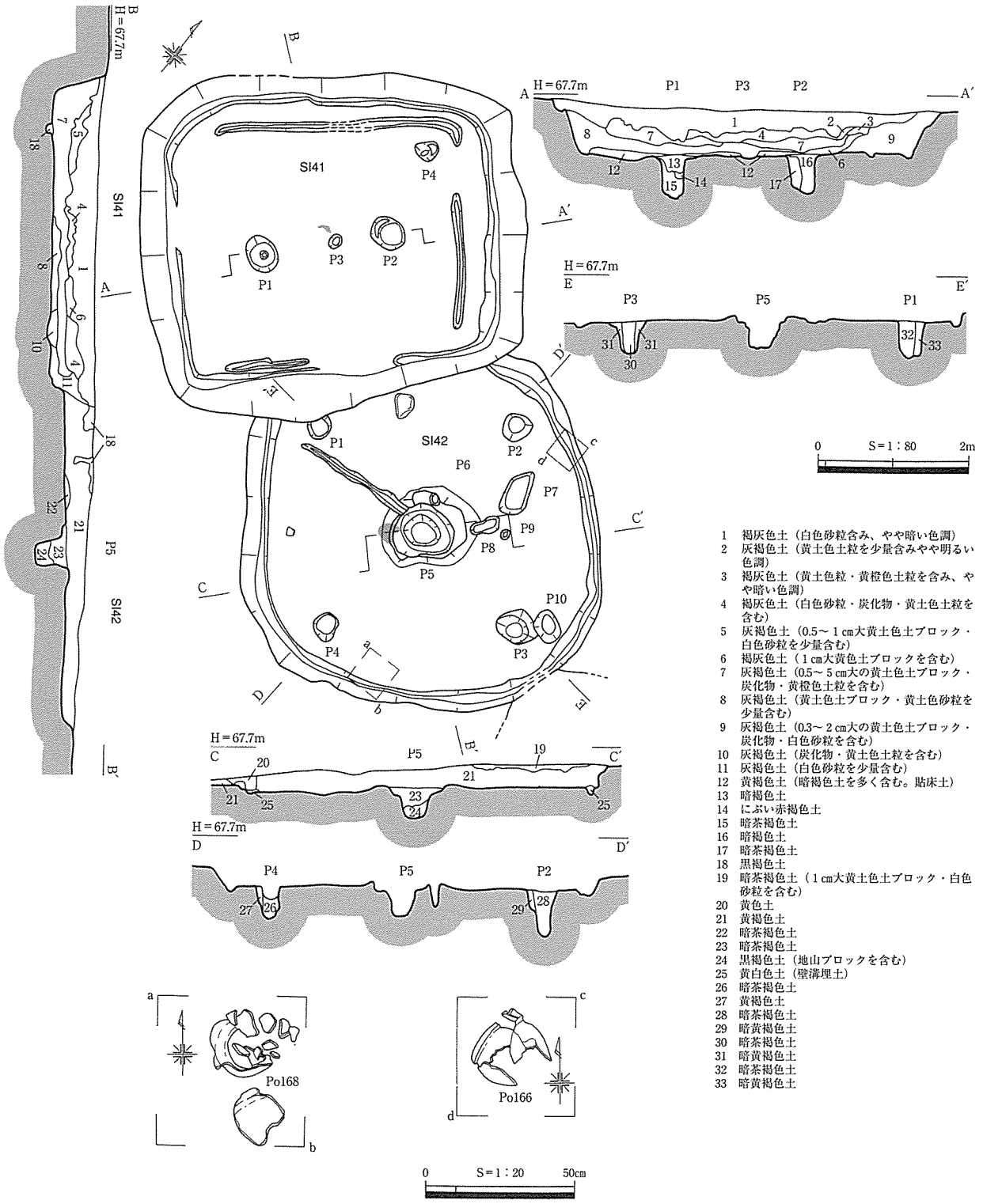
規模は長軸4.3m以上、短軸4.2mを測る。不整形な隅丸方形を呈す。壁高は、遺存状況が比較的良好な西壁の最深部で41cmを測る。建物の西半は遺存良好であるが、東半は壁面のほとんどが削平を受けていた。壁際には幅12～41cm、深さ4.7～12.5cmの壁溝が全周する。

埋土は５層に分かれるが、埋土の厚さ約30cmのうち、その大部分を茶褐色土が占め、比較的単純な堆積である。建物の埋没は自然堆積による可能性が強いとみられるが、比較的単純な層位であり、かつ埋土中に地山の掘削土とみられる黄色土小ブロックを含むことから、人為的な埋め戻しである可能性も残される。

床面ではピットを10基検出した。このうち主柱穴とみられるのはP1～P4である。P1を除く３基からは柱痕跡も検出された。これから推定される柱の直径は21～28cmである。柱間はP1-P2間から順に1.3m、1.4m、1.3m、1.4mである。またP9はP2とP3の間に位置し、掘方規模も小さいことから、支柱穴の可能性

表21　笠見第３遺跡SI42ピット一覧表

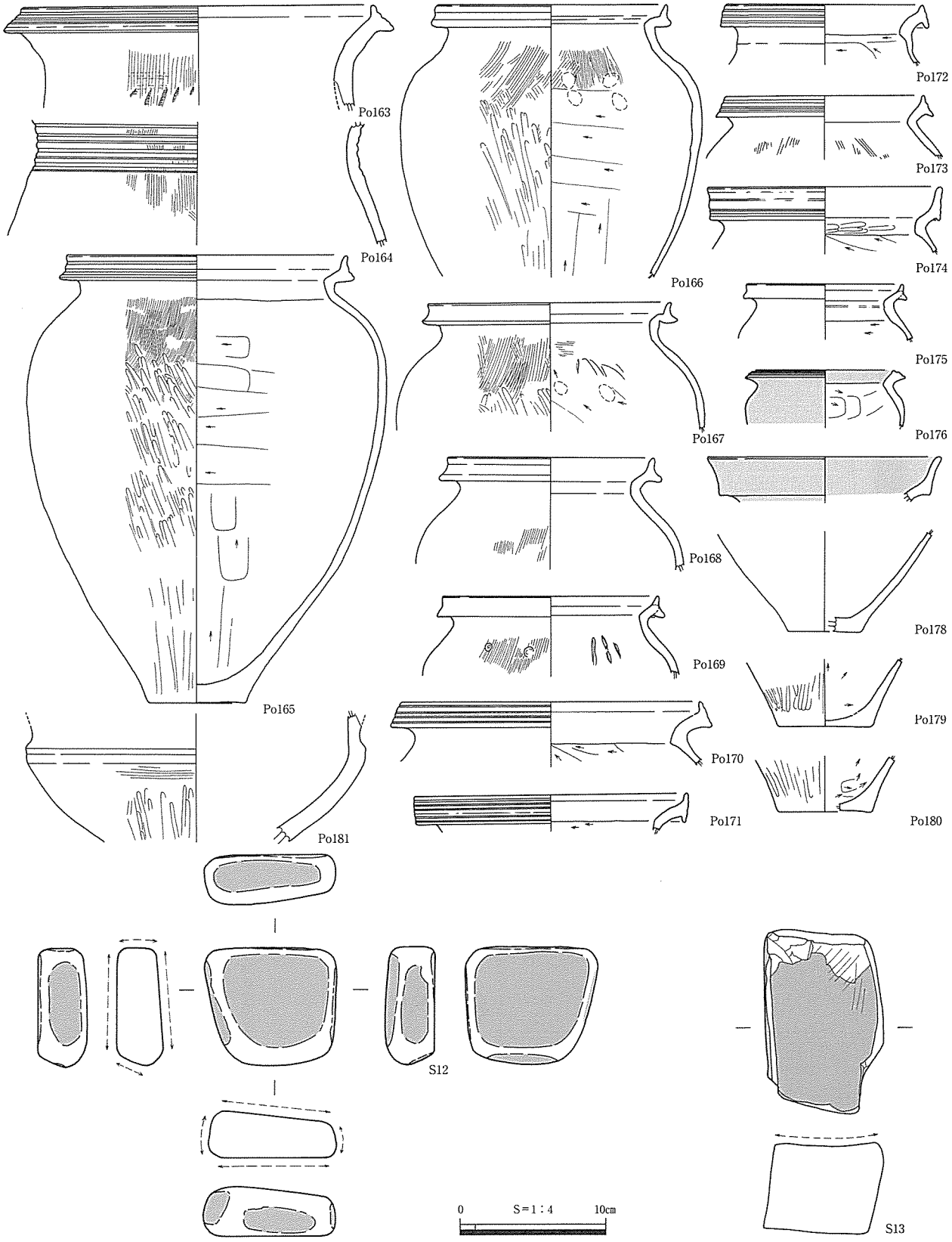
ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
Ｐ１	36×32－52	主柱穴	Ｐ６	16×12－31	
Ｐ２	40×36－63	主柱穴(柱痕あり)	Ｐ７	62×33－１	
Ｐ３	58×47－44	主柱穴	Ｐ８	37×22－10	
Ｐ４	36×32－45	主柱穴(柱痕あり)	Ｐ９	13×13－10	
Ｐ５	46×40－41	中央ピット	Ｐ10	42×32－16	



第111図　笠見第３遺跡SI41・42遺構図

がある。P5は中央ピットである。その周囲には、床面より３～6cmほど高い土手がめぐる。この段差は地山を削り出すことによって構築される。この高まりの外側で焼土面を検出した。焼土面はこの高まりの上面の一部にまでは及ぶが、中央ピット内では被熱の痕跡は認められなかった。

またこの高まりを断ち切って住居の西隅へ延びる溝も検出された。溝は幅６～13cm、深さ約２～３cm、長さ168cmである。溝の埋土は建物内の埋土と同じである。また溝底のレベルは、両端でほぼ同じである。



第112図　笠見第３遺跡SI42出土遺物実測図

この他にも不整形なピット等を４基検出したが、性格不明である。

出土遺物は、図化したものに弥生土器壺Po163・164、甕Po165～177、底部Po178～180、鉢Po181、赤色塗彩された磨石S12、砥石S13がある。大半は埋土中からの出土で、Po165はばらばらの状態で出

土した他、北辺の中央付近床面直上から、台石が平らな面を上に向けて据え置かれた状態で出土した。また建物の北隅床面でPo166、南隅床面でPo168がつぶれた状態で出土した他、S12も床面上で出土している。

床面出土の土器から、清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろの竪穴住居跡と見られる。（小山）

SI43（第113・114図、PL. 19・118）

調査区北東側、G5グリッドの標高68.7m付近の平坦面に立地する。遺存状態は悪く半分以上は削平されていた。南西側約６mにSI38がある。

ほとんど削平されているため平面形は不明であるが、隅丸方形の可能性がある。規模は、東西3.8m以上、床面積4.7m²以上を測る。壁高は、最も残りがよい南側で19cmである。壁の周囲には幅18cm、深さ４～６cmの壁溝がめぐると思われる。

主柱穴はP2、P7、P8、P10と考えられ、柱間は、P2～P7間から順に2.2m、2.0m、2.0m、2.8mである。P9も主柱穴の可能性があり、柱穴据え替えの可能性がある。中央ピットはP4で、埋土下層には炭化物を含む。

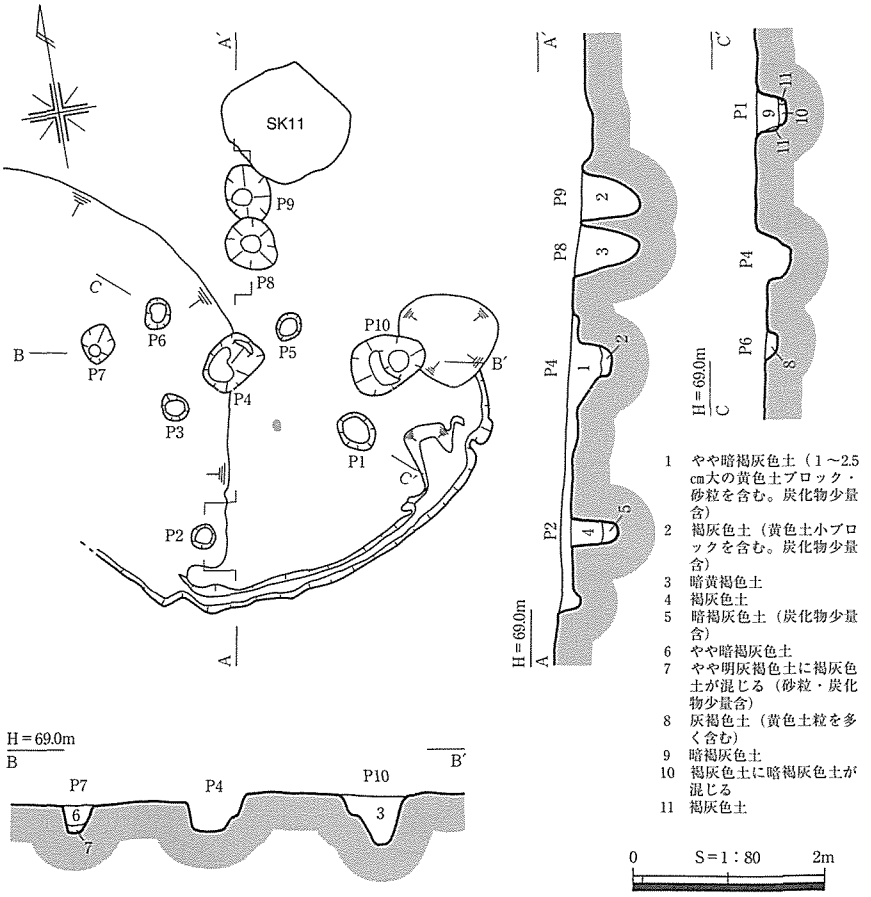
埋土は、攪乱土以外は１層単層である。

出土遺物には、図化したものに埋土中で出土した弥生土器甕Po182～185がある。

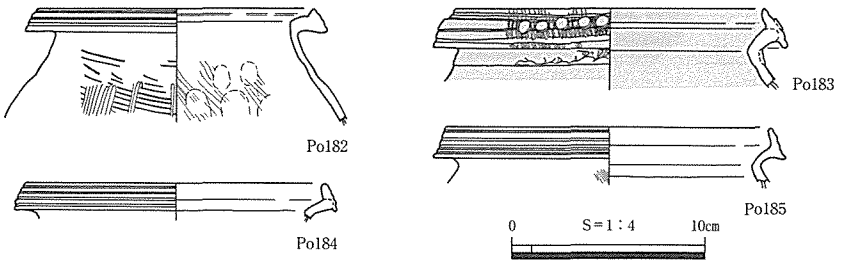
出土遺物等から、清水Ⅳ－３様式、弥生時代中期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（小山）

表22　笠見第３遺跡SI43ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
Ｐ１	41×37－35		Ｐ６	33×26－15	
Ｐ２	24×22－51	主柱穴	Ｐ７	41×33－35	主柱穴
Ｐ３	28×26－38		Ｐ８	55×53－64	主柱穴
Ｐ４	65×50－37	中央ピット	Ｐ９	57×48－62	主柱据え替え穴か
Ｐ５	30×25－57		Ｐ10	80×60－54	主柱穴



第113図　笠見第３遺跡SI43遺構図



第114図　笠見第３遺跡SI43出土遺物実測図

SI44（第115・116図、PL. 20・102・118・177）

調査区中央やや北東側、H2グリッドの標高66.9～67.3mの緩斜面に立地する。

遺存状況は比較的良好で、長軸3.5m、短軸3.2m、壁高は最深部で65cmを測る、平面方形の竪穴建物跡である。壁際には幅６～8cm、深さ１～３cmの壁溝がめぐるが、東南部のみ認められなかった。

表23　笠見第３遺跡SI44ピット一覧表

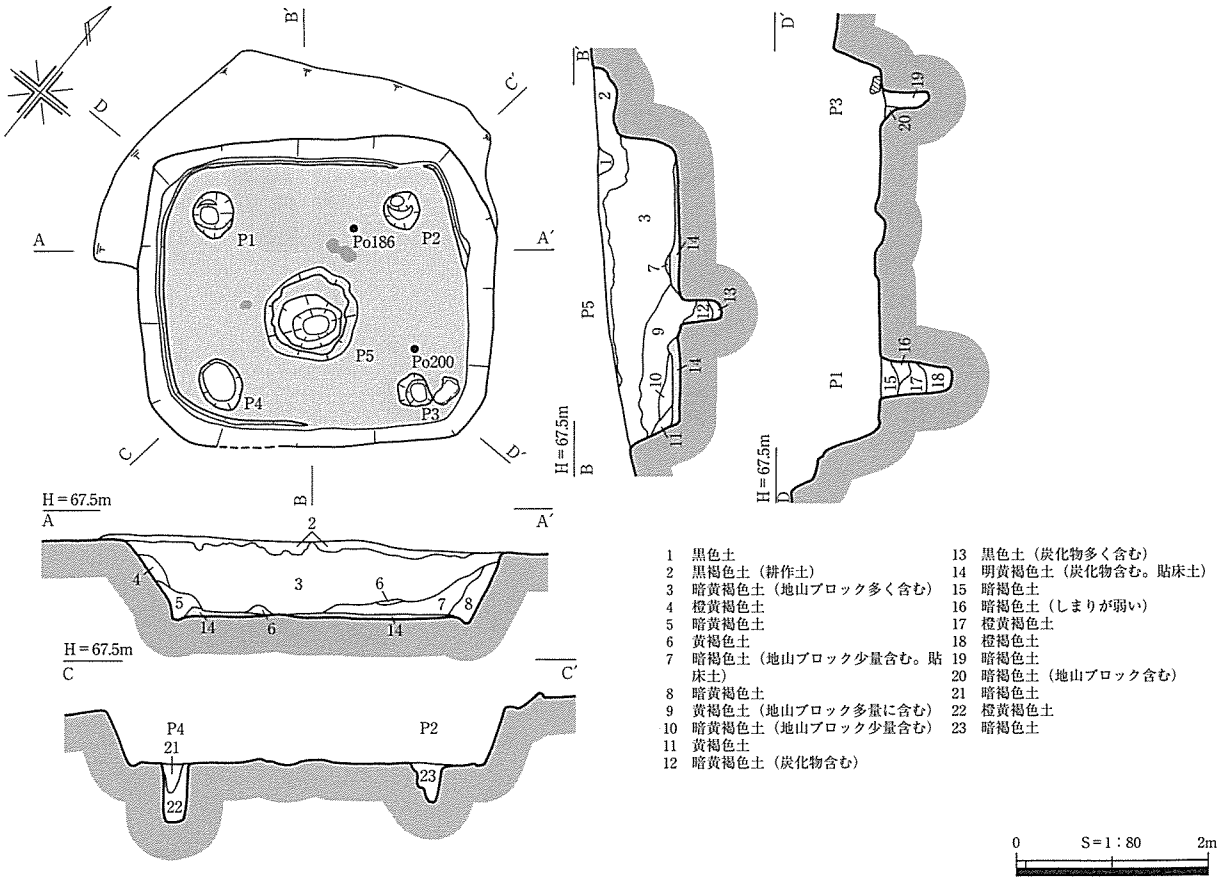
ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
Ｐ１	44×46－81	主柱穴
Ｐ２	39×37－83	主柱穴
Ｐ３	39×36－46	主柱穴
Ｐ４	55×42－62	主柱穴
Ｐ５	47×33－51	中央ピット

床面で５基のピットを検出した。このうちP1～P4が主柱穴とみられる。柱間はP1-P2間から以下順に2.1m、1.9m、2.1m、1.9mである。P5は中央ピットである。周囲には幅20～40cmの土手がめぐる。この高まりは床面より２～3.6cm高く、後述する貼床層を厚く盛り上げることにより構築される。また中央ピット周辺の床面には、２箇所で焼土面が検出された。建物の床面には、全面にわたり厚さ１～６cmの貼床が施されていた。

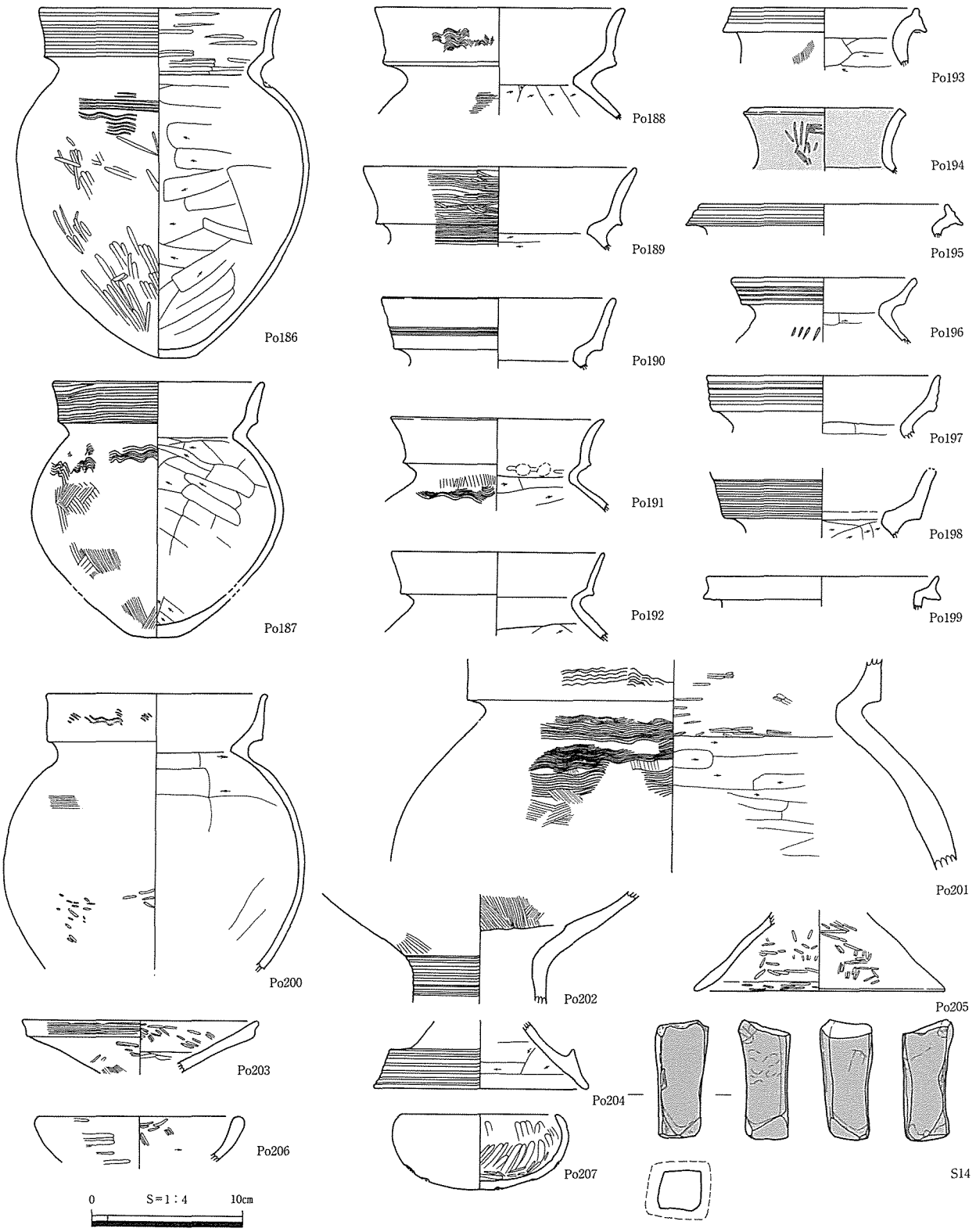
埋土は11層に分層可能である。建物内への初期の流入土は東側で顕著である。土砂の流入が斜面の下方側から始まるのはやや不自然と思われ、人為的な可能性も否定できない。

出土遺物は、図化できたものに弥生土器甕Po186～201、高杯Po202、器台Po203・204、蓋Po205、椀Po206・207、砥石S14がある。大半は、床面からかなり浮いた状態で出土したが、東南隅の床面直上で上面が平らな石が据え置かれており、台石とみられる。またP2の約50cm東南側の床面上で、Po186が口縁部を下にして伏せられた状態で出土した。Po200は、P2-P3間の床面上で出土した。

出土遺物から、清水Ⅵ-１様式、弥生時代終末期の竪穴住居跡とみられる。（小山）



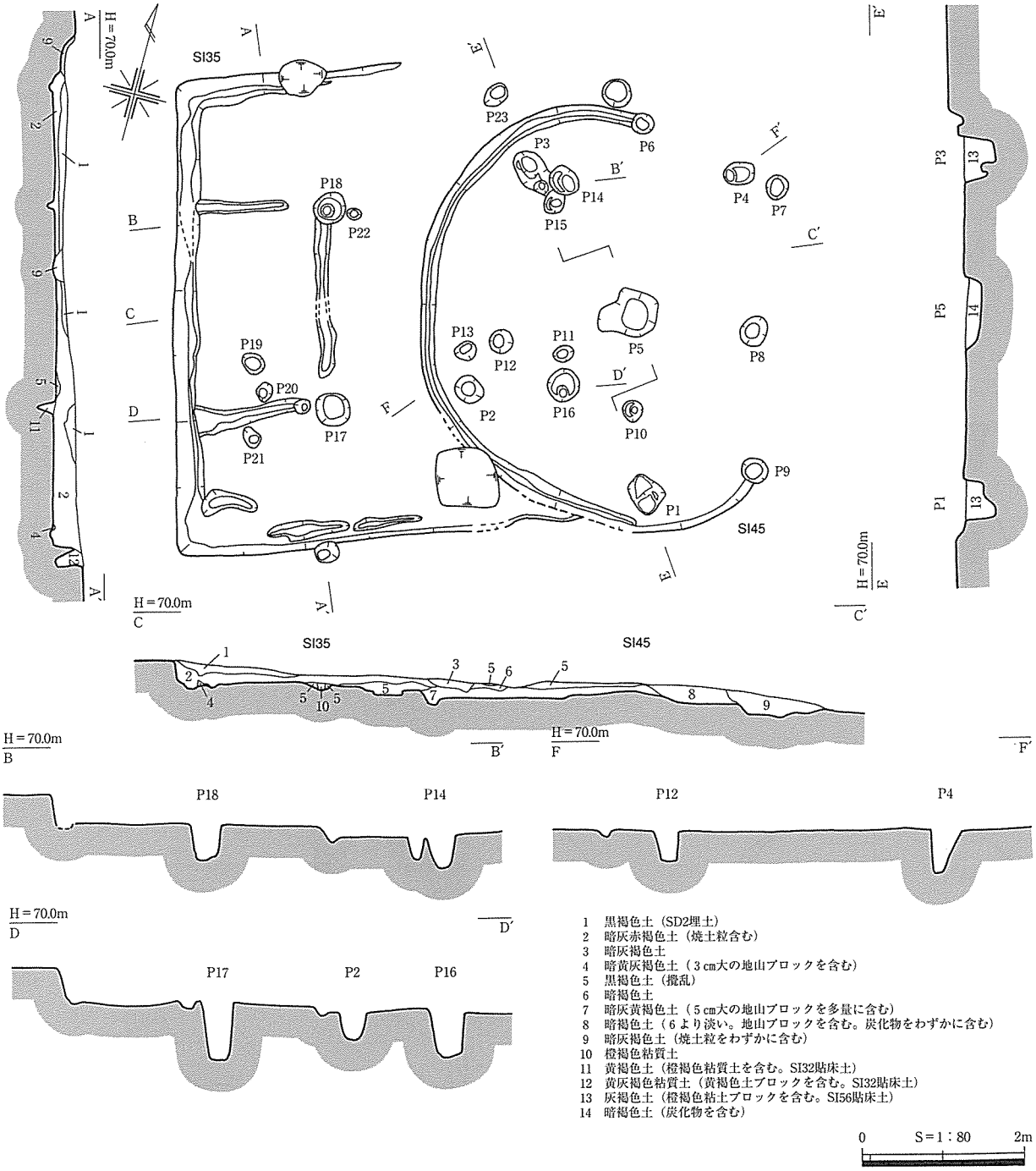
第115図　笠見第３遺跡SI44遺構図



第116図　笠見第３遺跡SI44出土遺物実測図

SI45（第118図、PL. 20・119）

調査区やや北東側、I・J4グリッドの標高69m付近の緩斜面に立地する竪穴建物跡である。西半はSI35と重複するが、当建物跡は、SI35の貼床層直下で検出されていることや遺物などからみて、SI45が古いことが明らかである。



第117図　笠見第３遺跡SI35・45遺構図

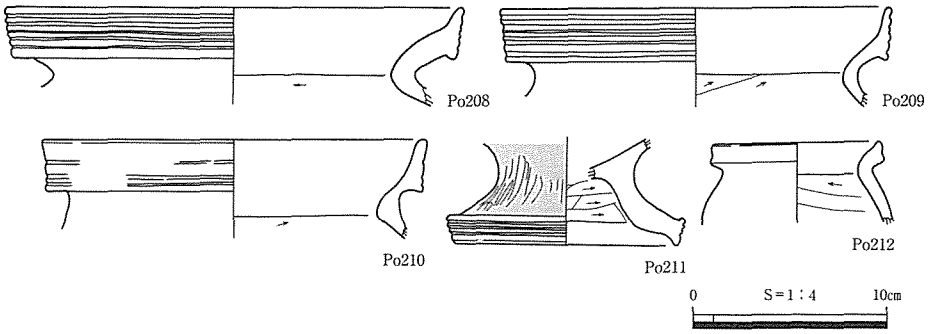
表24　笠見第３遺跡SI45ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
Ｐ１	42×41－36	主柱穴	Ｐ８	40×32－40	主柱穴
Ｐ２	36×31－39	主柱穴	Ｐ９	36×30－25	
Ｐ３	61×36－40	主柱穴	Ｐ10	42×32－16	
Ｐ４	39×28－55	主柱穴	Ｐ11	26×21－不明	
Ｐ５	80×63－16	中央ピット	Ｐ12	31×29－60	
Ｐ６	28×25－14		Ｐ13	28×24－15	
Ｐ７	30×27－40		Ｐ14	41×35－40	

建物跡の東半はすでに失われるなど遺存状態は悪い。平面は円形を呈し、復元される直径は5.2m、床面積16.8m²以上である。壁高も最も残存する西側で12cmである。壁溝は幅10～19cm、深さ４～10cmで遺存する範囲内では全周する。

床面及びその周辺で多数のピットを検出したが、このうち主柱穴と考えられるのはP1～P4、P8の

５基である。柱間はP1-P2から以下順に2.7m、3.0m、2.55m、2.0m、2.5mである。当遺構床面で検出したP15・16は、重複するSI35の主柱穴と考えられる。P5は中央ピットである。



第118図　笠見第３遺跡SI45出土遺物実測図

埋土の厚さは12cmを測り、上面はSI35の貼床層で覆われていた。

出土遺物は、埋土中から出土したものばかりで、図化できたものは弥生時代甕Po208～210、脚付甕Po211、小型甕Po212である。

これらの土器から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉のものとみられる。（小山）

SI46（第119・120図、PL. 76・119）

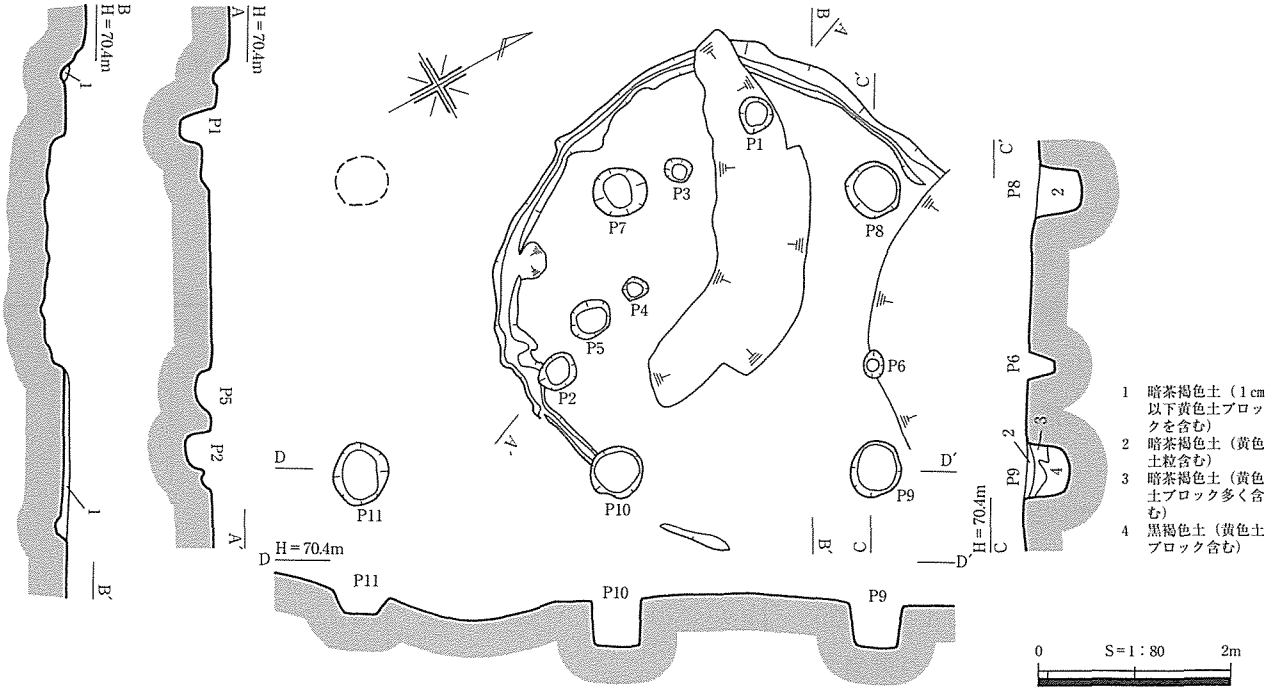
調査区東側、J5グリッドの標高70.1m～70.3mの緩斜面に立地する。１間×２間の掘立柱建物SB26と重複するが、同一面での検出であり、両者の前後関係は不明である。

遺存状況は悪く、攪乱坑はSI46床面の大半を掘り抜き地山に達している。建物の規模は一辺4.5m四方で、隅丸方形を呈すとみられる。壁溝は幅10～24cm、深さ９～11cmで全周していたとみられる。

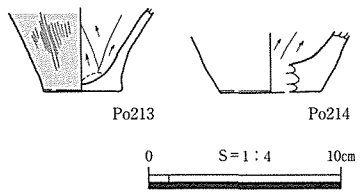
主柱穴は西半のP1、P2の２基が検出された。東半は攪乱等によ

表25　笠見第３遺跡SI46ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
Ｐ１	40×37－34	主柱穴
Ｐ２	42×35－26	主柱穴
Ｐ３	29×25－31	
Ｐ４	25×24－45	
Ｐ５	46×41－21	
Ｐ６	28×20－32	



第119図　笠見第３遺跡SI46遺構図



第120図　笠見第３遺跡SI46 出土遺物実測図

り不明であるが、４本柱の構造とみられる。

埋土も大半が失われ、攪乱土を除去して壁溝やピットが検出される状況であった。

出土遺物は、床面から浮いた状態で出土し、弥生土器底部Po213・214を図化した。

出土土器等から、弥生時代中期ごろの竪穴住居跡とみられる。（小山）

SI48（第121～123図、PL. 21・119・176）

調査区東側、L5グリッドの標高69.7～70.1mの緩斜面に立地する。東側７mにはSI49がある。この建物は拡幅を伴う建て替えが行われており、建て替え前を旧SI48、建て替え後を新SI48と呼称する。

新SI48は、径5.5m、残存壁高68cmを測り、平面隅丸方形を呈す。壁溝は幅約10cmで、西側と南側で検出している。主柱穴はP1、P13、P5、P3の４基で、柱間距離はP1-P3間から順に3.2m、3.0m、3.3m、3.1mである。北東側および南西側の主柱穴間に、それぞれP17、P18があり、主柱穴に比べると浅く、補助柱穴と推定する。中央ピットP12は円形で、建物の中心よりやや南側に位置する。焼土面は中央ピットの南西側と北東側で検出した。

埋土は炭化物と焼土粒を含んでいる。また、北西壁際から炭化材が出土していることから、この建物は焼失後に廃棄されたものと考えられる。炭化材には板材と、みかん割りの丸太材があり、壁にもたれるような状態で出土したことから、焼け落ちた垂木材の一部であると考えられる。

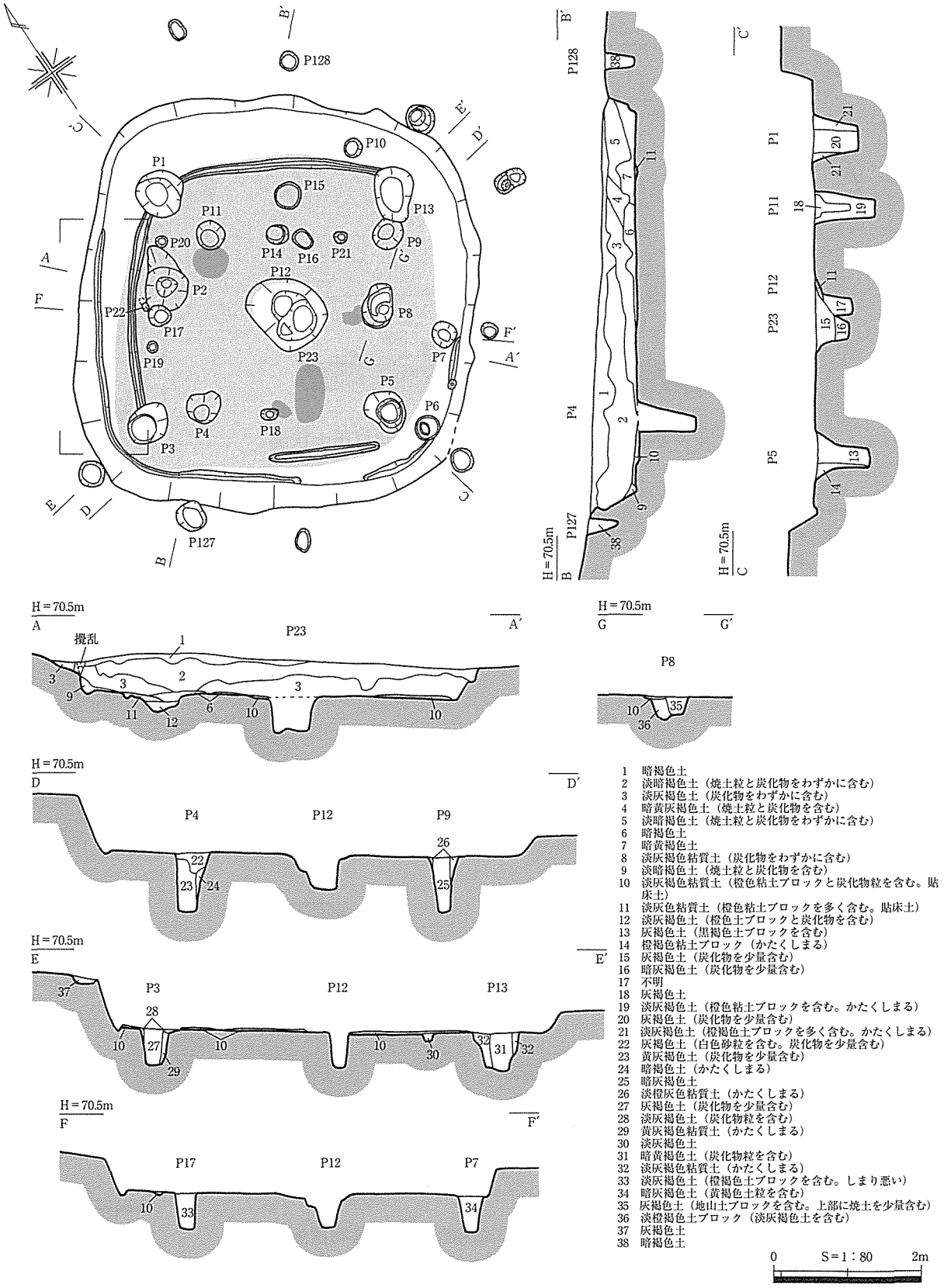
北西側を除いて、掘方を取り囲むような配置で、９基のピットを検出した。ピットの間隔は1.5m～２mで各辺３基ずつというまとまりが見られるが、深さにはばらつきがある。建物に伴う庇状の構造物の可能性がある。

旧SI48は、新SI48の貼床土除去後に検出したもので、特に主柱穴から壁際の範囲には厚く貼床が施されている。壁溝は南東側を除く３方で検出したが、隅は新SI48の主柱穴に切られている。平面は一辺3.8m前後の隅丸方形に復元される。主柱穴はP11、P9、P5、P4の４基で、P5は再使用されたと考えられる。柱間距離はP11-P9間から順に2.4m、2.5m、2.6m、2.4mある。中央ピットはP23で、拡幅のときに埋め戻され、それよりやや南寄りにＰ12が掘り直されたと考える。そのほかのピットは小規模で、性格が不明である。特にP17の北西側にある小ピットP22は北に向かって斜めに掘られており、中から土器片が出土している。小動物による攪乱の可能性が考えられる。

出土遺物には、埋土中から出土した弥生土器甕Po215～219、底部Po220、壺口縁部Po222、小型甕胴部Po223、器台Po224、縄文土器Po225がある。また、中央ピットの東側で台石が、北西側と南西側の壁寄り床

表26　笠見第３遺跡SI48ピット規模一覧表

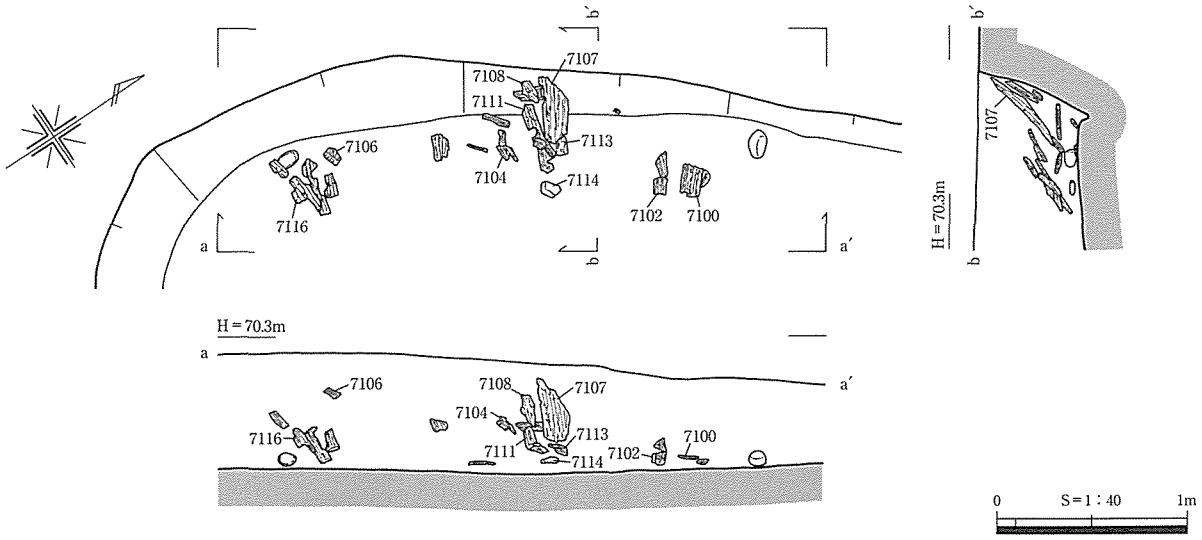
ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
Ｐ１	65×63－66	新SI48主柱穴	Ｐ13	75×53－54	新SI48主柱穴
Ｐ２	60×60－32		Ｐ14	31×24－24	
Ｐ３	62×49－52	新SI48主柱穴	Ｐ15	36×34－５	
Ｐ４	48×43－83	旧SI48主柱穴	Ｐ16	28×18－７	
Ｐ５	61×45－87	新旧SI48主柱穴	Ｐ17	31×27－51	
Ｐ６	34×33－13		Ｐ18	23×15－24	
Ｐ７	35×33－49		Ｐ19	16×14－14	
Ｐ８	53×33－36		Ｐ20	15×15－15	
Ｐ９	43×39－82	旧SI48主柱穴	Ｐ21	19×15－10	
Ｐ10	25×24－10		Ｐ22	11×８－	
Ｐ11	41×40－85	旧SI48主柱穴	Ｐ23	110×100－55	旧中央ピット
Ｐ12	110×100－49	新中央ピット			



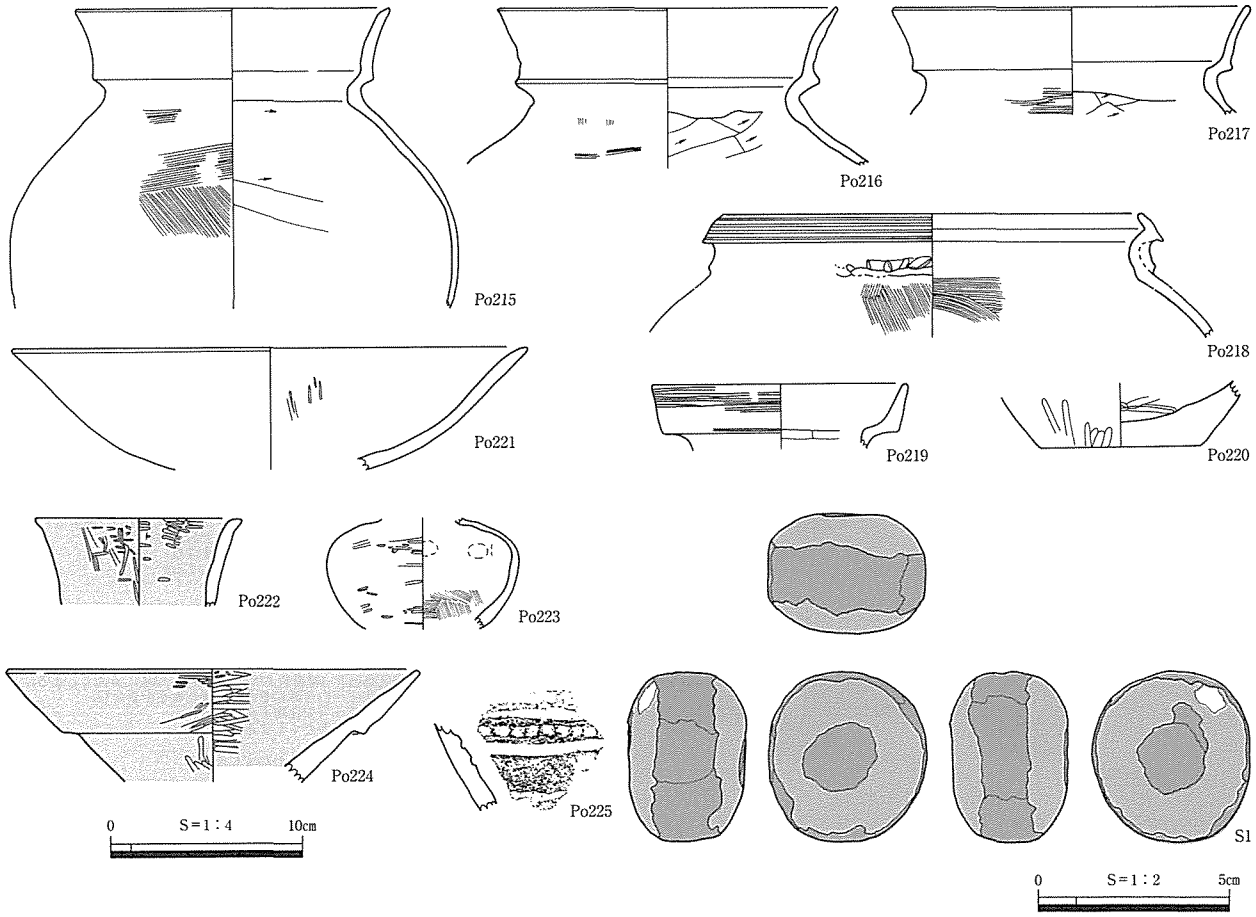
第121図　笠見第３遺跡SI48遺構図

面で凹石Ｓ15が出土している。

出土遺物等から、清水Ⅵ－２様式、弥生時代終末期ごろの竪穴住居跡と考えられる。（家塚）



第122図　笠見第３遺跡SI48炭化材出土状況

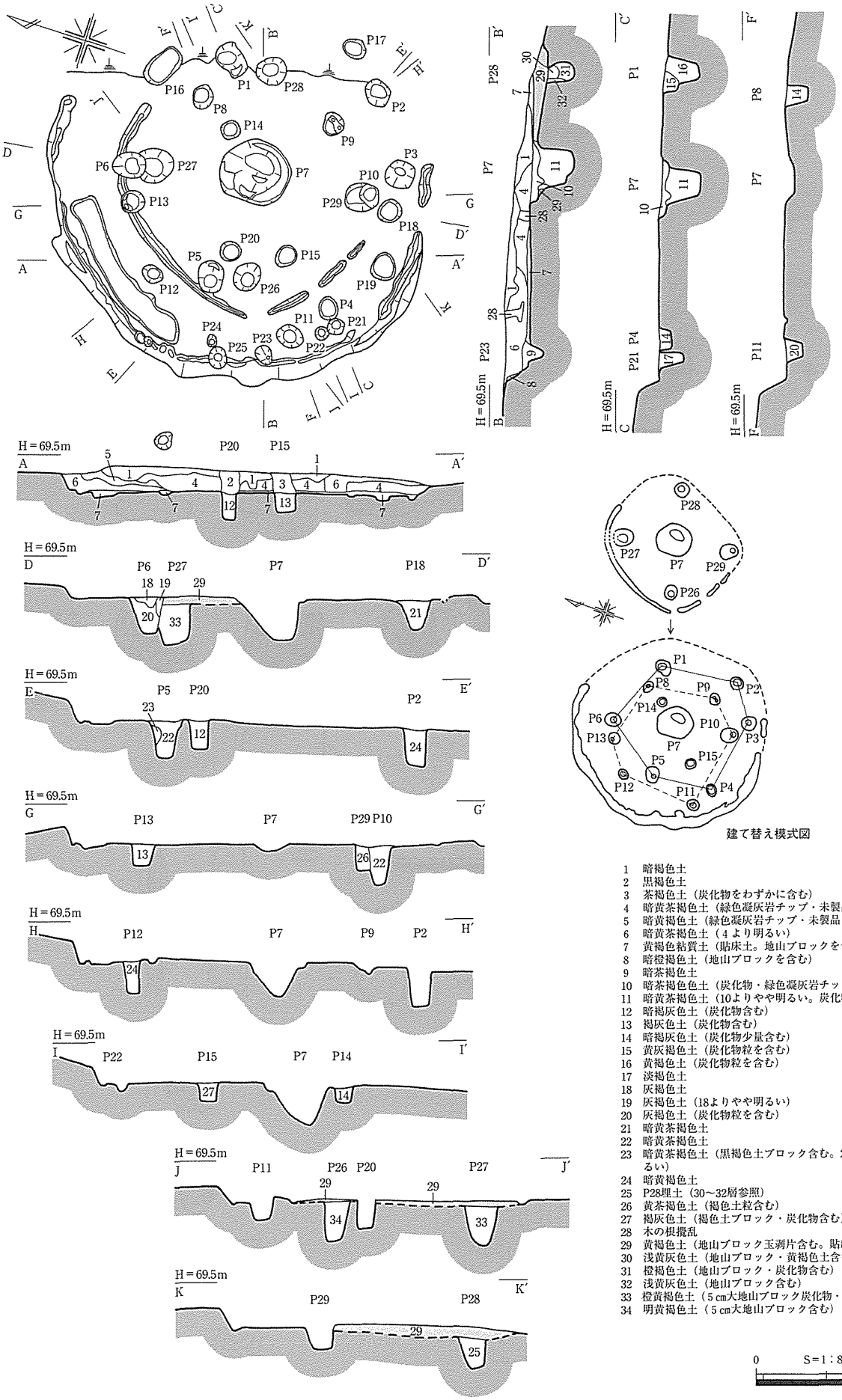


第123図　笠見第３遺跡SI48出土遺物実測図

SI49（第124～127図、PL. 22・120・175・176・178・179）

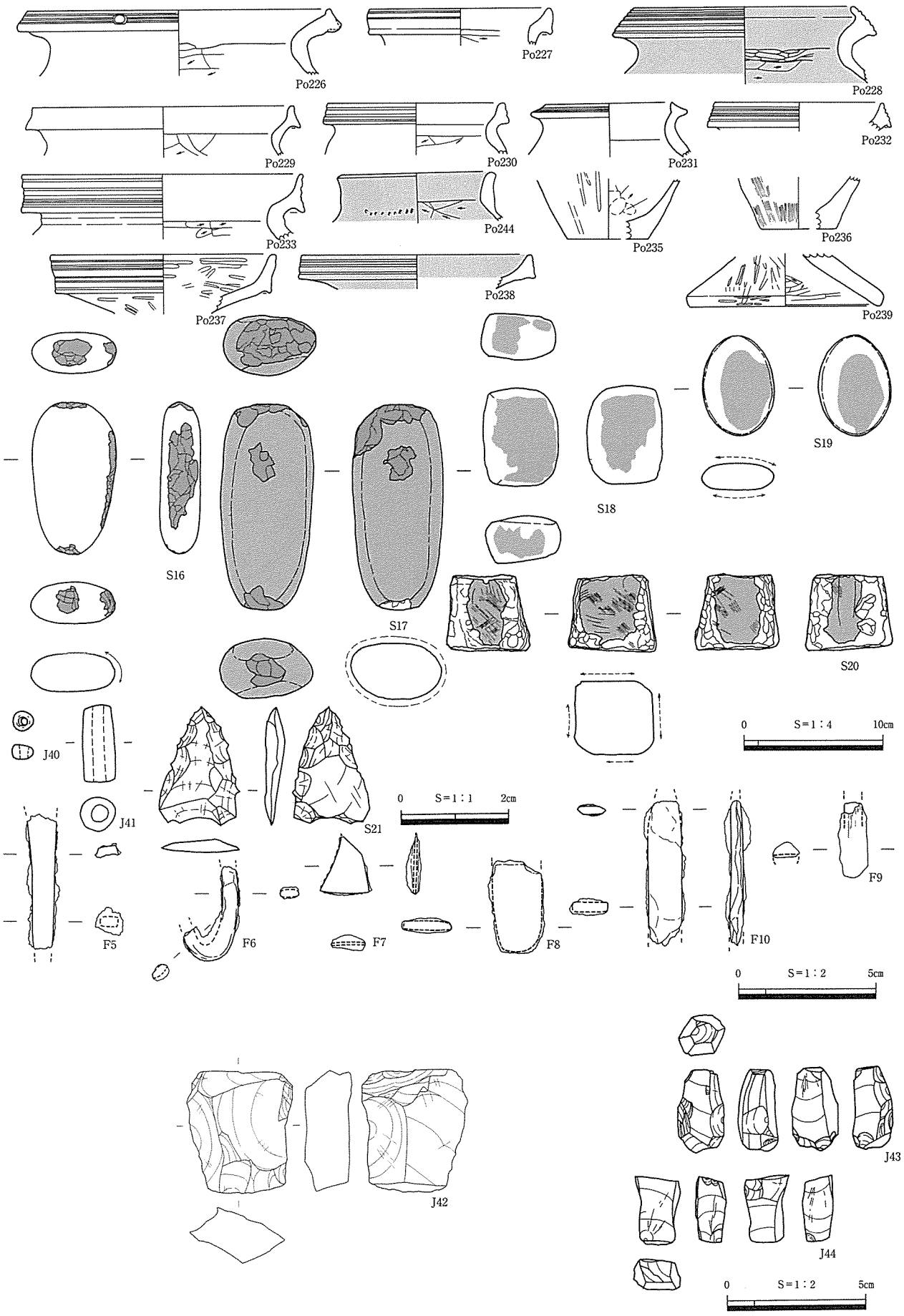
調査区東側、L4グリッドの緩やかに東側に傾斜する標高68.7～69.3mの斜面部に立地する竪穴建物跡である。２回の建て替えがあり、新しいものからSI49－１、－２、－３として記述することにする。

SI49－１は、北東側が流失しており、遺存状態はよくない。平面は円形または多角形（六角形か）を呈す。規模は、南北5.12m、東西4.3m以上、床面積18㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態が

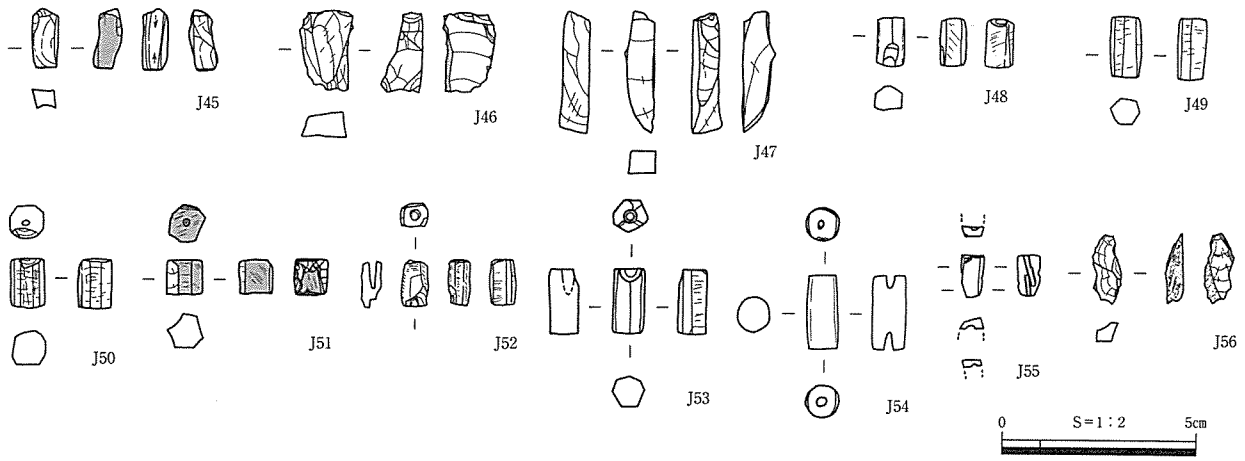


1　暗褐色土
2　黒褐色土
3　茶褐色土（炭化物をわずかに含む）
4　暗黄茶褐色土（緑色凝灰岩チップ・未製品を含む）
5　暗黄褐色土（緑色凝灰岩チップ・未製品を含む）
6　暗黄茶褐色土（４より明るい）
7　黄褐色粘質土（貼床土。地山ブロックを含む）
8　暗橙褐色土（地山ブロックを含む）
9　暗茶褐色土
10　暗茶褐色色土（炭化物・緑色凝灰岩チップを含む）
11　暗黄茶褐色土（10よりやや明るい。炭化物少量含む）
12　暗褐灰色土（炭化物含む）
13　褐灰色土（炭化物含む）
14　暗褐灰色土（炭化物少量含む）
15　黄灰褐色土（炭化物粒を含む）
16　黄褐色土（炭化物粒を含む）
17　淡褐色土
18　灰褐色土
19　灰褐色土（18よりやや明るい）
20　灰褐色土（炭化物粒を含む）
21　暗黄茶褐色土
22　暗黄茶褐色土
23　暗黄茶褐色土（黒褐色土ブロック含む。22よりやや明るい）
24　暗黄褐色土
25　P28埋土（30～32層参照）
26　黄茶褐色土（褐色土粒含む）
27　褐灰色土（褐色土ブロック・炭化物含む）
28　木の根攪乱
29　黄褐色土（地山ブロック玉剥片含む。貼床土）
30　浅黄灰色土（地山ブロック・黄褐色土含む）
31　橙褐色土（地山ブロック・炭化物含む）
32　浅黄灰色土（地山ブロック含む）
33　橙黄褐色土（５cm大地山ブロック炭化物・玉剥片出土）
34　明黄褐色土（５cm大地山ブロック含む）

第124図　笠見第３遺跡SI49遺構図



第125図　笠見第３遺跡SI49出土遺物実測図(1)



第126図　笠見第３遺跡SI49出土遺物実測図(2)

第127図　笠見第３遺跡SI49玉未成品・剥片出土状況図

よい南西壁で最大35cmを測る。壁際には幅６～10cm、深さ２cm前後の浅い壁溝がほぼ半周している。

主柱穴は、P1からP6である。主柱穴の埋土は暗黄褐色又は暗茶褐色系である。主柱穴間距離は、P1-P2間から順に2.2m、1.2m、2.1m、1.7m、2.0m、2.0mである。主柱穴は、建物の中央部ではなくやや東側に配列されている。

建物中央には、大型の中央ピットP7が掘り込まれている。埋土は、建物下層の埋土とほぼ同質の

もので、P7は建物廃絶まで開口していたものと考えられる。埋土中で緑色凝灰岩剥片が出土している。

中央ピットを挟んでP14、P15があるが、位置的に棟持柱穴と考えられる。その他床面上で、P16からP25が掘り込まれているが、用途は不明である。

また、床面ほぼ全域に貼床（第７層）が認められた。焼土面は確認されなかった。

表27　笠見第３遺跡SI49ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備考(調査時ピット番号)	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備考(調査時ピット番号)
Ｐ１	49×36－48	－１主柱穴(Ｐ18)	Ｐ16	61×33－20	用途不明(Ｐ24)
Ｐ２	38×36－56	－１主柱穴(Ｐ16)	Ｐ17	34×27－22	用途不明(Ｐ17)
Ｐ３	40×39－44	－１主柱穴(Ｐ10)	Ｐ18	34×30－20	用途不明(Ｐ９)
Ｐ４	32×27－22	－１主柱穴(Ｐ７)	Ｐ19	40×33－７	用途不明(Ｐ８)
Ｐ５	45×36－53	－１主柱穴(Ｐ５)	Ｐ20	30×28－40	用途不明(Ｐ12)
Ｐ６	42×36－53	－１主柱穴(Ｐ２)	Ｐ21	25×24－34	用途不明(Ｐ23)
Ｐ７	100×93－60	中央ピット(Ｐ13)	Ｐ22	20×18－11	用途不明(Ｐ22)
Ｐ８	30×28－37	－２主柱穴(Ｐ１)	Ｐ23	31×21－23	用途不明(Ｐ21)
Ｐ９	32×31－10	－２主柱穴(Ｐ25)	Ｐ24	18×13－12	用途不明(Ｐ19)
Ｐ10	50×40－54	－２主柱穴(Ｐ15)	Ｐ25	30×25－28	用途不明(Ｐ20)
Ｐ11	39×32－25	－２主柱穴(Ｐ６)	Ｐ26	45×39－49	－３主柱穴(Ｐ26)
Ｐ12	27×25－46	－２主柱穴(Ｐ４)	Ｐ27	55×48－53	－３主柱穴(Ｐ27)
Ｐ13	33×30－30	－２主柱穴(Ｐ３)	Ｐ28	45×39－44	－３主柱穴(Ｐ28)
Ｐ14	26×25－24	－１棟持柱(Ｐ11)	Ｐ29	※50×40－33	－３主柱穴(Ｐ29)

SI49－２は、主柱穴が－１より西側に配列されたP8からP13である。主柱穴間距離は、P8－P9間から順に1.9m、1.2m、2.3m、2.1m、1.1m、1.8mである。－１と－２の前後関係の詳細については不明であるが、－１が一回り大きいことから－１のほうがやや新しいと考える。

SI49－３は、－１の内側の貼床を除去して検出された壁溝及びピットから確認されたものである。平面は方形を呈すと考えられる。主柱穴は、P26からP29の４基である。主柱穴間距離は、P26－P27間から順に2.1m、2.1m、2.2m、2.0mである。

床面のほぼ全域で第29層による貼床が認められた。

埋土は、６層に分層できた。第４層以上は自然堆積したものと考えられる。

出土遺物には、図化できたもののうち床面から磨石S18・19、石鏃S21、鉄器F5～７、P13内から弥生土器甕Po227、管玉未成品J48がある。また、埋土中から弥生土器甕Po226・228～236、器台Po237・238、蓋Po239、敲石S16・17、砥石S20、ガラス小玉J40、管玉J41、石鏃S21、管玉未成品J42～47・49～56の他、緑色凝灰岩及び碧玉剥片多数が出土しており、玉作工房と考えられる。管玉未成品及び剥片は貼床土中からも検出されており、長期にわたって工房として使用されたものと考えられる。

時期は、出土遺物から清水Ｖ－１様式、弥生時代後期前葉ごろのものと考えられる。また、碧玉・緑色凝灰岩剥片・未成品の産地同定分析の結果、７点のうち碧玉剥片１点が花仙山産のものと判明した。その他のものは、不明か女代南Ｂ遺物群に類似するものとされ、弥生時代後期前半ごろで、玉原石獲得地が山陰（花仙山）にも目が向けられるようになったものと推定される。（牧本）

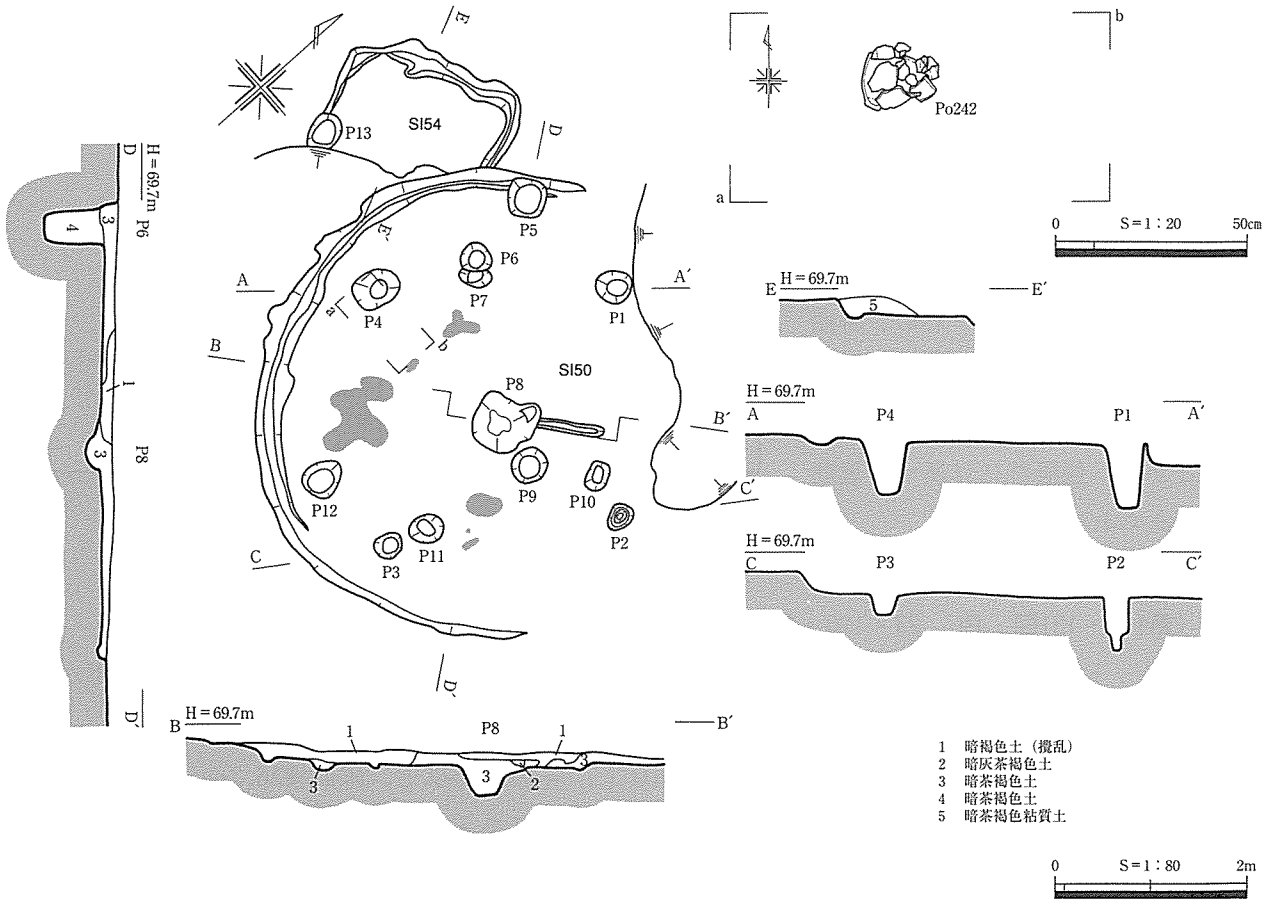
SI50（第128・129図、PL. 22・120）

I5グリッドの標高69.5mの緩斜面に立地する。北東部は床面が流失し、南西部は壁溝がかろうじて残存するにすぎない。

平面円形を呈し、復元径が4.9m、床面積15.6㎡以上を測る。壁高は、最も残りがよい北側で19cmである。壁溝は幅８～28cm、深さ５～７cmで、西側のみで検出できた。

主柱穴はP1～P4と考えられる。ただしP3は深さ18cmと浅い。柱間は、P1－P2間から順に、2.4m、2.4m、2.7m、2.5mである。

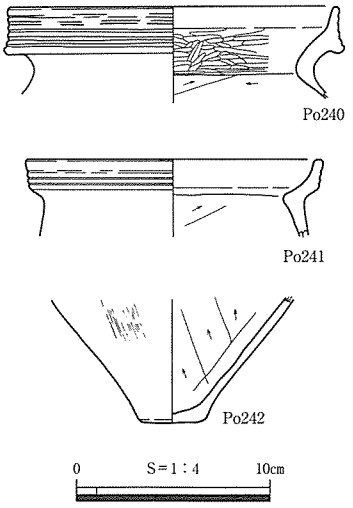
P7は中央ピットで、北東側へ延びる幅10cm前後、深さ３～５cmの溝が接続する。また南半部の床面には８カ所で焼土面が認められた。



第128図　笠見第３遺跡SI50・54遺構図

表28　笠見第３遺跡SI50ピット一覧表　　△は残存値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
Ｐ１	39×35－69	主柱穴	Ｐ８	72×68－110	
Ｐ２	28×24－58	主柱穴	Ｐ９	37×36－48	
Ｐ３	30×25－24	主柱穴	Ｐ10	30×25－23	
Ｐ４	50×38－56	主柱穴	Ｐ11	36×32－19	
Ｐ５	44×43－63		Ｐ12	40×37－54	
Ｐ６	33×30－21		Ｐ13	36×32－40	
Ｐ７	33×14△－14				



第129図　笠見第３跡SI50出土遺物実測図

埋土は厚さ10cm前後の暗茶褐色土で、一部攪乱が床面まで及ぶ。

出土遺物は、図化できたものに弥生土器甕Po240～242がある。Ｐ4付近の床面からPo242が出土した他は、埋土中からの出土である。

出土遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（小山）

SI54（第129図、PL. 23）

調査区北東側、I5グリッドの標高69.5mの緩斜面に立地し、SI50と切り合うが前後関係は不明である。南壁は梨畑の攪乱により削平を受け、遺存状況は悪い。一辺が1.9m程度の方形を呈すと思われ、壁高は最も残りが良好な北西隅で20cm、床面積1.6m²以上である。壁際には幅６～24cm、深さは

１～５cmの壁溝がめぐる。床面で壁溝と重複する（36×32－40）cmを測るP13を１基検出したが、当該遺構に伴うものか否か不明である。

埋土は、暗茶褐色粘質土単層である。

出土遺物も顕著でないため、時期決定は困難である。通常の竪穴住居跡とみるにはあまりにも規模が小さいことから、住居跡に付属する建物跡と考えられる。（小山）

表29　笠見第３遺跡SI51ピット一覧表

ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ﾋﾟｯﾄ番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
Ｐ１	61×61－37	主柱穴	Ｐ13	48×42－43	主柱穴
Ｐ２	35×30－49	建て替え前主柱穴	Ｐ14	25×23－22	
Ｐ３	57×40－49		Ｐ15	24×20－８	
Ｐ４	52×46－17	貼床土下	Ｐ16	53×44－44	主柱穴
Ｐ５	51×46－31	主柱穴	Ｐ17	60×56－35	主柱穴
Ｐ６	60×45－40		Ｐ18	35×13－32	
Ｐ７	55×37－50	建て替え前主柱穴	Ｐ19	41×35－57	
Ｐ８	41×36－66	建て替え前主柱穴	Ｐ20	25×20－20	
Ｐ９	40×28－36		Ｐ21	51×41－53	建て替え前主柱穴(柱痕有)
Ｐ10	31×30－36	建て替え前主柱穴	Ｐ22	132×120－22	中央ピット
Ｐ11	44×40－48	主柱穴	Ｐ23	40×39－64	主柱穴
Ｐ12	53×40－32		Ｐ24	48×41－60	柱痕有

SI51（第130・131図、PL. 23・120・176）

H5グリッドの標高68.8m付近ほぼ平坦面に立地する。検出面は大きく削平されており、わずかな掘り込みが見られるに過ぎない。南側にSI52が接している。

平面円形ないし七角形を呈し、復元東西7.3m以上、南北6.8m以上、床面積36.2㎡以上を測る大型の竪穴建物跡である。壁高は最も残りがよい西側で24cmである。壁溝は幅７～15cm、深さ２～４cmで、一部二重に検出されていることから建て替えがあったものと思われる。

主柱穴はP1・５・16・23・11・13・17と考えられ、柱間は、P1-P5間から順に2.8m、3.4m、2.2m、2.7m、2.9m、2.4m、3.2mである。建て替え前の主柱穴は、P2・７・８・10・21と思われ、P10-P21間には更に1ないし２基ピットがあったものと思われるがすでに失われていた。柱間は、P21-P2間から順に2.3m、2.9m、2.3m、2.5mである。P21では柱痕が確認でき、柱は径約20cmに復元できる。その他にもピットが検出されたが、用途及びSI51に伴うものかは不明である。なお、P4、P21は貼床層下で検出され、P24でも柱痕が検出されている。復元される柱は径約14cmである。

P22は二段掘りになる中央ピットで、P5に繋がる幅20cm前後、深さ４～６cmの溝が接続する。中央ピット西側の床面に焼土面が１箇所認められた。

埋土はわずかに２層に分層でき、床面には中央ピット付近及びP21上で貼床が一部認められた。

出土遺物は、図化できたものに弥生土器甕Po243～245・247～249、器台Po246、装飾壺Po250・251、凹石S22、磨石S23がある。Po248がP8内から出土した以外は、埋土下層からの出土である。

出土遺物等から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（小山）

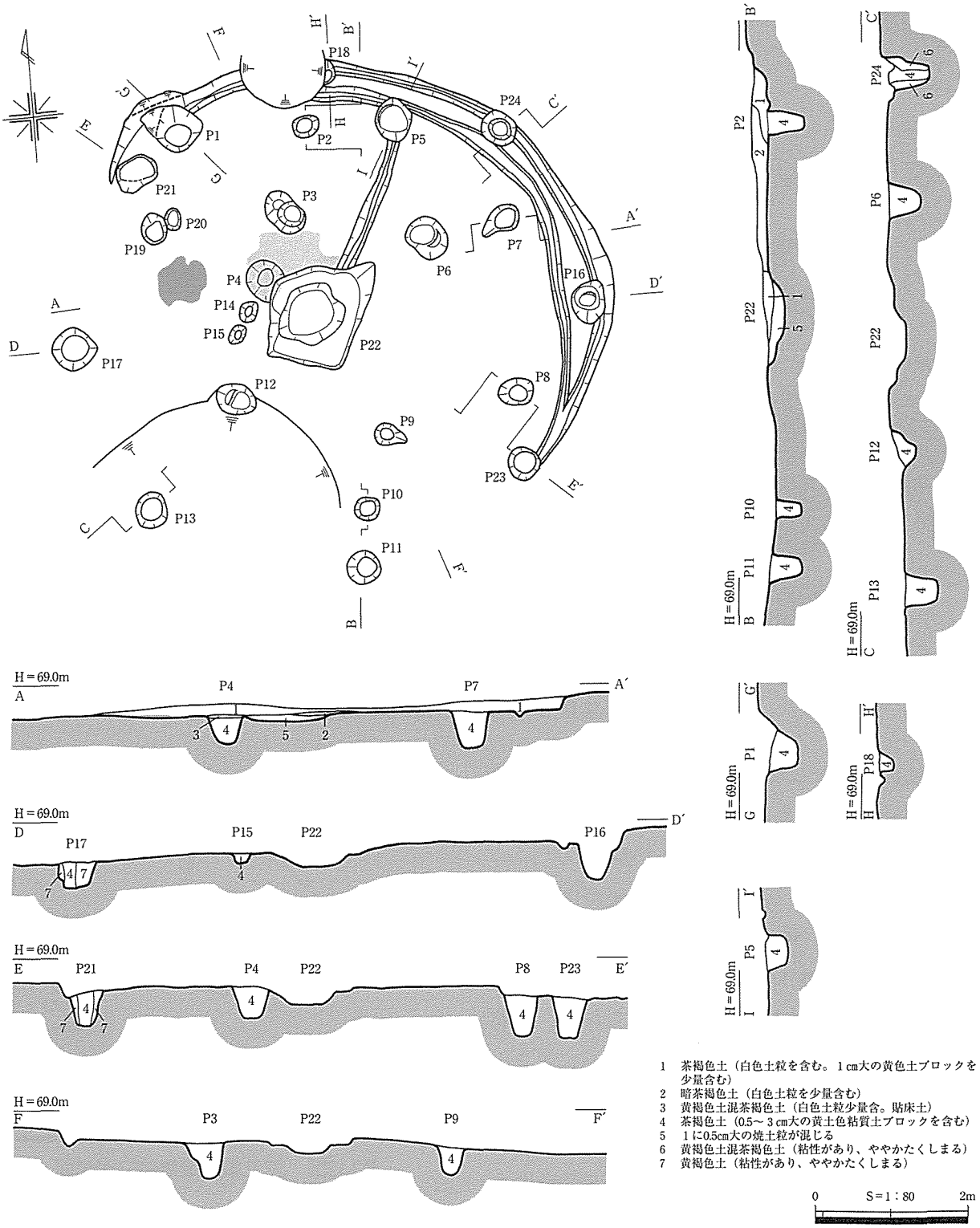
SI53（第132・133図、PL. 23・120）

H5グリッドの標高70.4m付近のほぼ平坦面に立地し、SI54と接するようにある。

平面方形を呈すと思われ、南北2.7m、東西2.5m、壁高は最大20cm、床面積3.7㎡以上を測る。西側壁際には幅10cm、深さは３～５cmの壁溝がめぐるが、本来は全周していたものと思われる。

床面で（38×37－36）cmを測るP1を１基検出したが、当遺構に伴うものか否か不明であり、主柱穴はない可能性がある。

埋土は、茶褐色土単層である。



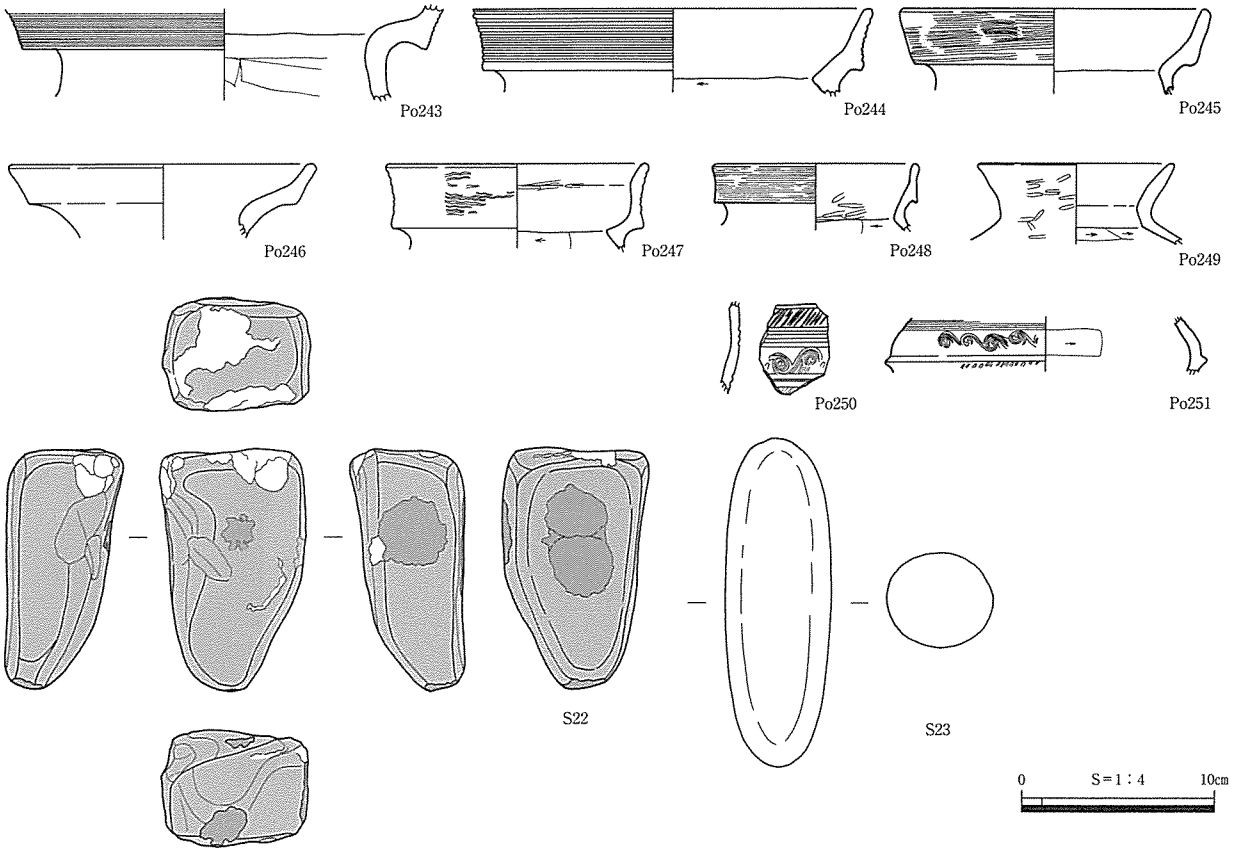
第130図　笠見第３遺跡SI51遺構図

出土遺物は、図化したものに埋土下層中から出土した弥生土器甕Po252、底部Po253がある。

出土遺物等から、清水Ⅵ－２様式、弥生時代終末期ごろの竪穴住居跡と考えられる。（小山）

SI55（第134・135図、PL. 24・121）

調査区北東側、I3グリッドの標高65.8m～66.3m付近の東側急斜面に立地する。検出面は弥生時代



第131図　笠見第３遺跡SI51出土遺物実測図

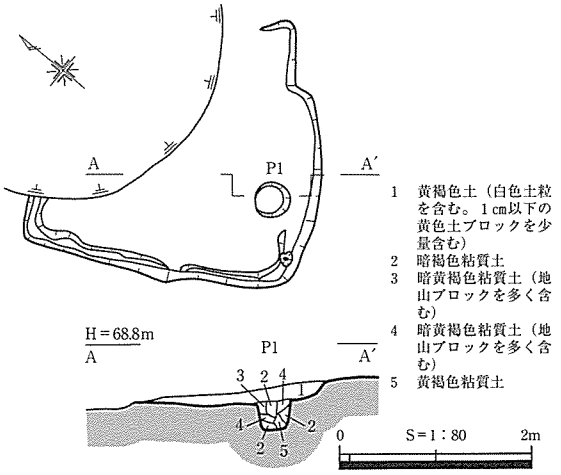
後期の包含層である暗茶褐色土を除去した後に検出した。SS3と重複するが、SS3がSI55の埋土を掘り込んでいることから、当建物跡が古い。

東壁は流失しているが、その他の壁面は比較的良好に遺存する。規模は長軸3.4m、短軸2.3m以上、最も良好な西壁で壁高83cmを測る。床面積5.2m²以上を測り、平面方形を呈すとみられる。西壁際と北壁及び南壁際の一部に幅７～14cm、深さ１～２cmの壁溝がめぐる。

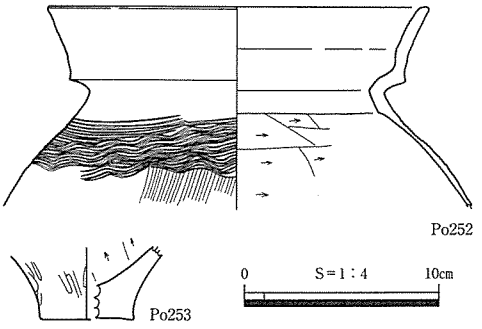
西側壁で検出したピットは、SI55の埋土上面から掘り込んだもので、時期は新しい。SI55に伴うピットは床面で検出したP1・２と考えられる。このほかに上屋構造を探る手がかりとなるものは見受けられないが、これは急斜面といった特異な立地に起因するものかもしれない。なお、P1は埋土に黒褐色土が互層状に入り、落し穴の可能性もある。

埋土は、黄茶褐色土を主体とするもので、斜面上方からの自然堆積による埋没とみられる。

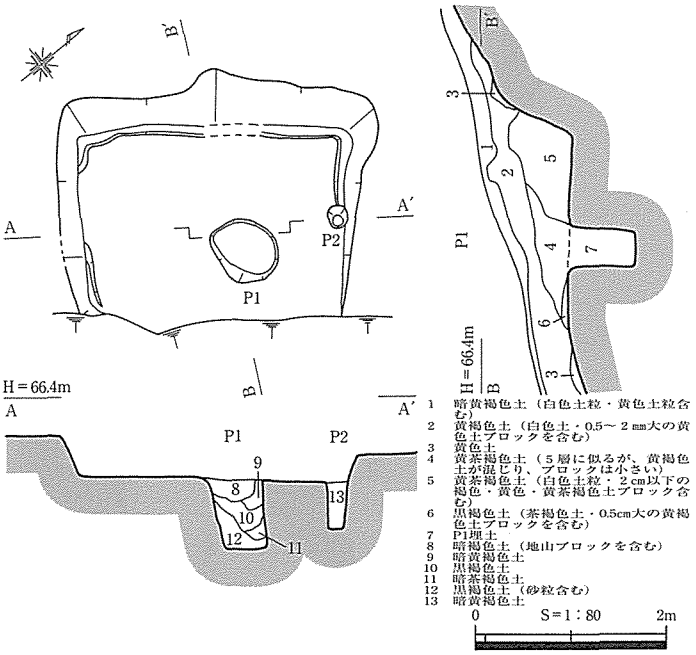
出土遺物は、図化できたものに埋土中からの弥生土器



第132図　笠見第３遺跡SI53遺構図



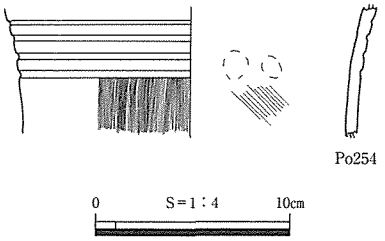
第133図　笠見第３遺跡SI53出土遺物実測図



第134図　笠見第３遺跡SI55遺構図

表30　SI55ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	75×62－72	
P２	23×20－47	



第135図　笠見第３遺跡SI55
出土遺物実測図

壺Po254がある。

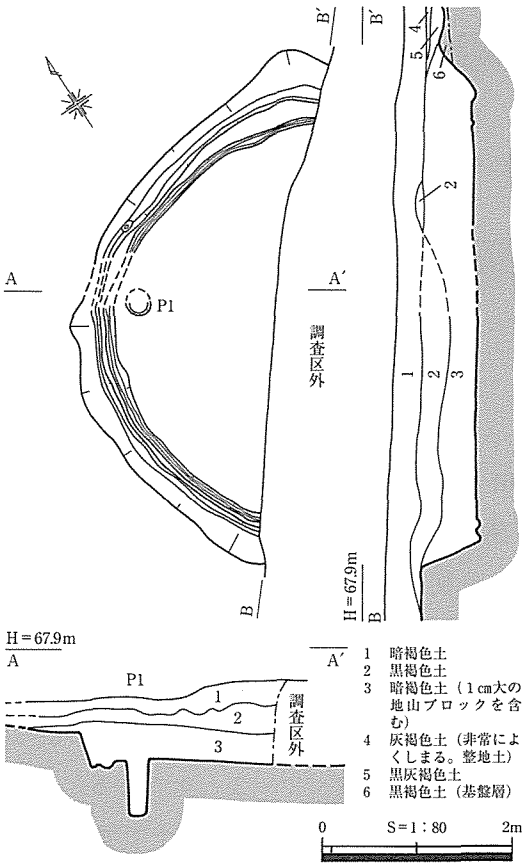
出土遺物から、弥生時代中期に遡る竪穴住居跡と考えられる。（小山）

SI59（第136図、PL. 24）

調査区北際、E5・６グリッドの標高66.8～67mの緩やかに北西へ傾斜する斜面部に立地する。当遺構は、弥生時代中期から後期前半の遺物包含層を除去した後に検出した。東側半分以上は現農道下にあり、調査することができなかった。

平面は円形を呈すものと思われ、規模は、径約4.1m、床面積3.2㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態がよい南西側で最大39cmを測る。壁際には幅10cm、深さ4～６cmの壁溝が二重にめぐる。このことから、建て替えがあったものと考えられる。

主柱穴として検出したものは、（24×14－60）cmを測るP1のみである。その他は調査区外にある。中央ピット等は検出できなかった。

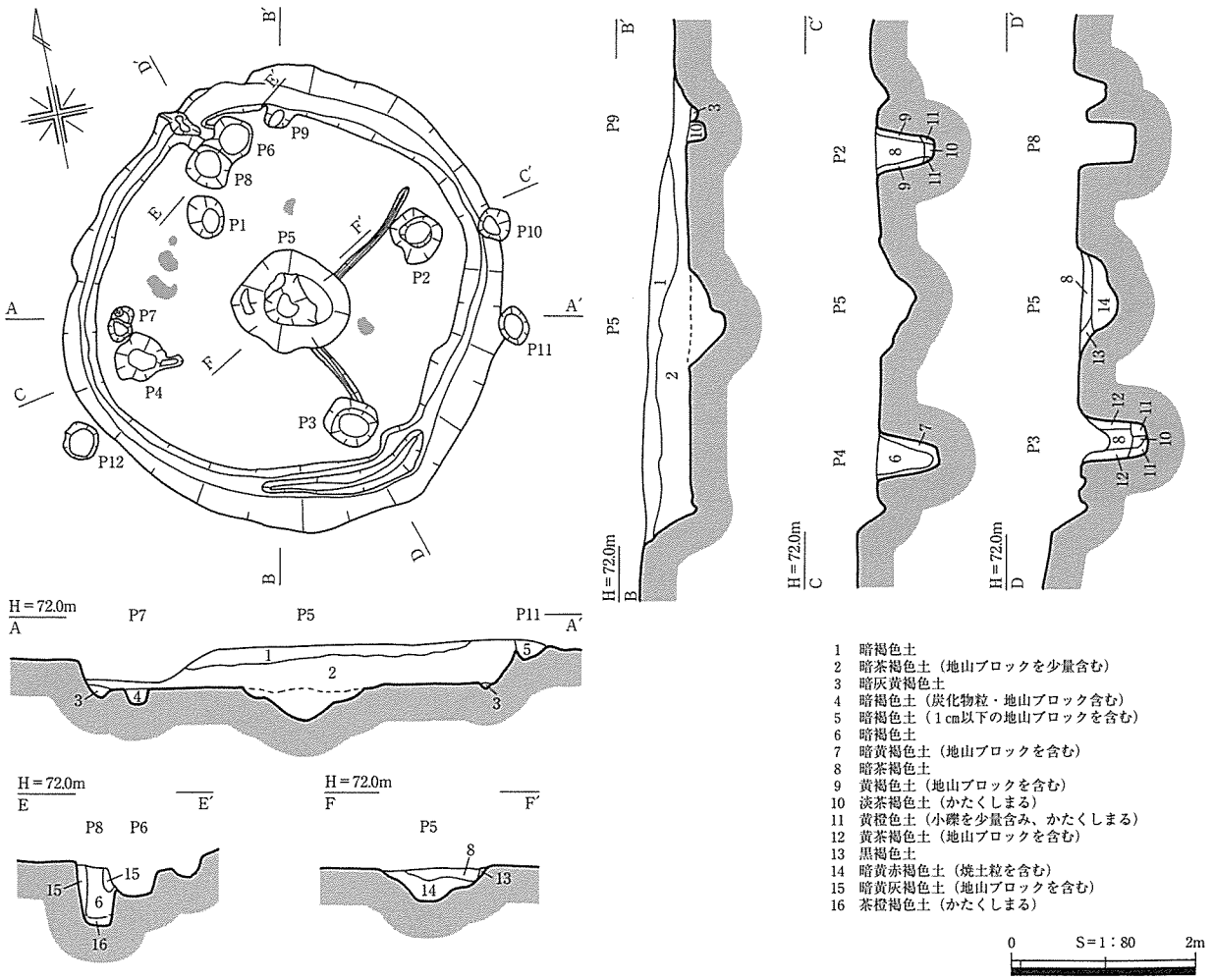


第136図　笠見第３遺跡SI59遺構図

また、床面中央ピットの周囲に不整形な焼土面が６箇所認められた。

埋土は第３層のみで、主柱穴の埋土も同様のものであることから、柱等抜き取られた後に埋没したものと考えられる。

出土遺物はなく、正確な時期は不明であるが、前述したように遺物包含層除去後に検出したことから、弥生時代後期前半以前の竪穴住居跡と考えられる。（牧本）



第137図　笠見第３遺跡SI61遺構図

SI61（第137・138図、PL. 24・121）

調査区やや西側、H17グリッドの標高71.7m付近のほぼ平坦面に立地する。周辺は、梨耕作の攪乱により削平されている。北側約0.5mにSI62がある。

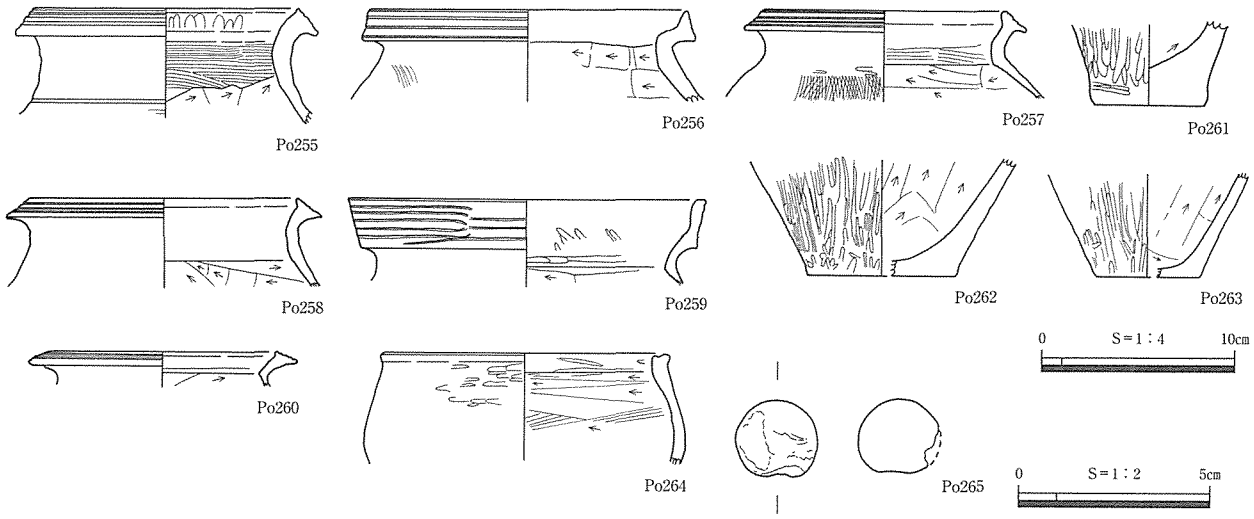
平面は隅丸方形を呈す。規模は、南北3.8m、東西3.7m、床面積12.0m²を測る。残存壁高は、最も遺存状態がよい南壁で最大54cmを測る。壁際には幅15～25cm、深さ５～15cmの壁溝が全周している。南東隅で壁溝が二重になることから、建て替えの可能性がある。

主柱穴は、P8・２・３・４である。P2・３・４には柱痕が認められ、推定される柱径は約20cmである。主柱穴は暗黄褐色系の土で埋め戻されたものと推定される。柱穴間距離は、P2-P3間から順に2.2m、2.4m、2.2m、2.4mである。

建物中央には、二段掘りの中央ピットP5が掘り込まれている。P5の埋土は、３層に分層でき、第14層は焼土粒を含む。建物下層の埋土とは異なることから、廃絶の際には、既に埋まっていた可能性がある。また、中央ピットに向かい幅７cm前

表31　SI61ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	47×37－36		P７	37×25－17	
P２	53×46－61	主柱穴	P８	46×44－64	主柱穴
P３	57×52－74	主柱穴	P９	25×23－22	
P４	50×50－70	主柱穴	P10	36×34－29	
P５	116×105－40	中央ピット	P11	37×33－39	
P６	49×41－22		P12	41×36－38	



第138図　笠見第３遺跡SI61出土遺物実測図

後、深さ２㎝前後の２本の溝が接続している。仕切り溝の可能性がある。その他のピットは、用途不明である。

また、床面主柱穴に囲まれる範囲内に不整形な焼土面が５箇所認められた。

SI61の埋土は、２層に分層でき自然堆積したものと考えられる。

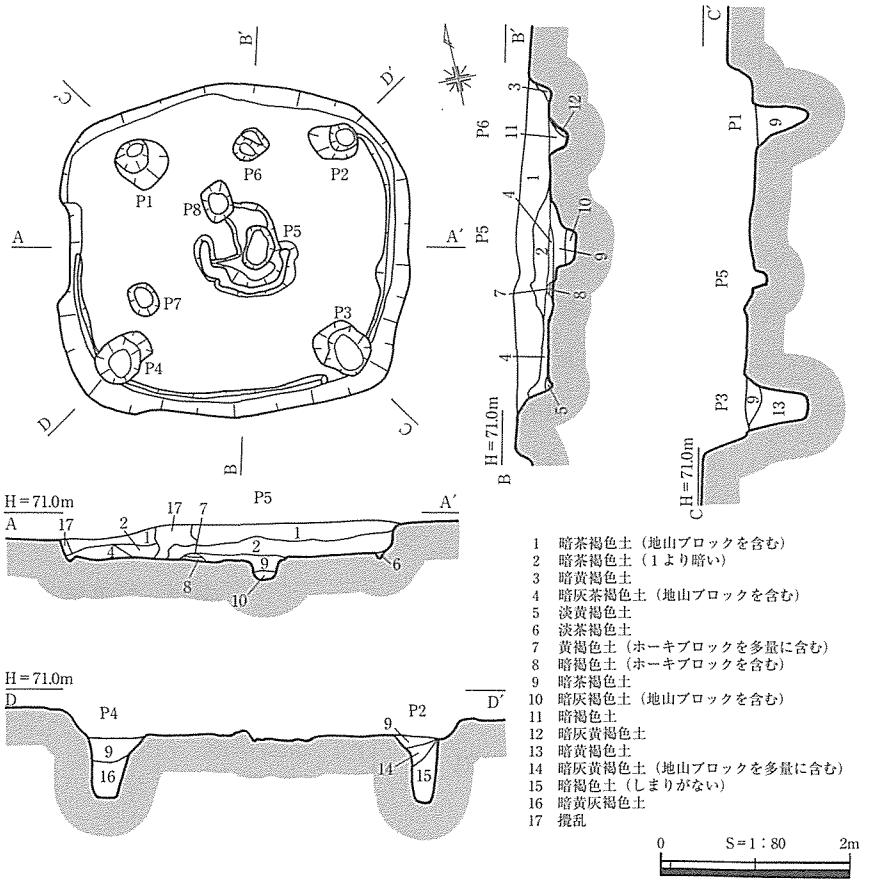
出土遺物は、図化できたものに弥生土器甕Po255～260、底部Po261～263、鉢Po264、土玉Po265がある。Po259がP6内から出土した以外は埋土中からの出土である。

出土遺物等から清水Ⅴ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

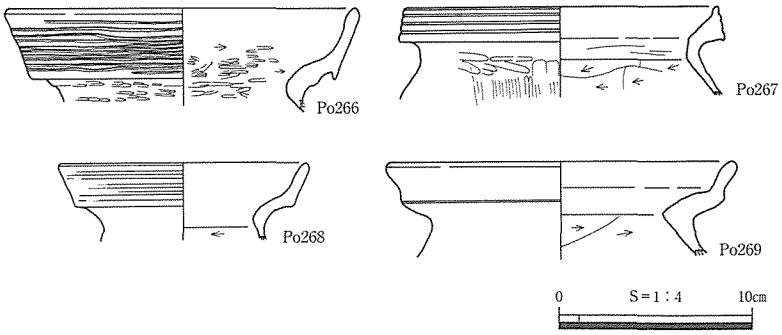
SI62（第139・140図、PL.　25・121）

調査区やや西側、G16・17グリッドの標高71.3m付近のほぼ平坦面に立地する。周辺は、梨耕作の攪乱により削平されている。南側約0.5mにSI61がある。

平面は隅丸方形を呈す。規模は、南北3.1m、東西3.25m、床面積9.0



第139図　笠見第３遺跡SI62遺構図



第140図　笠見第３遺跡SI62出土遺物実測図

表32　笠見第３遺跡SI62ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	53×52－61	主柱穴
P２	52×39－71	主柱穴
P３	65×48－66	主柱穴
P４	64×44－50	主柱穴
P５	45×25－25	中央ピット
P６	35×31－15	
P７	37×27－20	
P８	40×32－17	

㎡を測る。残存壁高は、最も遺存状態がよい南壁で最大33cmを測る。壁際には、北側は途切れるが幅10cm、深さ５cm前後の壁溝がめぐる。

主柱穴は、P1～P4である。柱穴間距離は、P1-P2間から順に2.2m、2.3m、2.4m、2.2mである。主柱穴は、埋没時には抜き取られていたものと考えられる。

建物中央には、南側に高さ約５cmの盛土（第７・８層）による土手をもつ中央ピットP5が掘り込まれている。P5の埋土は、建物下層の埋土と同様であることから、廃絶の際にはまだ埋っていなかった可能性が高い。その他のピットは、用途不明である。焼土面は検出されなかった。

埋土は、４層に分層でき自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は、図化できたものに埋土中から出土した弥生土器甕Po266～269がある。

出土遺物等から清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

SI63（第141・142図、PL. 25・121）

調査区やや西側、I16グリッドの標高72.4m付近のほぼ平坦面に立地する。周辺は、梨耕作の攪乱により削平されている。南東側にSI143が接し、北東側約１mにはSI64がある。

平面は円形を呈す。規模は、南北4.3m、東西4.4m、床面積9.8㎡を測る。残存壁高は、最も遺存状態がよい南壁で最大42cmを測る。壁際には、幅14～22cm、深さ４～15cm前後の壁溝が全周する。

主柱穴は、P1～P4である。柱穴間距離は、P1-P2間から順に2.3m、2.4m、2.4m、2.5mである。P３・４では柱痕が確認され、推定される柱径は約20cmである。その他のピットは、用途不明である。

中央ピット、焼土面、貼床は確認できなかった。

埋土は、３層に分層できたが、埋没の過程は不明である。

出土遺物は、図化できたものに埋土中から出土した弥生土器甕Po270、底部Po271がある。

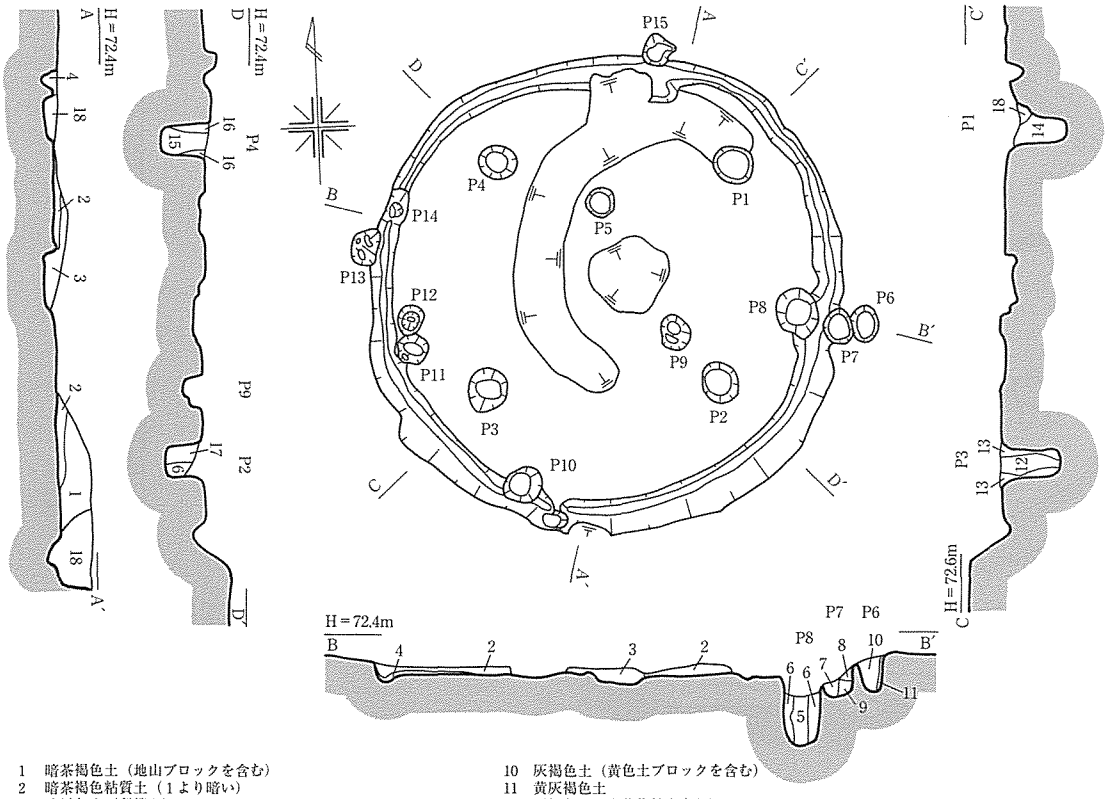
出土遺物等から、弥生時代中期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

表33　笠見第３遺跡SI63ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	44×39－56	主柱穴	P９	32×32－21	
P２	44×39－62	主柱穴	P10	42×37－78	
P３	48×43－63	主柱穴	P11	33×28－24	
P４	37×35－58	主柱穴	P12	31×26－12	
P５	36×27－43		P13	41×31－31	
P６	36×27－43		P14	35×23－22	
P７	35×30－34		P15	30×25－26	
P８	50×46－73				

SI64（第143・144図、PL. 25・121・176）

調査区中央部、H15・I15グリッドの標高71.9～72.3mの南から北へ緩



1　暗茶褐色土（地山ブロックを含む）
2　暗茶褐色粘質土（１より暗い）
3　暗褐色土（梨攪か）
4　暗黄褐色土
5　暗灰褐色土
6　灰褐色土（地山ブロック・炭化物含む）
7　淡灰褐色土
8　淡灰褐色土（かたくしまる。裏込め土）
9　淡灰褐色土（かたくしまる。ATブロックを多く含む。裏込め土）
10　灰褐色土（黄色土ブロックを含む）
11　黄灰褐色土
12　灰褐色土（炭化物粒を含む）
13　黄褐色粘質土（黄色土ブロックを多く含む。裏込め土）
14　灰褐色土（黄色土ブロックを多く含む）
15　灰褐色土（黄色土ブロック・炭化物粒を含む）
16　黄灰褐色土
17　淡灰褐色土（黄橙色粘土ブロック・炭化物粒を多く含む。裏込め土）
18　攪乱

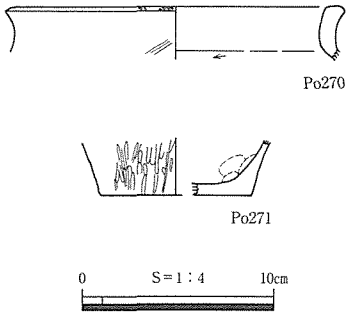
0　S=1：80　2m

第141図　笠見第３遺跡SI63遺構図

やかに下る斜面地に立地している。

遺存状態はよい。平面形は不整円形を呈する。規模は長軸5.9m、短軸5.6m、床面積は20㎡を測る。残存壁高は、南側で最大49cmを測る。壁溝は幅約６～20cm、深さ約13cmを測り、全周する。断面はＵ字状を呈する。

主柱穴はP1～P5の５基で、主柱間距離はP1-P2から順に2.5m、2.35m、2.3m、2.45m、2.35mである。P6は中央ピットで、周囲に土手を持つ。土手は、幅約９～20cm、高さ約５cmである。埋土中には炭化物が少量含まれている。その他のピットは用途不明である。



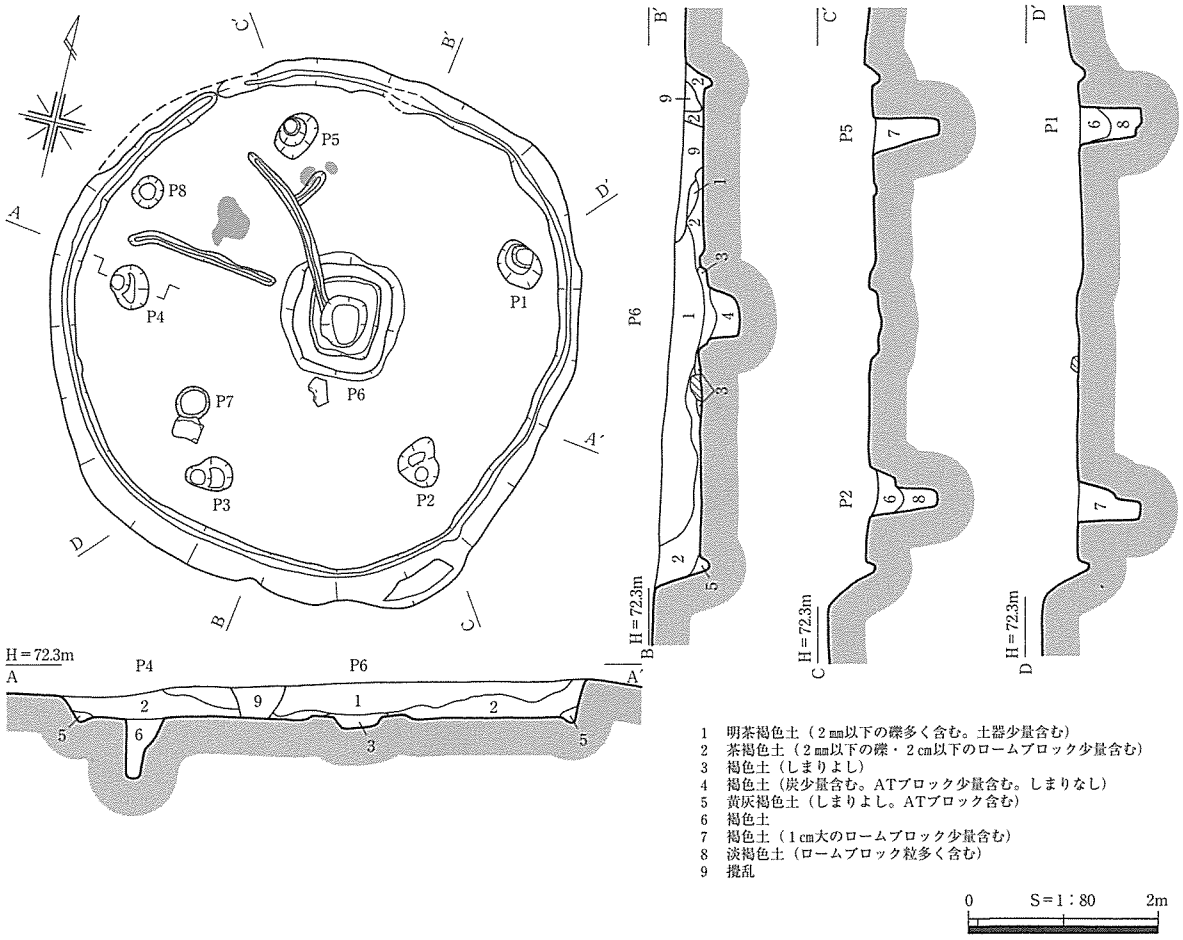
第142図　笠見第3跡SI63出土遺物実測図

その他床面で溝と被熱硬化した焼土面を検出した。床溝は、西側と中央ピットからのものと２条あり、長さ約1.6m、幅8～13cm、深さ２～４cmを測る。中央ピットから伸びる床溝は二股に分かれる。用途は不明である。焼土は床溝付近に２～３箇所見られる。

埋土は、自然堆積と考えられる。

表34　笠見第３遺跡SI64ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	53×38－67	主柱穴	P５	50×35－69	主柱穴
P２	45×35－69	主柱穴	P６	53×49－34	中央ピット
P３	50×21－66	主柱穴	P７	36×35－53	
P４	45×27－62	主柱穴	P８	34×30－27	

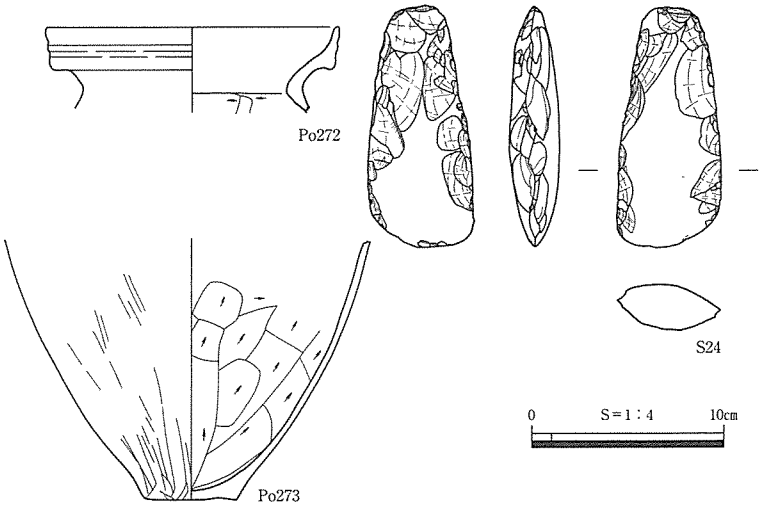


第143図　笠見第３遺跡SI64遺構図

出土遺物は、床面直上から甕口縁部Po272、底部Po273、磨製石斧Ｓ24がある。

出土遺物等の特徴から、清水Ｖ-2様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。

（岩井）



第144図　笠見第３遺跡SI64出土遺物実測図

SI65（第145・146図、PL. 26・121・174・176）

調査区北西部、C16グリッドの標高69.5m付近のほぼ平坦面に立地する。東側はSI73埋土を掘り込んでいる。

遺存状態は比較的よく、平面は方形を呈する。規模は長軸3.3m、短

表35　笠見第３遺跡SI65ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　　考
Ｐ１	36×35－95	主柱穴
Ｐ２	95×53－29	主柱穴
Ｐ３	28×24－16	主柱穴

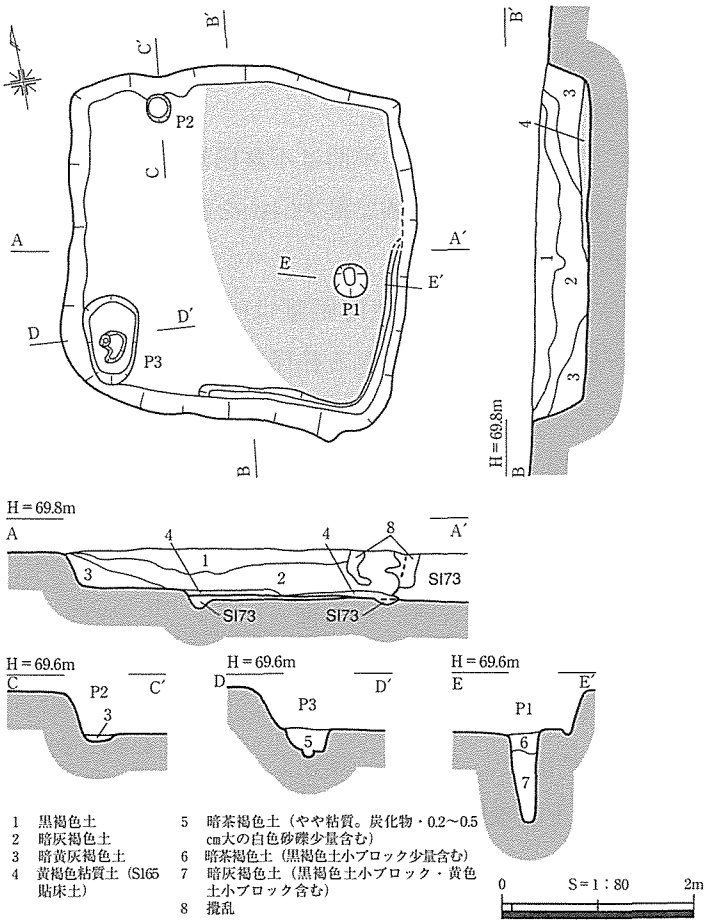
軸3.2m、面積は10.0㎡を測る。残存壁高は、南側で最大47㎝を測る。壁溝は南東隅のみで確認できた。幅15㎝、深さ５～９㎝を測る。断面はＵ字状を呈する。

主柱穴は不規則ではあるがP1～P3の３基で、主柱間距離はP1-P2間から順に2.7m、2.6m、2.5mである。P2は非常に浅い。中央ピット、焼土面は検出されなかった。SI73と重複する部分には、貼床が認められた。

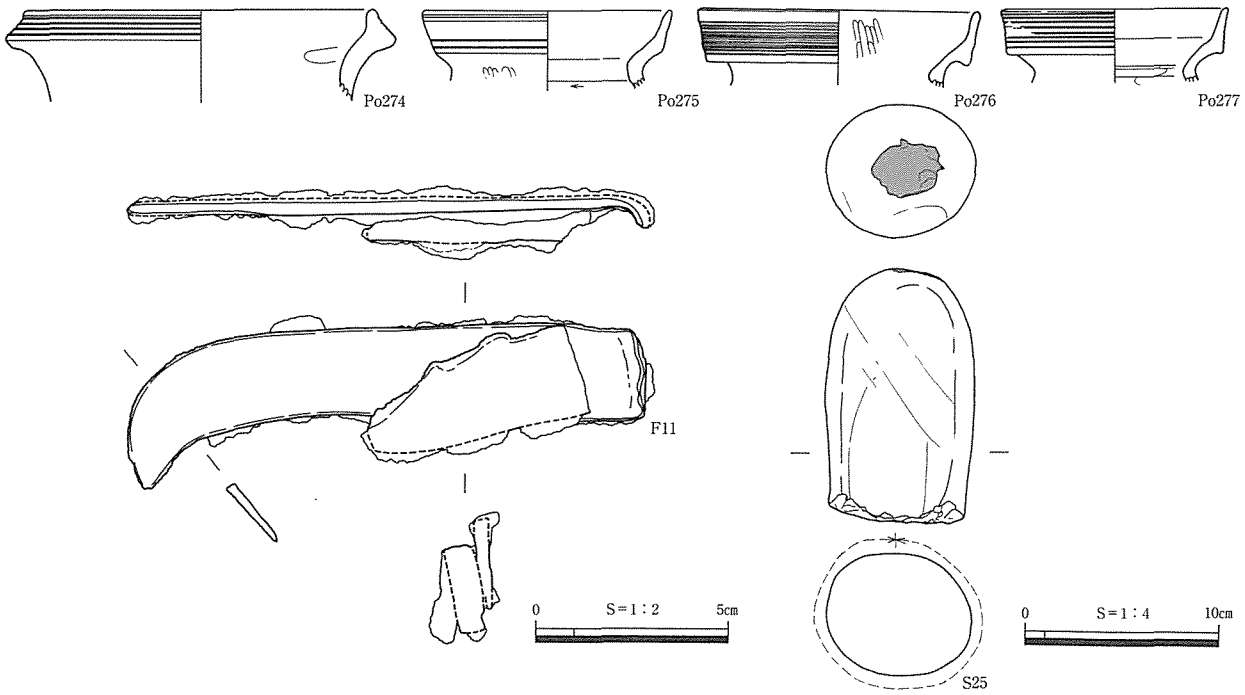
埋土は３層に分層でき、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は、埋土中からの弥生土器壺Po274、甕Po275～277、曲刃鎌F11、敲石S25を図化した。

出土遺物から清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろのものと考えられる。形態的には竪穴住居に類似するものの、その他の用途が考えられる。（牧本）



第145図　笠見第３遺跡SI65遺構図



第146図　笠見第３遺跡SI65出土遺物実測図

SI66（第147・148図、PL. 26・177）

調査区北西部、F・G16グリッドの標高70.1～72.1mの北側に向かう緩斜面に立地する。東側約２mにはSI68がある。

遺存状態は比較的よく、平面は不整円形を呈する。規模は南北5.1m、東西5.14m、床面積は22.2㎡を測る。残存壁高は、南側で最大64cmを測る。壁溝は、幅９～28cm、深さ５～11cmを測り、断面はU字状を呈し全周する。

主柱穴はP1～P4で、主柱間距離はP1-P2間から順に3.3m、3.0m、3.1m、2.9mである。P1・P2では柱痕が検出され、推定される柱径は約15cmである。

中央ピットは二段掘りされたP5で、埋土下層には炭化物を含む層が水平堆積する。中央ピットから北東・北西方向に２本の床面仕切り溝と考えられる溝が延びる。幅15cm程度、深さ１～３cmを測る。

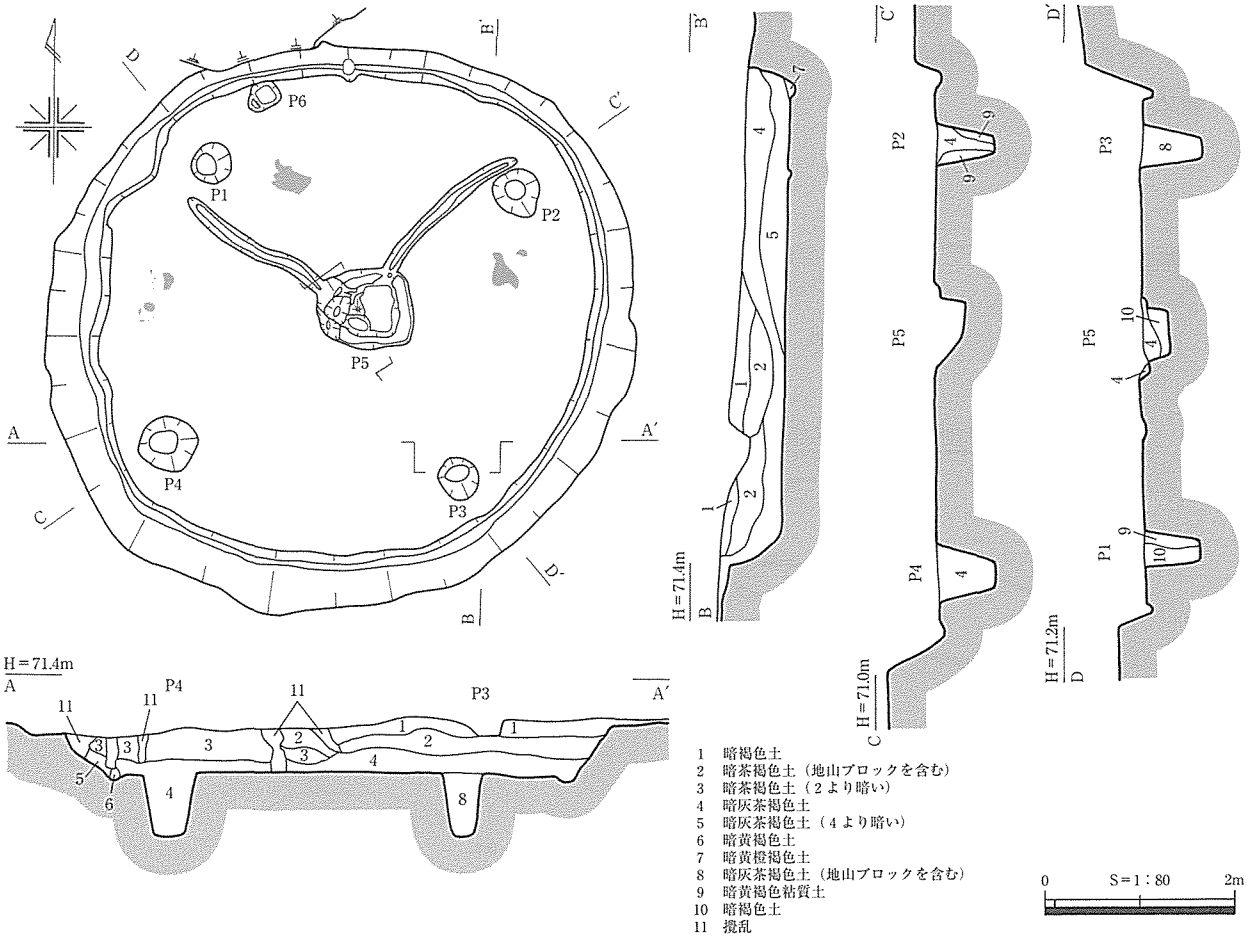
床面北側半分で、焼土面を５箇所検出した。

埋土は５層に分層でき、自然堆積したものと考えられる。

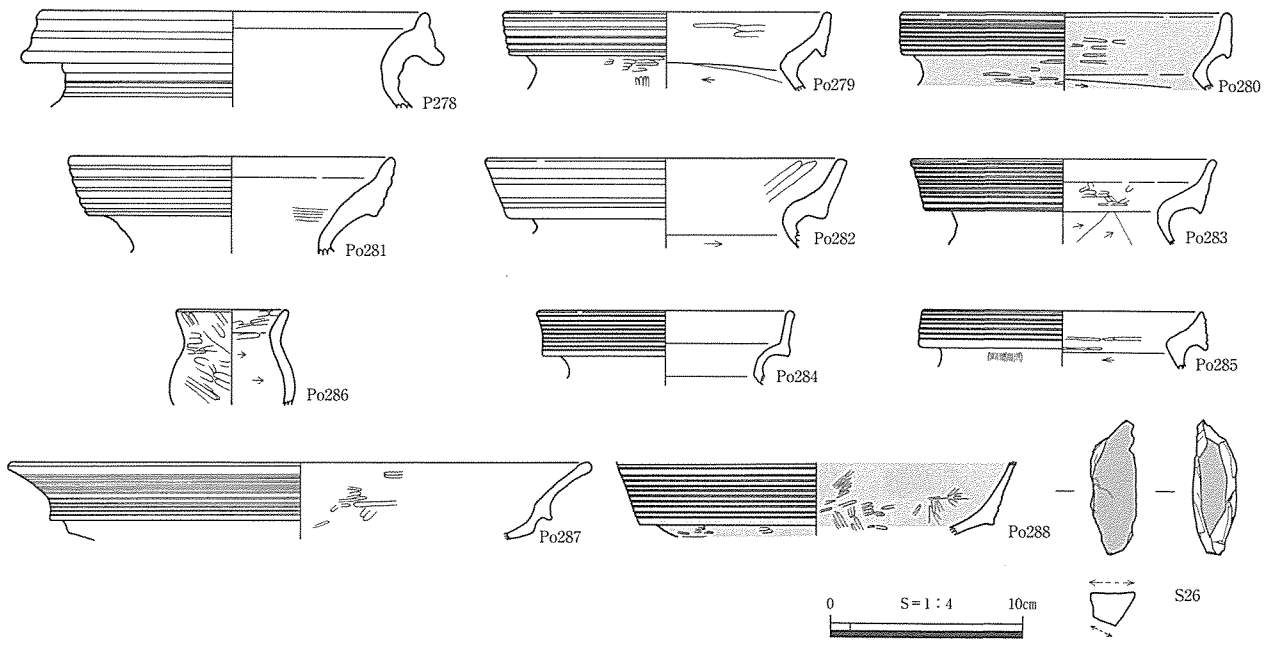
出土遺物は、P3内から弥生土器壺Po278が出土した他は、埋土中から弥生土器甕Po279～285、小

表36　笠見第３遺跡SI66ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	42×39－60	主柱穴	P４	63×60－62	主柱穴
P２	53×47－66	主柱穴	P５	100×85－34	中央ピット
P３	45×40－59	主柱穴	P６	37×30－40	



第147図　笠見第３遺跡SI66遺構図



第148図　笠見第３遺跡SI66出土遺物実測図

型壺Po286、高杯Po287、器台Po288、砥石破片S26などが出土している。

出土遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

SI67・68（第149～151図、PL. 26・102・122・176）

調査区北西部、F15・16、G15・16グリッドの標高70m付近のほぼ平坦面に立地する。SI67・68が重複して検出された。切り合い関係から、SI68→67の順に作られていることが判明した。西側約２mにはSI66がある。

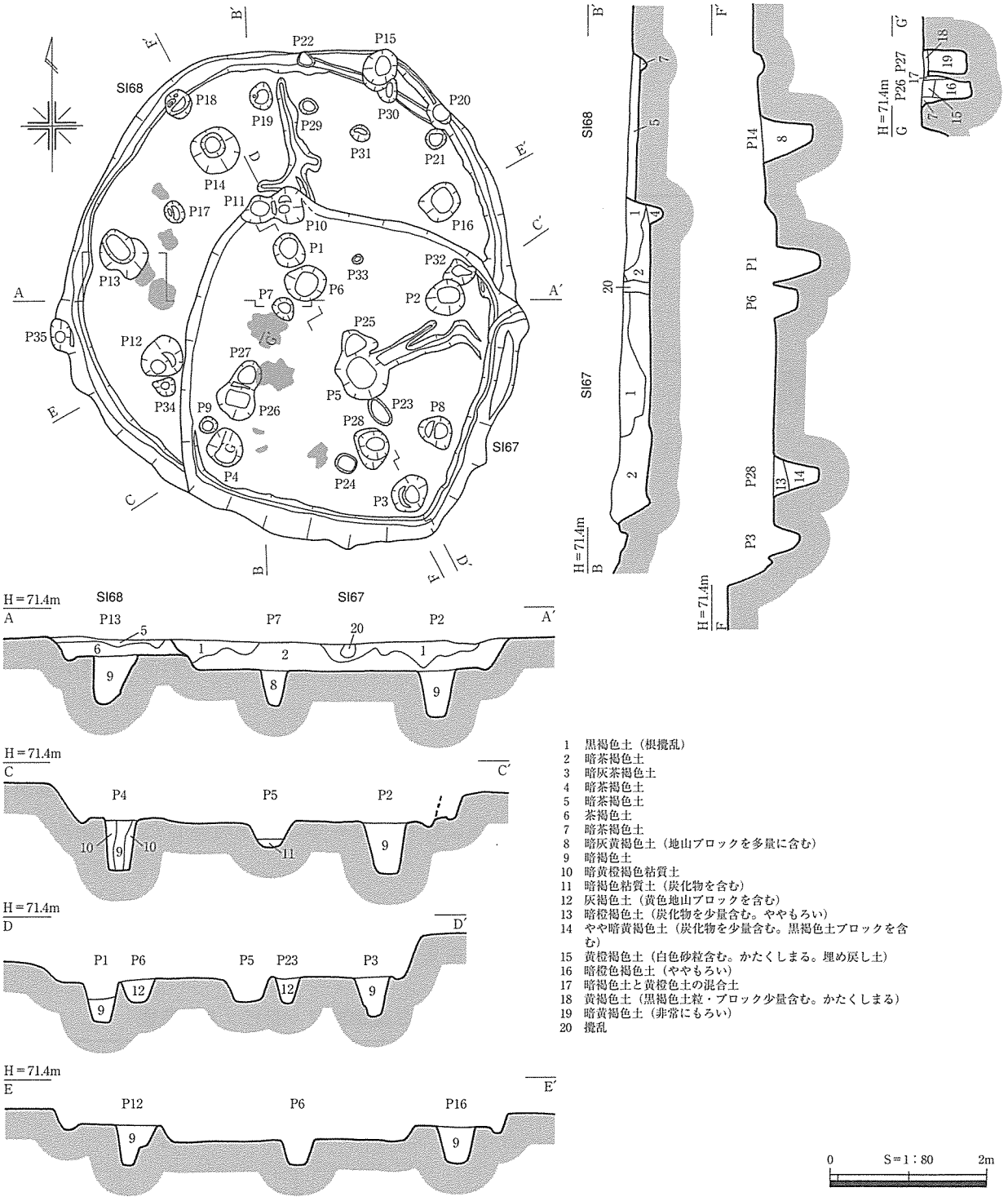
SI67は、SI68の埋土を切り込む。遺存状態は比較的よく、平面は隅丸方形を呈す。規模は南北3.7m、東西3.5m、床面積は11.8㎡を測る。残存壁高は、南東側で最大50cmである。壁溝は、南・東壁際で検出され、幅10cm、深さ３～６cmを測り、断面はＵ字状を呈する。

主柱穴はP1～P4で、主柱間距離はP1-P2間から順に2.2m、2.6m、2.3m、2.7mである。P4で柱痕が検出され、推定される柱径は約14cmである。中央ピットはP5で、埋土には炭化物を含む。中央ピットから北東方向に延びる溝が接続する。幅15cm程度、深さ１～３cmを測る。床面西・南主柱穴間で、大小５箇所の焼土面を検出した。

埋土は攪乱土を除くと暗茶褐色土単層で、人為的行為などで短時間に

表37　笠見第３遺跡SI67・68ピット一覧表　△は残存値

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	46×38－59	SI67主柱穴	P19	33×28－13	
P２	50×46－63	SI67主柱穴	P20	29×27－69	
P３	49×43－52	SI67主柱穴	P21	26×24－23	
P４	45×43－64	SI67主柱穴(柱痕有)	P22	21×21－22	
P５	72×55－29	SI67中央ピット	P23	38×20－36	
P６	49×45－30	SI68中央ピット	P24	28×21－36	
P７	37×30－50		P25	46×37－33	
P８	40×39－18		P26	55×45－66	
P９	22×22－５		P27	41×35－56	SI68主柱穴
P10	47×39－63		P28	54×47－55	
P11	36×30－29		P29	23×21－24	
P12	55×47－50	SI68主柱穴	P30	30△×28－20	
P13	61×50－61		P31	24×22－９	
P14	58×57－68	SI68主柱穴	P32	33×25－12	
P15	52×40－63		P33	15×13－20	
P16	50×42－46	SI68主柱穴	P34	28×28－21	
P17	27×25－13		P35	42×30－44	
P18	33×30－38				



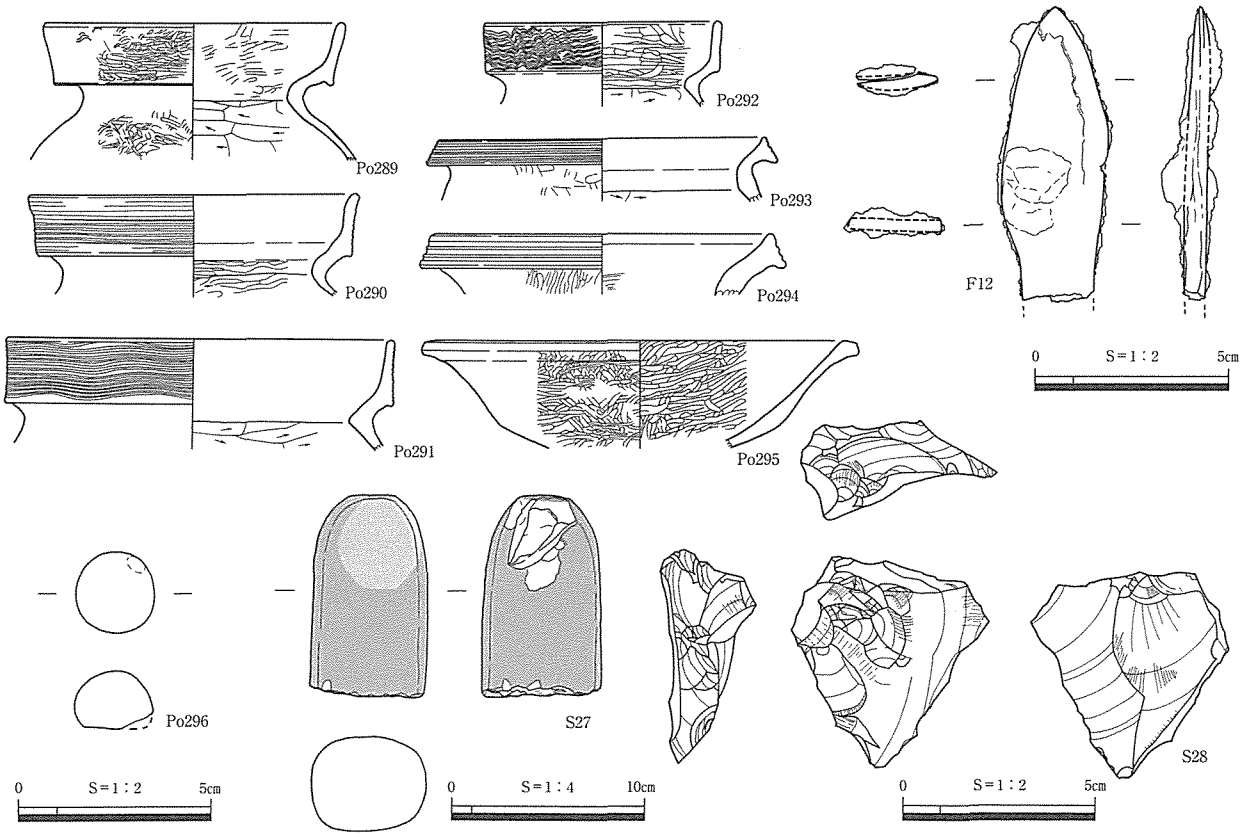
第149図　笠見第３遺跡SI67・68遺構図

堆積したものと考えられる。

出土遺物は、床面からの弥生土器甕Po289・290、敲石破片Ｓ27の他は、埋土中から弥生土器甕Po291～294、高杯Po295、土玉Po296、鉄鏃と思われるF12、黒曜石石核S28などが出土している。

SI68は、南東部をSI67によって切られており、遺存状態はよくないが、平面は不整円形を呈すと思われる。規模は、南北5.34m、東西5.1m、床面積10.6㎡以上を測る。残存壁高は、南側で最大26㎝である。壁溝は、全周していたものと推定され、幅８～22㎝、深さ３～６㎝を測る。

主柱穴は、P12・14・16・28の４基で、主柱穴間距離はP12-14間から順に2.9m、3.1m、3.2m、3.0

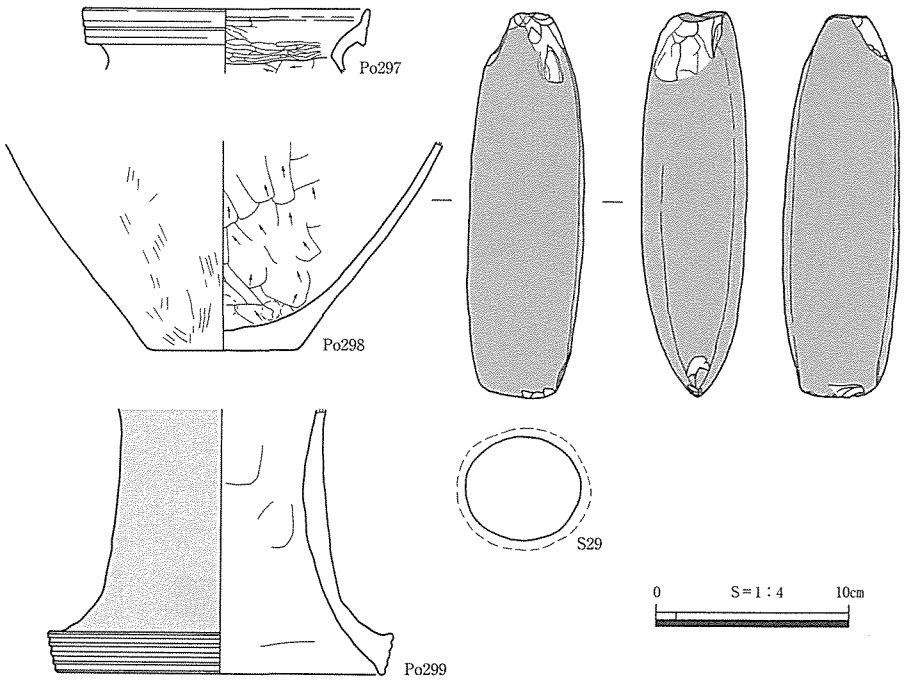


第150図　笠見第３遺跡SI67出土遺物実測図

mである。中央ピットは位置的にP6と考えられる。床面西側のP12―14間で焼土面を４箇所検出した。

埋土は２層に分層でき、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物には、図化したものはいずれも埋土中からのもので、弥生土器甕Po297、底部Po298、器台Po299、太型蛤刃石斧S29がある。



第151図　笠見第３遺跡SI68出土遺物実測図

それぞれの床面上では、柱穴以外のピットが大小多数検出されているが用途は不明である。なお、SI67床面上のP27は、上面を塞がれた状態で検出されており、SI68に伴う可能性がある。

SI67は出土遺物等から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろ、SI68は清水Ｖ－２様式、弥生時代後期後葉ごろのいずれも竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

SI69・76（第152・153図、PL. 27・125）

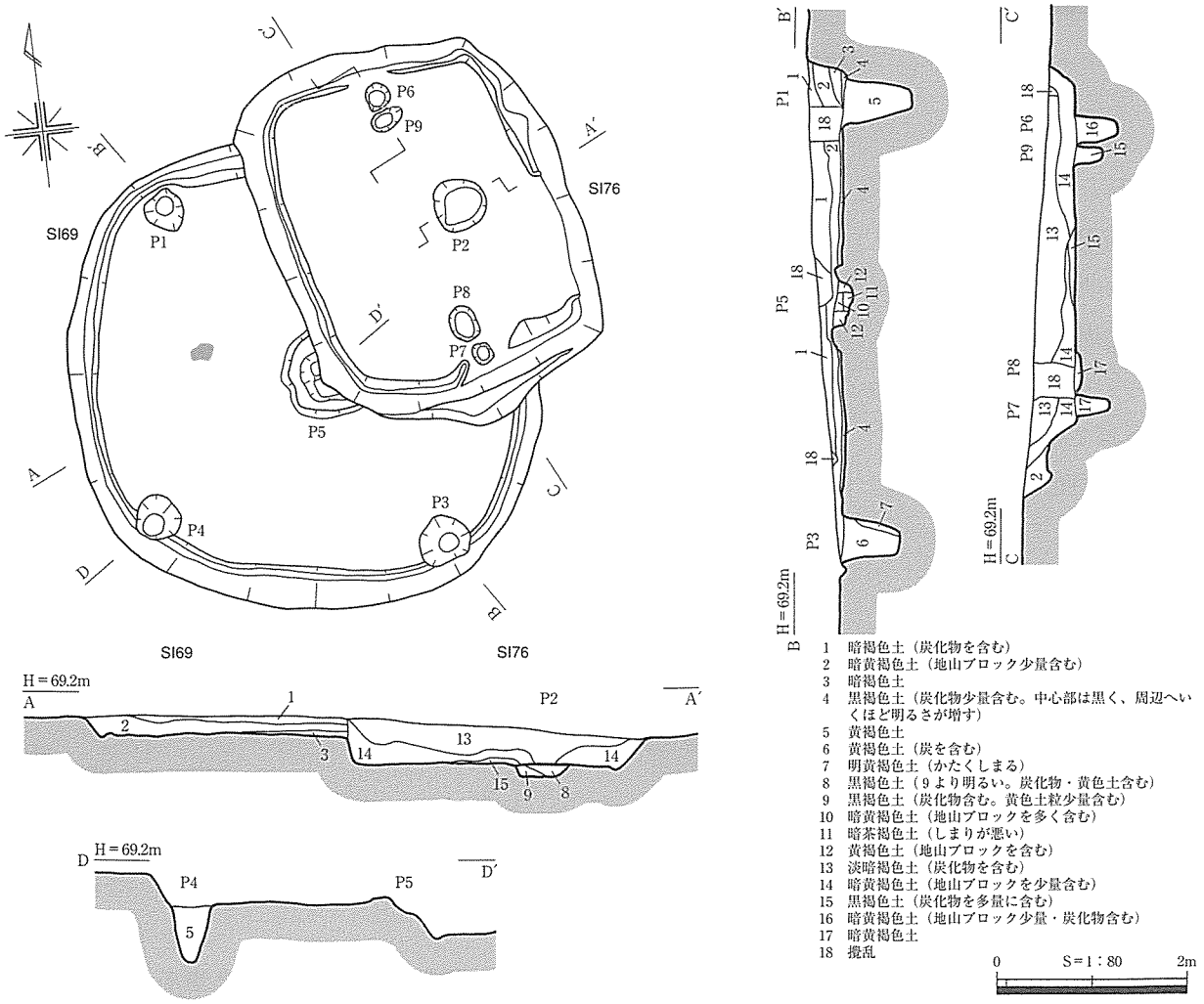
調査区最北西端、B16グリッドの標高68.7～69.0m付近のほぼ平坦面に立地する。SI69・76が重複して検出された。切り合い関係から、SI69→76の順に作られていることが判明した。南側約３ｍにはSI73がある。

SI69は、北東側をSI76によって掘り込まれるが、遺存状態は比較的よく、平面は隅丸方形を呈す。規模は南北5.0m、東西5.0m、床面積は11.3㎡以上を測る。残存壁高は、南東側で最大49㎝である。壁溝は、幅10～25㎝、深さ３～５㎝程度を測り、全周するものとみられる。断面はＵ字状を呈す。

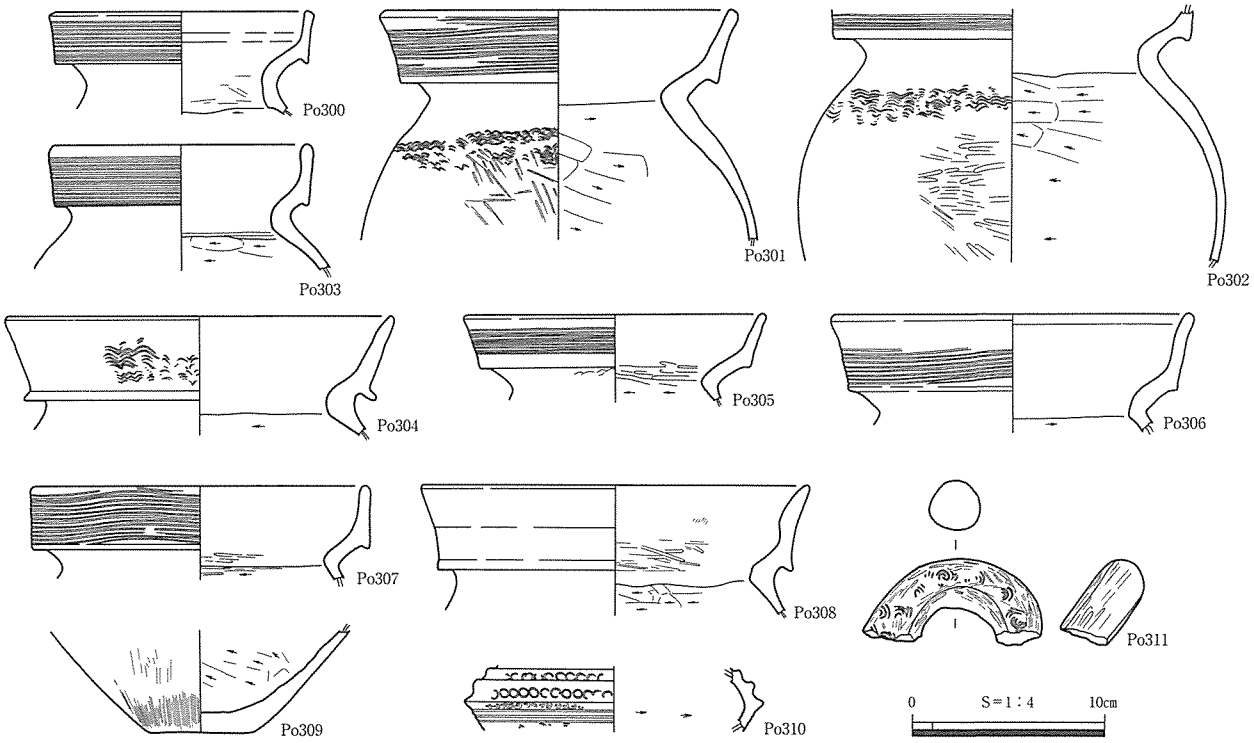
主柱穴はP1・３・４で、主柱間距離はP3-P4間から順に3.2m、3.4mである。本来は４本柱で、P2付近にあったものと考えられるが、SI76のP2によって壊されたものと考えられる。中央ピットはP5で、埋土は柱痕状に分層できた。周囲には幅20㎝程度、高さ２～４㎝の地山削り出しの土手がある。また、床面西側で、焼土面を１箇所検出した。

埋土は３層に分層でき、自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は、埋土中で土器片を検出したが、図化には至らなかった。



第152図　笠見第３遺跡SI69・76遺構図



第153図　笠見第３遺跡SI76出土遺物実測図

表38　笠見第３遺跡SI69・76ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	54×41－61	SI69主柱穴	P６	27×18－38	SI76主柱穴(建替前)
P２	58×58－16	SI76中央ピット	P７	22×18－38	SI76主柱穴
P３	58×52－77	SI69主柱穴	P８	39×31－８	SI76主柱穴(建替前)
P４	49×47－66	SI69主柱穴	P９	22×18－33	SI76主柱穴
P５	60×20－19	SI69中央ピット			

SI76は、SI69埋土を掘り込み、遺存状態はよい。平面は隅丸長方形を呈し、南北3.45m、東西2.6m、床面積7.9㎡を測る。残存壁高は、南側で最大58cmである。壁溝は、南東側で途切れるが全周していたものと推定され、幅８～20cm、深さ２～８cmを測る。

主柱穴は、P6・７の２基で、主柱穴間距離は3.0mである。それぞれの内側にはP8・９があり、建て替え前のものと考えられる。建て替え前の主柱穴間距離は、2.4mである。中央ピットは、主柱間からやや東にずれるP2で、埋土には炭化物を含む。焼土面はない。

埋土は３層に分層でき、自然堆積したものと考えられる。

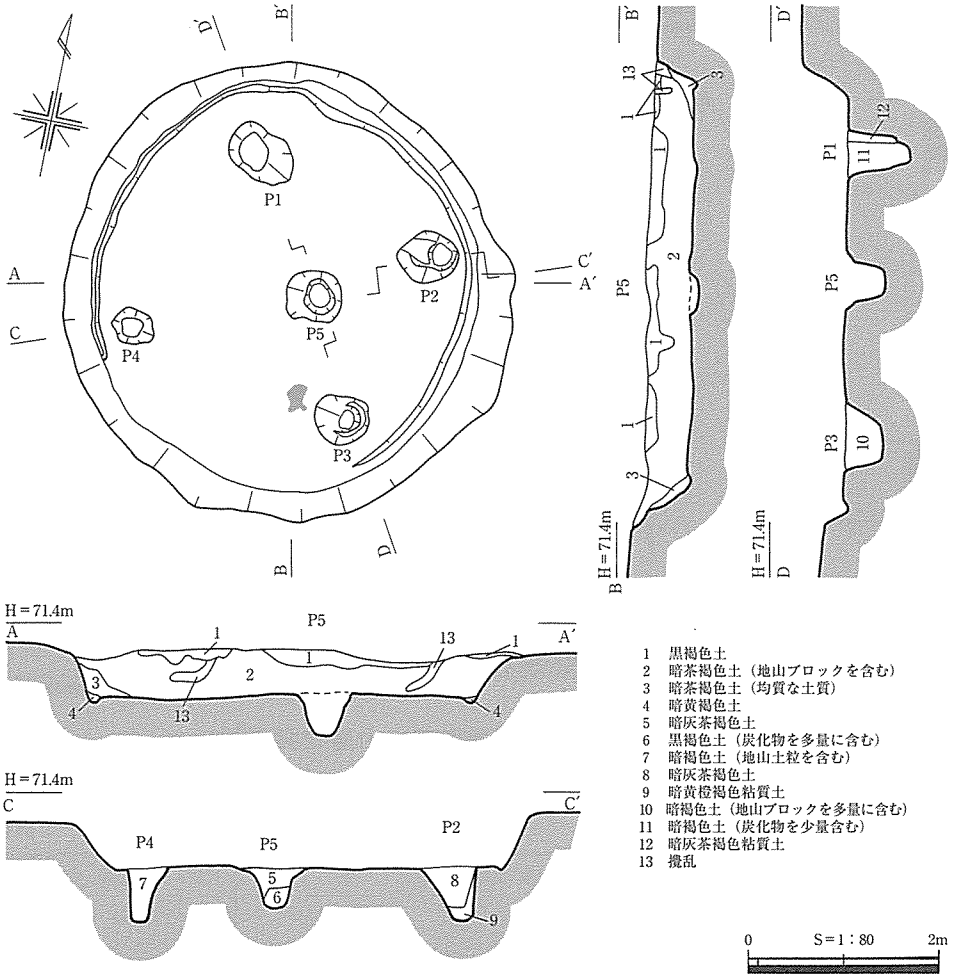
出土遺物には、図化したものはいずれも埋土中からのもので、弥生土器甕Po300～308、底部Po309、装飾壺Po310、把手Po311がある。

SI76は出土遺物等から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろと考えられる。SI69は出土遺物がなく確実な時期は不明であるが、SI76より先行するものである。SI69は竪穴住居跡と考えられるが、SI76は規模が小さく、通常の住居とは異なる性格のものと考えられる。（牧本）

SI70（第154・155図、PL. 27・122）

調査区北西側、Ｆ15グリッドの標高70.5m付近のほぼ平坦面に立地する。北西約１mにSI71がある。

平面は円形を呈す。規模は、南北3.89m、東西3.61m、床面積13.2㎡を測る。残存壁高は、最も遺



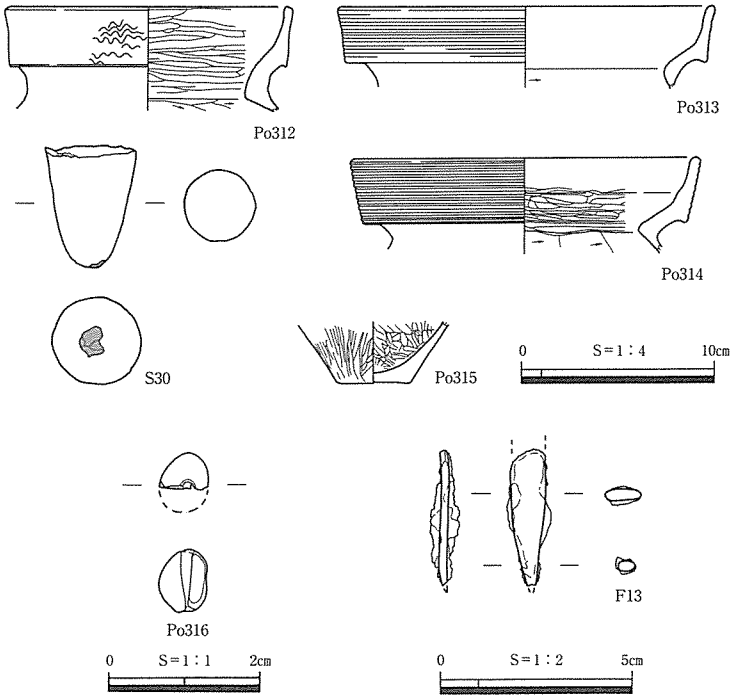
第154図　笠見第３遺跡SI70遺構図

存状態がよい南壁で最大54cmを測る。壁際では南側は途切れるが、幅10cm、深さ１～５cm前後の壁溝がめぐる。本来は全周していたものと考えられる。

主柱穴は、P1～P4である。柱穴間距離は、P1-P2間から順に2.2m、2.0m、2.5m、2.3mである。主柱穴は、埋没時には抜き取られていたものと考えられる。

建物中央には、中央ピットP5が掘り込まれている。埋土下層は炭化物を含む層である。床面P3西側で焼土面が１箇所検出された。

埋土は、２層に分層できたが、ほ



第155図　笠見第３遺跡SI70出土遺物実測図

とんど地山ブロックを含む暗茶褐色土で、短期間に埋めた可能性がある。また、壁際では堰板状の痕跡（第３層）が認められた。

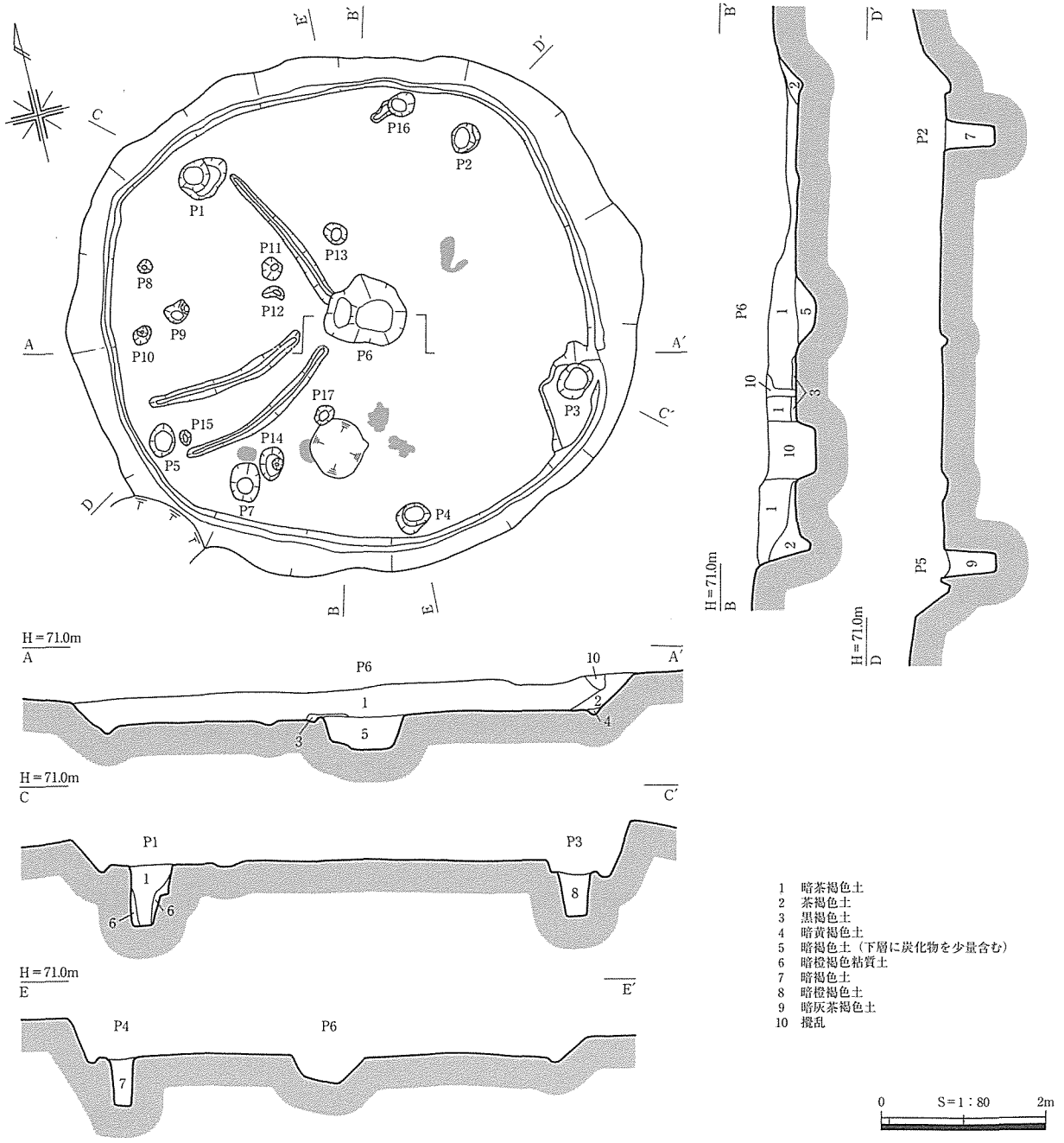
表39　笠見第３遺跡SI70ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	80×50－40	主柱穴	P４	40×38－60	主柱穴
P２	65×55－60	主柱穴	P５	61×58－43	中央ピット
P３	56×50－65	主柱穴			

出土遺物は、図化できたものに埋土中から出土した弥生土器甕Po312～314、底部Po315、土玉片Po316、茎部片F13、磨製石斧基部片S30がある。

出土遺物等から清水Ⅴ－３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

SI71（第156・157図、PL. 27・123）



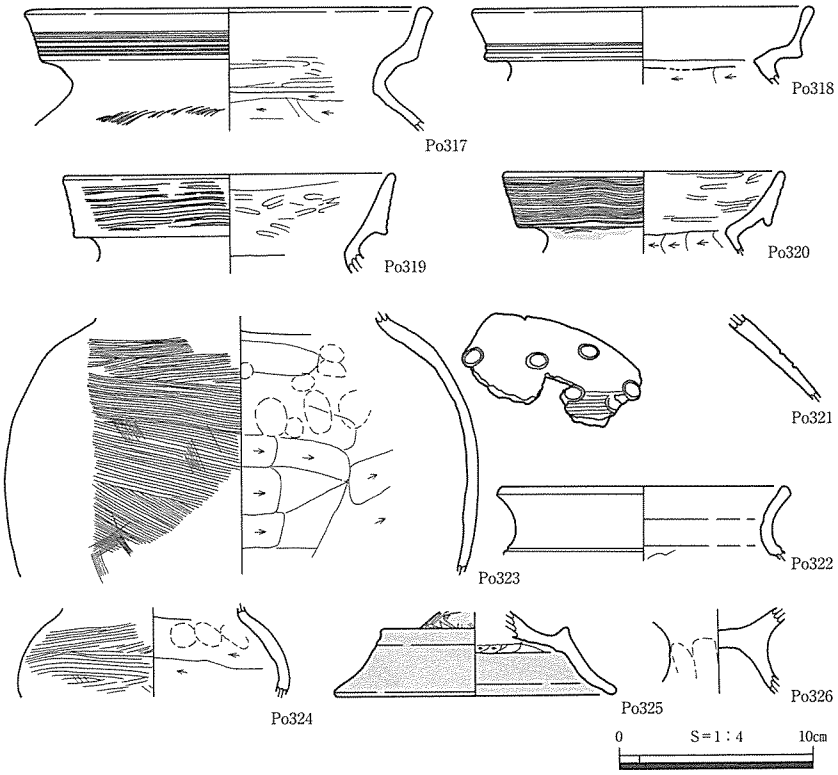
第156図　笠見第３遺跡SI71遺構図

調査区北西側のE15・F15グリッドにあり、標高70.3～74.5m付近のほぼ平坦面に立地する竪穴建物跡である。南側約１mにはSI70が隣接している。

平面は五角形を呈す。規模は、南 北5.5m、東 西5.7m、床面積は26.3㎡である。残存壁高は、最も遺存状態はよい南壁で最大54cmを測る。壁際には、幅10～18cm、深さ10cm程度の壁溝が全周している。

主柱穴はP1～P5である。主柱穴間距離は、P1-P2間から順に、3.3m、3.3m、2.6m、3.2m、3.2mである。P4では柱痕が認められる。推定される柱の径は約20cmである。柱を立てた後黄橙褐色粘質土で埋め立てている。

建物中央には、不整楕円形で一部２段に掘り込まれたP6がある。柱穴に比べて規模が大きいが、主柱穴同様深く掘りこまれている。埋土中には炭化物をわずかに含んでいる。



第157図　笠見第３遺跡SI71出土遺物実測図

表40　笠見第３遺跡SI71ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　考
P１	63×51－72	主柱穴	P10	22×17－22	入口ピットか
P２	37×35－58	主柱穴	P11	25×25－37	
P３	48×38－62	主柱穴	P12	24×13－10	
P４	42×30－56	主柱穴	P13	30×25－15	
P５	40×32－63	主柱穴	P14	42×29－39	
P６	95×78－30	中央ピット	P15	19×13－６	
P７	46×37－79		P16	34×22－26	
P８	18×16－19	入口ピットか	P17	24×22－26	
P９	28×22－19				

その他に、床面上でピットが11個ある。P7を除いて小規模なものであり、用途はいずれも不明であるが、P8・P10は、壁に平行しP1-５間の中央に並んでおり、入口に関連した可能性がある。

床面西側では、仕切り溝と思われる幅15～20cm、深さ３～７cmの３本の溝がある。最も北側のものはP6に接続する。また、床面上で５箇所の焼土面を検出した。

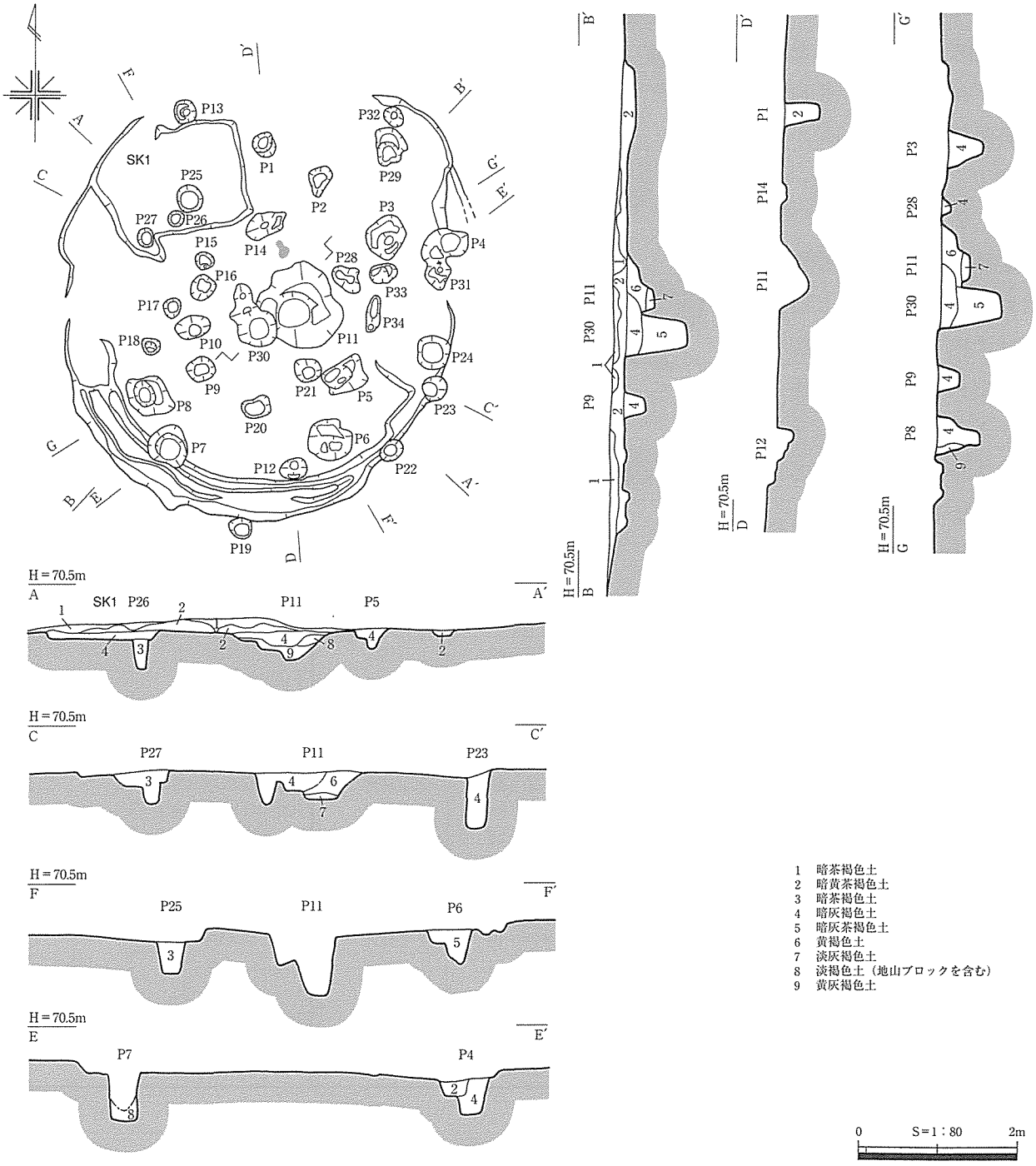
埋土は、攪乱土層を除くと暗黄褐色土単層であるが、おそらく自然堆積したものと考えられる。

出土遺物には、埋土中から弥生土器甕Po317～320・322、スタンプ文を持つPo321、鼓形器台Po325、高杯Po326、検出面で土師器甕Po323、直口壺Po324などがある。

出土遺物等から、清水Ｖ-３様式、弥生時代後期後葉ごろと考えられる。（牧本）

SI72（第158・159図、PL. 28・123）

調査区北西側、D15・16、E15・16グリッドの、標高69.9～70.0m付近のほぼ平坦面に立地する竪穴建物跡である。北東側約３mにはSI80、北西側約３mにはSI60がある。平成13年度の東伯町試掘調査



第158図　笠見第３遺跡SI72遺構図

T13で確認されたものである。

遺存状態は非常に悪く、検出段階で床面が露出していた。平面は楕円形又は多角形を呈すと考えられる。規模は、南北5.1m、東西5.0m程度、床面積は約20.6㎡である。残存壁高は、最も遺存状態はよい南壁で最大13㎝を測る。南側壁際には、幅８～21㎝、深さ３㎝程度の壁溝がめぐるが、全周していたものか不明である。一部二重になることから、建て替えがあると考えられる。一回り大きいものをSI72－１、小さなものを－２として報告する。

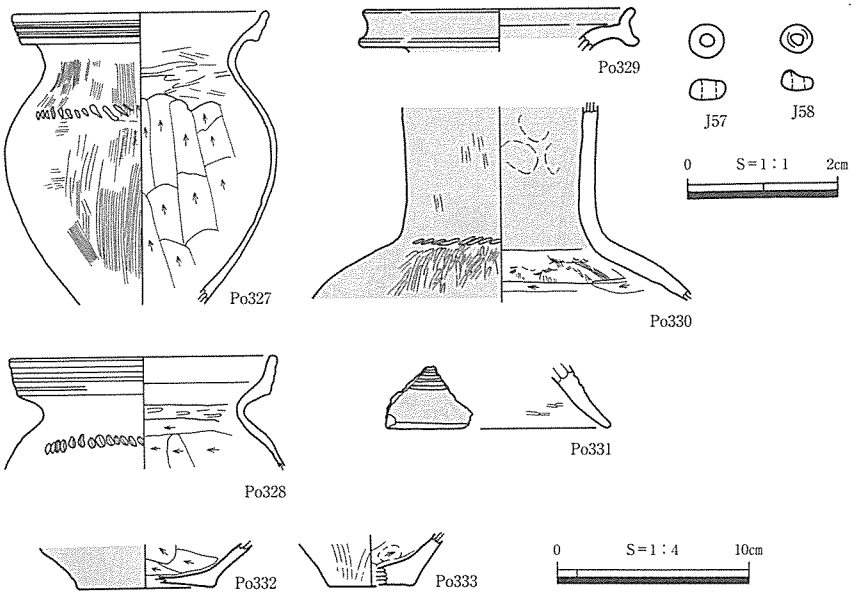
SI72－１の主柱穴は、P1・４・23・12・７・27である。主柱穴間距離はP1－P4間から順に2.6m、1.9m、2.0m、1.6m、2.7m、2.0mである。

SI72－２の主柱穴は、一回り内側で検出されたP3・６・８・25で、主柱穴間距離は、P3-P6間から順に、2.7m、2.4m、2.5m、2.6mである。

建物中央には、不整楕円形で一部２段に掘り込まれたP11と、それを掘り込む円形のP30が中央ピットと考えられる。－１・２のいずれに属するものかは不明であるが、一般に笠見第３遺跡では、建物は拡張する傾向にあることから、P11が－２に、P30が－１に属するものと考えられる。P30は、主柱穴同様深く掘りこまれている。その他に、床面上でピットが多数検出され、P6・10・17のように主柱穴並みの深さをもつものがあるが、位置関係から主柱穴とは考えられず、用途は不明である。

床面P11に近接して焼土面を１箇所検出した。おそらく－１に伴うものと考えられる。

埋土は、わずかに１・２層のみ遺存していたが、おそらく自然堆積したものと考えられる。



第159図　笠見第３遺跡SI72出土遺物実測図

表41　笠見第３遺跡SI72ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	33×27－42	－１主柱穴	P18	23×20－13	
P２	34×27－20		P19	30×25－17	
P３	51×42－49	－２主柱穴	P20	35×22－9	
P４	55×42－49	－１主柱穴	P21	34×32－68	
P５	50×40－27		P22	30×23－15	
P６	55×50－44	－２主柱穴	P23	32×30－75	
P７	51×50－68	－１主柱穴	P24	41×40－79	
P８	68×51－55	－２主柱穴	P25	35×33－39	－２主柱穴
P９	33×31－27		P26	20×20－36	
P10	45×30－77		P27	24×22－24	－１主柱穴
P11	107×84－38	－２中央ピット	P28	40×24－15	
P12	32×28－19	－１主柱穴	P29	48×30－19	
P13	30×28－54	－１主柱穴	P30	61×52－76	－１中央ピット
P14	55×29－16		P31	32×31－33	
P15	22×20－13		P32	28×21－14	
P16	30×28－17		P33	33×24－11	
P17	23×22－30		P34	48×18－10	

出土遺物には、埋土中から弥生土器甕Po327・328、直口壺Po330、底部Po333、土師器杯Po332、P11内で弥生土器甕Po329などがある。Po332は、奈良時代ごろのものと考えられ当建物に伴うものではない。

出土遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

SI73（第160・161図、PL. 28・123）

調査区北西部、C16グリッドの標高69.5m付近のほぼ平坦面に立地する。西側はSI65によって掘り込まれ、東側はSI77を掘り込んでいる。

遺存状態は比較的よく、平面は円形を呈する。規模は南北4.82m、東西4.96m、床面積27.8㎡を測る。残存壁高は、南側で最大64cmを測る。壁溝は南西隅が途切れるもののほぼ全周し、幅９～15cm、

深さ２～４㎝を測る。断面はＵ字状を呈する。

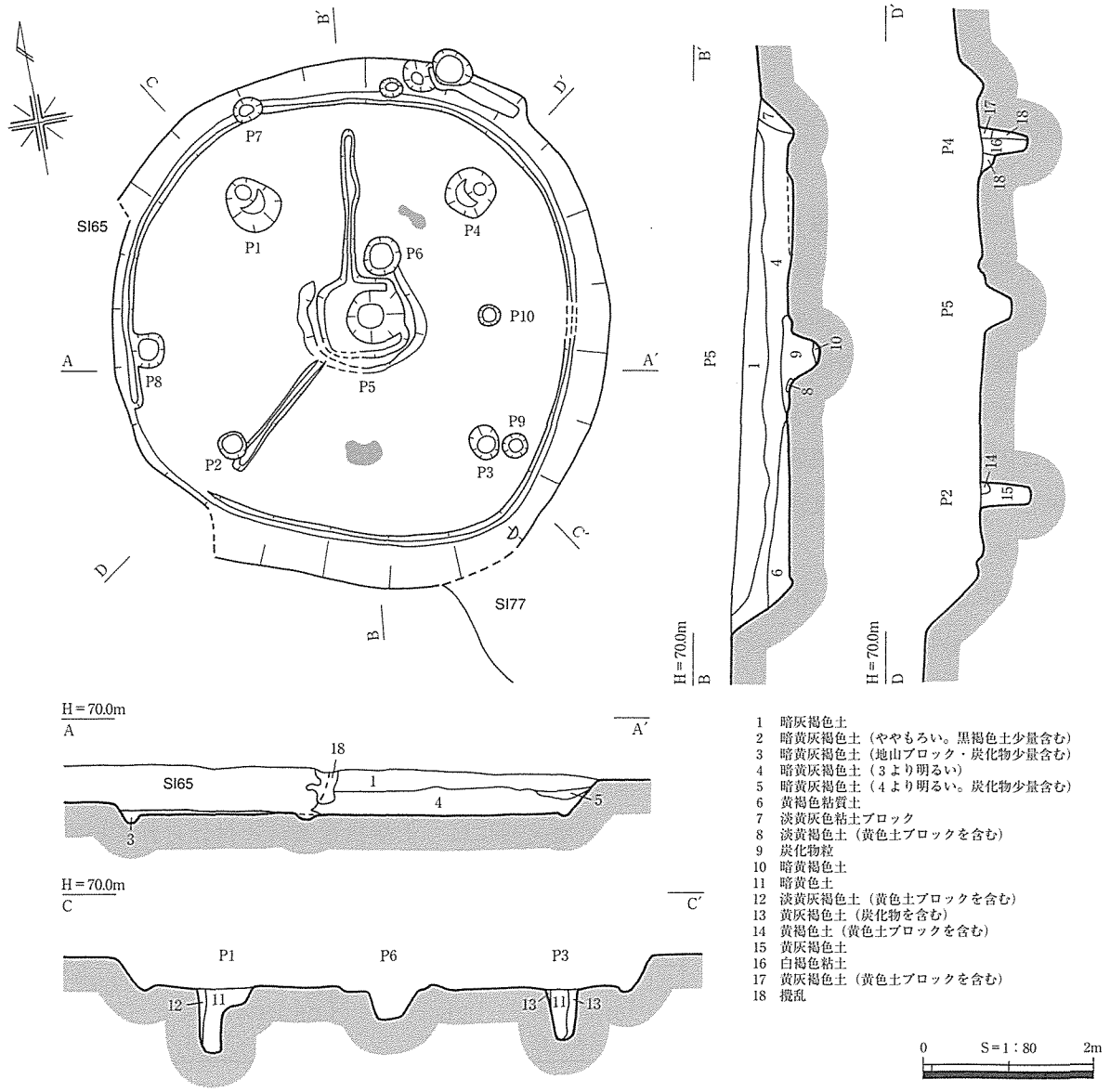
主柱穴はP1～P4で、主柱間距離はP1-P2間から順に2.9m、2.9m、2.9m、2.7mである。P10は、P3-４間中央にあり、補助柱穴の可能性がある。P5が中央ピットで、周囲には北側を除き地山削り出しの高さ約４㎝、幅約20㎝の土手がめぐり、二段掘りとなる。P5北側には幅９～18㎝、深さ２～５㎝の溝が、南西側には幅10㎝、深さ３㎝前後の溝がそれぞれ接続する。用途は不明である。

床面P1-４間、P2-３間で１箇所ずつの不整形に広がる焼土面を検出した。P8は、P1-２間ほぼ中央壁際にあり、入口に関するピットの可能性がある。その他にもピットを検出したが、用途はそれぞれ不明である。

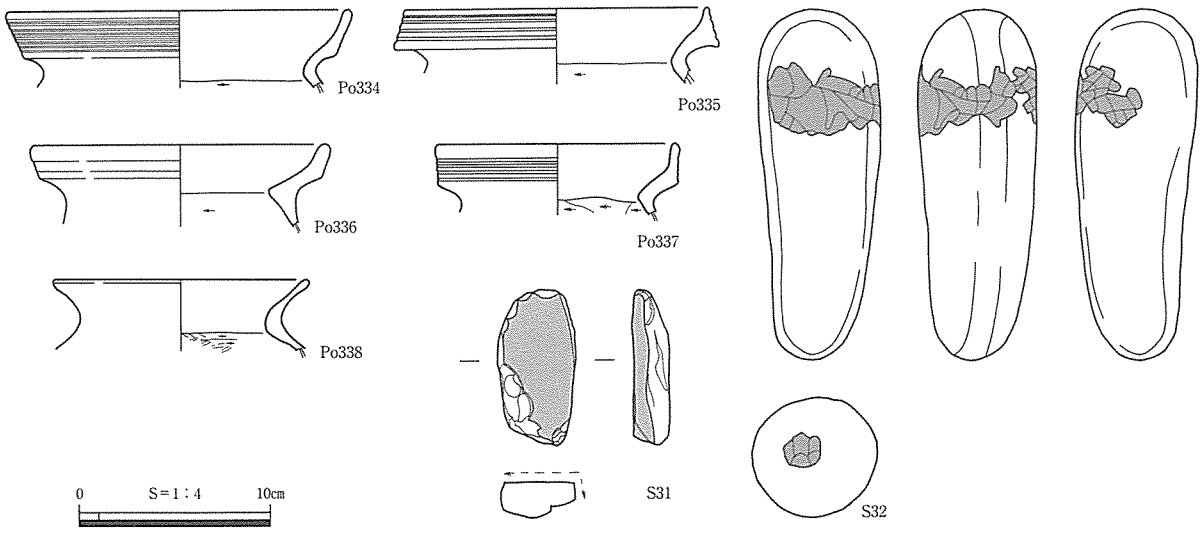
埋土は４層に分層できたが、自然堆積したものと考えられる。北側壁溝部分では、堰板状の土層堆積が分

表42　笠見第３遺跡SI73ピット一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　考
P１	57×55－75	主柱穴	P７	31×25－15	
P２	30×26－56	主柱穴	P８	38×36－37	入口か
P３	34×34－58	主柱穴	P９	26×25－13	
P４	54×52－54	主柱穴	P10	24×22－６	
P５	98×75－42	中央ピット	P11	46×40－56	
P６	44×38－24				



第160図　笠見第３遺跡SI73遺構図



第161図　笠見第３遺跡SI73出土遺物実測図

層できた。

出土遺物は、埋土中から出土した弥生土器甕Po334～336・338、P6内から出土した弥生土器甕Po337を図化した。

出土遺物等から、清水Ｖ－２様式、弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

SI74（第162・163図、PL. 29・123）

調査区北西部、E16グリッドの標高70.3m付近のほぼ平坦面に立地する。東側約２mにSI71がある。

遺存状態は比較的よく、平面は隅丸方形を呈す。規模は南北4.0m、東西4.26m、床面積15.5㎡を測る。残存壁高は、南側で最大61㎝を測る。壁溝は北東側のみで検出した。幅７～13㎝、深さ３㎝程度を測る。断面はＵ字状を呈する。

主柱穴はP1～４で、主柱間距離はP1-P2間から順に2.5m、2.4m、2.7m、2.5mである。P5が二段掘りの中央ピットである。北東側には幅15㎝、深さ３㎝程度の溝が、P6と接続するようにある。溝及びP6の用途は不明である。

床面P5西側のP1-P4間で、不整形に広がる焼土面を１箇所検出した。

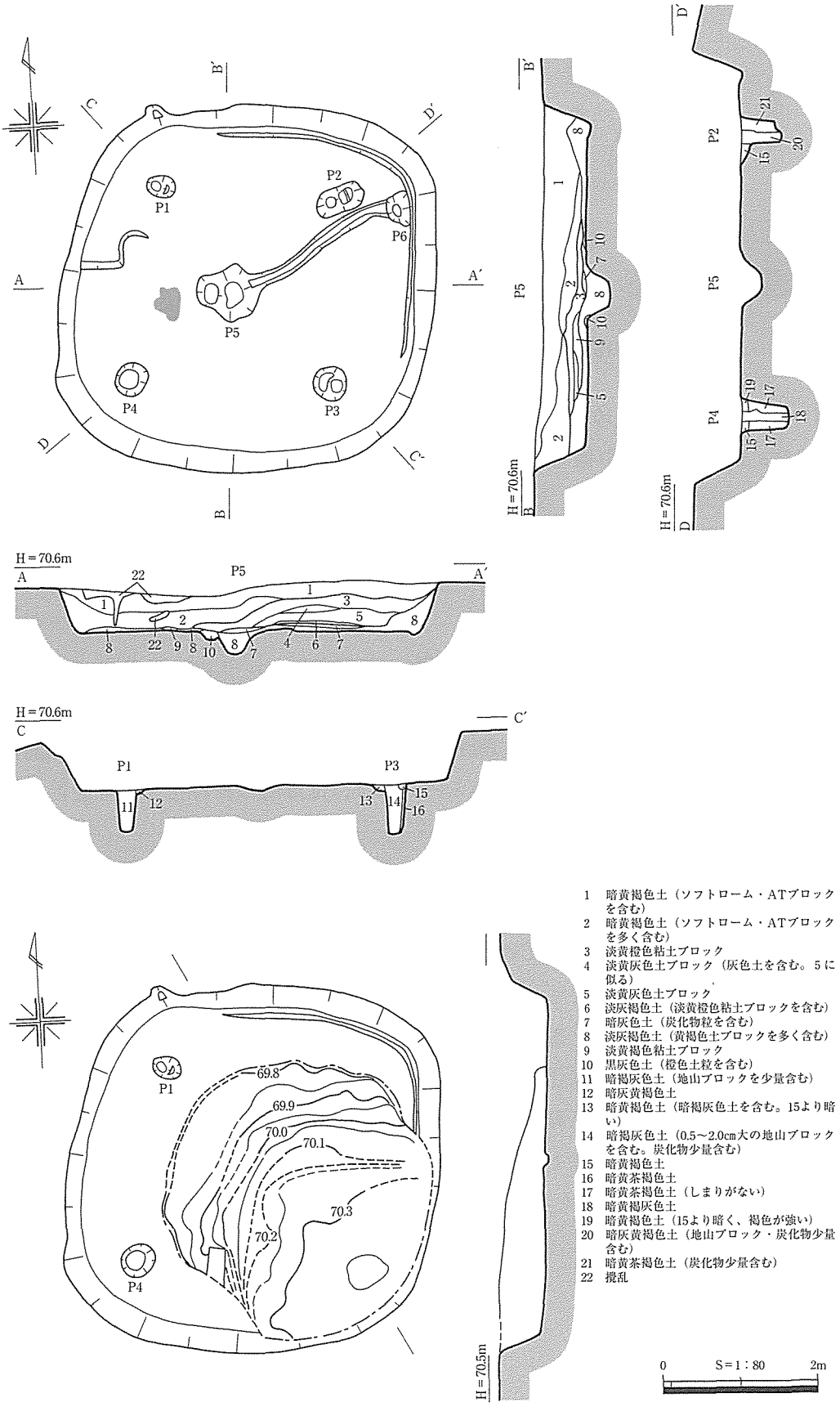
埋土は９層に分層できたが、このうち、第３～６層は南東隅から意図的に埋め戻された土（約3.0㎥）である。埋め戻される以前には、第８・９層が堆積しており、建物が廃絶してしばらくたった後の窪んだ状態の場所を、埋め戻したものと考えられる。この土がどこの由来であるかは不明であるが、後述する貯蔵穴SK37（容積約2.9㎥）と同時期で、土量的にも近似していることから、SK37掘削土が捨てられた可能性がある。なお、この建物の廃絶時には、上屋構造等は片付けられていた可能性がある。

出土遺物は、埋土中から出土した弥生土器甕Po339～344、胴部Po345、器台Po346を図化した。

出土遺物等から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろの竪穴住居跡と考えられる。（牧本）

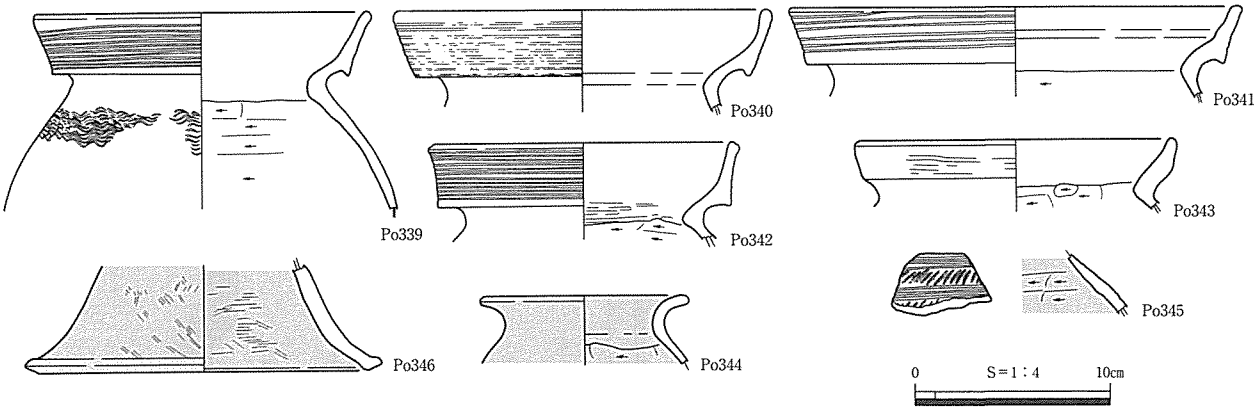
表43　笠見第３遺跡SI74ピット規模一覧表

ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(㎝)	備　考
Ｐ１	39×30－55	主柱穴	Ｐ４	44×39－59	主柱穴
Ｐ２	64×34－57	主柱穴	Ｐ５	80×76－31	主柱穴
Ｐ３	44×43－67	主柱穴	Ｐ６	37×30－8	中央ピット



1　暗黄褐色土（ソフトローム・ATブロックを含む）
2　暗黄褐色土（ソフトローム・ATブロックを多く含む）
3　淡黄橙色粘土ブロック
4　淡黄灰色土ブロック（灰色土を含む。５に似る）
5　淡黄灰色土ブロック
6　淡灰褐色土（淡黄橙色粘土ブロックを含む）
7　暗灰色土（炭化物粒を含む）
8　淡灰褐色土（黄褐色土ブロックを多く含む）
9　淡黄褐色粘土ブロック
10　黒灰色土（橙色土粒を含む）
11　暗褐灰色土（地山ブロックを少量含む）
12　暗灰黄褐色土
13　暗黄褐色土（暗褐灰色土を含む。15より暗い）
14　暗褐灰色土（0.5～2.0cm大の地山ブロックを含む。炭化物少量含む）
15　暗黄褐色土
16　暗黄茶褐色土
17　暗黄茶褐色土（しまりがない）
18　暗黄褐灰色土
19　暗黄褐色土（15より暗く、褐色が強い）
20　暗灰黄褐色土（地山ブロック・炭化物少量含む）
21　暗黄茶褐色土（炭化物少量含む）
22　攪乱

第162図　笠見第３遺跡SI74遺構図・埋め戻し土実測図



第163図　笠見第３遺跡SI74出土遺物実測図

SI75（第164～168図、PL. 29・103・124・174・178）

調査区北西部、E17グリッドの標高69.5～70.1m付近の西側に傾斜する緩斜面に立地する。東側約５mにSI74、西側はSI58によって掘り込まれている。

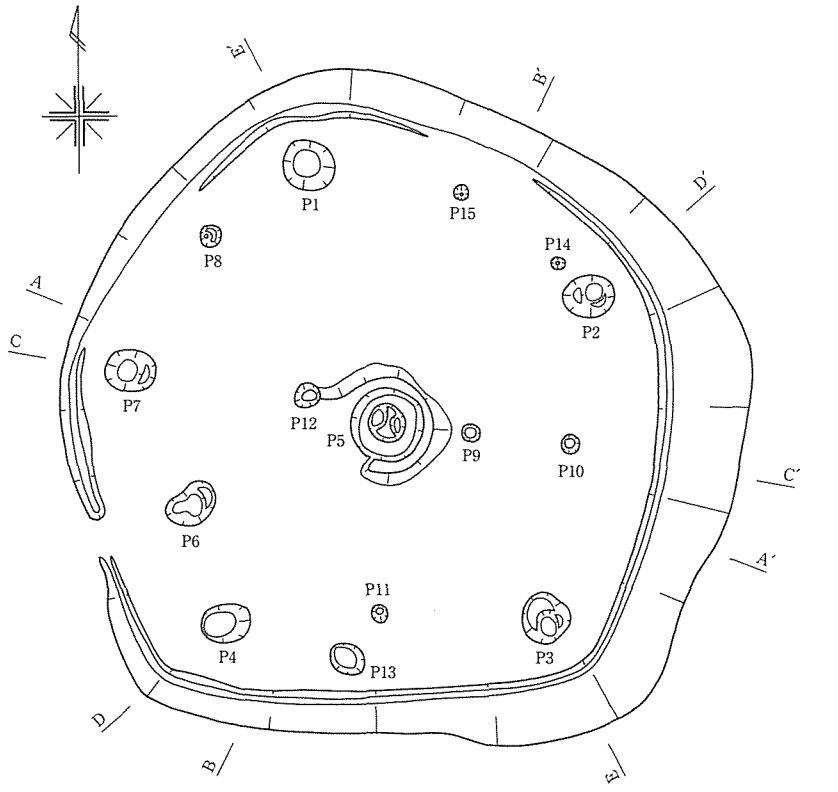
遺存状態は比較的よく、平面は五角形を呈す。南北6.04m、東西6.1m、床面積29.8m²を測る大型の竪穴住居跡と考えられる。残存壁高は、東側で最大82cmを測る。壁溝は、部分的に途切れるもののほぼ全周していたと考えられる。幅15cm、深さ２～５cm程度を測る。断面はＵ字状を呈する。

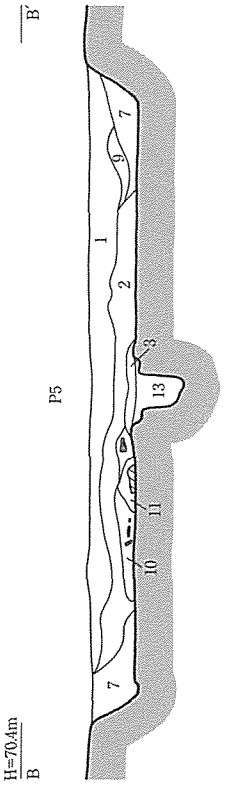
主柱穴はP1～４・７で、主柱間距離はP1-P2間から順に3.3m、3.3m、3.3m、2.9m、2.9mである。主柱穴間中央部に小型のP15・10・11・６・８があり、これらは補助柱穴と考えられる。床面中央部のP5が二段掘りの中央ピットである。周囲には、西側は途切れるが高さ約４cm、幅25cm程度の土手がめぐる。また、中央ピットP5の東西にあるP9・12は、位置的に棟持柱穴の可能性がある。焼土面は検出されなかった。

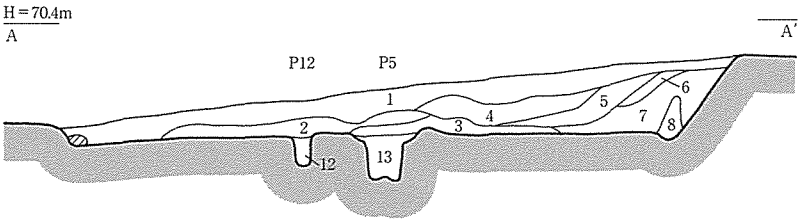
埋土は11層に分層できたが、埋土下層には炭化物・焼土を含む層が不規則に入り込んでいる。また、床面付近でも、遺存状態は悪いが焼土・炭化材が出土しており、建物が焼失した可能性を示している。焼土がやや浮いた状態で検出されていることから、土屋根であった可能性がある。なお、床面付近の炭化材は、南側でのみ遺存している。

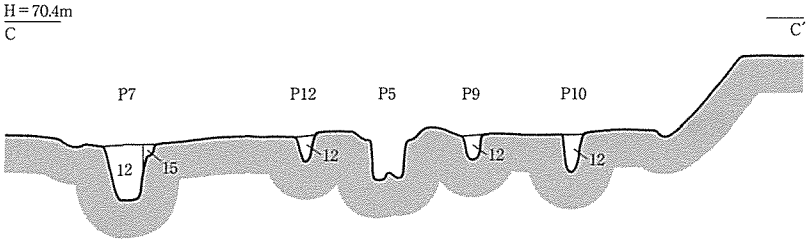
埋土中から床面にかけて多量の土器片、石器、鉄器などの遺物が出土している。これらは、焼失後に廃棄されたものと考えられる。図化できたものに、弥生土器壺Po347～356、甕Po357～392、胴部Po393・394、底部Po395～398、脚付甕脚部Po399・400、器台Po401～405、蓋Po406、装飾壺Po407、赤色塗彩石S33、石匙片S34、小型袋状鉄斧F14・15、茎部F16がある。このうち、床面からはPo359、S33、F15・16がある。その他は、埋土中からの出土である。

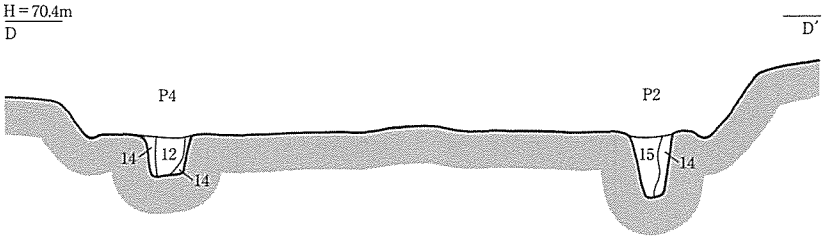
出土遺物等から、清水Ｖ－３様式、弥生時代後期後葉ごろのものと考えられる。（牧本）

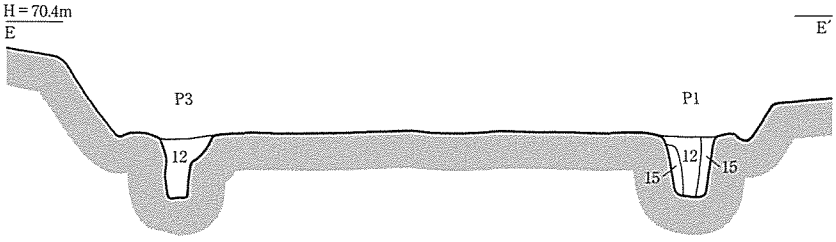




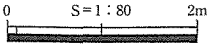




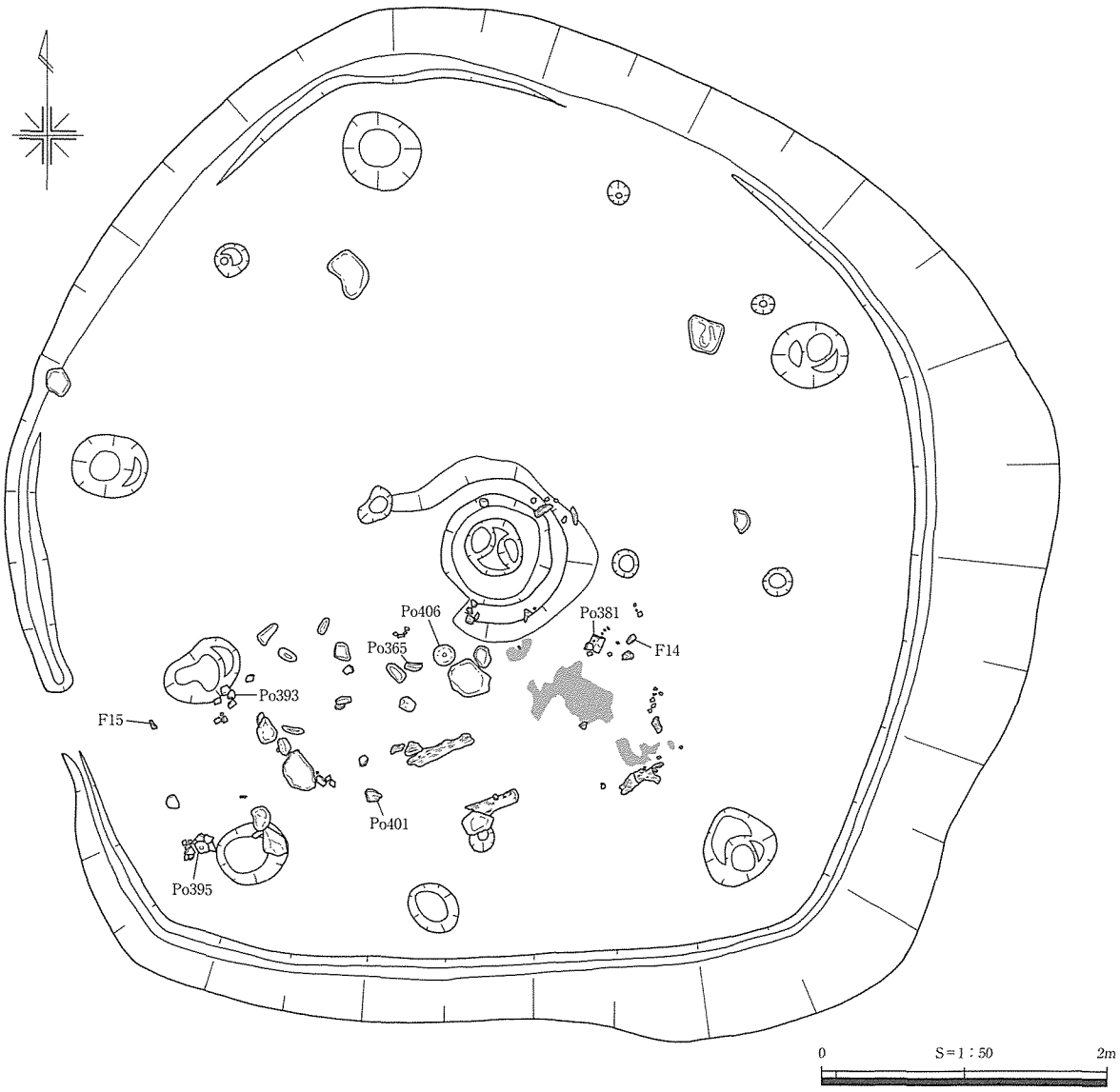




1　暗茶褐色土
2　暗黄茶褐色土
3　暗黄茶褐色土（２～３cm大の地山ブロックを含む。焼土粒をわずかに含む）
4　暗茶灰褐色土（炭化物・地山ブロック・焼土粒を含む）
5　暗黄茶褐色土（２cm大の地山ブロックを含む）
6　暗黄灰褐色土（２cm大の地山ブロックを含む）
7　暗黄褐色土（２cm大の地山ブロックを含む）
8　暗黄褐色土（２cm大の地山ブロックを含む。もろい）
9　暗茶褐色土（炭化物・焼土を含む）
10　暗褐色土（炭化物・焼土粒を大量に含む。地山ブロックを含む）
11　黒褐色土（炭化物・焼土粒・地山ブロックを含む）
12　暗褐色土
13　黒褐色土
14　暗赤褐色土
15　暗黄褐色土



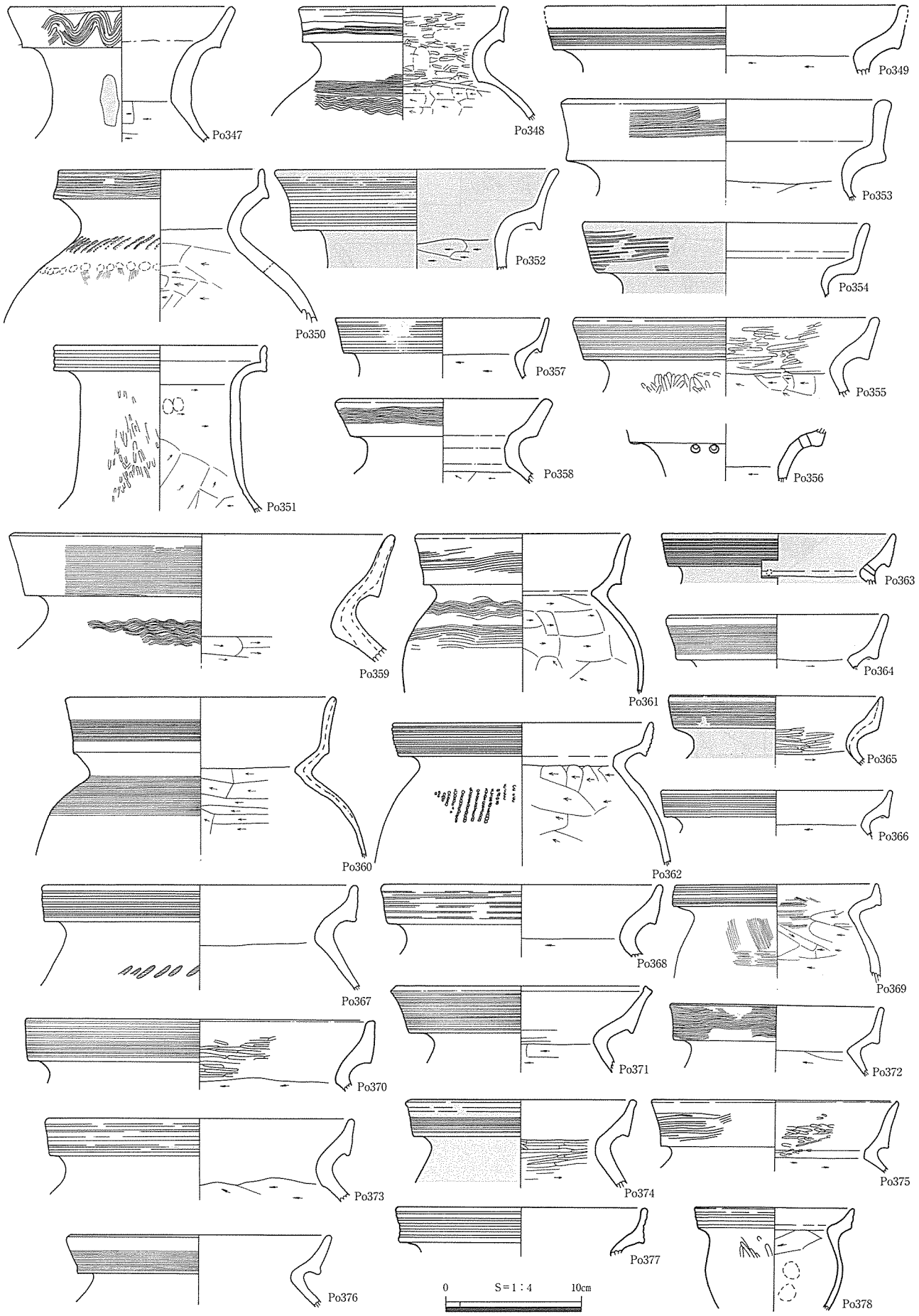
第164図　笠見第３遺跡SI75遺構図



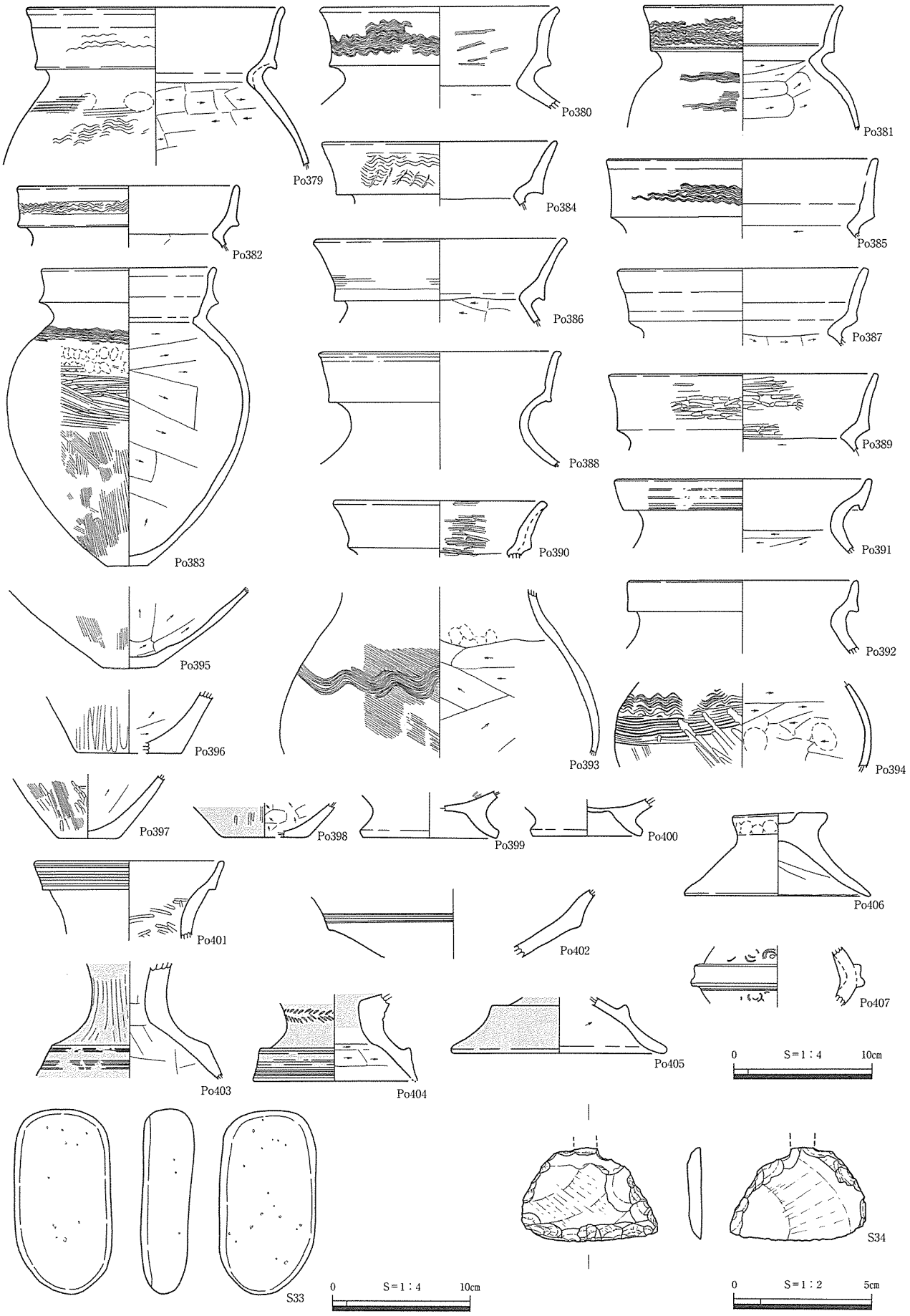
第165図　笠見第３遺跡SI75遺物出土状況図

表44　笠見第３遺跡SI75ピット一覧表

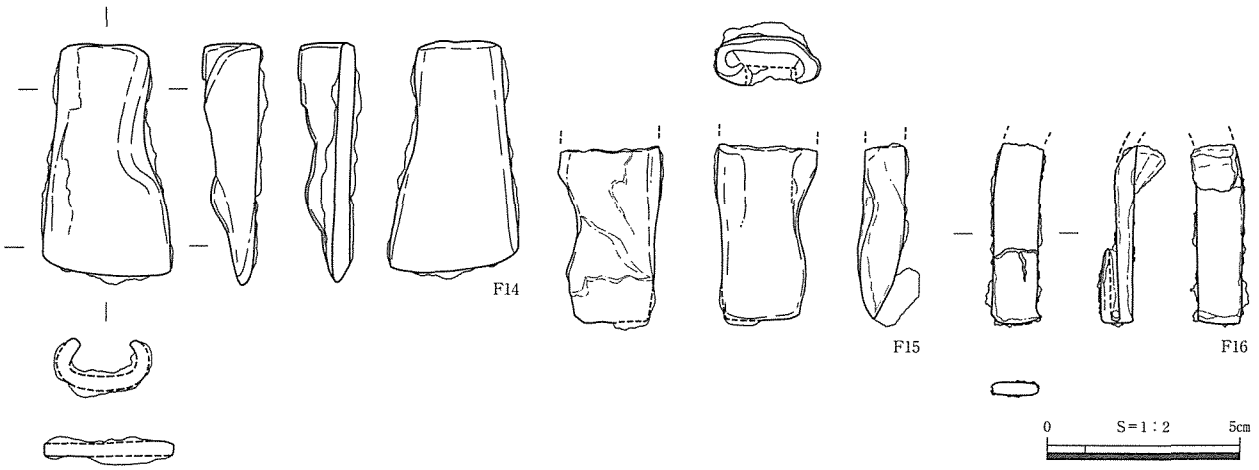
ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考	ピット番号	長軸×短軸－深さ(cm)	備　　考
P１	58×54－66	主柱穴	P９	20×18－25	棟持柱
P２	54×45－67	主柱穴	P10	21×20－37	補助柱穴
P３	52×51－66	主柱穴	P11	18×18－28	補助柱穴
P４	52×42－43	主柱穴	P12	38×18－32	棟持柱
P５	76×75－56	中央ピット	P13	38×32－15	
P６	57×37－27	補助柱穴	P14	18×12－20	
P７	52×43－60	主柱穴	P15	17×15－11	補助柱穴
P８	24×24－19	補助柱穴			



第166図　笠見第３遺跡SI75出土遺物実測図(1)



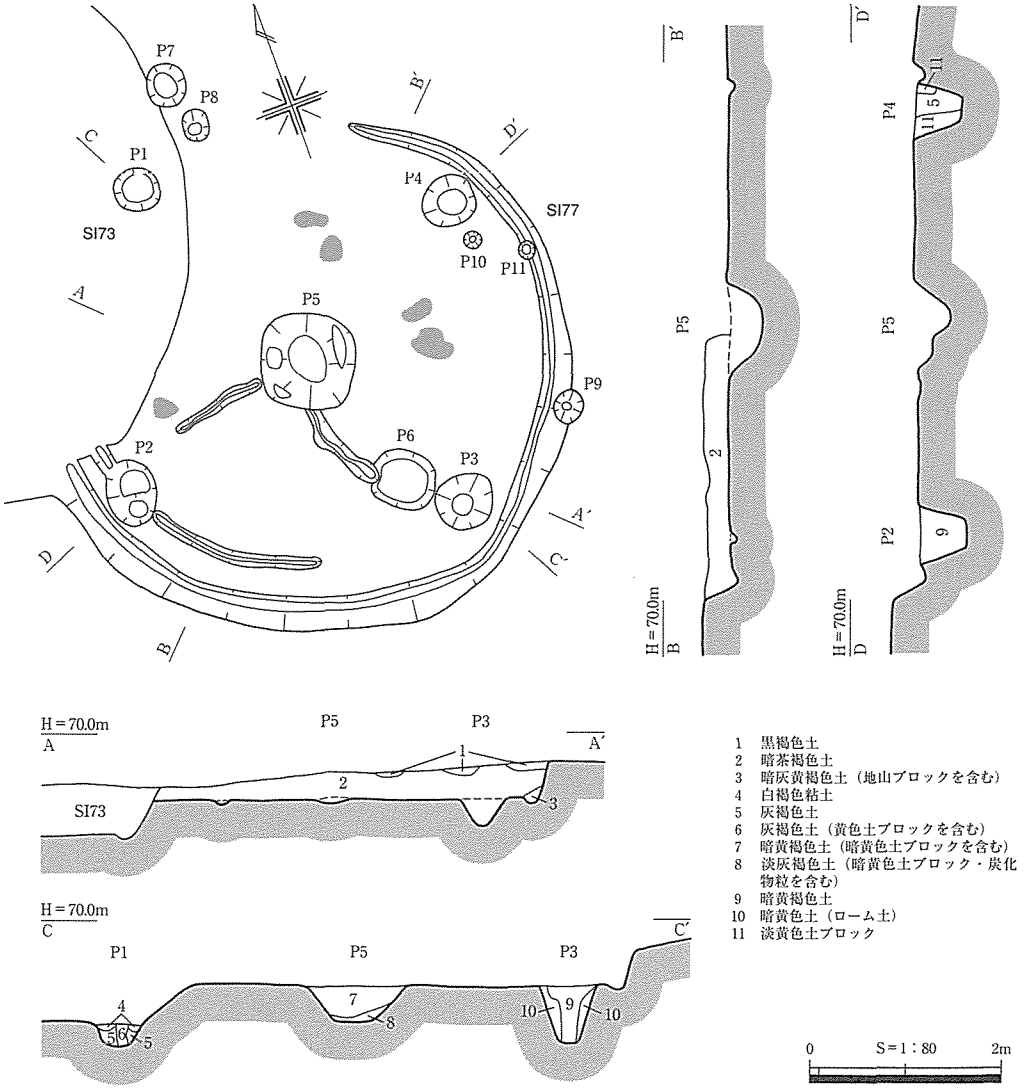
第167図　笠見第３遺跡SI75出土遺物実測図(2)



第168図　笠見第３遺跡SI75出土遺物実測図(3)

SI77（第169・170図、PL. 30・125・177）

調査区北西部、C15・16、D15・16グリッドの標高69.5m付近のほぼ平坦面に立地する。北西側はSI



第169図　笠見第３遺跡SI77遺構図